

野<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>遺<sup>い</sup>跡<sup>せき</sup> C 地区  
(第2分冊)

2012

岐阜県文化財保護センター



## 目 次（第2分冊）

第3章 調査の成果（承前）	1
第4節 遺物（承前）	1
第4章 自然科学分析	93
第1節 花粉化石群集の分析	93
第2節 プラント・オパール分析	98
第3節 掘立柱建物跡柱根の放射性炭素年代測定	101
第4節 金属器類の成分分析	104
第5節 木器類の樹種同定	108
第5章 総括	116
第1節 野内遺跡C地区で出土した木器類について	116
第2節 野内遺跡C地区検出遺構の消長について	146
第3節 野内遺跡とその周辺区域における土地利用の変遷について	149
参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第229図 6セ・15タグリッドの花粉化石分布図……………	96	第236図 木器類主要器種の出土地点分布(1)……………	124
第230図 6セ・15タグリッドのプラント・オパール分布図……………	99	第237図 木器類主要器種の出土地点分布(2)……………	125
第231図 放射性炭素年代測定暦年較正結果……………	103	第238図 野内遺跡C地区の遺構の消長……………	147
第232図 金属器類の成分分析位置……………	104	第239図 野内遺跡周辺の主要遺跡……………	150
第233図 銅鏝の成分……………	105	第240図 野内遺跡・ウバガ平遺跡・三枝城跡の立地……………	151
第234図 耳環の成分……………	106	第241図 野内遺跡各地区の古代の遺構……………	154
第235図 銅鏝の成分……………	107	第242図 ウバガ平遺跡・三枝城跡の古代の遺構……………	155

## 表目次

第39表 出土地点別遺物破片数一覧表(1)……………	1	第61表 遺物観察表(9)……………	23
第40表 出土地点別遺物破片数一覧表(2)……………	2	第62表 遺物観察表(10)……………	24
第41表 出土地点別遺物破片数一覧表(3)……………	3	第63表 遺物観察表(11)……………	25
第42表 出土地点別遺物破片数一覧表(4)……………	4	第64表 遺物観察表(12)……………	26
第43表 出土地点別遺物破片数一覧表(5)……………	5	第65表 遺物観察表(13)……………	27
第44表 出土地点別遺物破片数一覧表(6)……………	6	第66表 遺物観察表(14)……………	28
第45表 出土地点別遺物破片数一覧表(7)……………	7	第67表 遺物観察表(15)……………	29
第46表 出土地点別遺物破片数一覧表(8)……………	8	第68表 遺物観察表(16)……………	30
第47表 出土地点別遺物破片数一覧表(9)……………	9	第69表 遺物観察表(17)……………	31
第48表 出土地点別遺物破片数一覧表(10)……………	10	第70表 遺物観察表(18)……………	32
第49表 出土地点別遺物破片数一覧表(11)……………	11	第71表 遺物観察表(19)……………	33
第50表 出土地点別遺物破片数一覧表(12)……………	12	第72表 遺物観察表(20)……………	34
第51表 出土地点別遺物破片数一覧表(13)……………	13	第73表 遺物観察表(21)……………	35
第52表 出土地点別遺物破片数一覧表(14)……………	14	第74表 遺物観察表(22)……………	36
第53表 遺物観察表(1)……………	15	第75表 遺物観察表(23)……………	37
第54表 遺物観察表(2)……………	16	第76表 遺物観察表(24)……………	38
第55表 遺物観察表(3)……………	17	第77表 遺物観察表(25)……………	39
第56表 遺物観察表(4)……………	18	第78表 遺物観察表(26)……………	40
第57表 遺物観察表(5)……………	19	第79表 遺物観察表(27)……………	41
第58表 遺物観察表(6)……………	20	第80表 遺物観察表(28)……………	42
第59表 遺物観察表(7)……………	21	第81表 遺物観察表(29)……………	43
第60表 遺物観察表(8)……………	22	第82表 遺物観察表(30)……………	44

第83表	遺物観察表 (31)	45	第118表	遺物観察表 (66)	80
第84表	遺物観察表 (32)	46	第119表	遺物観察表 (67)	81
第85表	遺物観察表 (33)	47	第120表	遺物観察表 (68)	82
第86表	遺物観察表 (34)	48	第121表	遺物観察表 (69)	83
第87表	遺物観察表 (35)	49	第122表	遺物観察表 (70)	84
第88表	遺物観察表 (36)	50	第123表	遺物観察表 (71)	85
第89表	遺物観察表 (37)	51	第124表	遺物観察表 (72)	86
第90表	遺物観察表 (38)	52	第125表	遺物観察表 (73)	87
第91表	遺物観察表 (39)	53	第126表	遺物観察表 (74)	88
第92表	遺物観察表 (40)	54	第127表	遺物観察表 (75)	89
第93表	遺物観察表 (41)	55	第128表	遺物観察表 (76)	90
第94表	遺物観察表 (42)	56	第129表	遺物観察表 (77)	91
第95表	遺物観察表 (43)	57	第130表	遺物観察表 (78)	92
第96表	遺物観察表 (44)	58	第131表	花粉化石産出一覧	95
第97表	遺物観察表 (45)	59	第132表	試料 1 g 当たりのプラント・オパール個数	99
第98表	遺物観察表 (46)	60	第133表	放射性炭素年代測定試料及び処理	102
第99表	遺物観察表 (47)	61	第134表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	102
第100表	遺物観察表 (48)	62	第135表	金属器類の成分分析試料一覧	105
第101表	遺物観察表 (49)	63	第136表	金属器類の成分分析結果一覧	105
第102表	遺物観察表 (50)	64	第137表	木器類各器種の出土地点	116
第103表	遺物観察表 (51)	65	第138表	木器類各器種の樹種選択	119
第104表	遺物観察表 (52)	66	第139表	木器類各器種の本取り	122
第105表	遺物観察表 (53)	67	第140表	県内遺跡での下駄の出土例	129
第106表	遺物観察表 (54)	68	第141表	木器類の属性一覧 (1)	134
第107表	遺物観察表 (55)	69	第142表	木器類の属性一覧 (2)	135
第108表	遺物観察表 (56)	70	第143表	木器類の属性一覧 (3)	136
第109表	遺物観察表 (57)	71	第144表	木器類の属性一覧 (4)	137
第110表	遺物観察表 (58)	72	第145表	木器類の属性一覧 (5)	138
第111表	遺物観察表 (59)	73	第146表	木器類の属性一覧 (6)	139
第112表	遺物観察表 (60)	74	第147表	木器類の属性一覧 (7)	140
第113表	遺物観察表 (61)	75	第148表	木器類の属性一覧 (8)	141
第114表	遺物観察表 (62)	76	第149表	木器類の属性一覧 (9)	142
第115表	遺物観察表 (63)	77	第150表	木器類の属性一覧 (10)	143
第116表	遺物観察表 (64)	78	第151表	木器類の属性一覧 (11)	144
第117表	遺物観察表 (65)	79	第152表	木器類の属性一覧 (12)	145

## 写真図版目次

- 図版1 遺跡遠景  
図版2 調査前状況  
図版3 発掘区全景 (1)  
図版4 発掘区全景 (2)  
図版5 発掘区全景 (3)  
図版6 発掘区全景 (4)  
図版7 竪穴住居跡 (1)  
図版8 竪穴住居跡 (2)  
図版9 竪穴住居跡 (3)  
図版10 櫓跡 (1)  
図版11 櫓跡 (2)  
図版12 掘立柱建物跡 (1)  
図版13 掘立柱建物跡 (2)  
図版14 掘立柱建物跡 (3)  
図版15 掘立柱建物跡 (4)  
図版16 掘立柱建物跡 (5)  
図版17 掘立柱建物跡 (6)  
図版18 掘立柱建物跡 (7)  
図版19 掘立柱建物跡 (8)  
図版20 水田跡 (1)  
図版21 水田跡 (2)  
図版22 水田跡 (3)  
図版23 水田跡 (4)  
図版24 水田跡 (5)  
図版25 水田跡 (6)  
図版26 水田跡 (7)  
図版27 水田跡 (8)  
図版28 水田跡 (9)  
図版29 水田跡 (10)  
図版30 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (1)  
図版31 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (2)  
図版32 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (3)  
図版33 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (4)  
図版34 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (5)  
図版35 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (6)  
図版36 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (7)  
図版37 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (8)、溝状遺構 (1)  
図版38 溝状遺構 (2)  
図版39 溝状遺構 (3)  
図版40 自然流路に付属する溝状遺構 (1)  
図版41 自然流路に付属する溝状遺構 (2)  
図版42 自然流路に付属する溝状遺構 (3)  
図版43 自然流路に付属する溝状遺構 (4)  
図版44 自然流路に付属する溝状遺構 (5)  
図版45 自然流路に付属する溝状遺構 (6)、水制遺構 (1)  
図版46 水制遺構 (2)、遺物集積、土坑 (1)  
図版47 土坑 (2)  
図版48 土坑 (3)、作業風景、遺物出土状況 (1)  
図版49 遺物出土状況 (2)  
図版50 遺物出土状況 (3)  
図版51 遺物出土状況 (4)  
図版52 遺物出土状況 (5)  
図版53 調査後状況  
図版54 縄文土器・弥生土器 (1)  
図版55 縄文土器・弥生土器 (2)  
図版56 弥生土器・弥生土器ないし土師器、土師器 (1)  
図版57 土師器 (2)  
図版58 土師器 (3)  
図版59 土師器 (4)  
図版60 須恵器 (1)  
図版61 須恵器 (2)  
図版62 須恵器 (3)  
図版63 須恵器 (4)  
図版64 須恵器 (5)  
図版65 須恵器 (6)  
図版66 須恵器 (7)  
図版67 須恵器 (8)  
図版68 須恵器 (9)  
図版69 灰輪陶器 (1)

- 図版70 灰軸陶器 (2)
- 図版71 灰軸陶器 (3)、土鍾・陶鍾
- 図版72 転用硯
- 図版73 墨書土器・ヘラ書き土器 (1)
- 図版74 墨書土器・ヘラ書き土器 (2)
- 図版75 墨書土器・ヘラ書き土器 (3)
- 図版76 墨書土器・ヘラ書き土器 (4)
- 図版77 墨書土器・ヘラ書き土器 (5)
- 図版78 墨書土器・ヘラ書き土器 (6)
- 図版79 墨書土器・ヘラ書き土器 (7)、緑軸陶器・土師  
質土器・山茶碗
- 図版80 緑軸陶器・輸入磁器・珠洲焼
- 図版81 常滑焼・古瀬戸系施軸陶器・近世陶磁器・土師  
質土器・山茶碗
- 図版82 鉢 (1)
- 図版83 鉢 (2)
- 図版84 鉢 (3)
- 図版85 鉢 (4)
- 図版86 泥除け
- 図版87 えぶり・田下駄・剣物容器
- 図版88 挽物容器
- 図版89 楕円形曲物容器
- 図版90 円形曲物容器 (1)
- 図版91 円形曲物容器 (2)
- 図版92 円形曲物容器 (3)
- 図版93 円形曲物容器 (4)
- 図版94 円形曲物容器 (5)、曲物側板
- 図版95 組物容器・柄杓・斎串・鬺物形
- 図版96 鳥形・馬形
- 図版97 椅子、下駄 (1)
- 図版98 下駄 (2)
- 図版99 櫛・紡錘車・杵・木簡・杓子、箸 (1)
- 図版100 箸 (2)
- 図版101 火付け木
- 図版102 模造品・串状木製品・へら状木製品、板状木製  
品 (1)
- 図版103 板状木製品 (2)、棒状木製品
- 図版104 建築部材 (1)
- 図版105 建築部材 (2)
- 図版106 建築部材 (3)
- 図版107 建築部材 (4)
- 図版108 建築部材 (5)
- 図版109 建築部材 (6)
- 図版110 建築部材 (7)
- 図版111 土木部材
- 図版112 器具部材 (1)
- 図版113 器具部材 (2)
- 図版114 器具部材 (3)
- 図版115 器具部材 (4)
- 図版116 器具部材 (5)
- 図版117 端材 (1)
- 図版118 端材 (2)、割板・割板残材、磨製石鏃・石包丁
- 図版119 石鏃・石鏃・石匙・楔形石器・垂飾・スクレイパー・  
石鏃・紡錘車・異形石棒・不明石製品
- 図版120 打製石斧
- 図版121 砥石・磨製石斧・石冠・磨石
- 図版122 耳環・銅鏃・銅鈴・小柄・古銭・籠甲製品、匣鉢、  
羽口・鉄滓、古代瓦
- 図版123 花粉化石
- 図版124 ブラント・オパール
- 図版125 平成17年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真
- 図版126 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (1)
- 図版127 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (2)
- 図版128 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (3)
- 図版129 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (4)
- 図版130 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (5)
- 図版131 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (6)
- 図版132 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (7)
- 図版133 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (8)
- 図版134 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (9)
- 図版135 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (10)
- 図版136 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (11)
- 図版137 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (12)
- 図版138 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (13)

図版139	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (14)	図版149	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (24)
図版140	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (15)	図版150	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (25)
図版141	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (16)	図版151	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (26)
図版142	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (17)	図版152	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (27)
図版143	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (18)	図版153	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (28)
図版144	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (19)	図版154	平成21年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (1)
図版145	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (20)	図版155	平成21年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (2)
図版146	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (21)	図版156	平成21年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (3)
図版147	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (22)	図版157	平成21年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (4)
図版148	平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (23)	図版158	平成21年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (5)



























第52表 出土地点別遺物破片数一覧表(14)

出土地点	ゾナ別区分	層位	土器類																	合計								
			調査土器	弥生土器	須恵器		灰輪陶器		埴輪陶器	土質土器	山形陶																	
					食器具	貯蔵具	陶器類	陶器類																				
30チ	NE	I	16	152	25	1	30	9												244								
		KOT	30	237	7	3														279								
	SW	I	12	32	3															49								
		KOT	5	20	12	22	3													79								
30セ	NE	I	55	161	32	6	1													263								
		KOT	6	1	1														9									
	SW	I	2	130	22	63	4													202								
		KOT	24	122	46	51														296								
30フ	NE	I	3																	3								
		KOT	14																28									
	SW	I	4																	23								
		KOT	13	8	4	14	1													49								
30テ	NE	I	4																	4								
		KOT	1																2									
	SW	I	1																	1								
		KOT	1																	2								
31チ	NE	I	4	7	1	3														16								
		KOT	4	48	9	49														110								
	SW	I	26	166	62	31	11													296								
		KOT	1	11	5	19	3													40								
31フ	NE	I	23	106	42	4														180								
		KOT	3	27	10	21	1													62								
	SW	I	6	13	8	24	9													61								
		KOT	2	12	1	2														46								
31セ	NE	I	1	21	4	7														35								
		KOT	26	22	9	14	1													73								
	SW	I	74	56	3	2	4													145								
		KOT	1	2	3	1	2													9								
31テ	NE	I	1	2	3	1														7								
		KOT	2	2	18															22								
	SW	I	2	1	5															8								
		KOT	2	3																20								
12年度試験区1	-	-	1	9	17	12	2													47								
12年度試験区2	-	-	2	47	43	38	2													133								
12年度試験区3	-	-	5	61	47	3	54													272								
12年度試験区4	-	-	3	21	19	24	4													58								
12年度試験区5	-	-	5	3	8	6														51								
12年度試験区6	-	-	2	11	3	2														89								
12年度試験区7	-	-	5	9	74	70	50	3												236								
12年度試験区8	-	-	24	43	49	50	2													243								
12年度試験区9	-	-	4	14	9	10														30								
12年度試験区10	-	-	2	1	7	1														14								
12年度試験区11	-	-	1	11	9	4														67								
12年度試験区12	-	-	2	27	7	17	8	6												76								
12年度試験区13	-	-	4	3	6	2														23								
12年度試験区14	-	-	3	12	6	10	2													30								
12年度試験区15	-	-	2	15	29	20	2													103								
12年度試験区16	-	-	4	48	21	16	2													94								
12年度試験区17	-	-	1	54	27	16	11	6												122								
12年度試験区18	-	-	16	6	53	43	23													181								
12年度試験区19	-	-	3	8	9	2	1													41								
12年度試験区20	-	-	3	3	3	1														13								
12年度試験区21	-	-	3	13	11	15														99								
東京都上野区	-	-	9	262	238	183	10													760								
12年度試験区22	-	-	1	2																3								
13年度試験区23	-	-	4	3	1	1														25								
13年度試験区24	-	-	1	2																3								
13年度試験区25	-	-	4	3	1	1														15								
13年度試験区26	-	-	1	8	1	7														47								
13年度試験区27	-	-	2	5	7	5	2	1												25								
13年度試験区28	-	-	3	2	1															30								
13年度試験区29	-	-	1	1																12								
16年度試験区30	-	-	6	59	44	19	3													164								
16年度試験区31	-	-	5	4	10	10														29								
18年度試験区32	-	-	6																	7								
18年度試験区33	-	-	1	1																2								
不明	-	-	1	253	2	402	309	3	217	34										1,201								
合計			1,311	107	15,402	1,407	14,072	1,296	76	7,394	770	11	19	13	82	146	38	16	15	322	53	71	3,863	739	32	46	24	82,967



第54表 遺物観察表(2)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 寸法	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
22	554P (5H)	-	土器類	須恵器	陶片(破片)	約14.0	-	-	第1130P 図版113	体部内外面凹削ナド。
23	1549P	W	土器類	土師器	壺	11.2	-	-	第1130P 図版106	全面厚減。胴部内面に縦方向のへた目。胴部外面に縦方向のへた目。
24	3429P	-	石器類	石錐	部具無蓋錐	(残存)31	0.40	(1.25)	第1130P 図版119	先端を欠く。石材は下石目。重さ0.4kg。
25	3995P	I	木器類	漆材	埴器部材 粒粒	(28.4)	0.30	(14.6)	第1130P 図版-	全体に残存状態は良好でない。下層は1方向から目めに切磨されている。芝蔴。
26	3015P	-	木器類	漆材	埴器部材 粒粒	(残存29.6)	0.30	(11.6)	第1130P 図版-	全体に残存状態は良好でなく。加工痕は認められない。芝蔴。ツラ。
27	4045P	-	木器類	漆材	埴器部材 粒粒	(29.6)	0.30	(8.9)	第1130P 図版-	下層は3方向から削って先端を支らせている。芝蔴。ツラ。
28	3455P	V	土器類	須恵器	看台弁	11.2	3.4	6.6	第1130P 図版-	体部内外面凹削ナド。胴部内面に縦方向のへた目。胴部外面に凹削ナドあり。粘土質。
29	10582P	-	土器類	土師器	蓋弁	-	-	-	第1130P 図版-	体部内面ナド。胴部内面ナド。胴部外面に縦方向のへた目。透かし孔は4箇所。
30	10652P	断ち割り	石器類	打製石斧		(7.40)	(1.40)	(5.1)	第1130P 図版120	刃部表面厚減。表面・裏面の下層に薄状痕。石材は結核質。重さ0.71kg。
31	13523P	障土	土器類	須恵器	無台碗	-	-	7.2	第1130P 図版-	体部内外面凹削ナド。底部内面凹削ナド。底部外面へラ切リ痕ナド。
32	13523P	障土	土器類	須恵器	看台碗	-	-	9.0	第1130P 図版-	底部内面凹削ナド後ナド。底部外面凹削ナドあり。
33	13523P	障土	土器類	須恵器	看台盤	14.0	3.1	6.9	第1130P 図版-	体部内外面凹削ナド。底部内面凹削ナド。底部内面平直化。体部内面に自然剥付着。
34	13523P	障土	土器類	瓦輪陶器	輪	-	-	8.7	第1130P 図版-	体部内外面凹削ナド。底部内面凹削ナド。底部外面凹削ナド。底部内面平直化。体部内面に反刺。
35	13523P	障土	土器類	瓦輪陶器	輪	-	-	7.2	第1130P 図版-	体部内外面凹削ナド。底部内面凹削ナド後ナド。底部外面ナドナド。底部内面平直化。体部内面に自然剥付着。
36	13523P	障土	土器類	瓦輪陶器	輪ナ	-	-	7.9	第1130P 図版-	体部内外面凹削ナド。底部内面凹削ナド後ナド。底部外面凹削ナドナド。底部内面平直化。底部内面に黒書「□」。
37	13523P	障土	土器類	瓦輪陶器	蓋	-	-	8.2	第1130P 図版-	胴部外周下部に(土)具によるみられる痕い凹削ナド。胴部内面凹削ナド。底部内面凹削ナド。底部外面に凹削未切リ痕。底部内面に自然剥付着。
38	13523P	障土	土器類	山形陶	輪	-	-	5.7	第1130P 図版79	体部内外面凹削ナド。底部内面凹削ナド後ナド。底部外面に凹削未切リ痕。高台にキマダク痕。底部内面に黒書輪形。体部外面に黒行。体部内面に自然剥付着。底部山形陶(明和型)。12568と縦行剥着。
39	13523P	障土	土器類	山形陶	輪	14.8	5.7	5.6	第1130P 図版79	体部内外面凹削ナド。底部内面凹削ナド後ナド。底部外面に凹削未切リ痕。高台にキマダク痕。底部内面に黒書輪形。体部内面に自然剥付着。底部山形陶(明和型)。12568と縦行剥着。
40	13523P	障土	土器類	珠洲焼	鉢	約2.4	-	-	第1130P 図版90	体部内外面凹削ナド。
41	13523P	障土	土器類	古瀬戸系 瓦輪陶器	鉤付大皿	-	-	-	第1130P 図版91	体部から底部にかけての内面に鉤目。体部外面に灰黄色の反刺。
42	13523P	障土	木器類	器具	中材木製品	(残存9.2)	(6.5)	(2.4)	第1130P 図版115	土層を欠く。香申の。板目。セノキ。
43	13523P	障土	木器類	漆材	器具部材	(残存21.8)	(1.3)	(11.7)	第1130P 図版115	下層を欠く。断面は楕円形を基本とするが。上層部は削って細く仕上げている。芝蔴。セノキ。
44	13533P	障土	土器類	瀬戸土器	深鉢	-	-	1.3	第1130P 図版105	内外面厚減。胎土に植物繊維を含む。縄文時代早期の灰土土器。
45	13533P	障土	土器類	土師器	壺	-	-	3.4	第1130P 図版-	内外面厚減。
46	13533P	障土	土器類	須恵器	看台弁	-	-	9.0	第1130P 図版-	体部内外面凹削ナド。底部内面凹削ナド。底部外面凹削ナドあり。
47	13533P	障土	土器類	須恵器	看台弁	-	-	7.4	第1130P 図版-	体部内外面凹削ナド。底部外面へラ書き(記号状ないし絵画的)。
48	13533P	障土	土器類	須恵器	無台碗	-	-	-	第1130P 図版-	輪の体部縁部と推定。体部内外面凹削ナド。体部外面に黒書「□」。
49	13533P	障土	土器類	須恵器	看台碗	-	-	9.6	第1130P 図版106	体部内外面凹削ナド。底部内面凹削ナド。底部外面に凹削未切リ痕。底部内面に黒書輪形。底部内面平直化。
50	13533P	障土	土器類	須恵器	鉢	16.0	-	-	第1130P 図版-	体部内面凹削ナド。体部外面上半部凹削ナド。下半部凹削ナドあり。

第55表 遺物観察表(3)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
51	1253T	層土	土器類	須恵器	蓋蓋	10.6	3.6	-	第1140E 図版67-72	片貝部内面凹折ナシ。口縁部内面凹折ナシ。外面は全面に自然結晶層のため顕著不明。内面に磨行。内面平直化・平直。
52	1253T	層土	土器類	須恵器	蓋	-	-	8.9	第1140E 図版-	底部内面凹折ナシ。反軸器底の可能性もあるが、外面に明確な磨輪が認められないことから須恵器と判断した。
53	1253T	層土	土器類	須恵器	蓋	-	-	7.9	第1140E 図版-	底部内面凹折ナシ。底部外面に凹折糸切り痕。底部内面に自然磨行。
54	1253T	層土	土器類	須恵器	蓋	-	-	9.3	第1140E 図版-	胴部内面凹折ナシ。底部内面ナシ。底部外面凹折糸切り痕ナシ。
55	1253T	層土	土器類	須恵器	蓋?	-	-	11.9	第1140E 図版-	胴部内面凹折ナシ。
56	1253T	層土	土器類	須恵器	平瓶	-	-	-	第1140E 図版-	平瓶の把手の一部と推定。把手部内面へツ折リ。
57	1253T	層土	土器類	須恵器	壺	約14.9	-	-	第1140E 図版-	口縁部内面凹折ナシ。胴部外面に叩き痕が認められるが、形状は不明。写真。
58	1253T	層土	土器類	反軸陶器	甕	18.0	3.5	8.2	第1140E 図版69	体部内面凹折ナシ。底部内面凹折ナシ。
59	1253T	層土	土器類	反軸陶器	甕	15.4	4.4	8.6	第1140E 図版71	体部内面凹折ナシ。下部を除く体部内面凹折ナシ。下部凹折へツ折リ。底部内面凹折ナシ。底部外面凹折へツ折リ。体部内面に反軸(底辺7.1cm)。底部内面に重ね磨行。底部内面平直化。
60	1253T	層土	土器類	反軸陶器	甕	10.6	3.0	5.6	第1140E 図版71	内面は磨輪のため顕著不明。体部内面凹折ナシ。底部外面ナシ。内面全面と体部外面上半に反軸。
61	1253T	層土	土器類	反軸陶器	甕	約16.4	-	-	第1140E 図版-	体部内面凹折ナシ。
62	1253T	層土	土器類	反軸陶器	甕	16.2	-	-	第1140E 図版-	体部内面凹折ナシ。底部内面凹折ナシ。底部外面凹折へツ折リ。底部内面平直化。肩台の新磨輪が明確に認められる。
63	1253T	層土	土器類	反軸陶器	甕	-	-	7.0	第1140E 図版-	体部内面凹折ナシ。体部内面に自然磨行付。
64	1253T	層土	土器類	反軸陶器	甕	-	-	8.4	第1140E 図版-	体部内面凹折ナシ。底部内面凹折ナシ・ナシ。体部内面・底部内面に自然磨行。
65	1253T	層土	土器類	反軸陶器	甕	-	-	7.0	第1140E 図版-	体部内面凹折ナシ。底部内面凹折ナシ。焼成あまく反黄色を呈する。外面は顕著した黄色を呈する部分が多い。
66	1253T	層土	土器類	輸入磁器	白磁瓶	-	-	-	第1140E 図版-	底部外面を除く内外面に自然磨。
67	1253T	層土	土器類	輸入磁器	青磁皿	11.2	-	-	第1140E 図版30	体部内外面に青緑色の青磁釉。
68	1253T	層土	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第1140E 図版-	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外面に黒漆付文。
69	1253T	層土	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第1140E 図版-	体部内外面に青緑色の青磁釉。体部外面に黒漆付文。
70	1253T	層土	土器類	汎用磁	鉢	-	-	-	第1140E 図版30	体部内面凹折ナシ。体部内面に磨目。体部内面磨目著しい。
71	1253T	層土	土器類	山系陶	甕	-	-	4.9	第1140E 図版31	体部内面凹折ナシ。底部内面凹折ナシ。底部外面に凹折糸切り痕。内外面に部分的に黄色陶化粉付着。北面系山系陶(大塚五郎説)。
72	1253T	層土	土器類	古瀬戸系 反軸陶器	直線大皿	31.0	-	-	第1140E 図版31	体部内面上半は磨輪のため顕著不明。下半凹折ナシ。体部外面上半は磨輪のため顕著不明。下半凹折へツ折ナシ。体部内外面上半に緑色の反軸。古瀬戸陶器。
73	1253T	層土	木器類	器具	形代 鳥形	(残存1.0)	(0.7)	(残存2.1)	第1140E 図版-	右半を欠くと思われるが、大ききや型から鳥形と推定された。蓋部に刃物によるとみられる2条の縦状痕が認められる。径目。アスナロ風。
74	1253T	層土	木器類	器具	形代 楕圓形	(11.5)	(1.1)	(1.7)	第1140E 図版35	胴面と蓋面に新磨部分があるもの。ほぼ正明品である。中央から上半にかけて、楕圓状の磨目が施されている。男性の性器を写実的に描いたとされた形代とみられる。志高。ヒノキ。
75	1253T	層土	木器類	器具	下駄 滑車下駄 入箱	(19.0)	(1.4)	(9.9)	第1140E 図版37	上端を欠く。竹と金一木から作る滑車下駄である。滑車孔が上縁付付中央、左側縁付付、右側縁付付に1つずつ認められるが、左側縁と右側縁の1つは半円形である。蓋面は、向かって右側ほど磨り方が著しい。径目。ヒノキ。
76	1253T	層土	木器類	器具	蓋	(残存9.1)	(0.9)	(6.8)	第1140E 図版-	上端を欠く。蓋面は五角形である。下部は実らせている。志高。ヒノキ。
77	1253T	層土	木器類	加工材	端材	(4.7)	(3.3)	(3.4)	第1140E 図版117	各面1つだけ。比較的平滑である。志高。ヒノキ。

第56表 遺物観察表(4)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 寸法	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	直径		
78	135337	障土	木器類	器具	模造品	(18.7)	0.40	(2.3)	第1400 0006102	三角形の扁平した模造品。表面はりつてあったとみられる。中央部に浅く窪みが凸部と認められる。又その模造品である。径目、径目。
79	135337	障土	金属器類	古銭		(2.4)	0.13	(2.4)	第1400 0006102	銅製。型元正宝(北条、1391年製造)。重さ2.5g。
80	135337	障土	石器類	打製石器		(8.4)	0.20	(4.9)	第1400 0006102	石材は緑色片岩。重さ114.4g。
81	135337	障土	銅器類	遺物	口皿	(残存4.3)	(残存3.9)	(残存1.4)	第1400 0006102	先筒の一部に黒皮が付着する。外面焼熱黄色。重さ33.7g。残存外径5.0cm。
82	135437	障土	土器類	土師器	甕	-	-	2.6	第11500 0006100	底部内外面凹ナズ。
83	135437	障土	土器類	須恵器	高形蓋	約15.4	-	-	第11500 0006100	天井部外面凹ナズ。内面外面凹ナズ。
84	135437	障土	土器類	須恵器	備前蓋	13.9	2.7	-	第11500 0006100	天井部内外面凹ナズ。内面外面凹ナズ。口縁部外面に自然動行着。
85	135437	障土	土器類	須恵器	看台形	-	-	9.9	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。底部内面凹ナズ。底部外面へツ削り(口縁部を除く)。
86	135437	障土	土器類	須恵器	無台形	-	-	6.8	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。底部内面凹ナズ。底部外面へツ削り後ナズ。底部内面平直化。底部外面へツ削り。
87	135437	障土	土器類	須恵器	不明	14.9	-	-	第11500 0006100	細口蓋小有台盤の体部とみられる。体部内外面凹ナズ。焼成おおく灰白色を呈する。体部内面に黒行着。転用説。
88	135437	障土	木器類	器具	二重物器 円形食物容器	(残存9.7)	0.40	(残存4.3)	第11500 0006100	木製。木刺し11。断面が板状とみられる孔が周縁部に1箇所認められる。径目、径目。
89	135437	障土	石器類	スライパー		(5.4)	1.30	(3.1)	第11500 0006119	石材はナート。重さ16.6g。
90	135537	障土	土器類	土師器	甕	約16.1	-	-	第11500 0006100	内外面平直。
91	135537	障土	土器類	土師器	甕?	-	-	5.0	第11500 0006100	腹部内外面凹ナズ。底部内外面凹ナズ。腹部外面に黒色炭化物行着。
92	135537	障土	土器類	土師器	土師	(残存1.9)	1.10	(1.4)	第11500 0006100	外面ナズ。
93	135537	障土	土器類	須恵器	備前蓋?	14.2	-	-	第11500 0006100	天井部内面凹ナズ。天井部外面凹ナズ。内面外面凹ナズ。
94	135537	障土	土器類	須恵器	備前蓋?	-	-	-	第11500 0006100	天井部内面凹ナズ後ナズ。天井部外面凹ナズ。内面外面凹ナズ。
95	135537	障土	土器類	須恵器	備前蓋?	-	-	-	第11500 0006100	天井部内面凹ナズ後ナズ。天井部外面凹ナズ。内面外面凹ナズ。天井部内面平直化。天井部内面に全面に黒行着。また、天井部・体部の外面にも部分的に黒行着。転用説。
96	135537	障土	土器類	須恵器	備前蓋?	18.0	-	-	第11500 0006100	天井部内面凹ナズ後ナズ。天井部外面凹ナズ。内面外面凹ナズ。体部内外面凹ナズ。体部内面に自然動行着。
97	135537	障土	土器類	須恵器	備前蓋?	17.0	-	-	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。
98	135537	障土	土器類	須恵器	看台形	-	-	8.2	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。底部内外面凹ナズ。
99	135537	障土	土器類	須恵器	無台形	11.6	3.5	7.3	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。底部内面凹ナズ。底部外面ナズ。内外面平直化。
100	135537	障土	土器類	須恵器	無台形	-	-	6.0	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。底部内面凹ナズ。底部外面ナズ。
101	135537	障土	土器類	須恵器	無台形	-	-	6.6	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。底部内面凹ナズ。体部外面に黒行着「」。
102	135537	障土	土器類	須恵器	看台形	18.0	6.7	3.8	第11500 0006100	体部内面凹ナズ。体部外面上平凹ナズ。下平凹ナズ。削り。底部内面凹ナズ。底部内面平直化。
103	135537	障土	土器類	須恵器	看台形	-	-	8.9	第11500 0006100	底部内面凹ナズ。底部外面凹ナズ削り後ナズ。底部内面平直化。
104	135537	障土	土器類	須恵器	看台形	-	-	7.0	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。底部内面凹ナズ。底部外面凹ナズ。底部外面に黒行着「」。
105	135537	障土	土器類	須恵器	看台形	15.0	3.0	6.0	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。底部内面平直化。
106	135537	障土	土器類	須恵器	看台形	15.2	2.4	7.9	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。底部内面凹ナズ後ナズ。
107	135537	障土	土器類	須恵器	看台形	-	-	8.6	第11500 0006100	体部内外面凹ナズ。底部内面凹ナズ後ナズ。底部外面凹ナズ削り。
108	135537	障土	土器類	須恵器	蓋?	10.0	-	-	第11500 0006100	天井部・口縁部内外面凹ナズ。内面に自然動行着。
109	135537	障土	土器類	須恵器	蓋	約14.0	-	-	第11500 0006100	口縁部内外面凹ナズ。

第57表 遺物観察表(5)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (最大)	器 底 (深さ)	底径 (最大)		
108	1550T	埋土	土器類	須恵器	壺?	-	-	11.0	第1150E 図取	底部内面凹削ナズ。底部外面に凹削未切り肌。
111	1550T	埋土	土器類	須恵器	鉢	-	-	約5.0	第1150E 図取	底部内面凹削ナズ。底部外面凹削ヘツ削リ。底部内面凹削ナズ。底部外面凹削ヘツ削リ。
112	1550T	埋土	土器類	須恵器	甕	-	-	16.1	第1150E 図取	胴部内面ナズ。胴部外面に平行溝状の叩き肌。底部外面ナズ。
113	1550T	埋土	土器類	須恵器	甕	-	-	15.0	第1150E 図取	胴部内面凹削ナズ。胴部外面ナズ。底部内面凹削ナズナズナズナズ。底部外面ナズナズナズナズ。底部外面を強く内外面に黄土を施し、内面に凹凸模様。胴部外面は褐色を呈する。
114	1550T	埋土	土器類	須恵器	陶鉢	(3.1)	(3.0)	(4.0)	第1150E 図取71	外面丁寧なナズ。孔径6cm。蓋さ5.3cm。
115	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	12.7	4.0	7.2	第1140E 図取69	底部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ残ナズ。底部外面ナズ。底部外面に反肌。底部内面に自然輪行着。
116	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	14.6	4.2	6.0	第1140E 図取	底部内外面凹削ナズ。底部内面・口縁部外面に自然輪行着。
117	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	10.0	第1140E 図取	底部内面凹削ナズ。中央部を強く底部外面凹削ナズ。底部外面中央部凹削ヘツ削リ。底部内面凹削ナズ。底部外面凹削ヘツ削リ残削ナズ。底部内面平滑化。底部内面に自然輪行着。
118	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	6.4	第1140E 図取	底部内外面凹削ナズ。底部外面に蓋書「口」。
119	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	7.2	第1140E 図取	底部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面に凹削未切り肌。底部内面平滑化。
120	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	6.9	第1140E 図取	底部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面に凹削未切り肌。底部外面に反肌。底部外面に蓋書「口」。
121	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	6.4	第1140E 図取	底部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部内面に反肌(小さい自然輪あり)。底部外面に蓋書「口」。
122	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	9.0	第1140E 図取	底部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面凹削ヘツ削リ。底部外面上半・底部内面・底部内面に反肌。
123	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	6.0	第1140E 図取	底部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面に凹削未切り残ナズ。底部内面に自然輪行着。
124	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	9.8	第1140E 図取	底部内面凹削ナズ残ナズ。底部外面凹削ヘツ削リ。底部内面平滑化。
125	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	7.4	第1140E 図取	底部外面凹削ナズ。底部外面に凹削未切り肌。底部内面・底部内面に自然輪行着。
126	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	7.3	第1140E 図取	底部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面に凹削ヘツ削リ。底部内面平滑化。
127	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕?	-	-	6.2	第1140E 図取	底部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。底部内面に蓋ね掻き肌。
128	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	不明	-	-	7.8	第1140E 図取	底部内面凹削ナズ。底部外面凹削ヘツ削リナズ。18x5M之破片接合。
129	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕?	-	-	7.2	第1140E 図取72	底部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。底部内面に不明な凹凸模様。底部・底部外面に蓋行着。転用肌。
130	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	小瓶	4.0	-	-	第1140E 図取	山頂部内外面凹削ナズ。山頂部内外面に反肌。
131	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	長頸瓶	-	-	-	第1140E 図取	山頂部内外面凹削ナズ。外面に自然輪ナズ行着。
132	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	9.4	第1140E 図取	胴部内外面凹削ナズ。底部外面ナズ。胴部外面に反肌。胴部内面・底部内面に自然輪行着。15x9Mと破片接合。
133	1550T	埋土	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	13.0	第1140E 図取	胴部内面凹削ナズ。胴部外面に平行凹削ナズ。下平凹削ヘツ削リ。胴部外面に反肌。
134	1550T	埋土	土器類	山系陶	甕	15.0	-	-	第1140E 図取91	底部内面凹削ナズ。底部外面上半凹削ナズ。下半凹削ナズ残ナズ。底部内外面に蓋行着。底部系山系陶。12x22と破片接合。
135	1550T	埋土	土器類	山系陶	小甕	-	-	3.6	第1140E 図取91	底部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。底部内面平滑化。底部内面に自然輪行着。底部系山系陶。
136	1550T	埋土	土器類	山系陶	甕	15.4	-	-	第1140E 図取91	底部内外面凹削ナズ。内外面に自然輪行着。底部系山系陶。



第59表 遺物観察表(7)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
136	1550T	埋土	木器類	加工材	端材	(8.2)	(1.3)	(7.3)	第1160 図0117	下層面と裏面は削く。特に下層面は削り断り切れた痕跡が確認している。表面は削り残ったままの状態で残る。それら以外の表面は比較的平滑である。縦目、ヒノキ。
139	1550T	埋土	木器類	加工材	端材	(14.9)	(3.2)	(4.2)	第1170 図0117	全体に削き着いた。横断面は四方四角を呈する。芯材、ヒノキ。
140	1550T	埋土	石器類	異形石核		(4.8)	(1.8)	(2.2)	第1160 図0119	全面に磨利な方向によるとみられる加工痕が認められる。男性器を穿実的に磨利したものであろう。石材は燧石、長さ18.4。
141	1550T	埋土	石器類	砥石		(7.5)	(2.9)	(5.1)	第1160 図0121	砥石は表面・裏面の2面。石材は花崗、長さ132.2。
142	1550T	埋土	銅器類 遺物	鍔洋		(5.8)	(2.7)	(3.6)	第1160 図0122	366に比べ、底面が高い。長さ62.4。
143	1550T	埋土	その他 特殊物品	古代瓦	平瓦	(横存7.1)	(3.5)	(横存7.0)	第1160 図0122	断面縦方向のへり削り。内面に縦目状の印が施す。
144	1550T	埋土	その他 特殊物品	古代瓦	平瓦	(6.7)	(3.6)	(6.3)	第1160 図0122	断面ナズ、オオス、へり削り。内面に縦目状の印が施す。断面ナズ、オオス。
145	1560T	埋土	土器類	須恵器	有台笠?	-	-	-	第1160 図01-	体部内外面凹削ナズ。体部外面に磨蓋「口」付。
146	1560T	埋土	土器類	灰輪陶器	輪	16.9	4.9	8.8	第1160 図01-	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。断面内面凹削。断面内面に重ね焼き。断面内面平滑化。
147	1560T	埋土	土器類	灰輪陶器	輪	約12.0	-	-	第1160 図01-	体部内外面凹削ナズ。体部外面に灰焼。
148	1520T ~1550T	断ち割り	土器類	土器類	土埴	(2.8)	(1.3)	(1.7)	第1160 図0171	外面磨削。陶器からの穿孔孔。直径0.3mm。長さ5.2。
149	307T ~346T	断ち割り	土器類	須恵器	無台坪?	-	-	-	第1160 図0173	断面内面凹削ナズ。体部ナズ。断面外面へり切り痕ナズ。断面外面に磨蓋「口」付。
170	1520T ~1550T	断ち割り	土器類	須恵器	有台坪	-	-	6.4	第1160 図01-	体部内外面凹削ナズ。断面内面凹削ナズ。
171	380T ~384T	断ち割り	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第1160 図0173	体部内外面凹削ナズ。体部外面に磨蓋「口」付。体部内面に口縁部に浅ない保存痕。焼成済みと洗剤色を呈する。
172	1520T ~1560T	断ち割り	土器類	須恵器	無台輪	-	-	6.2	第1160 図0164	体部内外面凹削ナズ。断面内面凹削ナズ。断面外面に削削り痕。断面内面平滑化。
173	383T	断ち割り	土器類	須恵器	無台輪	-	-	6.9	第1160 図0173	断面内面ナズ。断面内面凹削ナズ。断面外面へり切り痕ナズ。オオス。断面外面に磨蓋「口」付。
174	1520T ~1550T	断ち割り	土器類	須恵器	壺	40.0	-	-	第1160 図01-	口断面内外面凹削ナズ。口断面内面と頸部外面に灰焼付着。
175	1520T ~1550T	断ち割り	土器類	須恵器	壺	7.0	-	-	第1160 図01-	口断面内外面凹削ナズ。頸部内外面凹削ナズ。
176	3110 ~392T	断ち割り	土器類	須恵器	円筒碗	約11.1	-	-	第1160 図0165	断面両断面内外面凹削ナズ。
177	1520T ~1560T	断ち割り	土器類	須恵器	網?	21.0	-	-	第1160 図0165	体部内外面凹削ナズ。15445Tと類似品。
178	1520T ~1550T	断ち割り	土器類	灰輪陶器	輪	12.6	4.5	6.4	第1160 図01-	体部内外面凹削ナズ。断面内面凹削ナズ。断面外面ナズ。断面上外面に灰焼。
179	1520T ~1550T	断ち割り	土器類	灰輪陶器	網?	-	-	6.5	第1160 図01-	断面内面ナズ。断面内面凹削ナズ。断面内面平滑化。
180	1560T	断ち割り	土器類	灰輪陶器	網?	-	-	7.5	第1160 図01-	断面内面凹削ナズ。断面内面に重ね焼き。断面内面平滑化。
181	1520T ~1550T	断ち割り	土器類	灰輪陶器	網	-	-	7.7	第1160 図01-	体部内外面凹削ナズ。断面内面凹削ナズ。断面外面ナズ。へり削り。体部内面に自然磨利痕。断面内面中央部に削削り痕。
182	3110 ~392T	断ち割り	木器類	器具	動物容器 円形動物容器 目録	(11.6)	(6.9)	(11.5)	第1160 図0169	ほぼ全形の痕跡である。断面に木目とみられる小穴孔が4箇所認められる。表面に動物痕跡認められる。縦目、アスナク。
183	1520T ~1550T	断ち割り	木器類	器具	動物容器 動物標	(横存5.3)	(6.4)	(2.3)	第1160 図01-	横存部分に全体のごく一部とみられる。全形の横目(縦目)でから、上下縁に押し蓋交方向にケギを施している。縦目、ヒノキ。
184	3110 ~392T	断ち割り	木器類	器具	箸	(横存15.3)	(6.4)	(6.8)	第1160 図01-	3つの破片に接点はないが出土状況や加工方法・木目の一致から一部を判断した。正論を欠く。断面は木製内形を基本とするが、一定していない。断面は知られていない。
185	3110 ~392T	断ち割り	木器類	器具	穴付竹木 人輪	(13.5)	(6.9)	(1.4)	第1160 図01-	土層と平らに加工している。芯材、ヒノキ。
186	3110 ~392T	断ち割り	木器類	器具	穴付竹木 人輪	(横存7.1)	(1.1)	(1.7)	第1160 図01-	土層を欠く。下層の高低化している。芯材、ヒノキ。
187	3110 ~392T	断ち割り	木器類	器具	板状木製品	(15.9)	(1.1)	(横存5.1)	第1160 図01-	左端と右端の一部を欠く。土層・層位ともに1方向から斜めに切り切らしている。縦目、ヒノキ。

第60表 遺物観察表(8)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
188	31150 ～39257	■ (勝ち残り)	木器類	器具	神杵木型具	(残存)4.0	0.40	(2.4)	第1160 0056	土層を欠く。素材材で表面は内面である。磨度は程していない。白磁土と灰河の間に知り得る限り、先施される。空腔、キラン線。
189	125307 ～125507	勝ち残り	木器類	部材	器具部材 磨具部材	(残存)9.0	0.71	(3.9)	第1160 0058.113	右端を欠く。下層付近に一切の切り込みを設けており、磨具部が磨過している。部部が削れ、粗目、ヒノキ。
190	31150 ～39257	■ (勝ち残り)	木器類	部材	器具部材 有孔押板	(17.1)	0.50	(残存)6.0	第1160 0058.113	下層は大欠けとみられる。磨過する小孔は3箇所認められるが、磨度が概ね普通孔が一定認められる。通径目、ヒノキ。
191	125307 ～125507	勝ち残り	木器類	部材	器具部材	(8.5)	0.40	(3.0)	第1160 0058	ほぼ全周であるが、本型面のコの字状の跡は、磨具の痕跡である可能性もある。土層は角めに磨過されている。粗目、ヒノキ。
192	125307 ～125507	勝ち残り	木器類	加工材	端材	(8.4)	(残存)1.4)	(2.9)	第1160 0058	磨過を欠く。側面には細かな加工痕が認められる。下層を欠く。中心部のみわずかに磨過に磨過する小孔があるが、これは磨が削けただけかもしれない。加工部分と欠大部分を区別。細目、ヒノキ。
193	125207 ～125507	勝ち残り	石器類	打製石器		(8.4)	(1.90)	(4.9)	第1160 0058	石材は凝灰岩。長さ77.9g
194	31050	-	土器類	土師器	製塩土器	-	-	-	第1160 0056	半割成形。外面は褐色を呈する。製塩土器の底部破片と推定。
195	31050	-	土器類	土師器	土罎	(4.2)	0.10	(1.2)	第1160 0057.1	外面ナデ。孔径0.3cm。長さ6.7g。
196	31050	-	土器類	土師器	土罎	(残存)3.4)	0.13	(1.2)	第1160 0057.1	下層を欠く。外面ナデ。孔径0.4cm。残存部分の長さ5.6g。
197	31050	勝ち残り	土器類	土師器	土罎	(3.6)	0.13	(1.2)	第1160 0058	外面磨滅。孔径0.3cm。長さ4.3g。
198	31050	-	土器類	須恵器	無台杯	-	-	7.4	第1160 0058.73	底部内面ナデ。底部内面へ切り残りナデ。底部内面平滑化。底部外面に磨書「海」。
199	31050	E	土器類	須恵器	有台杯	-	-	7.8	第1160 0058	底部内面磨ナデ後ナデ。底部外面磨ナデ。底部内面平滑化。底部外面にへラ磨き。底部外面に磨書。転用。中央部土層に接合。
200	31050	E	土器類	須恵器	有台杯	-	-	-	第1160 0058	底部内面磨ナデ後ナデ。底部外面磨ナデ後ナデ。底部内面平滑化。底部外面に磨書。転用。
201	31050	-	土器類	須恵器	無台碗	-	-	5.7	第1160 0058	底部内面磨ナデ。底部外面磨ナデ後ナデ。底部内面平滑化。底部外面に磨書「川」。中央部には磨が削けただけかもしれない。底部外面に磨書「川」。
202	31050	-	土器類	須恵器	無台碗	-	-	6.6	第1160 0058.73	底部内面磨ナデ。底部内面磨ナデ後ナデ。底部外面へラ磨ナデ。底部内面平滑化。底部外面に磨書「川」。36750と破片接合。
203	31050	-	土器類	須恵器	無台碗	-	-	6.9	第1160 0058	底部内面磨ナデ。底部内面磨ナデ。底部内面平滑化。底部外面にへラ磨き(記号状なし・動線)。
204	31050	-	土器類	須恵器	有台盤	14.3	2.3	8.0	第1160 0058	底部内面磨ナデ。底部内面平滑化。底部内面磨ナデ後ナデ。底部外面にへラ磨き(記号状なし・動線)。
205	31050	勝ち残り	土器類	須恵器	不明	-	-	8.8	第1160 0058	有台杯・有台碗・有台盤い「ハ」の底部とみられる。底部内面磨ナデ後ナデ。中央部を磨く底部内面磨ナデ。中央部ナデ・オース。底部内面平滑化。底部外面に磨書。転用。
206	31050	-	土器類	須恵器	蓋	12.6	4.0	-	第1160 0058.60	底部内面磨ナデ。大井部内面磨ナデ後ナデ。大井部磨ナデ。中央部にはナデを加える。口縁部内面磨ナデ。後成または、36750と破片接合。
207	31050	E	土器類	須恵器	蓋	11.0	-	-	第1160 0058.67	口縁部内面磨ナデ。口縁部内面に自然磨け。50750・09と破片接合。
208	31050	-	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第1160 0058	杯小碗の底部破片と推定。底部外面に磨書「川」。
209	31050	-	土器類	須恵器	陶輪	(残存)4.0)	(2.4)	(2.5)	第1160 0058	土層を欠く。外面ナデ。磨ナデ。孔径0.8cm。残存部分の長さ23.3g。
210	31050	-	土器類	瓦輪陶器	輪	13.4	4.3	6.7	第1160 0058.71	底部内面磨ナデ。底部内面磨ナデ。内面全面と底部外面上部に灰釉(厚)が削り、36750・809と破片接合。
211	31050	-	土器類	瓦輪陶器	輪	12.2	3.8	7.0	第1160 0058.69	底部内面磨ナデ。底部内面磨ナデ。底部内面磨ナデ後ナデ。底部内面平滑化。
212	31050	-	土器類	瓦輪陶器	輪	12.3	3.5	5.9	第1160 0058.69	底部内面磨ナデ。底部内面磨ナデ。
213	31050	-	土器類	瓦輪陶器	蓋	-	-	6.6	第1160 0058	底部内面磨ナデ。底部内面磨ナデ。底部外面ナデ。底部外面に磨書「川」。







第64表 遺物観察表(12)

遺物番号	出土地点	層位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 寸法	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	直径 (幅)		
296	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存22.4)	0.40	10.60	第12層 図版100	土層を欠くが、尖先部分はわずかとみられる。断面は不整な六角形を基本とするが、一定していない。側面は左右揃りである。下端はならせている。細かな加工が多数認められる。志土、ヒノキ。
297	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存18.9)	0.39	10.40	第12層 図版100	土層を欠くが、尖先部分はわずかとみられる。断面は不整な六角形を基本とするが、横門に近い部分のみみられる。志土、ヒノキ。
298	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存17.2)	0.40	10.40	第12層 図版100	土層を欠く。断面は不整な六角形を基本とするが、下端では右方向から削り、先端を尖らせている。志土。
299	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存15.4)	0.39	10.40	第12層 図版100	土層を欠く。下端はわずかに欠けておとみられる。断面は不整な六角形であるが、門に近い部分のみみられる。志土、ヒノキ。
300	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存14.8)	0.40	10.70	第12層 図版100	土層を欠く。断面は不整な六角形を基本とするが、一定していない。志土、ヒノキ。
301	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存14.0)	0.39	10.70	第12層 図版100	土層を欠く。断面は不整な六角形である。下端は尖らせている。志土、ヒノキ。
302	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存13.4)	0.40	(1.9)	第12層 図版100	土層を欠く。断面は不整な七角形である。志土。
303	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存9.3)	0.40	10.40	第12層 図版100	土層を欠く。断面は不整な五角形である。志土、ヒノキ。
304	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存8.5)	0.39	10.50	第12層 図版100	土層と下層を欠く。断面は横門に近い角形部分もある。志土、ヒノキ。
305	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存8.7)	0.40	10.40	第12層 図版100	土層を欠く。断面は不整な六角形である。志土、ヒノキ。
306	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存10.4)	0.39	10.70	第12層 図版100	土層を欠く。断面は不整な五角形である。志土、ヒノキ。
307	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存12.3)	0.39	10.70	第12層 図版100	土層を欠く。断面は横門形である。志土、ヒノキ。
308	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存11.8)	0.40	10.40	第12層 図版100	土層を欠く。断面は不整な五角形を基本とするが、横門に近い部分が多い。志土、ヒノキ。
309	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存12.4)	0.40	10.70	第12層 図版100	土層を欠く。断面は不整な五角形を基本とするが、一定していない。志土、サワラ。
310	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存13.5)	0.39	10.50	第12層 図版100	土層を欠く。断面は方形を基本とするが、下層付近は七角形である。志土、ヒノキ。
311	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存13.8)	0.39	10.70	第12層 図版100	土層を欠く。断面は横門形である。志土、ヒノキ。
312	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存14.1)	0.40	10.40	第12層 図版100	土層を欠く。断面は不整な六角形である。志土、ヒノキ。
313	3115D	-	木器類	器具	箸	(残存15.1)	0.40	10.40	第12層 図版100	土層を欠く。断面は六角形である。下端は尖らせている。志土、サワラ。
314	3115D	-	木器類	器具	板状木製品	(残存13.3)	0.40	(3.2)	第12層 図版100	下層を欠く。全体に磨食が濃くあり、加工痕などは認められない。榎目、ヒノキ。
315	3115D	-	木器類	器具	板状木製品	(残存9.40)	0.40	(3.9)	第12層 図版100	下層を欠く。加工痕などは認められない。榎目、ヒノキ。
316	3115D	-	木器類	器具	板状木製品	(22.0)	0.40	(3.4)	第12層 図版100	右側面に欠失している可能性がある。断面は削っているが、全周加工は施されていない。動物の側板か、榎目、サワラ。
317	3115D	-	木器類	器具	板状木製品	(26.7)	0.40	(6.4)	第12層 図版100	左下隅を欠く。表面と左側面に方向によるとみられる細かな磨食が認められる。また表面の下層付近には、炭化部分と動物の側板が認められる。榎目、ヒノキ。
318	3115D	-	木器類	器具	板状木製品	(26.4)	(6.3)	(4.8)	第12層 図版100	ほぼ整形品であるが、かなり傷んでいる。右上隅に小さな切り欠きか1箇所認められる。動物器の側板か、榎目、ヒノキ。
319	3115D	-	木器類	器具	板状木製品	(26.1)	(6.3)	(2.2)	第12層 図版100	整形品とみられる。全体に残存状況良好であるが、加工痕は認められない。榎目、ヒノキ。
320	3115D	-	木器類	器具	板状木製品	(残存30.0)	0.40	(5.3)	第12層 図版100	下層を欠く。全体に磨食が濃くあり、加工痕などは認められない。榎目、ヒノキ。
321	3115D	-	木器類	器具	火付け木製品	(29.0)	0.39	11.30	第12層 図版100	下層のみ炭化している。志土。
322	3115D	-	木器類	器具	火付け木製品	(27.3)	0.40	11.40	第12層 図版100	土層と下層が炭化している。下半部は強く削って薄く仕上げている。志土、ヒノキ。
323	3115D	-	木器類	器具	火付け木製品	(25.7)	(1.3)	11.40	第12層 図版100	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。志土、ヒノキ。
324	3115D	-	木器類	器具	火付け木製品	(23.3)	0.40	10.90	第12層 図版100	下層のみ炭化している。志土。

第65表 遺物観察表(13)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (最大)	器 高 (深さ)	底径 (深さ)		
225	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	300.20	00.90	01.10	第12400 図版101	字履のみ炭化している。土層は斜めに切断されている。志丸。
226	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	286.60	00.70	01.10	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸、ヒノキ。
227	30150	0	木器類	器具	矢付け木 A類	327.70	00.60	01.10	第12400 図版101	字履のみ炭化している。227・320・324・349・350の7個体 は一同出土。志丸。
228	30150	0	木器類	器具	矢付け木 A類	328.90	00.60	00.70	第12400 図版101	土層と下層が炭化している。志丸、ヒノキ。
229	30150	0	木器類	器具	矢付け木 A類	327.80	00.40	00.60	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸、ヒノキ。
230	30150	0	木器類	器具	矢付け木 A類	326.60	00.40	00.70	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸、ヒノキ。
231	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	326.80	00.30	01.10	第12400 図版101	土層と下層が炭化するが、土層の炭化範囲はほぼ土層面の みにとどまる。志丸。
232	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	326.60	00.50	00.60	第12400 図版101	土層と下層が炭化している。断面は比較的整った方形であ る。志丸、ヒノキ。
233	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	323.60	00.70	02.20	第12400 図版101	字履のみ炭化している。土層はきれいに切断されている。 志丸、ヒノキ。
234	30150	0	木器類	器具	矢付け木 A類	326.60	00.50	00.50	第12400 図版101	土層と下層が炭化している。志丸、ヒノキ。
235	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	323.80	00.70	01.90	第12400 図版101	字履のみ炭化している。土層はきれいに切断されている。 志丸。
236	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	317.60	00.90	01.00	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸。
237	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	317.10	00.30	00.90	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸、ヒノキ。
238	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	312.10	00.70	01.80	第12400 図版101	字履のみ炭化している。両側面が整っており、底面の形状 など、種別の製品から聞き取られたものである可能性があ る。志丸。
239	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	312.40	00.50	00.70	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸、ヒノキ。
240	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	316.20	00.40	00.80	第12400 図版101	字履のみ炭化している。土層は2層方向に切断されてい る。志丸、ヒノキ。
241	30150	-	木器類	器具	矢付け木 B類	312.40	00.60	01.00	第12400 図版101	字履のみ炭化している。上半はごく薄く仕上げている。志丸。
242	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	316.90	00.50	01.00	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸。
243	30150	-	木器類	器具	矢付け木 B類	315.90	00.90	00.80	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸。
244	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	315.10	00.70	01.10	第12400 図版101	字履のみ炭化している。土層はきれいに切断されている。 志丸、ヒノキ。
245	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	314.70	00.70	01.20	第12400 図版101	土層と下層が炭化している。いづれも表面はほとんど炭化 していない。志丸。
246	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	322.60	00.90	00.90	第12400 図版101	字履のみ炭化している。土層は欠けている可能性がある。 志丸、ヒノキ。
247	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	322.90	00.60	01.70	第12400 図版101	字履のみ炭化している。土層は削って薄く仕上げている。 志丸。
248	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	323.20	01.80	01.20	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸。
249	30150	0	木器類	器具	矢付け木 A類	324.10	00.40	00.50	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸。
250	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	325.60	01.20	01.20	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸、ヒノキ。
251	30150	0	木器類	器具	矢付け木 A類	324.20	00.20	00.60	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸。
252	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	312.20	00.50	01.10	第12400 図版101	字履のみ炭化している。表面はさらに長かった可能性がある。 志丸。
253	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	311.60	00.60	01.20	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸。
254	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	310.90	00.20	00.80	第12400 図版101	字履のみ炭化している。志丸。
255	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	311.40	00.90	00.80	第12400 図版101	字履のみ炭化している。上半は薄い。志丸。
256	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	312.50	00.60	01.90	第12400 図版101	字履のみ炭化している。土層は側面に対して斜めに切断さ れている。志丸。
257	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	299.90	00.50	02.10	第12400 図版101	土層を欠く。残存部分のほぼ下半全体が炭化している。志丸。 ヒノキ。
258	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	328.50	00.70	01.40	第12400 図版101	字履のみ炭化している。土層はきれいに切断されている。 志丸、ヒノキ。
259	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	299.80	00.20	00.70	第12400 図版101	土層を欠く。字履のみ炭化している。志丸。
260	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	298.40	00.70	01.20	第12400 図版101	土層を欠く。字履が炭化している。志丸。
261	30150	-	木器類	器具	矢付け木 A類	325.20	00.90	02.90	第12400 図版101	土層と下層が炭化している。志丸。

第66表 遺物観察表(14)

遺物番号	出土地点	層位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
362	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(25.6)	0.59	10.53	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。志土。
363	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(21.9)	0.59	10.83	第12層 図版101	下層のみ炭化している。全体に極めて薄い。志土。
364	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(21.0)	0.49	(1.4)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。志土。ヒノキ。
365	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(20.9)	0.79	(1.4)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。上・下層を削って先端を尖らせている。志土。
366	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(19.4)	0.79	(1.1)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。上半の彎曲が著しい。志土。
367	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(19.2)	0.49	(1.3)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。志土。ヒノキ。
368	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(18.3)	0.49	10.85	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層は斜めに切離されている。志土。
369	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(18.2)	0.49	(1.3)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。志土。
370	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(17.4)	0.49	10.83	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。志土。
371	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(17.4)	0.49	12.3	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。志土。ヒノキ。
372	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(16.8)	0.49	(1.0)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。志土。
373	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(16.4)	0.59	10.99	第12層 図版101	下層のみ炭化している。志土。
374	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(14.8)	0.99	(1.0)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。志土。ヒノキ。
375	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(16.1)	10.79	10.99	第12層 図版101	下層のみ炭化している。横断面は比較的整った長方形である。志土。
376	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(15.3)	10.39	(1.0)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。志土。ヒノキ。
377	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	16.3	10.29	(1.0)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。極めて薄い。志土。ヒノキ。
378	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(厚さ6.2)	10.39	(1.2)	第12層 図版101	土層を欠く。残存部分のほぼ半全体が炭化している。志土。ヒノキ。
379	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(8.4)	10.79	(1.2)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。本来はさらに長かった可能性がある。志土。ヒノキ。
380	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(9.4)	10.29	(1.4)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。全体に極めて薄い。志土。
381	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(9.2)	10.49	(1.0)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。志土。
382	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(10.0)	10.79	(1.0)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層は2方向からきれいに切離されている。志土。
383	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(10.0)	10.59	(1.7)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。志土。
384	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(11.4)	10.29	(1.0)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。非常に薄く作りである。志土。
385	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(厚さ12.0)	10.29	10.69	第12層 図版101	土層を欠く。下層のみ炭化している。志土。
386	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(12.7)	10.49	(2.0)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。志土。
387	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(12.6)	10.59	10.79	第12層 図版101	下層のみ炭化している。上半部は薄い。志土。
388	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(12.2)	10.59	12.1	第12層 図版101	下層のみ炭化している。志土。ヒノキ。
389	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(12.4)	10.89	(1.4)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。志土。
390	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(12.7)	10.29	(1.2)	第12層 図版101	両側面は広く、左側面では下半部に通している。志土。
391	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(14.4)	10.49	10.59	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。志土。ヒノキ。
392	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(8.4)	10.49	(1.2)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。志土。
393	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(8.2)	10.49	(2.4)	第12層 図版101	下層のみ炭化している。土層はきれいに切離されている。志土。
394	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(7.5)	10.79	(1.4)	第12層 図版101	土層は欠失している可能性がある。下層のみ炭化している。志土。
395	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(厚さ6.7)	10.49	(1.4)	第12層 図版101	土層を欠く。下層のみ炭化している。志土。
396	3115D	-	木器類	器具	火付け木 丸盤	(7.0)	10.49	(1.3)	第12層 図版101	短小であるが上・下層が炭化している。志土。

第67表 遺物観察表(15)

遺物 番号	出土 層位	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口徑 (長さ)	器 底 径(寸)	底径 (寸)		
397	3115D	-	木器類	器具	六行け木 大盤	06.90	06.40	06.90	第12600 図版1	字線のみ残化している。芯土。
398	3115D	-	木器類	器具	六行け木 大盤	06.90	06.40	01.10	第12600 図版1	上縁・下縁が残化している。芯土。
399	3115D	-	木器類	器具	六行け木 大盤	(7.8)	06.40	(1.4)	第12600 図版101	字線のみ残化している。芯土。モカシ風。
400	3115D	-	木器類	器具	六行け木 大盤	(7.0)	06.50	08.80	第12600 図版101	字線のみ残化している。芯土。ヒノキ。
401	3115D	-	木器類	器具	六行け木 大盤	06.30	(1.0)	(1.4)	第12600 図版1	上縁は欠失している可能性はある。字線のみ残化している。字線は斜めに削っている。横溝部分に凹みがあり、木の柱を切ったことを見られている。芯土。
402	3115D	-	石器類	石鏡	跡無葉鏡	(1.6)	06.30	(1.3)	第12600 図版119	石材はチャート。重さ0.5g。
403	3215D	-	土器類	須恵器	坏蓋	9.0	2.9	-	第12600 図版1	天井部内面平ナ。天井部外面凹削ヘラ削り。底部内外面凹削ナ。底部内面に自然釉付着。
404	3215D	-	土器類	須恵器	篩み蓋?	-	-	-	第12600 図版73	天井部内面平ナ。天井部外面凹削ヘラ削り。底部内外面凹削ナ。底部内面に磨書「□」。
405	3215D	-	土器類	須恵器	篩み蓋?	約17.0	-	-	第12600 図版1	底部内外面凹削ナ。底部内面に磨書。転用鏡。
406	3215D	-	土器類	須恵器	篩み蓋?	約16.4	-	-	第12600 図版1	天井部内面凹削ナ。天井部外面凹削ヘラ削り。底部内外面凹削ナ。内面にほぼ全面に磨書。転用鏡。
407	3215D	-	土器類	須恵器	甗台輪	12.0	4.2	3.2	第12600 図版60・61	底部内面凹削ナ。底部外面上半は工具により凹削ナ。下半は凹削ナ。底部内面に凹削ナ。底部外面に凹削ナ。底部外面に自然釉を全量とする。底部内面に磨書「□口フヤ」。古く厚く破片接合。
408	3215D	-	土器類	須恵器	甗台輪	12.2	3.4	6.6	第12600 図版66	底部内外面凹削ナ。底部内面凹削ナ後ナ。底部外面ヘラ削り後削ナ。
409	3215D	-	土器類	須恵器	甗台輪	-	-	3.8	第12600 図版73	底部内面凹削ナ。底部内面凹削ナ後ナ。底部外面ヘラ削り後削ナ。底部外面に磨書「□」。
410	3215D	-	土器類	須恵器	甗台坪	12.0	3.3	8.4	第12600 図版60	底部内面凹削ナ。底部内面凹削ナ。底部内面凹削ヘラ削り後ナ。底部内面平化。底部外面に磨書「□」。
411	3215D	-	土器類	須恵器	甗台輪	12.6	2.7	6.2	第12600 図版66	底部内面凹削ナ。底部内面凹削ナ後ナ。底部外面凹削ナ。
412	3215D	-	土器類	須恵器	甗台盤?	14.0	-	-	第12600 図版72	底部内外面凹削ナ。底部内面に磨書。転用鏡。
413	3215D	-	土器類	須恵器	甗台盤?	約15.0	-	-	第12600 図版1	甗台盤か甗台坪の底部とみられる。底部内外面凹削ナ。底部内面に磨書。取口には磨書付着が認められる。ことから、割れたものに破として使用されたかみられる。転用鏡。
414	3215D	-	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第12600 図版1	底部内外面凹削ナ。底部外面に磨書「□」。
415	3215D	-	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第12600 図版1	甗台輪か甗・鉢の底部と推定。底部内外面平ナ。底部外面に磨書「□」。
416	3215D	-	土器類	須恵器	不明	-	-	8.4	第12600 図版1	甗台盤か甗台坪の底部とみられる。底部内外面凹削ナ。底部外面に磨書「□」。
417	3215D	-	土器類	須恵器	蓋	11.8	-	-	第12600 図版64	底部内外面凹削ナ。口縁部付近に穿てた突起を兼ねる。3058・2040・190150・6ヶ所と破片接合。
418	3215D	-	土器類	須恵器	蓋	10.4	-	-	第12600 図版1	口縁部内外面凹削ナ。口縁部内面全面と外面の一部に自然釉付着。3ヶ所と破片接合。
419	3215D	-	土器類	須恵器	平瓶	8.5	14.6	7.0	第12600 図版63	口縁部内外面凹削ナ。頸部内面凹削ナ。下縁も窪み凹削ナ。底部内外面凹削ナ。頸部下縁外面凹削ヘラ削り。底部内面に自然釉付着。3ヶ所・深・深と破片接合。
420	3215D	-	土器類	須恵器	平瓶	10.6	16.8	11.9	第12600 図版63	口縁部内外面凹削ナ。頸部内面凹削ナ。頸部外面凹削ヘラ削り。底部内外面凹削ナ。口縁部内面に自然釉付着。21130・23038・23440・237・30637・37200・190150・3ヶ所・6ヶ所・6ヶ所・7ヶ所・8ヶ所と破片接合。
421	3215D	-	土器類	須恵器	横瓶	11.6	-	-	第12600 図版67	口縁部内外面凹削ナ。頸部内面平ナ。頸部外面に平行線印付。口縁部内外面に自然釉付着。4ヶ所・5ヶ所・5ヶ所・5ヶ所と破片接合。
422	3215D	-	土器類	瓦輪陶器	網	14.2	4.0	7.4	第12600 図版1	内面は発輪のため調整不明。底部外面凹削ナ。内面に全面に灰釉。底部外面に磨書。転用鏡。21150と破片接合。
423	3215D	-	木器類	器具	形内 高形	(残存9.2)	06.50	(2.5)	第12600 図版1	芯土を全々。全体形状の復元は困難である。上縁面・下縁面の加工は丁寧である。残存部分の断面は表現しているように見えることから、真形が判明した。種目、ヒノキ。

第68表 遺物観察表(16)

遺物番号	出土層位	層位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 寸法	観察所見など
						口徑 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
424	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(5.5)	0.30	(1.9)	第1260 図版	ほぼ下半が炭化している。極めて短い。上半が欠失した 状態は無い。否也。
425	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(6.9)	0.73	(9.9)	第1260 図版	下半のみ炭化している。否也。
426	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(残存6.4)	0.30	(1.1)	第1260 図版	上半を欠く。下半のみ炭化している。否也。
427	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(7.4)	0.43	(1.1)	第1260 図版	上半と下半が炭化している。否也。
428	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(6.1)	0.40	(2.7)	第1260 図版	下半のみ炭化している。否也。
429	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(5.5)	0.53	(1.1)	第1260 図版	上半と下半が炭化している。否也。
430	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(12.4)	0.30	(1.1)	第1260 図版	上半と下半が炭化している。否也。
431	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(12.9)	0.30	(1.2)	第1260 図版	下半のみ炭化している。否也。
432	20150	W	木器類	器具	火付け木 火皿	(12.5)	0.53	(0.5)	第1260 図版	下半のみ炭化している。否也。
433	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(11.8)	0.40	(0.9)	第1260 図版	下半のみ炭化している。否也。
434	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(11.8)	0.30	(1.2)	第1260 図版	下半のみ炭化している。否也。
435	20150	W	木器類	器具	火付け木 火皿	(11.4)	0.30	(1.1)	第1260 図版	下半のみ炭化している。否也。
436	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(10.3)	0.13	(2.3)	第1260 図版	下半のみ炭化している。否也。
437	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(12.0)	(1.8)	(1.7)	第1260 図版	下半のみ炭化している。否也。
438	20150	W	木器類	器具	火付け木 火皿	(27.5)	(1.4)	(1.9)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
439	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(22.3)	(1.4)	(1.9)	第1270 図版	上半と下半が炭化している。否也。
440	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(20.3)	(1.5)	(2.3)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
441	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(19.4)	(1.5)	(1.8)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
442	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(18.7)	0.30	(2.0)	第1270 図版	下半が炭化するほか、表面と右側面では中央部が部分的に 炭化している。否也。
443	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(17.9)	0.33	(1.1)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
444	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(17.1)	(1.4)	(1.5)	第1270 図版	下半のみ炭化している。上半は斜めに長く切断されている。 否也。
445	20150	W	木器類	器具	火付け木 火皿	(17.7)	0.43	(1.0)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
446	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(17.2)	0.73	0.30	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
447	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(16.5)	(1.3)	(1.5)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
448	20150	W	木器類	器具	火付け木 火皿	(16.4)	0.43	(1.2)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
449	20150	W	木器類	器具	火付け木 火皿	(7.2)	0.33	(1.8)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
450	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(7.7)	0.53	(1.5)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
451	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(8.2)	0.43	(1.0)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
452	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	0.40	0.53	(1.2)	第1270 図版	下半が炭化するほか、右側面も炭化している。否也。
453	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(8.7)	(1.4)	(1.1)	第1270 図版	下半のみ炭化している。表面と上端付近は、縁が水平輪 状の加工が認められる。否也。
454	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(2.0)	(1.1)	(1.0)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
455	20150	W	木器類	器具	火付け木 火皿	(8.9)	0.53	0.9)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
456	20150	-	木器類	器具	火付け木 火皿	(16.4)	0.53	(1.1)	第1270 図版	下半のみ炭化している。否也。
457	20150	-	木器類	器具	棒状木製品	(28.5)	(2.4)	(2.5)	第1280 図版	上半部と下半部中央に1箇所ずつ、突起が認められる。 横断面は円形である。これは自然木の丸みを利用したもので なく、加工によるものである。三尖の形状。否也。
458	20150	-	木器類	器具	棒状木製品	(残存12.3)	(1.2)	(1.5)	第1280 図版	上半を欠く。断面は方形に近い台形である。否也。
459	20150	-	木器類	器具	棒状木製品	(8.9)	(1.2)	(1.2)	第1280 図版	上半は垂直に切り取っている。下半は1方向から斜めに 切り落とされている。断面は不整形な五角形~六角形である。否也。
460	20150	-	木器類	部材	土器部材	(残存64.5)	(4.7)	0.43	第1290 図版	上半をわずかに欠く。下半は6方向から削り、先端を尖ら せている。断面は円形である。打ち込まれた状態である。土 器部。
461	20150	-	木器類	加工材	削製木材	(12.7)	0.43	(10.4)	第1290 図版119	右側面と裏面は比較的平滑だが、それ以外の表面は粗い 両側面を比べると、上半は縁取りを意図した形状であるの に対し、下半は極めて粗く削られたままの状態である。縦目、 1/4。
462	20450	2	土器類	土器部	鏝	12.8	-	-	第1290 図版120	口縁部内外面凹削ナデ。胴部内面上半凹削ナデ。下半に斜 め方向のハケ目。胴部外面上半にキリ目。下半に縦方向の 筋目。粘土質で具厚さを有する。
463	20450	連甲	土器類	土器部	鏝	14.0	-	-	第1290 図版121	口縁部内外面ナデ。胴部内面に横方向のハケ目。胴部内面 ナデ。胴部から胴部にかけての外面に縦方向のハケ目。

第99表 遺物観察表(17)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (最大)	器底 (深さ)	直径 (最大)		
464	3040	—	土器類	須恵器	杯身	—	—	—	第127図 図0073	天井部内面凹ナド、天井部外面凹ナドあり。底部内面凹ナドあり。天部外面に磨面あり。器底、外面に自然釉付着。10x8と同一個体と、3.9x5・5.7xと破片符合。
465	3040	2	土器類	須恵器	杯身	約8.0	—	—	第127図 図0074	底部内面凹ナド。
466	3040	—	土器類	須恵器	鍋み蓋	21.7	3.8	—	第128図 図0069・72	天井部内面凹ナド、天井部外面凹ナドあり。鍋み蓋凹ナド。底部内面凹ナド。天井部内面平滑化。内面に墨付着。和瓦同。3010・5.7xと破片符合。
467	3040	1	土器類	須恵器	鍋み蓋	13.9	2.3	—	第128図 図0071	天井部内面凹ナド後ナド。天井部外面凹ナドあり。鍋み蓋凹ナド。底部内面凹ナド。底部内面に自然釉付着。
468	3040	—	土器類	須恵器	鍋み蓋?	14.0	—	—	第128図 図0072	天井部内面凹ナド後ナド。天井部外面凹ナドあり。底部内面凹ナド。天井部内面平滑化。内面に墨付着。和瓦同。
469	3040	1	土器類	須恵器	無台杯	12.3	3.7	8.6	第128図 図0071	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド。底部外面ナド。胎土焼く黒色粒を多く含む。5.7x5.7xと破片符合。
470	3040	2	土器類	須恵器	無台杯	12.0	3.0	7.2	第128図 図0074	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド。底部外面ナド。胎土焼く黒色粒を多く含む。3010と破片符合。
471	3040	1	土器類	須恵器	無台杯	12.0	3.2	7.4	第128図 図0066	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド。底部外面ナド。胎土焼く黒色粒を多く含む。5.7x5・6.7xと破片符合。
472	3040	1	土器類	須恵器	無台杯	11.9	3.0	7.2	第128図 図0069	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド後ナド。底部外面ナド。胎土焼く黒色粒を多く含む。300x・5.7x・5.7xと破片符合。
473	3040	1	土器類	須恵器	無台杯	11.9	3.0	8.2	第128図 図0071	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド。底部外面ナド。胎土焼く黒色粒を多く含む。5.7x5・5.7xと破片符合。
474	3040	1	土器類	須恵器	無台杯	12.0	2.9	7.4	第128図 図0066	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド。底部外面ナド。胎土焼く黒色粒を多く含む。
475	3040	1	土器類	須恵器	有台杯	12.0	3.9	7.9	第128図 図0069	底部内面凹ナド。下縁を多く底部内面凹ナド。底部外面平滑化。胎土焼く黒色粒を多く含む。300x・5.7xと破片符合。
476	3040	1	土器類	須恵器	有台杯	—	—	8.2	第128図 図0071	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド後ナド。底部外面ナド。胎土焼く黒色粒を多く含む。300x・5.7xと破片符合。
477	3040	2	土器類	須恵器	有台杯	13.6	5.6	9.9	第128図 図0074	底部内面凹ナド。底部内面ナド。底部外面凹ナドあり。
478	3040	1	土器類	須恵器	有台杯	14.3	5.5	10.0	第128図 図0066	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド。底部内面に自然釉付着。胎土焼く黒色粒を多く含む。5.7x5と破片符合。
479	3040	1	土器類	須恵器	有台杯	12.0	3.8	8.1	第128図 図0071	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド。
480	3040	遺跡	土器類	須恵器	有台杯	12.1	3.4	8.8	第128図 図0071	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド後ナド。底部内面平滑化。
481	3040	2	土器類	須恵器	有台杯?	—	—	9.2	第128図 図0071	底部内面凹ナド。底部外面に墨書「口」。縁成未だく明白化を要する。
482	3040	2	土器類	須恵器	無台碗	13.0	3.4	8.0	第128図 図0071	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド。底部外面に凹削糸切り痕。底部内面平滑化。
483	3040	1	土器類	須恵器	無台碗	12.0	3.5	8.6	第128図 図0069	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド。底部外面に凹削糸切り痕。口縁部内面に墨書「口」。口縁部上にての泥付が想定される。3010・4.7x5・5.7xと破片符合。
484	3040	1	土器類	須恵器	無台碗	12.3	3.3	7.0	第128図 図0069・72	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド後ナド。底部外面ナドあり。底部外面に墨書「口」。
485	3040	1	土器類	須恵器	無台碗	—	—	8.0	第128図 図0071	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド後ナド。底部外面に凹削糸切り痕。
486	3040	1	土器類	須恵器	無台碗	—	—	8.0	第128図 図0071	底部内面凹ナド。底部外面に凹削糸切り痕。底部外面に墨書「口」。
487	3040	1	土器類	須恵器	無台碗	12.4	3.0	8.4	第128図 図0066	底部内面凹ナド。底部内面凹ナド。底部外面に凹削糸切り痕。
488	3040	2	土器類	須恵器	無台碗	11.9	3.0	8.0	第128図 図0071	底部内面凹ナド。底部外面に凹削糸切り痕。

第70表 遺物観察表(18)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
489	3240	溝埴	土器類	須恵器	無台碗	-	-	6.8	第12902 00273	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外周 ナズナズ後ナズ。底部外面に遺着「溝」。
490	3240	1	土器類	須恵器	有台碗	16.4	5.1	9.2	第12902 00261・72	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外周 回転ナズナズ。底部内面平直化。体部外周に部分的に遺着「内 」と部分的に遺着「口」(記号)。底部外面に遺着「内」 と部分的に遺着。5ヶ所・5ヶ所と破片接合。
491	3240	1	土器類	須恵器	有台碗?	16.2	-	-	第12902 00261	底台は残っていないが、有台碗とみてほぼ間違いのない。体 部内外面回転ナズ。29687・4003と破片接合。
492	3240	2	土器類	須恵器	有台碗	-	-	8.2	第12902 00277	底部内面回転ナズ。底部外面ナズナズ後ナズ。底部内面平 直化。焼成済み。広い帯褐色～広い褐色を呈する。 底部外面に遺着「力」(記号)。
493	3240	1	土器類	須恵器	有台碗	14.0	2.2	7.3	第12902 00261・72	体部内外面回転ナズ。底部内面ナズナズ。底部外面回転ナズ。 底部内面平直化。底部外面の高台より内側の全体に体部内 面の一部に遺着。転用碗。
494	3240	0	土器類	須恵器	有台碗	16.9	3.6	8.0	第12902 00261	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。
495	3240	0	土器類	須恵器	有台碗	13.9	3.3	6.6	第12902 00261	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外周 ナズ。底部内面に歪む焼き痕。頸部で褐色を呈する。9 ヶ所と破片接合。
496	3240	0	土器類	須恵器	有台碗	13.7	2.6	7.2	第12902 00261・72	体部内外面回転ナズ。底部内面ナズ。底部外周回転ナズナズ 。体部内面・底部内面に自然転付。底部外面に遺着。転 用碗。
497	3240	0	土器類	須恵器	不明	13.0	-	-	第12902 00270	体部内外面回転ナズ。底部外面に遺着「口」(井?)。
498	3240	2	土器類	須恵器	不明	-	-	10.9	第12902 00272	底部内面回転ナズ後ナズ。底部内面平直化。底部外面に 遺着「溝」。4ヶ所と破片接合。
499	3240	1	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第12902 00261	有台碗・有台碗の体部破片。体部内外面回転ナズ。体部外 面に遺着「口」。
500	3240	1	土器類	須恵器	不明	-	-	8.3	第12902 00270	底部内面ナズ。底部外面回転ナズ。焼成済みで灰白色を呈 する。底部外面に遺着「溝」。
501	3240	0	土器類	須恵器	不明	-	-	8.2	第12902 00272	有台碗・有台碗の底部のみ残る。底部内外面回転ナズ。 体部内面に自然転付。底部外面に遺着。転用碗。
502	3240	2	土器類	須恵器	鉢?	12.9	-	-	第12902 00261	体部内外面回転ナズ。焼き不足等あり。とりえず鉢と 考えられ、あるいは蓋か。
503	3240	1	土器類	須恵器	蓋	26.6	37.5	7.5	第12902 00260	口部内外面回転ナズナズ。口部外周面回転ナズ。頸部・底 部内面に同心状の凸が長径。頸部・底部外面に斜線状の 凸を呈す。口部内面・底部外周上平。底部内面に自然転 付着。32130・34800・4ヶ所・4ヶ所・5ヶ所・5ヶ所と破片接 合。
504	3240	溝埴	土器類	須恵器	蓋	11.4	7.9	5.4	第13002 00264	口部内外面回転ナズ。頸部内外面回転ナズ。底部内外面 ナズ・オオス。5ヶ所・5ヶ所と破片接合。
505	3240	2	土器類	須恵器	蓋	11.8	-	-	第13002 00264	口部内外面回転ナズ。頸部内外面回転ナズ。下部を除く頸 部回転ナズナズ。底部内面・下部外周の凸ナズ(凸部 回転ナズ)。口部内面に斜線状の凸ナズ。部分的に に部分回転化(凸部・凸部)ナズ。32130・1ヶ所・34800・ 32130・34800・4ヶ所・4ヶ所・5ヶ所・6ヶ所・11ヶ所と破 片接合。
506	3240	1	土器類	須恵器	蓋	11.4	-	-	第13002 00261	口部内外面回転ナズ。頸部内外面回転ナズ。
507	3240	1	土器類	須恵器	蓋	-	-	7.7	第13002 00267	頸部内面回転ナズ。頸部外周上回転ナズ。下部回転ナズ ナズ。底部内面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部内 面と頸部外周に部分的に自然転付着。あるいは転付部か 。5ヶ所と破片接合。
508	3240	1	土器類	須恵器	蓋	-	-	4.2	第13002 00267	頸部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。
509	3240	0	土器類	瓦輪陶器	長柄瓶	9.3	-	-	第13002 00261	口部内外面回転ナズ。肩部内外面にほぼ全面に灰釉。 13003・6ヶ所と破片接合。
510	3240	-	土器類	瓦輪陶器	段蓋	-	-	7.1	第13002 00261	体部内面ナズ。体部内面回転ナズナズ。底部内面ナズ。底 部内面平直化。4ヶ所と破片接合。
511	3240	1	土器類	緑釉陶器	蓋	13.6	2.0	6.9	第13002 00279	体部内外面回転ナズ。底部内面回転のため調整不明。外周 回転ナズナズ。全面に緑釉。頸土器部で砂粒の混入なし。 破片。9枚長平ばこのみ存在。
512	3240	1	土器類	緑釉陶器	瓶	-	-	-	第13002 00280	体部内外面回転ナズ。全面に緑釉。頸土器部で砂粒の混入 なし。破片。

第71表 遺物観察表(19)

遺物 番号	出土 器具	部位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
513	3240	溝岸	木器類	器具	箸	(残存6.3)	(0.6)	(0.7)	第130図 図版一	土層を欠く。おそらく本来はもっと長いとみられる。残存部分で断面は円形である。下端を尖らせている。芯持、ツクヤ型。
514	3240	溝岸	木器類	器具	箸	(残存4.8)	(0.4)	(0.6)	第130図 図版一	土層を欠く。本来はもっと長いとみられる。残存部分では、断面はほぼ正方形である。芯持、ツクヤ。
515	3240	1	木器類	器具	火付け本 A類	(22.6)	(1.0)	(1.2)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。芯持。
516	3240	1	木器類	器具	火付け本 A類	(17.1)	(0.5)	(1.1)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。芯持。
517	3240	2	木器類	器具	火付け本 A類	(16.2)	(0.9)	(1.7)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。上端はきれいに切斷されている。芯持。
518	3240	1	木器類	器具	火付け本 C類	(15.4)	(0.8)	(1.2)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。芯持。
519	3240	溝岸	木器類	器具	火付け本 A類	(11.8)	(0.6)	(1.2)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。芯持。
520	3240	溝岸	木器類	器具	火付け本 A類	(11.6)	(0.9)	(1.4)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。芯持。
521	3240	1	木器類	器具	火付け本 A類	(11.6)	(0.4)	(0.7)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。芯持。
522	3240	溝岸	木器類	器具	火付け本 C類	(10.7)	(0.7)	(1.0)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。芯持。
523	3240	2	木器類	器具	火付け本 B類	(8.6)	(1.2)	(1.7)	第130図 図版一	下端を中心に残存部分の過半が炭化している。芯持。
524	3240	2	木器類	器具	火付け本 C類	(8.0)	(0.3)	(1.0)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。芯持。
525	3240	溝岸	木器類	器具	火付け本 C類	(9.4)	(0.7)	(1.5)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。芯持。
526	3240	溝岸	木器類	器具	火付け本 A類	(6.4)	(1.2)	(2.1)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。上端はきれいに切斷されている。芯持。
527	3240	溝岸	木器類	器具	火付け本 A類	(6.6)	(0.5)	(1.0)	第130図 図版一	下端のみ炭化している。本来はもっと長かった可能性がある。芯持。
528	3240	溝岸	木器類	部材	土木部材 杖	(31.7)	(4.2)	(4.7)	第130図 図版111	土層は腐食のため、本来より短くなっているとみられる。下端は4方向から削り、先端を尖らせている。腐食部分加工部分以外では、断面がほぼ正方形である。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。
529	3240	溝岸	木器類	部材	土木部材 杖	(残存34.6)	(3.7)	(4.5)	第130図 図版111	土層を欠く。下端は3方向から削り、先端を尖らせている。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。
530	3240	溝岸	木器類	部材	土木部材 杖	(41.4)	(4.0)	(5.0)	第130図 図版111	腐食のため観察ではないが、下端を削って先端を尖らせている。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。
531	3240	溝岸	木器類	部材	土木部材 杖	(49.8)	(5.0)	(5.0)	第130図 図版111	土層は腐食のため本来より短くなっているとみられる。下端は4方向から削り、先端を尖らせている。腐食部分加工部分以外では、断面がほぼ正方形である。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。
532	3240	溝岸	木器類	部材	土木部材 杖	(71.6)	(5.6)	(5.3)	第130図 図版111	全体に腐食が激しい。下端は6方向から削り、先端を尖らせている。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。
533	3240	—	木器類	部材	土木部材 杖	(33.2)	(3.6)	(7.1)	第130図 図版111	ほぼ正方形である。下端の両側面を削り、先端を尖らせている。幅広の杖である。断面はほぼ正方形である。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。
534	3240	溝岸	木器類	部材	土木部材 杖	(76.7)	(5.9)	(6.0)	第130図 図版111	腐食のため、土層は本来の形状をどめていないとみられる。下端は6方向から削り、先端を尖らせている。断面はほぼ正方形である。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。
535	3240	溝岸	木器類	部材	土木部材 杖	(38.6)	(3.3)	(6.5)	第130図 図版111	板状の杖である。上端がやや腐食している。下端は両側面から削りに削り、先端を尖らせている。加工痕が明確に認められる。断面はほぼ正方形である。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。
536	3240	—	木器類	部材	土木部材 杖	(39.0)	(2.1)	(4.0)	第130図 図版一	土層・下層は腐食のため、本来の形状をどめていないとみられる。幅広の杖である。断面はほぼ正方形である。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。
537	3240	—	木器類	部材	土木部材 杖	(残存36.9)	(3.4)	(2.7)	第130図 図版一	土層を欠く。下層を尖らせているが、加工痕があまり明確ではない。断面はほぼ正方形である。打ち込まれた杖で出土。芯持。
538	3240	溝岸	木器類	部材	土木部材 杖	(残存27.9)	(3.9)	(4.4)	第130図 図版111	土層・下層を欠く。下端は6方向から削り、先端を尖らせている。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。
539	3240	溝岸	木器類	部材	土木部材 杖	(57.5)	(5.8)	(6.8)	第130図 図版111	腐食のため、土層・下層は本来の形状をどめていない。下端は4方向から削り、先端を尖らせている。断面は円形である。打ち込まれた杖で出土。芯持、ツクヤ。

第72表 遺物観察表 (20)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
540	3245D	溝埴	木器類	部材	土本部材 杖	(48.9)	(4.4)	(5.6)	第132図 図説111	観察のため、鞘に上半は本来の形状をたどっていないとみられる。下端は1方向から斜めに削っている。断面は六角 の形状である。打込まれた状態で出土。芯材、ナラ材。
541	3245D	溝埴	木器類	部材	土本部材 杖	(残存49.0)	(5.7)	(6.5)	第131図 図説111	上端を欠く。下端は3方向から削り、先端を尖らせている。 断面は六角形である。打込まれた状態で出土。芯材、ナラ材 裏側縁部変形。
542	3245D	溝埴	木器類	部材	土本部材 杖	(51.4)	(4.3)	(4.7)	第131図 図説111	観察が著しく、上端・下端は本来の形状をたどっていないが、 下端を削って先端を尖らせている。断面は六角形である。 打込まれた状態で出土。芯材、ナラ。
543	3245D	溝埴	木器類	部材	土本部材 杖	(58.1)	(6.1)	(6.5)	第131図 図説111	全体に観察が著しい。下端は4方向から削り、先端を尖ら せている。断面は六角形である。打込まれた状態です。土 芯材、ナラ。
544	3245D	溝埴	木器類	部材	土本部材 杖	(70.4)	(4.1)	(9.5)	第132図 図説111	観察が著しいもの。本来の形状をほぼとどめているとみ られる。下端は1方向から斜めに削り、先端を尖らせている。 丸材を削ったものに加して作っており、断面は六角形であ る。打込まれた状態です。芯材、ナラ。
545	3245D	溝埴	木器類	部材	土本部材 杖	(65.9)	(5.1)	(5.8)	第132図 図説111	全体に観察が著しく、加工痕はほとんど消えている。下 端は削って先端を尖らせている。断面は六角形である。打 込まれた状態です。土、ナラ。
546	3245D	溝埴	木器類	部材	土本部材 杖	(64.4)	(6.2)	(7.8)	第131図 図説111	全体に観察が著しい。下端は4方向から削り、先端を尖ら せている。断面は六角形である。打込まれた状態です。土 芯材、ナラ。
547	3245D	溝埴	木器類	部材	土本部材 杖	(25.4)	(5.5)	(4.6)	第132図 図説111	上端は欠失している可能性がある。下端は3方向から削り、 先端を尖らせている。加工痕が明確に残っている。丸材を 削ったものに加して作っており、断面は六角形である。 打込まれた状態です。芯材、ナラ。
548	3245D	溝埴	木器類	部材	土本部材 杖	(58.9)	(6.2)	(9.3)	第132図 図説111	全体に観察が著しいものと思われる。下端は6方向か ら削り、先端を尖らせているとみられる。断面は六角形である。 打込まれた状態です。土、ナラ。
549	3245D	1	その他 特殊品	古代瓦	瓦瓦	(残存5.3)	(1.3)	(残存4.3)	第132図 図説122	断面に布目。断面へつ削り・ナデ。内面ナデ。
550	3065D	1	土器類	須恵器	蓋	約13.0	-	-	第132図 図説	口縁部内外面回転ナデ。
551	3485D	-	土器類	須恵器	杯蓋	8.8	3.0	-	第132図 図説96	天井部内外面回転ナデ。底部内外面回転ナデ。2250・5ヶ 9と縦片接合。
552	3485D	-	土器類	須恵器	鉢	14.9	4.9	8.2	第132図 図説	体部内外面回転ナデ。底部内外面回転ナデ。底部外面へつ切 り痕ナデ。底部内面に自然削付。5ヶ9と縦片接合。
553	3485D	-	土器類	瓦輪筒器	筒	17.0	5.3	8.7	第132図 図説99	体部内外面回転ナデ。底部内面反転のため調整中。中央 部全面に底部内外面回転ナデ。中央ナデ。体部内面と上 部内面のほぼ全面に反転。底部内面に2ヶ9の痕跡とみ られる蓋削り痕。高台部にも蓋削り痕。底部外面に 調整「1」(約0.1)。2750・6ヶ9と縦片接合。
554	3615D	-	土器類	須恵器	杯蓋	11.2	3.9	-	第132図 図説90	天井部内面回転ナデ。天井部外面ナデ・オナデ。体部内外 面回転ナデ。天井部内面平化。体部外面に自然削付。 4ヶ9・5ヶ9と縦片接合。
555	3615D	-	土器類	須恵器	高坪	11.4	7.1	8.9	第132図 図説90	杯部内外面回転ナデ。體部内外面回転ナデ。杯部内外面と 脚部外面に自然削付。2250・4ヶ9・4ヶ9と縦片接合。
556	3615D	-	土器類	須恵器	輪み番	14.2	2.9	-	第132図 図説90	天井部内面回転ナデ・ナデ。天井部内面回転ナデ。脚 み部内面ナデ。体部内外面回転ナデ。外面に蓋削り痕。 2250・2250と縦片接合。
557	3615D	-	土器類	須恵器	無台碗	12.9	3.6	6.9	第132図 図説96	体部内外面回転ナデ。底部内外面回転ナデ。底部外面に削 り痕。
558	3615D	-	土器類	須恵器	看台杯	-	-	6.2	第132図 図説	体部内外面回転ナデ。底部内外面ナデ。胎土粗く胎色粗 く見付。
559	3615D	-	土器類	須恵器	鉢鉢兼	(4.8)	(1.4)	(4.7)	第132図 図説95	平底型は髷った形である。普通型は中心からやや外れた 位置にある。表面のみ自然削付が付きしている。高さ29.5e。
560	3615D	-	石器類	砥石		(5.4)	(2.2)	(4.1)	第132図 図説121	砥面は表面・裏面・左側面・右側面の4面。右石は緑灰色。 長さ53.7e。
561	3665D	1	土器類	須恵器	火舎	-	-	-	第132図 図説67	脚部全面回転ナデ。焼成あまく灰白色を呈する。
562	3665D	1	土器類	瓦輪筒器	筒	12.4	3.9	6.5	第132図 図説	体部内外面回転ナデ。底部内外面回転ナデ。
563	3675D	-	土器類	土器類	土牌	(残存3.1)	(1.4)	(1.3)	第132図 図説	下端を欠く。外面ナデ。口径0.4m。残存部分の長さ5.1e。

第73表 遺物観察表(21)

遺物 番号	出土 層位	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	直径 (高さ)		
564	367D	-	土器類	土師器	土埴	(残存)3.3	(1.3)	(1.3)	第120図 図61	土層を欠く。外面ナブ・胎オキニ。乳眼0.4cm。残存部分の長さ3.4cm。
565	367D	-	土器類	土師器	土埴	13.7	(1.1)	(1.1)	第120図 図62	外面ナブ。乳眼0.4cm。長さ4.7cm。
566	367D	-	土器類	須恵器	高坪	-	-	7.8	第120図 図63	胴部内外面回転ナブ。10015Dと破片接合。
567	367D	-	土器類	須恵器	浅ハ蓋	11.4	2.6	-	第120図 図64	天井部内面回転ナブ付ナブ。天井部外面回転ナブ付ナブ。縁部外面回転ナブ付ナブ。底部内外面回転ナブ。3720B・7ヤ9と破片接合。
568	367D	-	土器類	須恵器	盤台碗	13.1	2.7	7.0	第120図 図65	体部内面回転ナブ。体部外面上半回転ナブ。下半回転ナブ付ナブ。底部内面ナブ。底部外面回転ナブ付ナブ。
569	367D	-	土器類	須恵器	盤台碗	17.1	4.3	8.9	第120図 図66	体部内外面回転ナブ。底部内面ナブ。底部外面へ切り傷ナブ。
570	367D	-	土器類	須恵器	盤台碗	14.4	3.4	5.8	第120図 図67	体部内外面回転ナブ。底部内面回転ナブ。底部外面に回転ナブ切り傷。8ヤ9と破片接合。
571	367D	-	土器類	須恵器	盤台碗	13.4	2.6	6.9	第120図 図68	体部内面回転ナブ。体部外面上半回転ナブ。下半回転ナブ付ナブ。底部内面回転ナブ。底部外面回転ナブ付ナブ。10015Dと破片接合。
572	367D	-	土器類	須恵器	盤台碗	13.2	3.1	7.0	第120図 図69	体部内外面回転ナブ。底部内面回転ナブ。底部外面へ切り傷ナブ。
573	367D	-	土器類	須恵器	盤台碗	-	-	5.0	第120図 図70	体部内外面回転ナブ。底部内面磨成。底部外面に回転ナブ切り傷。胎オキニと胎合を認める。なお、胎合は口縁部の軟質層付着が35個体以上出土している。
574	367D	-	土器類	須恵器	有台碗	15.4	4.2	8.0	第120図 図71	体部内面回転ナブ。体部外面上半回転ナブ。下半回転ナブ付ナブ。底部内面回転ナブ。底部外面へ切り傷。胎オキニと胎合を認める。なお、胎合は口縁部の軟質層付着が35個体以上出土している。
575	367D	-	土器類	須恵器	有台碗	-	-	9.1	第120図 図72	体部内外面回転ナブ。底部内面回転ナブ。底部外面回転ナブ付ナブ。底部内面へ切り傷ナブ。
576	367D	-	土器類	須恵器	有台碗	12.2	4.6	6.4	第130図 図73	体部内外面回転ナブ。底部内面自然剥離のため調整不良。底部外面回転ナブ。中央部にナブを認める。5ヤ9・8ヤ9と破片接合。
577	367D	-	土器類	須恵器	蓋	3.5	-	-	第130図 図74	口縁部内外面回転ナブ。胴部内外面回転ナブ。外面に自然剥離付着。
578	367D	-	土器類	須恵器	木目	-	-	-	第130図 図75	底部内面ナブ。底部外面に自然剥離付着。底部外面に雲母を認めず質極劣品。有台碗としてほぼ鉢と見られる。
579	367D	-	土器類	須恵器	有台碗	17.6	3.4	7.9	第130図 図76	体部内外面回転ナブ。底部内面ナブ。底部外面へ切り傷ナブ。底部内面平滑。5ヤ9・5B・5Cと破片接合。
580	367D	-	土器類	須恵器	盤台碗	14.4	2.5	6.2	第130図 図77	体部内外面回転ナブ。底部内面回転ナブ。底部外面に回転ナブ切り傷。胎合で雲母色を認める。
581	367D	-	土器類	須恵器	陶埴	(残存)6.43	(2.4)	(2.9)	第130図 図78	外面ナブ。乳眼0.5cm。残存部分の長さ42.5cm。
582	367D	-	土器類	須恵器	陶埴	7.01	(2.0)	(2.6)	第130図 図79	外面ナブ・胎オキニ。乳眼7.0cm。長さ43.3cm。
583	367D	-	土器類	須恵器	陶埴	(5.1)	(1.4)	(1.8)	第130図 図80	外面ナブ。乳眼6.6cm。長さ17.7cm。
584	367D	-	土器類	須恵器	円面碗	-	-	-	第130図 図81	胴部内外面回転ナブ。盤台碗十字形とみられる透かし乳土層方向の平行穴。1379に581とつながる。
585	367D	-	土器類	須恵器	円面碗	-	-	-	第130図 図82	胴部内外面回転ナブ。図の上半左端・右端は調整が壊れており、ともに方形の透かし乳とみられる。
586	367D	-	土器類	須恵器	大舎	-	-	-	第130図 図83	土層に上部の一部がわずかに残る。胴部全面胎オキニ。
587	367D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	21.0	7.1	9.1	第140図 図84	体部内面回転ナブ。体部外面土層回転ナブ。土層を除く体部外面回転ナブ付ナブ。
588	367D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	12.5	4.2	6.9	第140図 図85	体部内面回転ナブ。底部内面回転ナブ。底部外面に回転ナブ切り傷。体部内外面に胎合。底部外面に胎合付着。胎合は平滑と破片接合。
589	367D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	12.5	2.9	7.1	第140図 図86	体部内外面回転ナブ。底部内面ナブ。体部内面に胎合。3885Dと破片接合。
590	367D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	14.4	4.2	8.2	第140図 図87	体部内外面回転ナブ。底部内面回転ナブ。底部外面ナブ。体部内面に胎合。
591	367D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	13.6	4.0	7.8	第140図 図88	体部内外面回転ナブ。底部内外面ナブ。内面平坦・体部境に重たい胎合。

第74表 遺物観察表 (22)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
092	3675D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	-	-	3.5	第13402 0006	底部内外面平化。縁部あまりく湾曲性を示す。同面では、27.6×7.4×0.6cmの突起部が縁部を形成し、その突起部は器体から出土しているが、両面を確認できる個体はこれのみである。
093	3675D	-	土器類	瓦輪陶器	蓋	17.0	2.4	8.2	第13402 0007	内面は厚い輪軸のため磨整不明。底部外面平坦ナゲ。底部外面平坦ナゲナゲ。内外面のほぼ全面に灰化。底部内面に浅く凹曲(トナリ)。9×9と破片接合。
094	3675D	-	土器類	瓦輪陶器	蓋	16.9	2.4	7.8	第13402 0007b	内面は輪軸のため磨整不明。底部外面平坦ナゲ。底部外面丁寧ナゲ。底部外面全面内面を除く全面に灰化。3720D・3720D・9と破片接合。
095	3675D	-	土器類	瓦輪陶器	蓋	-	-	7.0	第13402 0007c	底部内外面平坦ナゲ。底部外面平ナゲ。底部外面に磨書「□▲#」。
096	3675D	-	土器類	瓦輪陶器	輪?	-	-	-	第13402 0008	底部内外面平坦ナゲ。底部外面ナゲ。底部外面が凹ナゲナゲ。縁部あまりく湾曲性を示す。両方が倒壊した瓦輪陶器とみられる。口径では3720Dのように軟質の瓦輪陶器は30個体以上出土しているが、軟質の瓦輪陶器は、この個体と別の2個体のみ確認している。
097	3675D	-	土器類	土師瓦土器	蓋	9.6	-	-	第13402 0008b	底部内外面平坦ナゲ。口縁部内外面に線状に、灯明土として使用されたと考えられる。
098	3675D	-	木器類	器具	火付付木丸箱	(16.2)	(0.9)	(1.6)	第13402 0009	下縁のみ灰化している。芯材。
099	3675D	-	木器類	部材	土師木部材板	(残存25.4)	(3.7)	(3.3)	第13402 0009	上縁を欠く。下縁は両面から削って先端を尖らせているが、先端はつぶれている。ごくわずかなみがあるが、磨度が残っている。芯材。
099	3675D	-	石器類	砥石		(7.5)	(4.7)	(7.4)	第13402 0009.121	石材は砂岩。長さ29cm。
099	3675D	-	石器類	砥石		(7.2)	(1.9)	(6.9)	第13402 0009.121	砥石は表面・左側面・右側面・上端面・下端面の5面が、砥石面から平らな面ではなく、上端面はほぼ平たく、石材は表面。長さ129.3cm。
099	3675D	-	その他 特殊品	古代瓦	平瓦	(残存7.7)	(2.7)	(残存9.3)	第13402 0009.122	断面は直形。ただしナゲに加工されている部分あり。端部へナゲあり。内面に溝状の凹みあり。
099	3680D	-	土器類	須恵器	双耳片	-	-	-	第13402 0009b	双耳片の耳と器体の一部と磨定。耳内面平ナゲナゲ。
099	3680D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	-	-	7.8	第13402 0009	底部内外面平坦ナゲ。底部外面平坦ナゲナゲ。底部外面に磨書「□」(2文字の可能性あり)。9×9と破片接合。
099	3680D	-	土器類	輸入磁器	青磁碗	約15.0	-	-	第13402 0009b	底部内外面に緑色の青磁釉。底部内面へナゲ指文字。
099	3680D	-	土器類	輸入磁器	青磁碗	約14.2	-	-	第13402 0009b	底部内外面に青緑色の青磁釉。
099	3680D	-	木器類	器具	火付付木丸箱	(11.6)	(0.7)	(0.9)	第13402 0009	下縁のみ灰化している。芯材。
099	3725D	-	土器類	須恵器	浅き蓋	15.9	-	-	第13402 0009	底部内外面平坦ナゲ。
099	3725D	-	土器類	須恵器	浅き蓋?	-	-	-	第13402 0009.75	天井部内面平坦ナゲ。天井部内面平坦ナゲナゲ。底部内外面平坦ナゲ。天井部内面に磨書「漆」。胎土線まで灰白色を示す。胎土に灰化を伴った。胎土・色黒0.083に灰化する。
099	3725D	-	土器類	須恵器	無台碗	-	-	7.0	第13402 0009.75	底部内外面平坦ナゲ。底部外面平坦ナゲ。底部外面へナゲ切りナゲナゲ。底部外面に磨書「□」(1文字)。
099	3725D	-	土器類	須恵器	無台碗	-	-	7.0	第13402 0009	底部内外面平坦ナゲ。底部外面平坦ナゲナゲ。底部外面へナゲ切りナゲナゲ。底部外面に磨書「□▲#」。
099	3725D	-	土器類	須恵器	無台碗?	12.9	-	-	第13402 0009	底部内外面平坦ナゲ。底部外面に磨書「□」。
099	3725D	-	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第13402 0009	部材製の器体か。底部内外面平坦ナゲ。底部外面に磨書「□」(1文字)。
099	3725D	-	土器類	須恵器	陶輪	(残存3.9)	(1.4)	(1.4)	第13402 0009	上縁を欠く。外面に自然釉。また胎体の一部が付着し、さらさらとした状態に仕上がっている。孔径5cm。ただし自然釉により5.5とされている。残存部分の長さ11.8cm。
099	3725D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	14.2	4.6	7.0	第13402 0009.9・10	底部内外面平坦ナゲ。底部内外面平坦ナゲ。底部内面平直化。底部外面に磨書「□▲#」。3675Dと破片接合。
099	3725D	-	土器類	瓦輪陶器	蓋	8.2	13.2	8.9	第13402 0009.70	口縁部内外面平坦ナゲ。底部内面平坦ナゲ。底部外面上縁平坦ナゲ。下縁平坦ナゲナゲ。底部内面平坦ナゲ。底部外面平直ナゲ。底部外面全面(外面全面)に灰化。3720D・3680D・3720D・3720D・6×9・8×9・8×9・8×9・8×9と破片接合。
099	3725D	-	土器類	瓦輪陶器	陶輪	(6.7)	(3.3)	(3.6)	第13402 0009.71	外面口縁以上ナゲ。粗ナゲ。孔径6.9cm。長さ40.3cm。
099	3725D	-	土器類	輸入磁器	白磁碗?	-	-	-	第13402 0009	底部内外面に灰白色の白磁釉。

第75表 遺物観察表 (23)

遺物 番号	出土 層位	方位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (高さ)	直径 (幅)		
619	3720	-	木器類	部材	土製部材	06.55	06.03	(7.0)	第13000 図版	空黒色であり、厚端は5方向から削り、表面を尖らせている。断面は円形である。打ち込まれた痕跡で出土。写真。
620	3720	-	石器類	打製石片		(10.40)	(2.0)	(4.4)	第13000 図版	片表面・裏面・縁面・底面、石片は短尺状。長さ106.4e。
621	3720	-	その他 特殊物品	古代瓦	平瓦	(横9.4)	(2.7)	(横9.4)	第13000 図版122	断面が厚い。ただし寸法により狭くなっている。断面は9割り。外面に溝目状の叩き痕。
622	3730	-	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第13000 図版	有台盤・有台盤・有台盤のいずれかの底部とみられる。底部内面凹削りナズ。底部外面凹削りナズ。底部外面にヘラ削り。外面に溝目状の叩き痕。
623	10610	-	土器類	土師器	土鏝	(4.4)	(1.3)	(1.4)	第13000 図版71	外面ナズ。両端から穿孔している。径66.4cm、高さ8.4e。
624	10610	-	土器類	須恵器	編み籠?	-	-	-	第13000 図版66	底板の強みを持つ蓋の天井部破片。片断内面ナズ。編み目外面凹削りナズ。
625	10610	-	土器類	須恵器	無台杯	11.4	3.4	8.8	第13000 図版	体部内外面凹削りナズ。底部内面凹削りナズ。底部外面凹削りナズ。
626	10610	-	土器類	須恵器	無台杯	-	-	7.0	第13000 図版	底部内面ナズ。底部外面へラ削りナズ。底部外面に墨書「□」。
627	10610	-	土器類	須恵器	無台杯?	-	-	8.4	第13000 図版	体部内外面凹削りナズ。底部内面凹削りナズ。底部外面へラ削りナズ。底部内面の全面と体部内面下部に墨書行。転用痕。
628	10610	-	土器類	須恵器	無台杯	-	-	約9.0	第13000 図版	体部内外面凹削りナズ。底部内面ナズ。底部外面へラ削りナズ。底部外面に墨書「□(群a)」。ただし、その高縁にもう3文字書かれている可能性あり。
629	10610	-	土器類	須恵器	有台杯	-	-	8.6	第13000 図版	体部内外面凹削りナズ。底部内面凹削りナズナズ。底部外面凹削りナズ。底部外面に墨書行。転用痕。8割りと被写体合。
630	10610	-	土器類	須恵器	有台杯	12.4	3.7	8.9	第13000 図版69	体部内外面凹削りナズ。底部内面凹削りナズナズ。底部外面へラ削りナズ。底部内面に墨書「□」。8割りと被写体合。
631	10610	-	土器類	須恵器	有台杯	12.6	3.7	9.0	第13000 図版	体部内外面凹削りナズ。底部内面凹削りナズ。底部外面へラ削り。底部内面平直化。転用痕および高縁を呈する。
632	10610	-	土器類	須恵器	有台杯	-	-	7.8	第13000 図版	底部内面ナズ。底部内面平直化。底部外面に墨書「□」。
633	10610	-	土器類	須恵器	双耳杯?	約10.9	-	-	第13000 図版66	体部内外面凹削りナズ。耳は1つしか確認できないが、傾斜から双耳杯と推定した。
634	10610	-	土器類	須恵器	無台碗	13.0	3.8	5.6	第13000 図版	体部内外面凹削りナズ。底部内面凹削りナズ。底部外面に凹削り痕。底部外面に墨書「□」。8割りと被写体合。
635	10610	-	土器類	須恵器	無台碗	-	-	7.0	第13000 図版	体部内外面凹削りナズ。底部内面凹削りナズナズ。底部外面丁寧ナズ。底部外面に墨書「□」。
636	10610	-	土器類	須恵器	無台碗	12.0	3.1	5.8	第13000 図版	体部内外面凹削りナズ。底部内面凹削りナズ。底部外面へラ削り痕ナズ。底部内面平直化。底部外面に墨書「□(群a)」。
637	10610	-	土器類	須恵器	有台碗	15.0	5.7	8.2	第13000 図版68	体部内外面凹削りナズ。下縁を削り・体部内外面凹削りナズ。底部内面平直化へラ削り。底部内面凹削りナズナズ。底部外面ナズ。底部内面に墨書ナズ。底部内面平直化。
638	10610	-	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第13000 図版	底部内外面凹削りナズ。底部内面平直化。底部外面に墨書「□」。
639	10610	-	土器類	須恵器	4割	-	-	-	第13000 図版	底部内外面凹削りナズ。体部外面に墨書「□」。
640	10610	-	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第13000 図版	細か凸の体部とみられる。体部内外面凹削りナズ。体部外面に墨書「□」。
641	10610	-	土器類	須恵器	無台盤	-	-	6.6	第13000 図版	内面は自然剥片音のための調整不明。体部外面凹削りナズ。底部外面ナズ。
642	10610	-	土器類	須恵器	有台盤	13.9	2.6	6.8	第13000 図版81	体部内外面凹削りナズ。底部内面ナズ。底部外面凹削りナズ。底部内面にへラ書き「□」。底部外面へラ書き(記号が不明)。転用痕。転用で折損を呈する。
643	10610	-	土器類	須恵器	有台盤?	-	-	7.0	第13000 図版	体部内外面凹削りナズ。底部内面凹削りナズ。底部外面凹削りナズ。底部内面に自然剥片音。底部内面平直化。底部内面に墨書行。転用痕。
644	10610	-	土器類	須恵器	有台盤	16.4	3.1	8.2	第13000 図版121・122	体部内外面凹削りナズ。底部内面ナズ。底部内面平直化。底部外面に墨書「草」。底部内面に墨書「木」(記号不明)。底部外面に墨書行。転用痕とみられる。

第76表 遺物観察表(24)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
645	190150	-	土器類	須恵器	有台盤	15.7	3.9	6.7	第136図 0002	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。口縁は切り直さずのみに存在。体部内面に自然付着。
646	190150	-	土器類	須恵器	有台盤	14.8	2.4	7.3	第136図 0004	体部内面凹削ナズ。体部外面上半凹削ナズ。下半凹削ヘウ削ナリ。底部内外面ナズ。底部内面に直むき肌。底部内面平直化。
647	190150	-	土器類	須恵器	有台盤	13.9	2.6	6.7	第136図 00002	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。体部内面に部分的に自然付着。
648	190150	-	土器類	須恵器	有台盤	14.0	2.7	6.2	第136図 0005	体部内外面凹削ナズ。
649	190150	-	土器類	須恵器	有台盤	13.9	2.5	7.5	第136図 0006	体部内面凹削ナズ。体部外面上半凹削ナズ。下半凹削ヘウ削ナリ。底部内外面凹削ナズ。体部内面に自然付着。
650	190150	-	土器類	須恵器	割片類	15.5	10.8	10.7	第136図 00007	外側の口縁部内外面凹削ナズ。外側の底部内面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。脚部に3つの浅くしぼり付。その距離は約、 $\cdot 45^{\circ}$ 、 $\cdot 90^{\circ}$ と平均である。4.9cm $\times$ 9.9cmと破片保存。
651	190150	-	土器類	須恵器	陶輪	(残存6.6)	(2.7)	(2.9)	第136図 0008	上端を欠く。外面平卓ナズ・指ナサス。直径6.9cm。断面部分の長さ47.1g。
652	190150	-	土器類	須恵器	門窗瓦	21.0	6.9	30.4	第136図 0009	横断面内面中央部凹削ヘウ削ナリ。肩凹削ナズ。横断面内面凹削ヘウ削ナリ。縦断面凹削内外面凹削ナズ。断面内外面凹削ナズ。残存あり、6.9cm $\times$ 縦片保存。
653	190150	-	土器類	須恵器	門窗瓦	12.4	5.2	17.0	第136図 00008	横断面内面凹削ナズ。横断面外面に凹削ヘウ削ナリを施す。凹削は切り直さずのみに存在。断面内外面凹削ナズ。縦断面外面平直化。縦断面内面に肩凹削内外面に自然付着。8.5cm $\times$ 縦片保存。
654	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	15.2	5.2	7.8	第136図 0009	体部内面凹削ナズ。体部外面上半凹削ナズ。下半凹削ヘウ削ナリ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。体部内面下半と底部内面に自然付着。8.5cm $\times$ 縦片保存。
655	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	14.0	3.0	6.2	第136図 0009	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズナズ。底部外面ナズ。底部外面に磨書「C」(C.1)。
656	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	16.5	5.6	8.0	第136図 0008	内面は使い易くのため磨削不明。体部内面凹削ナズ。中央部を除く底部外面凹削ナズ。中央部ヘウ削ナリ。内面に全面に火焼。5.7cm $\times$ 縦片保存。
657	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	17.4	5.0	8.8	第136図 0009	体部内面凹削ナズ。体部外面上半凹削ナズ。下半凹削ヘウ削ナリ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。底部外面に直むき肌。底部内面平直化。体部内面に火焼(あるいは自然付着)。9.5cm $\times$ 縦片保存。
658	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	16.5	5.4	8.4	第137図 0008	体部内外面凹削ナズ。底部内外面凹削ナズ。
659	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	15.5	5.3	8.0	第137図 0008	体部内外面凹削ナズ。底部内外面ナズ。内面の底部・体部間に直むき肌。体部内面に自然付着。
660	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	13.0	4.6	6.6	第137図 0009 $\times$ 75	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。底部外面に磨書「C」。9.5cm $\times$ 縦片保存。
661	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	16.0	4.7	8.5	第137図 0008	体部内外面凹削ナズ。底部内面ナズ。体部内外面に火焼。
662	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	15.0	4.8	8.0	第137図 0009	体部内面凹削ナズ。下半を除く体部内面凹削ナズ。下半凹削ヘウ削ナリ。底部内外面凹削ナズ。体部内面・体部外面上部に自然付着。底部内面に直むき肌。底部内面平直化。9.5cm $\times$ 縦片保存。
663	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	13.0	4.3	7.3	第137図 0009	体部内外面凹削ナズ。底部内面磨削不明。底部外面ナズ。内面全面に縦断面外面に火焼。底部外面に磨書「C」。7.5cm $\times$ 縦片保存。
664	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	14.2	3.7	7.6	第137図 0009	体部内外面凹削ナズ。底部内面に自然付着のため磨削不明。底部外面に直むき肌。底部内面平直化。底部外面に磨書「C」。6.2cm $\times$ 縦片保存したのかもしれない。肩付内面に部分的に磨削。
665	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	19.4	-	-	第137図 00072	体部内面凹削ナズ。体部外面上半凹削ナズ。下半凹削ヘウ削ナリ。体部内面全面と体部外面上半に火焼。体部外面下半に磨削。転用。
666	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	-	-	8.0	第137図 0008	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。底部外面に磨書「C」。あるいは磨削跡。
667	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	-	-	6.1	第137図 0008	底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。体部外面下半と肩付に直むき肌。底部外面に磨書「C」。
668	190150	-	土器類	瓦輪陶器	輪	13.7	-	-	第137図 0008	体部内外面凹削ナズ。体部外面に磨書「C」。

第77表 遺物観察表(25)

遺物 番号	出土 地点	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
669	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	16.2	5.2	7.4	第127図 10069F	体部内外面陶削ナズ。底部内面にヘラ刮り痕。底部内面陶削ヘラ刮り。底部内面に着色あり。体部内面全面と体部外面上半の一部に瓦輪(あるいは自然釉あり)。
670	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	-	-	8.4	第127図 10067F	体部内外面陶削ナズ。底部内面陶削ナズ。底部外面ナズ。底部内面に自然釉付着。底部内面平滑化。底部外面に黒書「C」(記付)。
671	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	輪	-	-	8.2	第127図 10068F	底部内面陶削ナズ。底部外面ナズ。底部外面に墨付着。輪用砥。
672	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	皿	16.4	2.5	7.2	第127図 10070F	内面は磨削のための調整木目。体部外面陶削ナズ。底部外面陶削ヘラ刮り。内面全面に瓦輪。
673	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	皿	14.0	2.4	7.0	第127図 10066F	体部内外面陶削ナズ。底部内面陶削ナズ。
674	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	皿	13.9	2.9	7.9	第127図 10070F	体部内外面陶削ナズ。底部内面陶削ナズ後ナズ。底部外面に陶削ヘラ刮り痕。底部内面平滑化。底部外面に黒書「C」。
675	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	皿	13.2	3.1	7.8	第127図 10070F	体部内外面陶削ナズ。底部内面陶削ナズ。底部外面にヘラ刮りナズ。底部外面全面に全面に灰ナグリの付着。ただし、底部内面には黒書部分に付与とみられる無釉部分が認められる。底部外面に黒書「B」。4×3Nと磁石反応。
676	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	皿?	-	-	6.7	第127図 10066F	内面は磨削のための調整木目。体部外面陶削ナズ。底部外面陶削ナズ。内面全面と高台頂面までの外面は全面に瓦輪。底部内面に黒書付着。底部外面に墨付着。輪用砥。ただし刮りしている箇所は黒書の可能性あり。
677	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	皿蓋	-	-	7.2	第127図 10066F	体部内外面陶削ナズ。底部内外面陶削ナズ。体部内外面に瓦輪。
678	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	皿	14.8	3.4	7.5	第127図 10067F・36	体部内外面陶削ナズ。底部内面陶削ナズ後ナズ。底部外面に陶削ヘラ刮り。体部内面に自然釉あり。瓦輪。体部外面に黒書「C」。底部内面に墨付着。輪用砥。
679	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	皿	-	-	11.6	第127図 10070F	胴部内外面陶削ナズ。底部外面ナズ。胴部外面と底部内面に瓦輪(あるいは自然釉あり)。底部外面に3本の平行線状のヘラ磨き。3×3Nと磁石反応。
680	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	蓋	3.8	-	-	第128図 10066F	胴部内外面陶削ナズ。胴部内外面陶削ナズ。胴部外面に瓦輪。
681	10610D	-	土器類	瓦輪陶器	陶種	(6.3)	(3.6)	(3.8)	第128図 10067F	外面ナズ・底オサエ。外面に瓦輪もしくは自然釉。また他個体の一部が付着。孔径0.8mm。長さ7.6。
682	10610D	-	土器類	山形蓋	輪	約13.6	-	-	第128図 10069F	体部内外面陶削ナズ。底部内面に自然釉付着。底部全面瓦輪。
683	10610D	-	土器類	山形蓋	小蓋	約10.8	-	-	第128図 10069F	体部内外面陶削ナズ。底部内面に自然釉付着。底部全面瓦輪。
684	10610D	-	土器類	山形蓋	鉢	-	-	約14.5	第128図 10069F	体部内面陶削ナズ。体部外面上甲陶削ナズ。下半部方向の2ヶ所。底部内面平滑化。底土粗く、砂を多く含む。
685	10610D	-	木器類	器具	糸物容器 円筒糸物容器	(残存16.1)	0.70	(残存7.5)	第128図 10066F	胴縁部に幅広いV字型の凹みがある。表面に小さき孔が4箇所認められる。いずれも貫通していない。縦目。ヒノキ。
686	10610D	-	木器類	器具	糸物容器 円筒糸物容器	(残存26.4)	0.90	(残存6.2)	第128図 10069F	表面の残存部は互に表面に黒色の付着物(黒垢?)が認められる。縦目。ヒノキ。
687	10610D	-	木器類	器具	明臼 臼	(残存22.1)	(1.4)	(1.4)	第128図 10066F	平盤を欠く。断面はほぼ正方形である。上端では6方向の平盤を欠く。断面を互に付いている。中央に穿孔し込まれる小孔が2つあり、その隙間に径3mmほどの棒がつけられた網と固定できる。芯部。ヒノキ。
688	10610D	-	木器類	器具	形代 高形	(残存17.3)	0.71	(3.9)	第128図 10066F	右端(尾端)を欠く。上下を判別するのが難しい。背の腹の表現とされる方を上としたが、定かではなく、上下逆となる可能性がある。表面・裏面に磨きし込まれたみられる凹みか凹み箇所認められる。裏面に10程度の切り込みがみられる可能性がある。縦目。ヒノキ。
689	10610D	-	木器類	器具	形代 高形	(残存11.4)	0.70	(3.9)	第128図 10066F	右端を欠く。上下を判別するのが難しい。より背の腹にみ込まれている方を上としたが、定かではなく、上下逆となる可能性がある。表面・裏面に磨きし込まれたみられる凹みか凹み箇所認められる。縦目。ヒノキ。
690	10610D	-	木器類	器具	形代 高形	(残存11.1)	0.71	(3.6)	第128図 10066F	右端(尾端)を欠く。上端部・下端部の加工部がよく残っている。胴部・胴部・尾端の内面はほぼ丸くにより調整されている。胴部が平気であるが、輪部にも見え、上部は半円形を多く密かに傾り背を表現しているが、軽しい。表面は認められない。縦目。ヒノキ。

第78表 遺物観察表 (26)

遺物番号	出土層位	層位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	幅 (厚さ)	底径 (幅)		
491	1001B	-	木器類	器具	削代 高脚	(残存19.2)	0.53	12.33	第1346号 図説96	右側の一部を欠く。左側(正面)も欠失している可能性が高い。上縁(脚)と右縁(足縁)の形状から高脚と判断した。残片。アスノコ。黒。
492	1001B	-	木器類	器具	杵子 高脚	(残存13.6)	0.43	(残存5.9)	第1346号 図説97	上縁と左縁を欠く。下縁は保護されている。これは使用に待ったものである可能性がある。残片。ヒノキ。
493	1001B	-	木器類	器具	箸	(残存19.0)	0.53	0.83	第1346号 図説100	下縁を欠く。右側面に切り欠き加工を施している。その際の表面は深くぼみでおり、種のようなもので仕上げた層である可能性がある。残片。ヒノキ。
494	1001B	-	木器類	器具	板状木製品	(残存13.1)	0.13	(4.1)	第1346号 図説98	下縁を欠く。両側面に切り欠き加工を施している。その際の表面は深くぼみでおり、種のようなもので仕上げた層である可能性がある。残片。ヒノキ。
495	1001B	-	木器類	器具	板状木製品	(9.8)	0.40	0.53	第1346号 図説102	明らかで左側面は認められない。本来は円筒状(おび)または筒状(おび)であったものを二次加工したものであるように見受けられる。遺残片。ヒノキ。
496	1001B	-	木器類	器具	板状木製品	(残存16.1)	0.40	0.23	第1346号 図説99	左縁を欠く。下縁を欠く。右縁も欠けている可能性がある。上縁面は比較的平滑である。形状から彫刻の足縁の可能性が考えられるが、定かではない。残片。ヒノキ。
497	1001B	-	木器類	部材	器具部材	(14.2)	0.73	(7.8)	第1346号 図説101	下縁は彫刻をとりあげていないとみられる。左側面に切り欠き加工を施している。上縁と右側面は、比較的丁寧に斜めに切り落としている。残片。ヒノキ。
498	1001B	-	木器類	部材	器具部材 胡蝶蓋?	(26.9)	0.23	(6.0)	第1346号 図説112	下縁の一部を欠くが、ほぼ全形である。上縁と傾広の輪を伴って出ている。袖の上縁面からその木が覆って行かれている。これは彫刻を覆いにくくするための下とみられる。傾広面は彫刻の跡とみられるが、その部分に下縁も、下縁面を除いて比較的丁寧に加工されている。残片。アスノコ。黒。
499	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(22.4)	1.40	(1.4)	第1346号 図説103	上縁と下縁が炭化している。黒。ヒノキ。
700	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(26.4)	0.53	(1.2)	第1346号 図説104	下縁のみ炭化している。上縁は強く切離されている。黒。ヒノキ。
701	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(26.2)	0.73	(1.4)	第1346号 図説105	下縁のみ炭化している。黒。ヒノキ。
702	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(26.0)	1.13	(1.5)	第1346号 図説106	下縁のみ炭化しているが、炭化範囲は比較的広い。上縁はきれいに切離されている。左側面に彫刻が認められる。黒。ヒノキ。
703	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(26.4)	0.40	(1.7)	第1346号 図説107	下縁のみ炭化している。上縁はきれいに切離されている。黒。ヒノキ。
704	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(23.1)	1.13	(1.6)	第1346号 図説108	下縁のみ炭化している。上縁は強く切離されている。黒。ヒノキ。
705	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(21.4)	1.40	(1.2)	第1346号 図説109	上縁と下縁が炭化している。黒。ヒノキ。
706	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(20.4)	1.40	(1.4)	第1346号 図説110	下縁のみ炭化している。黒。ヒノキ。
707	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(8.1)	0.20	0.60	第1346号 図説111	極めて短く、下縁のほぼ全形が炭化している。黒。ヒノキ。
708	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(8.4)	0.53	(1.0)	第1346号 図説113	下縁のみ炭化している。黒。ヒノキ。
709	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(16.0)	1.40	(3.1)	第1346号 図説114	下縁が炭化するほか、右側面は広く炭化している。加えて、彫刻は極めて鋭い。黒。マツ属残存葉実。黒。
710	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(残存19.4)	1.13	(1.9)	第1346号 図説115	上縁を欠く。下縁のみ炭化している。黒。ヒノキ。
711	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(24.7)	1.40	(1.9)	第1346号 図説116	下縁のみ炭化しているが、炭化範囲は比較的広い。黒。ヒノキ。
712	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(11.0)	1.40	(1.4)	第1346号 図説117	下縁のみ炭化している。黒。ヒノキ。
713	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(12.0)	1.40	(1.4)	第1346号 図説118	下縁のみ炭化している。上縁はきれいに切離されている。黒。ヒノキ。
714	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(13.2)	0.83	(1.8)	第1346号 図説119	下縁のみ炭化している。黒。マツ属残存葉実。黒。
715	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(20.4)	1.13	(2.7)	第1346号 図説120	下縁のみ炭化している。加工・彫刻は極めて鋭い。黒。マツ属残存葉実。黒。
716	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(残存18.7)	1.53	(2.3)	第1346号 図説121	上縁を欠く。下縁のみ炭化している。黒。ヒノキ。
717	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(19.9)	0.40	(1.4)	第1346号 図説122	下縁のみ炭化しているが、右側面に炭化範囲が広い。黒。ヒノキ。
718	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(19.5)	0.83	(1.2)	第1346号 図説123	上縁と下縁が炭化している。黒。ヒノキ。
719	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(18.5)	0.20	(1.4)	第1346号 図説124	下縁のみ炭化している。黒。ヒノキ。
720	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(16.7)	0.13	(1.9)	第1346号 図説125	上縁と下縁が炭化している。黒。マツ属残存葉実。黒。
721	1001B	-	木器類	器具	火付け木 高脚	(17.3)	0.40	(1.2)	第1346号 図説126	下縁のみ炭化している。黒。ヒノキ。

第79表 遺物観察表(27)

遺物 番号	出土 地点	方位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (厚さ)		
722	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(15.3)	(1.2)	(2.4)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。土層は軽く切断されている。志志。
723	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(15.3)	(1.7)	(3.9)	第136号 図版101	下縁が炭化するほか、左側面と土層も部分的に炭化している。加工・彫刻は極めて粗い。志志。マツ葉線管束葉脈。
724	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(15.4)	(0.9)	(2.1)	第139号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
725	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(17.4)	(0.9)	(1.9)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
726	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(残存16.8)	(1.4)	(1.5)	第140号 図版101	土層を欠く。下縁のみ炭化している。志志。
727	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(残存15.9)	(1.1)	(2.2)	第140号 図版101	土層を欠く。下縁のみ炭化している。志志。
728	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(残存15.9)	(0.5)	(0.9)	第140号 図版101	土層を欠く。下縁のみ炭化している。志志。
729	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(14.5)	(1.2)	(1.4)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。土層はきれいに切断されている。志志。
730	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(15.7)	(0.4)	(1.4)	第140号 図版101	土層の一部を欠く。下縁のみ炭化している。志志、ヒノキ。
731	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(15.4)	(0.9)	(1.1)	第140号 図版101	土層から下縁まで、全面が炭化している。志志、ヒノキ科。
732	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(15.7)	(0.7)	(1.2)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。土層は軽く切断されている。志志。
733	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(14.2)	(1.2)	(1.9)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。土層はきれいに切断されている。志志。
734	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(残存13.2)	(1.4)	(2.1)	第140号 図版101	土層を欠く。下縁のみ炭化している。志志。
735	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(14.2)	(0.6)	(0.7)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
736	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(13.7)	(1.1)	(1.2)	第140号 図版101	土層と下縁が炭化している。志志。
737	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(14.6)	(0.5)	(0.9)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
738	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(11.3)	(1.0)	(1.4)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
739	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(10.7)	(0.9)	(1.3)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。土層はきれいに切断されている。志志、ヒノキ。
740	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(11.3)	(0.4)	(1.4)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。土層はきれいに切断されている。志志。
741	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(11.8)	(0.9)	(1.4)	第140号 図版101	下縁が広く炭化するほか、土層面もわずかに炭化している。土層はきれいに切断されている。志志。
742	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(12.0)	(0.7)	(0.8)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
743	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(残存12.4)	(0.5)	(0.7)	第140号 図版101	土層を欠く。下縁のみ炭化している。志志。
744	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(12.4)	(0.5)	(1.5)	第140号 図版101	土層と下縁が炭化している。志志、ヒノキ。
745	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(13.2)	(0.9)	(1.3)	第140号 図版101	土層と下縁が炭化するほか、側面も全体が炭化している。志志。
746	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(13.1)	(0.4)	(1.0)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
747	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(13.4)	(0.6)	(1.6)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志、マツ葉線管束葉脈。
748	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(13.2)	(1.1)	(1.3)	第140号 図版101	土層と下縁が炭化している。志志。
749	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(15.2)	(0.5)	(1.3)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
750	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(10.8)	(0.7)	(1.1)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
751	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(残存11.4)	(0.6)	(1.0)	第140号 図版101	土層を欠く。下縁のみ炭化している。志志。
752	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(10.7)	(1.6)	(1.4)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。みかん散り。
753	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(10.3)	(1.2)	(1.6)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。みかん散り。
754	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(10.3)	(1.3)	(1.9)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。土層は軽く切断されている。志志。
755	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(9.5)	(0.5)	(1.8)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
756	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(8.5)	(1.4)	(1.9)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。みかん散り。マツ葉線管束葉脈。
757	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(9.6)	(1.1)	(1.9)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。
758	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(9.4)	(0.5)	(1.0)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。上半部は極めて薄い。志志。
759	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(残存9.2)	(0.4)	(1.1)	第140号 図版101	土層を欠く。下縁のみ炭化している。志志。
760	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(10.6)	(1.0)	(1.6)	第140号 図版101	土層と下縁が炭化している。志志。
761	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(8.9)	(0.3)	(1.4)	第140号 図版101	土層と下縁が炭化している。志志、ヒノキ。
762	100310	-	木器類	器具	穴付け木 心櫃	(8.2)	(2.0)	(2.1)	第140号 図版101	下縁のみ炭化している。志志。

第80表 遺物観察表 (28)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 寸法	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
763	10010	-	木器類	器具	火付け木 丸型	(8.0)	0.40	(1.7)	第140図 図版101	下縁のみ炭化している。芯太。
764	10010	-	木器類	器具	火付け木 丸型	(8.3)	0.33	(1.0)	第140図 図版101	下縁のみ炭化している。芯太、ヒノキ。
765	10010	-	木器類	器具	火付け木 丸型	(8.2)	0.40	(1.1)	第140図 図版101	下縁のみ炭化している。芯太。
766	10010	-	木器類	器具	火付け木 丸型	(8.0)	0.40	(1.5)	第140図 図版101	下半部のほぼ全体が炭化している。加工・整形は無い。芯太、ツツ科属植物葉木属。
767	10010	-	木器類	器具	火付け木 丸型	(残存7.4)	0.40	(1.1)	第140図 図版101	土層を欠く。下縁のみ炭化している。芯太、ヒノキ。
768	10010	-	木器類	器具	火付け木 丸型	(残存7.8)	0.7)	(1.6)	第140図 図版101	土層を欠く。下縁のみ炭化している。芯太。
769	10010	-	木器類	器具	火付け木 丸型	(残存6.4)	0.40	(0.8)	第140図 図版101	土層を欠く。下縁のみ炭化している。芯太、ヒノキ。
770	10010	-	木器類	器具	火付け木 丸型	(7.6)	0.30	(1.4)	第140図 図版101	下縁のみ炭化している。芯太。
771	10010	-	木器類	器具	火付け木 丸型	(7.2)	0.40	(1.4)	第140図 図版101	下縁のみ炭化している。芯太。
772	10010	-	木器類	器具	火付け木 丸型	(6.8)	0.35	(1.3)	第140図 図版101	土層と下縁が炭化している。芯太。
773	10010	-	その他 特殊品	古代瓦	平瓦	(残存7.3)	(3.2)	(残存6.7)	第141図 図版122	断面は右側、右面に厚目層2枚。厚みがあることから軒平瓦の一部である可能性がある。
774	10010	-	金属器類	副飾		(2.6)	(2.1)	(2.1)	第141図 図版122	本体は上半と下半をくわめて接合している。鍍は本体に巻1.5巻またたいた。2巻巻かれている(寸法付け7)巻34巻。内面に漆とみられる黒い塗料が認められる。
775	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(76.2)	(2.2)	(3.0)	第141図 図版111	ほぼ完形品である。下縁を削っているが、加工痕は明確ではない。断面は不整な形状である。打ち込まれた状態で出土。芯太、ヒノキ。
776	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(残存67.0)	(2.8)	(2.7)	第141図 図版111	土層を欠く。下縁の加工痕は明確ではない。断面は不整な形状である。打ち込まれた状態で出土。芯太、ヒノキ。
777	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(74.4)	(2.1)	(6.8)	第141図 図版111	完形品である。断面は平らな形状である。下縁を削削面から削って支らせている。表面・断面も丸縁付である。おびながら削っている。打ち込まれた状態で出土。芯太。
778	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(83.9)	(2.4)	(4.7)	第141図 図版111	ほぼ完形品である。下縁を削っているが、加工痕は明確ではない。断面は長方形である。打ち込まれた状態で出土。芯太、ヒノキ。
779	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(40.4)	(1.2)	(3.0)	第141図 図版111	完形品とみられるが、土層は厚層のため、本来の形状と寸法でない可能性がある。土層と下縁を削削。全周を丸らせている。薄く削削。断面は不整な形状である。打ち込まれた状態で出土。芯太、ヒノキ。
780	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(残存86.0)	(2.4)	(4.2)	第141図 図版111	土層を欠く。右側面に部を削削した痕跡が確認。下縁の加工痕は明確ではない。断面は三角形である。打ち込まれた状態で出土。みかん割り。
781	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(残存90.2)	(2.5)	(4.1)	第141図 図版111	土層を欠くものの、空所に削削とみられる。断面は三角形である。下縁を支らせているが、加工痕はほとんど認められない。右側面に加工痕が多数認められる。土層付には切欠きを削削している。みかんは厚層部材からの転用か。打ち込まれた状態で出土。半割り。
782	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(63.2)	(2.3)	(3.9)	第141図 図版111	ほぼ完形品である。下縁のみ炭化している。断面は不整な形状である。打ち込まれた状態で出土。みかん割り。
783	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(64.4)	(2.7)	(3.5)	第141図 図版111	土層は欠失している可能性がある。下縁を削削しているが、加工痕は明確ではない。断面は厚層が厚しい。断面は不整な形状である。打ち込まれた状態で出土。芯太、ヒノキ。
784	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(残存67.5)	(3.4)	(4.2)	第141図 図版111	土層を欠く。下縁も欠失している可能性がある。下縁の加工痕は明確ではない。断面は不整な形状である。打ち込まれた状態で出土。芯太、ヒノキ。
785	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(71.0)	(2.4)	(3.2)	第141図 図版111	ほぼ完形品である。下縁は削削して先端を支らせているが、加工痕は明確ではない。断面は不整な形状である。打ち込まれた状態で出土。芯太、ヒノキ。
786	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(76.7)	(3.3)	(4.7)	第141図 図版111	土層は欠失している可能性がある。下縁を削削しているが、加工痕は明確ではない。断面は厚層が厚しい。断面は不整な形状である。打ち込まれた状態で出土。芯太、ヒノキ。
787	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(40.4)	(2.3)	(3.9)	第142図 図版111	上半が下半に比べ厚しい。これは副食によるものかもしれない。下縁は3方向から削削。先端を支らせている。断面は不整な形状である。断面が厚層部材からの転用か。打ち込まれた状態で出土。半割り。
788	10710	-	木器類	部材	土器部材 板	(71.2)	(2.8)	(3.9)	第142図 図版111	完形品である。下縁はのみ厚層削削しているが、表面・断面・側面に4方向から削削して支らせている。断面は不整な形状である。断面が厚層部材からの転用か。打ち込まれた状態で出土。芯太、アサギ科属。

第81表 遺物観察表 (29)

遺物 番号	出土 地点	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	幅高 (厚さ)	直径		
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(36.90)	(1.9)	(4.9)	第147図 図解11	土層を欠くが、長さはほぼそのまま認められる。下層の 加工痕は明確ではない。断面は不整な長方形である。打ち 込まれた状態で出土。志丸、ヒノキ。
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(残存36.8)	(2.0)	(3.0)	第147図 図解11	土層を欠く。下層は右方向から削り、先端を尖らせている。 断面は不整な長方形である。打ち込まれた状態で出土。志丸、 サワラ。
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(残存35.7)	(2.2)	(2.9)	第147図 図解11	土層を欠く。下層は削って先端を尖らせているが、加工痕 は明確ではない。断面は不整な長方形である。打ち込まれた 状態で出土。志丸、サワラ。
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(3)	(1.3)	(2.8)	第147図 図解11	ほぼ完形品である。加工痕は明確ではないが、上部・下層 は削って先端を尖らせているとみられる。断面は不 整な長方形である。打ち込まれた状態で出土。志丸、 ヒノキ。
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(残存36.7)	(1.9)	(3.3)	第147図 図解11	土層を欠く。下層は右方向から削り、先端を尖らせている。 断面は不整な長方形である。打ち込まれた状態で出土。志丸、 サワラ。
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(34.80)	(2.1)	(2.1)	第147図 図解11	完形品である。上下両端とも、削って先端を尖らせている。 打ち込まれた状態で出土。志丸、サワラ。
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(27.4)	(2.3)	(3.9)	第147図 図解11	土層は右側の半部を欠いている可能性がある。下層は 左右両端を削り、先端を尖らせている。断面は長方 形である。打ち込まれた状態で出土。志丸、サワラ。
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(30.9)	(3.5)	(3.2)	第147図 図解1	ほぼ完形品であるが、下層を尖らせていない。断面は不 整な三角形である。打ち込まれた状態で出土。みかん割り、 タリ。
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(49.5)	(3.4)	(4.9)	第147図 図解1	ほぼ完形品であるが、下層を尖らせていない。断面は不 整な三角形である。打ち込まれた状態で出土。みかん割り、 タリ。
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(49.2)	(3.0)	(3.1)	第147図 図解1	ほぼ完形品である。下層は裏面を斜めに切り落として尖ら せている。土層も、鋭くはびきのり、尖らせている。打ち 込まれた状態で出土。志丸、タリ。
799	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(48.7)	(2.2)	(3.6)	第147図 図解1	下層は削れているが、横切りにすぎない状態で出土。 土層を尖らせている。断面は長方形である。打ち込まれた 状態で出土。志丸、サワラ。
800	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(49.0)	(2.1)	(4.1)	第147図 図解1	ほぼ完形品であるが、下層を尖らせていない。断面は不 整な長方形である。打ち込まれた状態で出土。志丸、タリ。
801	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(残存45.4)	(3.5)	(3.0)	第147図 図解1	土層を欠く。下層は加工を削っているが、尖らせてはい ない。断面は不整な三角形である。打ち込まれた状態で出 土。みかん割り、タリ。
802	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(45.5)	(2.7)	(4.0)	第147図 図解1	ほぼ完形品である。下層は尖らせておらず、下層端は平ら である。打ち込まれた状態で出土。志丸、タリ。
803	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(43.7)	(2.3)	(3.3)	第147図 図解1	ほぼ完形品であるが、下層を削り、先端を尖らせている。 断面は不整な長方形である。打ち込まれた状態で出土。志丸、 サワラ。
804	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(32.2)	(1.3)	(2.9)	第147図 図解1	ほぼ完形品であるが、下層を尖らせていない。断面は長 方形である。打ち込まれた状態で出土。志丸、タリ。
805	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(28.4)	(3.8)	(3.7)	第147図 図解1	ほぼ完形品であるが、下層を尖らせていない。断面は、 鋭くはびきのり、削り落としたままとなっている。打ち込ま れた状態で出土。みかん割り、タリ。
806	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(35.0)	(2.1)	(2.7)	第147図 図解1	完形品であるが、下層を尖らせていない。断面は長方形 である。打ち込まれた状態で出土。志丸、タリ。
807	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(36.2)	(1.3)	(6.2)	第147図 図解1	土層は裏面を削り、先端を尖らせている。断面は長方形 である。打ち込まれた状態で出土。志丸、タリ。
808	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(40.4)	(1.5)	(4.7)	第147図 図解1	右端の一部を欠く。断面は長方形であり、下層を斜めに削って 尖らせている。打ち込まれた状態で出土。志丸、タリ。
809	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(37.8)	(1.5)	(4.6)	第147図 図解1	ほぼ完形品であるが、下層を尖らせていない。下層端と 下層部分の裏面に、鋭くはびきのり、削り落としたままとなっ ている。打ち込まれた状態で出土。志丸、タリ。
810	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(41.4)	(2.8)	(3.0)	第147図 図解1	ほぼ完形品であるが、下層を尖らせていない。断面は三 角形である。打ち込まれた状態で出土。みかん割り、タリ。
811	10710B	-	木器類	漆材	土器部材 杖	(44.6)	(2.4)	(3.4)	第147図 図解1	ほぼ完形品である。上部・下層を尖らせている。下層の 右側には加工痕が明確に認められる。打ち込まれた状態 で出土。志丸、サワラ。

第82表 遺物観察表 (30)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 寸法	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
812	10710	-	木器類	部材	土木部材 榿木	(98.8)	0.30	(4.0)	第1402 図84	右端は斜めに切断されている。横羽に当たって、板に対して横方向に穿し込まれた状態で出土した。志瓦。
813	10710	-	木器類	部材	土木部材 杖	(60.6)	0.40	(4.3)	第1402 図84	上端は木部の形状をどめていない可能性がある。下端は左右端を斜めに削ってあり、加工痕が明瞭に認められる。断面は長方形である。打ち込まれた状態で出土。志瓦。
814	10710	-	木器類	部材	土木部材 杖	(54.5)	0.40	(3.9)	第1402 図84	細部の形状を食ったため、大きく彎曲している。下端は右方向から削り、先端を尖らせている。断面は不整な形状であるが、定していない。打ち込まれた状態で出土。志瓦。
815	10710	-	木器類	部材	土木部材 杖	(69.4)	0.30	(4.3)	第1402 図84	ほぼ中央部をとり除く。下端は左右側面を斜めに削り、先端を尖らせている。断面は不整な長方形である。打ち込まれた状態で出土。志瓦。
816	10710	-	木器類	部材	土木部材 杖	(43.8)	0.40	(3.3)	第1402 図84	上端の断面を大きく、下端は左右側面から削り、先端を尖らせている。断面は不整な長方形である。打ち込まれた状態で出土。志瓦。
817	10710	-	木器類	部材	土木部材 杖	(36.0)	0.40	(3.6)	第1402 図84	上端は尖っている可能性がある。下端は左右側面を斜めに削り、先端を尖らせている。断面は不整な長方形である。打ち込まれた状態で出土。志瓦。
818	10710	-	木器類	部材	土木部材 杖	(40.5)	0.40	(3.1)	第1402 図84	上端は尖っている可能性がある。全体を削って、下端は中央部を削っている。断面は不整な形状である。打ち込まれた状態で出土。志瓦。
819	10440	-	石器類	打製石片		(12.3)	(3.3)	(6.8)	第1402 図86	全体に磨滅している。石材は輝石質。重さ339.6g。
820	12000	-	土器類	土師器	甕	19.6	-	-	第1402 図86b	口縁部内外面積ナゲ。外面には指すそを加工する。頸部内面に横方向のハタ目。頸部外面に縦方向のハタ目。
821	12030	-	土器類	土師器	甕	約26.4	-	-	第1402 図86b	口縁部内外面積ナゲ。頸部内面に横方向のハタ目。頸部外面に斜め方向のハタ目。
822	12030	-	土器類	須恵器	甕み蓋フ	-	-	-	第1402 図86b	外面回転ナゲ。縁部蓋の縁目と推定。
823	12030	-	土器類	須恵器	無台杯	12.6	4.3	5.8	第1402 図86b・76	体部内外面回転ナゲ。底部内面回転ナゲ。底部外面に凹輪(体切り痕。底部外面へツボ書き「□」(1.8cm))。焼成あまく浅黄褐色を呈する。
824	12020	-	土器類	須恵器	無台碗	11.8	2.9	5.8	第1402 図86	体部内外面回転ナゲ。底部内面回転ナゲ。
825	12020	-	土器類	須恵器	有台杯	13.0	3.5	8.1	第1402 図86	体部内外面回転ナゲ。底部内面回転ナゲ。底部内外面平滑化。21ヶ所と破片接合。
826	12030	-	土器類	須恵器	有台杯	11.8	3.5	7.7	第1402 図86	体部内外面回転ナゲ。底部内面回転ナゲ。底部内面平滑化。21ヶ所と破片接合。
827	12030	-	土器類	須恵器	有台杯	11.0	3.7	7.3	第1402 図86b	体部内外面回転ナゲ。底部内面回転ナゲ。底部外面中央部に凹輪(体切り痕)。
828	12030	-	土器類	須恵器	有台杯	9.1	3.7	6.5	第1402 図86	体部内外面回転ナゲ。底部内面回転ナゲ。底部外面中央部に凹輪(体切り痕)。
829	12030	-	土器類	須恵器	有台杯	12.6	2.9	9.6	第1402 図86b	体部内外面回転ナゲ。底部内面回転ナゲ。底部外面回転へツボ削り。外面全面と底部外面上半に自然釉付着。
830	12000	-	土器類	瓦輪陶器	蓋	-	-	8.8	第1402 図86	頸部内外面回転ナゲ。底部内面回転ナゲ。底部外面回転ナゲ。中央部にツボを加工する。頸部外面に凹輪。底部内面に自然釉付着。16.75×19.95と破片接合。
831	12030	-	石器類	打製石片		(13.4)	(2.2)	(5.7)	第1452 図87	両側縁の上半が磨滅している。表面の下部に線状痕。石材は輝石質。重さ180.26g。
832	12000	-	石器類	打製石片		(14.5)	(3.3)	(7.2)	第1452 図87b	石材は輝石質。重さ286.6g。
833	12050	-	土器類	須恵器	鉢	37.6	-	-	第1452 図86b	体部内外面回転ナゲ。体部内面に横目。体部内面平滑化。125507・113ヶ所と破片接合。
834	13000	-	土器類	外土土器 ないし 土師器	甕	16.0	-	-	第1452 図86b	口縁部内外面積ナゲ。ただし、外面は工具によるものである可能性がある。頸部内外面磨滅。
835	13000	-	土器類	須恵器	無台碗	12.0	3.0	6.4	第1452 図86	体部内外面回転ナゲ。底部外面へツボ切りナゲナゲ。
836	13000	-	土器類	須恵器	有台碗	-	-	6.3	第1452 図86	底部内面回転ナゲナゲ・オササ。底部外面回転ナゲ。底部外面に磨書「□」。焼成あまく浅黄褐色を呈する。
837	13000	-	土器類	須恵器	有台盤フ	-	-	7.8	第1452 図86	底部内面ナゲ。底部外面回転ナゲ。底部内面平滑化。底部外面に磨付着。転用説。
838	13000	-	土器類	須恵器	有台盤フ	-	-	5.6	第1452 図86b	底部内面回転ナゲナゲ。底部外面回転へツボ削り。底部内面平滑化。底部内面に磨書「□」。底部外面に磨書「□」。

第83表 遺物観察表(31)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	底径 (高さ)		
838	1309D	-	土器類	須恵器	不明	14.8	-	-	第145図 図84	体部内外面凹輪ナズ。形状が特殊であるため輪部が捲るものの、他面から須恵器と判断した。
840	1309D	-	土器類	灰輪陶器	輪	14.8	4.0	7.0	第145図 図89	体部内面凹輪ナズ。下縁を除く体部外面凹輪ナズ。下縁同輪へラ削り。底面内面の磨耗不明。底面内面凹輪へラ削り。内外面全体に灰層を施したとみられるが、灰質している部分も多い。軽質品。1310Dと緩く接合。
841	1309D	-	土器類	灰輪陶器	輪	13.0	4.0	6.2	第145図 図84	体部内外面凹輪ナズ。体部内面に自然輪付着。
842	1310D	-	土器類	須恵器	底り蓋	12.6	-	-	第145図 図86	体部内外面凹輪ナズ。体部外面に自然輪付着。
843	1310D	-	土器類	須恵器	底り蓋	約14.6	-	-	第145図 図84	体部内外面凹輪ナズ。
844	1310D	-	土器類	須恵器	無台輪	-	-	7.4	第145図 図84	体部内外面凹輪ナズ。底面内面凹輪ナズ。中央部にナズを施した。底面内面へラ削りナズ。
845	1310D	-	土器類	須恵器	無台輪	12.9	3.1	6.2	第146図 図504・28	体部内外面凹輪ナズ。底面内面凹輪ナズ。底面外面へラ削りナズ。底面内面に墨書(45)(記号付)。体部外面に墨書(2)(記号付)。
846	1310D	-	土器類	須恵器	無台輪	13.0	6.1	6.0	第146図 図84	体部内外面凹輪ナズ。底面内面凹輪ナズ後ナズ。底面外面に凹輪も切りナズ。体部内面・底面内面平滑化。底面外面に墨書(2)。
847	1310D	-	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第146図 図84	図様不明であるが、縁の輪の体部片とみられる。あるいは灰輪陶器か。体部内外面凹輪ナズ。体部外面にへラ書きナズ。
848	1310D	-	土器類	須恵器	有台輪	12.7	2.7	7.8	第146図 図84	体部内外面凹輪ナズ。底面内面凹輪ナズ。底面外面中央部に凹輪も切りナズ。底面内面に墨書き痕。磨耗。
849	1310D	-	土器類	須恵器	不明	-	-	6.0	第146図 図84	有台輪と有台輪の底面とみられる。底面内面凹輪ナズ後ナズ。底面内面に墨書き痕。磨耗あまく浅黄褐色を呈する。底面外面に墨付着。転用現。
850	1310D	-	土器類	須恵器	覆	-	-	-	第146図 図84	胴部内面ナズ。胴部外面に平行溝状の印キ痕。胴部内面にへラ書きが認められるが、磨耗しているため完全には不明。
851	1310D	-	土器類	須恵器	覆	24.9	-	-	第146図 図84	胴部内外面凹輪ナズ。
852	1310D	-	土器類	灰輪陶器	輪	17.4	-	-	第146図 図84	体部内外面凹輪ナズ。
853	1310D	-	土器類	灰輪陶器	鉢	28.0	-	-	第146図 図84	体部内外面凹輪ナズ。
854	1311D	-	土器類	土師器	高片	-	-	-	第146図 図84	内外面磨滅。有段杯部高片の下部の破片と推定。
855	1311D	-	土器類	須恵器	無台輪	11.8	3.0	6.0	第146図 図84	体部内外面凹輪ナズ。底面内面凹輪ナズ後ナズ。底面外面へラ削りナズ。内面は正全面と体部外面土手の一部に墨色の底り着。
856	1311D	-	土器類	須恵器	横み蓋	15.5	2.4	-	第146図 図86	天井部内面凹輪ナズ。天井部外面凹輪へラ削り。縁も凹輪ナズ。体部内外面凹輪ナズ。1312Dと緩く接合。
857	1311D	-	土器類	須恵器	無台輪	13.0	4.4	6.8	第146図 図84	内面は墨付着のため磨耗不明。体部内外面凹輪ナズ。底面外面へラ削りナズ。内面は正全面と体部外面土手の一部に墨色の底り着。
858	1311D	-	土器類	須恵器	有台輪	14.9	4.2	7.3	第146図 図84	体部内外面凹輪ナズ。底面内面平滑化。
859	1311D	-	土器類	須恵器	蓋	6.0	7.2	5.6	第146図 図84	胴部内外面凹輪ナズ。胴部内外面凹輪ナズ。底面内面凹輪ナズ。底面外面に凹輪も切りナズ。1312Dと緩く接合。
860	1311D	-	土器類	灰輪陶器	輪付輪	16.4	4.5	6.7	第147図 図89	体部内外面凹輪ナズ。体部外面上層凹輪ナズ。上層以外は凹輪へラ削り。底面内面平滑化したとみられる。底面外面ナズ。底質で広く黄褐色を呈する。口縁部に輪付。
861	1311D	-	石器類	打製石片	(残存13.5)	(口2)	(口7)	(口6)	第147図 図84	片断状不全文。石材は緑片岩。重さ332.8g。
862	1311D	-	石器類	打製石片	(残存13.5)	(口3)	(口9)	(口2)	第147図 図84	土層を欠く。石材は緑片岩。重さ567.7g。
863	1311D	-	石器類	砥石	(残存)	(口7)	(口1)	(口3)	第147図 図84	本来はもっと大きな砥石だったとみられる。残存する砥石は表面・裏面の2層。石材は砂岩。重さ391.4g。
864	1313D	-	土器類	赤生土器 ないし 土師器	蓋	約17.4	-	-	第147図 図86	胴部内外面輪ナズ。胴部外面に2列の列点文。
865	1967B	-	土器類	赤生土器	覆	20.9	-	-	第147図 図86	胴部内面輪ナズ。胴部外面に磨滅し磨滅文。胴部外面に縦方向の磨滅文が認められるが、これは磨滅文の可能性が高い。内外面全面に黒色灰化物付着。
866	1967B	-	土器類	赤生土器 ないし 土師器	覆	17.0	-	-	第147図 図86	胴部内外面輪ナズ。胴部外面に黒色灰化物付着。
867	1967B	-	土器類	赤生土器 ないし 土師器	覆	17.4	-	-	第147図 図86	胴部内外面輪ナズ。胴部外面に磨滅磨滅文。口縁部・胴部に部分的に黒色灰化物付着。

第84表 遺物観察表 (32)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 寸法	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
968	100738	-	土器類	灰土器 ないし 土師器	腰	-	-	-	第147図 図説1	口縁部内面横ナズ。口縁部外面に縦の溝文。
969	100738	-	土器類	灰土器 ないし 土師器	腰	-	-	-	第147図 図説2	口縁部内面横ナズ。口縁部外面に下向きに縦方向縦溝文。口縁部外面に黒色炭化物付着。
970	100738	-	土器類	灰土器 ないし 土師器	腰	-	-	-	第147図 図説3	口縁部内面横溝。口縁部外面に縦向き縦溝文。器部外面に黒色炭化物付着。
971	100738	-	土器類	灰土器 ないし 土師器	底	13.0	-	-	第147図 図説56	縦溝文の口縁部と横溝。内外面へつとぎ(外面は単位異ないう)。口縁部外面に縦方向の縦溝文付着。
972	100738	-	土器類	土師器	腰	-	-	-	第147図 図説6	頸部内面ナズ。頸部外面にハケ目。胎土に赤雲母を含む。3字文。
973	100738	-	木器類	器具	腰 血納網	(残存43.2)	(2.1)	(10.6)	第148図 図説84	下縁を欠く。輪部・刃部縁の管状突起は明瞭ではないが、輪部に僅く残存している。管状突起の中心部と外周部との間に溝が浅く、刃部の形状から、本来はナズシ型刺入器であったとみられる。表面は左右両面に加工痕が部分的に残っている。表面は紋目が美しい。径目、メス可削。
974	100738	-	木器類	器具	腰 血納網	(残存26.4)	(1.6)	(残存3.5)	第148図 図説85	下縁を欠くほか、縁に附けて五分を欠失している可能性が高い。血納網の骨子甲の輪部から刃部上半にかけての部分である。刃部は縦溝を中央部と外周部とに分けている。管状突起が認められないが、当該部位が平坦に仕上げられているとみられ、二次加工を加えて整形した可能性がある。径目、メス可削。
975	100738	-	木器類	器具	棒状木製品	(22.5)	(2.5)	(3.8)	第148図 図説8	横断面は不整形な形である。下縁の右側面のみ残存している。志左。
976	100738	-	木器類	器具	棒状木製品	(19.1)	(2.5)	(2.4)	第148図 図説103	上縁面に斜線がめり込んでいる。断面は不整形な形を基本とするが、中央～下縁では丸みを帯びて円形に近くなる。これは平で磨くことを想定した加工と推定される。しかし、横断面としては厚すぎ、強度が足りないと思われる。志左、メス可削。
977	100738	-	木器類	器具	棒状木製品	(残存49.9)	(2.2)	(残存4.9)	第148図 図説11	両縁を欠くが、上縁はナズシに環くとみられる。断面は不整形な形である。志左、メス可削。
978	100738	-	木器類	器具	板状木製品	(6.2)	(0.4)	(4.8)	第148図 図説9	全体が腐食が進んでいるものの、ほぼ矩形を呈している。とみられる。表面に加工が深く入り込んだ痕跡が確認される。あるいは未製品か。径目、メス可削。
979	100738	-	木器類	器具	板状木製品	(残存36.9)	(0.7)	(3.9)	第148図 図説10	両縁を欠く。表面は下縁の部分が剥落している。断面は十字型である。あるいは製材か。径目。
980	100738	-	木器類	器具	板状木製品	(10.2)	(0.4)	(残存3.6)	第148図 図説11	左縁を欠く。本来の形状は不明であるが、ごく薄く、加工は丁寧である。製材か。径目。
981	100738	-	木器類	部材	器具部材	(残存58.5)	(7.2)	(34.6)	第148図 図説114	全体に腐食状態は良好ではなく、左側縁が大部分欠失しているほか、加工痕跡、輪部が残りわずかに残存している。上縁は削り出しにより、断面は平状となっている。上縁・下縁には断面が厚く切り込みを呈している。断面に貫通しない管状の方形孔が1箇内部にみられる。大きさ・形状から管状の穴の天板の可能性があると推定するが、元は管状部であった可能性もあろう。径目、メス可削。
982	100738	-	木器類	器具	形代 器具	(残存24.8)	(0.6)	(残存7.9)	第148図 図説89	左縁を欠く。縦断面でみられる貫通孔が2箇所に認められるが、磨き残りの可能性もあろう。一方、断面は削り出したままである。形状から器具と判断した。径目、ヒメテ。
983	100738	-	木器類	器具	大釘付木 製品	(14.6)	(1.6)	(2.5)	第148図 図説90	下縁のみ残存している。志左。
984	100738	-	木器類	器具	大釘付木 製品	(25.8)	(0.9)	(1.9)	第148図 図説91	下縁のみ残存している。志左。
985	100738	-	木器類	部材	器具部材	(残存7.2)	(残存4.3)	(5.2)	第148図 図説92	断面は下縁を欠くが、残存部分からは、円柱状の形に加工された木製の釘状突起と推定される。上縁は削り出した状態で加工されている。あるいは製材か。志左、メス可削。
986	100738	-	木器類	部材	器具部材	(残存7.2)	(1.5)	(1.6)	第148図 図説115	下縁を欠く。上縁は削り出した形に似た小型の棒状木製品である。残存部分にも痕跡が認められている。また、断面を推定している。削り出した形に似ている可能性が考えられる。志左、ヒメテ。
987	100738	-	木器類	器具	筒状容器	(45.1)	(3.4)	(残存9.5)	第150図 図説97	右縁を欠く。下縁は炭化しており、特に表面は炭化範囲が広い。表面は削って磨き残っている。断面の上縁・下縁は削り出した状態で残存している。加工痕跡が認められる。断面は十字型である。残存部分に貫通孔が2箇所にみられるが、それらは二次加工によるものか可能性がある。径目、メス可削。
988	100738	-	木器類	器具	筒状容器 横断面部材	(残存41.6)	(1.5)	(残存4.9)	第150図 図説99	残存部分は全体のごく一部とみられるが、本来の形状は横断面と推定される。縦断面は推定されている。貫通する管状突起が2箇所に認められる。断面は削り出した状態で加工された。木目が打ち込まれている。断面には管状突起が認められる。径目、ヒメテ。

第85表 遺物観察表 (33)

遺物 番号	出土 地点	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
888	10678	-	木器類	部材	建築部材 厚板	(71.7)	(1.6)	(11.3)	第13図 図版107	左端は上端を斜めに切り落している。上端・下端に1個ずつ切り込みが加えられているが深さは均等ではない。表面・裏面にはほぼ全面にわたって、半円による下向き加工が施されている。ただし、表面の部分がより加飾的である。また、表面では、右端に直ぐち合わせによるものから加工が不明瞭な部分があり、さらに左端にも左端に平行な下向き加工が認められる。上・下両端に左向きに半円であるが、右側面はやや鋭い。裏面は平直である。通眼目、エボキ。
890	10678	-	木器類	部材	建築部材 厚板	(82.1)	(1.3)	(11.7)	第13図 図版109	ほぼ正方形である。表面・裏面は平直である。両側面の加工はやや鋭い。左側面には直ぐちがあるが、裏面には直ぐちが加えられていない。直目、クボハ。
891	10678	-	木器類	部材	建築部材 厚板	(80.6)	(1.8)	(11.4)	第13図 図版107	表面に半円によるものから加工が多数認められる。裏面は表面に比べ鋭い。上下両端に鋭い切り込みが認められる。表面右端付近に小さな凹みが多数あり、貫通しているものが多い。ただし、これらすべてが人工的であるものか否かは判断しえない。直目は、直目、アヌボロ風。
892	10678	-	木器類	部材	建築部材	(残存82.2)	(3.3)	(4.8)	第13図 図版109	下端を欠く。上端を有眼状に削り出している。断面は不整形な正方形である。輪郭が一定で、器高加飾の可能性が考えられる。直目、アヌボロ風。
893	10678	-	木器類	部材	建築部材 残材?	(残存63.3)	(1.8)	(3.3)	第13図 図版110	上下両端を欠く。表面は比較的平直であるが、ほとんどの表面はあまり整っていない。左端面上半分には透飾を残している。直目、アヌボロ。
894	10678	-	木器類	部材	建築部材 残材?	(63.3)	(2.2)	(3.9)	第13図 図版110	上端・下端も一部を欠くが、欠部部分はごく一部と認められる。各面の修整は鋭く。表面の大部分は3方向の透飾が認められる。直目、アヌボロ。
895	10678	-	木器類	部材	建築部材 厚板	(80.6)	(1.7)	(11.5)	第13図 図版106	上端の一部を欠く。上端を三角形状に削って先端を尖らせている。左側面に1個の切り欠き加工が施されている。下端面に鋭い切り込みが認められる。両端に直ぐち加工が施されている。中央部に凹みがあり、895でも同様であることから、削り加工によるものである可能性がある。矢板に転用された板材か。直目、アヌボロ風。
896	10678	-	木器類	部材	建築部材 厚板	(47.0)	(2.4)	(16.4)	第13図 図版106	ほぼ正方形である。上端を三角形状に削って先端を尖らせている。両側面に1方向の切り欠き加工が施されている。下端面に鋭い切り込みが認められる。両端に直ぐち加工が施されている。中央部に凹みがあり、895でも同様であることから、削り加工によるものである可能性がある。矢板に転用された板材か。直目、エボキ風。
897	10678	-	木器類	部材	建築部材 柱	(残存84.4)	(9.7)	(12.3)	第13図 図版105	上端は鋭く削り切られている。下端付近にくり抜かれたり、また下端は全体に鋭く削られている。これは上部にあつたことによる透飾が認められる。断面は正方形であるが、透飾の形状が認められない。表面・裏面は比較的平直である。直目、アヌボロ風。
898	10678	-	木器類	部材	建築部材	(残存95.0)	(1.4)	(3.1)	第13図 図版110	上下両端を欠く。断面は不整形な長方形である。各面の修整は鋭い。直目、アヌボロ。
899	10678	-	木器類	部材	建築部材 厚板	(38.9)	(3.9)	(11.3)	第13図 図版105	上端面と下端面に、それぞれ異なる傾きの削り込みが半円に施される。ただし、下端には透飾を透し、刻をなしの型で加工されたものと思われる。上端は直ぐち加工が施されているが、透飾の形状が認められない。表面・裏面は比較的平直である。直目、アヌボロ風。
900	10678	-	木器類	部材	土木部材 板	(残存24.7)	(3.8)	(3.7)	第13図 図版106	上端を欠く。下端は2方向から削り落して先端を尖らせている。欠部部分と加工部分以外の大部分に、透飾が施されている。直目。
901	10678	-	木器類	部材	土木部材 板	(残存41.3)	(2.7)	(3.1)	第13図 図版106	上端を欠く。下端は4方向から削り、先端を尖らせている。直目。
902	10678	-	木器類	加工材	製板残材	(8.2)	(3.2)	(8.6)	第13図 図版118	上方部から下方部にかけて切り落し、平面部は直角三角形状を呈する。表面は丸木の表面のままである。半眼目、トナリ目。
903	10678	-	木器類	加工材	製板	(73.5)	(5.5)	(16.2)	第13図 図版118	全体に透飾状態は良好ではない。上端と下端が半円に削り切られ、透飾が認められる。断面は二等辺三角形状である。のみが直目。アヌボロ。
904	10678	-	石器類	打製石片		(8.2)	(1.0)	(3.1)	第13図 図版106	片表面・裏面・端縁。石材は緑色片岩。長さ59.2g。
905	10678	-	石器類	打製石片		(10.5)	(1.9)	(4.7)	第13図 図版120	片表面・裏面・端縁。左右端縁中央部破断。石材は緑色片岩。長さ99.2g。
906	10678	-	石器類	打製石片		(10.2)	(1.9)	(6.4)	第13図 図版106	断面に修整している。石材は緑色片岩。長さ106.9g。
907	10678	-	石器類	磨製石片		(残存5.7)	(8.4)	(残存2.9)	第13図 図版118	細部の透飾を尖くもの。両面式である。断面よりやや上への凹みを持つていて、左端は直ぐち加工が施されているが、透飾が認められる。石材は緑色片岩。直目からの透飾が認められる。直目、直目。

第86表 遺物観察表 (34)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
908	1067M	-	石器類	石筴	(残存6.5)	0.20	(残存8.8)		第1540 図版121	大半の多くを欠くものの、右端とみられる。全体に磨滅している。右方に縁状内面。残存部分の長さ10.5cm。
909	1067M	-	石器類	砥石	18.20	0.20	15.90		第1540 図版121	砥面は表面・裏面・右側面の3面。右方は砂目、長さ106.3cm。
910	365M	-	土器類	家産雑	蓋	-	-		第1540 図版91	胴部内外面回転ナズ。内外面に磨滅文具による2条の沈線。胴部上部に磨滅文具による2条の沈線をもつ。内面に自然軸付着。表面・底面が、白く焼く破片付着。
911	365M	-	木器類	器具	箸	(残存6.1)	0.20	0.40	第1540 図版7	上端を欠く。残存部分が少ないため定かではないが、断面は楕円形である。下端は尖らされている。芯地、ヒノキ。
912	1074E	-	土器類	須恵器	無台碗	12.4	3.9	6.6	第1540 図版6	体部内外面回転ナズ。体部内面に回転ナズ。中央部にナズを加える。底面外周ナズ。ヘリ切り痕を有す。
913	1074E	-	土器類	須恵器	有台碗	15.9	3.4	8.9	第1540 図版62・76	体部内外面回転ナズ。体部内面に回転ナズ。体部外周ナズ。体部内面に平直化。体部内面に磨滅文具による2条の沈線をもつ。(記号B)。底面外周に「三」(記号B)。106150に破片付着。
914	1074E	-	木器類	器具	火付け木 丸瓶	(15.2)	0.13	12.00	第1540 図版101	下端のみ磨滅している。上端は頂のみにきれいに切離されている。火付け木としては短縮である。芯地、ヒノキ。
915	1074E	-	木器類	器具	火付け木 丸瓶	(11.7)	0.20	09.90	第1540 図版6	下端のみ磨滅している。磨滅が浅い。芯地、ヒノキ。
916	1074E	-	木器類	器具	火付け木 丸瓶	(17.4)	1.13	11.13	第1540 図版6	下端のみ磨滅している。上端は磨滅した形状である。芯地、ヒノキ。
917	1074E	-	木器類	器具	現代木製品	(19.0)	1.40	13.13	第1540 図版6	全体に磨滅が著しい。分厚く、断面とは考え難い。榎目、ヒノキ。
918	1074E	-	木器類	器具	現代 高脚	(残存4.3)	0.40	12.40	第1540 図版96	左端(1部)を欠く。右端も欠ける可能性がある。上端は頂のみに平直化していると思われる。表面に磨滅しない切り込みが2条確認される。榎目、ヒノキ。
919	1074E	-	木器類	器具	神代木製品	(残存26.0)	0.20	11.90	第1540 図版7	下端を欠く。上端はきれいに斜めに切離されている。芯地、ヒノキ。
920	1074E	-	木器類	器具	神代木製品	(16.1)	0.20	11.20	第1540 図版7	縦方向に線が割って磨滅しているが、断面は円筒である。へこみ状の磨滅が認められるが、残存の磨滅である可能性が高い。芯地、ヒノキ。
921	1074E	-	木器類	器具	現代木製品	(残存1.0)	0.40	03.40	第1540 図版7	下端を欠く。本来の形状は不明である。表面に左側面には鋭利な角状の上り加工が多数認められる。裏面は粗い。あるいは神代が、榎目。
922	1074E	-	木器類	加工材	燐材	(4.4)	1.20	11.40	第1540 図版117	下端に磨滅されている。下端部の左右両面に切り込みが認められる。芯地、ヒノキ。
923	339E	L	土器類	須恵器	高坪	-	-	-	第1540 図版6	胴部内外面回転ナズ。
924	339E	L	土器類	須恵器	無台碗	11.6	3.9	5.6	第1540 図版76	体部内外面回転ナズ。体部内面に回転ナズ。底面外周に回転ナズ。底面外周に「三」(記号B)。
925	339E	M	土器類	須恵器	円蓋碗	18.8	-	-	第1540 図版69	縦断面内面ナズ。表面調整不明。胴部内外面回転ナズ。胴部内面に平直化とみられる。内面に5条の沈線と土器丸の平行沈線。縦断面中央部に磨滅付着。また、縦断面から胴部にかけての内面に2条とみられる平行沈線付着が認められる。縦断面中央部に平直化しており、磨滅した状態が認められる。
926	339E	M	土器類	須恵器	不明	13.0	-	-	第1540 図版7	体部内外面回転ナズ。体部の横から磨滅の可能性が高い。
927	339E	M	土器類	須恵器	無台碗	-	-	-	第1540 図版66	体部内外面回転ナズ。胴部内外面回転ナズ。胴部に方形の透かし(4箇所)を有す。胴部外周に縦方向の沈線を有す。
928	339E	M	土器類	須恵器	蓋	23.6	-	-	第1540 図版6	口部内外面回転ナズ。胴部内面に同心円状の付着痕。胴部内面に平行沈線の付着。外面の大部分に自然軸付着。
929	339E	M	土器類	須恵器	不明	-	-	10.9	第1540 図版72	胴部内周ナズ。胴部外周ナズによる回転ナズ。胴部内周平直化。胴部内面に2条の沈線付着。底面外周に磨滅付着。内面・外面を利用した転写。
930	339E	M	土器類	瓦輪陶器	輪	17.1	4.2	6.0	第1540 図版79	内面に瓦輪のため磨滅不明。体部外周上平回転ナズ。下底回転ナズ。底面外周回転ナズ。内面全面に瓦輪。縁部至縁部の厚さ(4号部)。2240・5分厚・9.5分と破片付着。
931	339E	-	木器類	器具	箸	(残存10.0)	0.20	00.70	第1540 図版6	上端を欠く。断面は不整形な六角形である。下端は尖らされている。芯地、ヒノキ。
932	339E	-	木器類	器具	火付け木 丸瓶	(16.8)	0.20	09.90	第1540 図版6	下端のみ磨滅している。芯地、ヒノキ。
933	339E	-	木器類	器具	火付け木 丸瓶	(12.2)	0.70	01.40	第1540 図版6	下端のみ磨滅している。芯地、ヒノキ。

第87表 遺物観察表 (35)

遺物 番号	出土 地点	方位	大分類	種別	形状?	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	直径 (高さ)		
934	309K	-	木器類	器具	穴径×木 口径	(12.4)	(1.1)	(1.3)	第154図 図54	土層が硬化するが、表面では下半のほぼ全面が硬化してい る。否也。
935	1299K	-	土器類	灰輪陶器	輪	13.4	4.0	7.4	第154図 図55	体部内外面凹輪ナシ。
936	1299K	-	石器類	打割石片		(11.4)	(2.2)	(5.4)	第154図 図56	表面の下端に薄状削。石材は緑色片岩、重さ3.4g。
937	1243K	-	土器類	須恵器	有台盤?	-	-	6.7	第155図 図57	体部内外面凹輪ナシ。底部内面凹輪ナシ。体部外 面凹輪へフ削り。体部内面に自然輪行迹。
938	1243K	-	土器類	灰輪陶器	輪	-	-	6.9	第155図 図58	体部内外面凹輪ナシ。底部内面凹輪ナシ。底部外面に凹輪 糸切り痕。体部内面に自然輪行迹。底部内面に浅く磨き 痕。底部内面平滑化。
939	1243K	-	土器類	灰輪陶器	輪?	-	-	6.1	第155図 図59	底部内外面凹輪ナシ。
940	1243K	-	土器類	灰輪陶器	輪?	-	-	6.9	第155図 図60	底部内外面凹輪ナシ。
941	1243K	-	土器類	灰輪陶器	輪	約14.2	-	-	第155図 図61	体部内外面凹輪ナシ。体部内面に自然輪行迹。
942	1243K	-	土器類	灰輪陶器	輪	-	-	7.4	第155図 図62	体部内外面凹輪ナシ。底部内面凹輪ナシ。底部外面に凹輪 糸切り痕ナシ。体部内面に自然輪行迹。底部内面にシラ書き。
943	1243K	-	土器類	古瀬戸瓦 瓦輪陶器	輪?	-	-	5.4	第155図 図63	体部内外面凹輪ナシ。底部外面に凹輪糸切り痕。内面全面 と体部外面上部に緑色の灰輪。
944	1298K	-	土器類	灰輪陶器	輪	-	-	7.0	第155図 図64	体部内外面凹輪ナシ。底部内外面凹輪ナシ。
945	1298K	-	土器類	山形輪	小皿	-	-	6.8	第155図 図65	体部内外面凹輪ナシ。底部内外面凹輪ナシ。底部外 面に凹輪糸切り痕。底部内面平滑化。底部系山形輪。
946	1276K	-	土器類	灰輪陶器	輪	13.0	-	-	第155図 図66	体部内外面凹輪ナシ。体部外面に灰輪。
947	1303K	-	土器類	須恵器	輪み番?	14.7	-	-	第155図 図67	天井部内面凹輪ナシ。天井部外面凹輪へフ削り。体部内外 面凹輪ナシ。
948	1303K	-	土器類	灰輪陶器	輪	約13.4	-	-	第155図 図68	体部内外面凹輪ナシ。
949	1303K	-	土器類	灰輪陶器	輪	-	-	8.0	第155図 図69	体部内外面凹輪ナシ。
950	1302K	-	石器類	石錘		(5.6)	(1.7)	(4.5)	第155図 図69-119	土層と下層に打ち欠きが認められる。石材は濃褐色斑岩、 重さ28.26g。
951	1825X	V	土器類	土師器	甕	-	-	-	第155図 図70	S字帯の帯台を上下逆。内面磨オナシ。外面に斜め方向の ハケ目。取土に灰目を含む。
952	1825X	V	土器類	須恵器	円蓋	10.9	-	-	第155図 図71	天井部内外面凹輪ナシ。体部内外面凹輪ナシ。天井部外面 にハケ書き「メ」。
953	1825X	V	土器類	須恵器	輪み番?	-	-	-	第155図 図72	天井部内面凹輪ナシ。天井部外面凹輪へフ削り。輪み番 凹輪ナシ。体部内外面凹輪ナシ。天井部内面に磨き「口重」。
954	1825X	V	土器類	須恵器	輪み番	16.3	-	-	第155図 図73	天井部内面凹輪ナシ。天井部外面凹輪へフ削り。体部内外 面凹輪ナシ。4字帯と磨片痕。
955	1825X	V	土器類	須恵器	有台盤	-	-	8.0	第155図 図74	体部内外面凹輪ナシ。底部内面ナシ。中央部を除く底部外 面凹輪ナシ。底部外面中央部ナシ。底部内面平滑化。底部 外面に磨き「口重」。「メ」。「メ」。「メ」。「メ」。「メ」。 磨片痕。
956	1825X	V	土器類	須恵器	有台盤	16.9	5.5	8.4	第155図 図75	体部内外面凹輪ナシ。底部内面凹輪ナシ。底部外面ナシ。
957	1825X	V	土器類	須恵器	蓋	-	-	7.2	第155図 図76	胴部内面凹輪ナシ。胴部内面凹輪へフ削り。体部内外面凹 輪ナシ。胴部外面と底部内面に自然輪行迹。3.5×3.8と 磨片痕。
958	1825X	V	土器類	灰輪陶器	皿	14.0	3.2	7.8	第155図 図77	体部内外面凹輪ナシ。底部内外面ナシ。底部内面平滑化。 体部内面に灰輪。
959	18.9	KT	土器類	縄文土器	漆鉢	17.4	-	-	第156図 図78	3字帯の帯起を帯起口縁。口縁部・胴部内面ナシ。口 縁部・胴部外面に縄文。ただし、浅層部を帯起消す。縄文 時代後期。
960	18.9	KDT	土器類	縄文土器	鉢	-	-	-	第156図 図79	胴部内面ナシ。胴部外面に塗漆と斜方向の沈痂。塗漆上 に縄文。縄文時代後期。
961	18.9	JH	土器類	縄文土器	漆鉢	27.5	26.8	10.0	第156図 図80	胴部内外面ナシ。胴部内面下半に黒色硬化物付着。胴部外 面上半に黒色硬化物付着。底部外面に縄文。縄文時代 後期。
962	129号 試掘坑12	-	土器類	縄文土器	鉢	10.0	-	-	第156図 図81	内外面ナシ。胴部外面に浮腫状文。内外面とも明褐色 を呈する。縄文時代後期。

第88表 遺物観察表 (36)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
963	15セ	■	土器類	縄文土器	鉢	-	-	-	第1560E 00035	腹部内面ナメ。腹部外面に浮線状文。縄文時代前期。
964	19中	△	土器類	縄文土器	深鉢	-	-	-	第1560E 00050	口縁部内面磨滅。口縁部外面に浮線。その下に横方向の1本の沈線。腹部内外面に全無。縄文時代前期。
965	19中	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	-	第1560E 00055	内外面磨滅。腹部外面に横方向の1本の沈線。腹部外面に横方向・斜め方向・縦方向の沈線と磨滅付着。腹部外面に黄色灰化付着。縄文時代前期。
966	17.9	KT	土器類	縄文土器	深鉢	-	-	-	第1560E 00055	口縁部内面ナメ。腹部内面ナメナ。腹部内面上部に横方向の2本の浅い・幅広い沈線。縄文時代前期。
967	18.9	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	6.8	第1560E 00061	内面磨滅。腹部外面ナメ。腹部外面中央部に横方向の2本の沈線。腹部外面に網代文。縄文時代前期。
968	17.7	KT	土器類	縄文土器	深鉢	24.4	-	-	第1560E 00065	口縁部内面磨滅ナメ。腹部内面磨ナメナ。腹部内面磨ナメナ。外面に黄色灰化付着。縄文時代前期。10.5寸破片保存。
969	18.9	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	-	第1560E 00065	内外面ナメ。腹部内面上部に横方向の2本の幅広い沈線。腹部外面に横方向の沈線。外面に黄色灰化付着。縄文時代前期。
970	18.9	I	土器類	縄文土器	深鉢	-	-	-	第1560E 00065	内外面磨滅。腹部内面上部に横方向の1本の沈線。その下に浅帯。縁部上に横方向の1本の沈線。縄文時代前期。
971	19中	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	-	第1560E 00065	腹部内面磨滅。腹部外面に沈線と文。縄文時代前期。
972	18.9	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	-	第1570E 00050	口縁部内面・腹部内面ナメ。口縁部外面に浅帯。縁部上に沈線。腹部外面に黄色灰化付着。
973	18.9	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	-	第1570E 00055	内外面磨滅。口縁部外面に磨ナメ。その下に横方向の2本の沈線。口縁部外面に磨ナメ。また、沈線は2本より内側するものもある可能性がある。
974	18中	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	-	第1570E 00055	腹部内面ナメ。腹部外面に縦方向・横方向の沈線と文。
975	18.9	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	-	第1570E 00055	口縁部内面磨ナメ。口縁部外面に網代文。
976	17.7	KT	土器類	縄文土器	深鉢	21.5	-	-	第1570E 00061	口縁部外面に黄色灰化付着。腹部外面に黄色灰化付着。90.3同一個体の可能性高い。
977	16.7	KT	土器類	縄文土器	深鉢	12.8	-	-	第1570E 00065	口縁部内面磨ナメ。口縁部外面ナメ。腹部内面上部横方向のみナメ。下部磨ナメナ。腹部外面ナメ。縁部上面に網代文。縁部上面と縁部下部外面に黄色灰化付着。
978	19中	KT	土器類	縄文土器	深鉢	24.4	22.5	11.2	第1570E 00064	腹部内面磨ナメ。腹部外面に沈線。
979	18.9	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	8.9	第1570E 00065	内外面磨滅。腹部外面に網代文。
980	19中	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	8.0	第1570E 00065	腹部内面ナメ。腹部外面に網代文。腹部内面・腹部外面に黄色灰化付着。
981	19.9	I	土器類	縄文土器	鉢	-	-	9.4	第1570E 00065	腹部内面ナメ。腹部内面ナメ。腹部外面に不明瞭ながら網代文様のものが見える。
982	18.9	△	土器類	縄文土器	鉢	-	-	8.0	第1570E 00065	内外面磨滅。腹部外面下部に2本の横方向の沈線。
983	17.7	KT	土器類	縄文土器	深鉢	-	-	8.4	第1570E 00065	内外面磨滅。976と同一個体の可能性高い。
984	18中	KT	土器類	縄文土器	鉢	-	-	9.4	第1570E 00065	内外面磨滅。腹部外面に不明瞭ながら網代文が見える。
985	16.7	KT	土器類	縄文土器	鉢	-	-	9.6	第1570E 00065	腹部内面ナメ。腹部外面に網代文。
986	15セ	■	土器類	縄文土器	鉢	-	-	8.0	第1570E 00065	腹部内面ナメ。腹部内面ナメ。腹部外面に網代文。
987	14.9	18	土器類	弥生土器	鉢	13.8	-	-	第1570E 00064	口縁部内面磨ナメ。口縁部外面に斜めの斜目文。腹部外面に凹文。腹部内面ナメ。腹部外面に縦方向のヘリ目。腹部外面下部に黄色灰化付着。弥生時代前期。
988	13.7	■	土器類	弥生土器	蓋	-	-	-	第1570E 00066	大型の蓋の口縁部破片と推定。内外面磨ナメ。外面上半に竹管文。
989	18.9	△	土器類	弥生土器	蓋	-	-	-	第1570E 00066	蓋の縁部と推定。内面ナメ。外面に網代文。
990	13.7	18	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1570E 00064	口縁部内面磨ナメ。腹部内面に横方向のヘリ目。腹部外面にヘリ磨ナメ沈線による網目状文。ただし、沈線は2本より内側した可能性がある。内面内面上部の網目状文も、弥生時代前期。
991	12.7	-	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1570E 00066	腹部内面ナメ。腹部外面にヘリ磨ナメ。内面内面上部の網目状文も、弥生時代中期。

第98表 遺物観察表 (37)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	幅高 (厚さ)	底径 (幅)		
992	16/F	KT B	土器類	弥生土器	甕	19.0	-	6.0	第1582 図0034	器高は18~20cmくらいに算定できる。内外面磨練のため顕微鏡観察。断面から観察にかけて、口縁上のヘリ部を沈線による横筋状文、底部外面に不明瞭ながら横代圧痕か、小窓ではあるが内面内式土器の横筋状文。弥生時代中期後半。
993	14/F	Ⅷ	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0036	口縁部内面横線ナズ。腹部内外面ナズ。腹部外面にヘリ部を沈線、内面内式土器の横筋状文とみられるが、口縁部断面に目立たない。弥生時代中期後半。
994	12/F	Ⅷ	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0036	腹部内外面ナズ。腹部外面にヘリ部を沈線、内面内式土器の横筋状文。弥生時代中期後半。
995	12/A	I	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0036	腹部内外面ナズ。腹部外面にヘリ部を沈線、内面内式土器の横筋状文。弥生時代中期後半。
996	12/A	II	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0034	甕の腹部断面と推定。腹部内面ナズ。腹部外面にヘリ部を沈線による横筋状文。横方向・縦方向の磨筋を沈線、13/Fと推定接合。
997	13/F	Ⅷ	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0034	甕の腹部断面と推定。腹部内面ナズ。腹部外面にヘリ部を沈線とみられる横筋状文と横方向の磨筋を沈線、13/Fと推定接合。
998	17/F	KT	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0036	腹部内外面ナズ。腹部外面にヘリ部を沈線、沈線の隙間に内面内式土器の横筋状文とみられるが、また、磨筋とみられる縦方向の沈線。
999	12/F	Ⅷ	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0036	腹部内外面ナズ。腹部外面にヘリ部を沈線、沈線の隙間や断面には997に類似する。
1000	17/F	KT	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0036	内外面磨練のため顕微鏡観察。断面から観察にかけての外面に横方向と斜め方向の磨筋を沈線、内外面磨練を記す。
1001	17/F	KT	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0036	甕の腹部断面と推定。腹部内面ナズ。部分的にハケ目・指オオミ痕が認められる。腹部外面に横方向の磨筋を沈線、外面に黒色点状物付着。17/Fと推定接合。
1002	17/F	KT	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0034	甕の腹部断面と推定。腹部内面ナズ。腹部外面に縦方向の磨筋を沈線。
1003	16/F	KT	土器類	弥生土器	甕	26.0	-	-	第1582 図0036	内面磨練。口縁部外面に管状の磨筋工具による斜線文。断面外面に棒状工具による斜線文と磨筋状文。
1004	16/F	KT II	土器類	弥生土器	甕	-	-	8.9	第1582 図0035	腹部外面に縦方向の沈線、断面外面に不明瞭ながら磨筋痕のようなものが見える。腹部内面に黒色点状物付着。弥生時代中期後半の土器文系土器。
1005	17/F	KT	土器類	弥生土器	甕	33.0	-	-	第1582 図0036	口縁部内面横方向のナズ。口縁部外面に磨筋を沈線状文。断面外面に縦方向のナズ。口縁部内面に黒色点状物付着。信用所。弥生時代後半。
1006	13/F	Ⅷ	土器類	弥生土器	甕	-	-	-	第1582 図0036	定かではないが、甕の腹部付近の断面と推定。内面横方向のナズ。外面磨練。断面外面に横方向の磨筋を沈線、断面上面外面に斜線文。腹部内面に黒色点状物付着。
1007	12/A	II	土器類	弥生土器 ないし 土器類	高杯	-	-	16.0	第1582 図0036	腹部内面ナズ。口縁部外面に縦方向のハケ目が部分的に認められる。
1008	15/F	Ⅷ	土器類	弥生土器 ないし 土器類	高杯	-	-	-	第1582 図0036	腹部内面横方向ナズ。腹部外面と下部に全周する斜線が認められる。透かし孔は3箇所。
1009	17/F	ADP	土器類	弥生土器 ないし 土器類	高杯	-	-	-	第1582 図0036	腹部内面ナズ。断面外面ナズ。部分的にハケ目が見える。
1010	15/E	II	土器類	弥生土器 ないし 土器類	高杯	-	-	-	第1582 図0036	内外面磨練。
1011	14/E	II	土器類	弥生土器 ないし 土器類	台付鉢	-	-	6.3	第1582 図0036	腹部内外面ナズ。
1012	13/F	Ⅷ	土器類	弥生土器 ないし 土器類	鉢	-	-	3.6	第1582 図0036	断面外面に縦方向のハケ目。断面内面工具によるナズ。
1013	12/F	Ⅷ	土器類	弥生土器 ないし 土器類	甕	-	-	-	第1582 図0036	口縁部内面横線ナズ。口縁部外面に横方向の沈線と横目文。断面内面磨練。断面外面ヘリ部ナズ。
1014	12/F	Ⅷ	土器類	弥生土器 ないし 土器類	甕	11.2	-	-	第1582 図0036	口縁部内面横線ナズ。口縁部外面に横筋状文。腹部外面にヘリ部。口縁部外面に部分的に赤彩。
1015	16/F	KT	土器類	弥生土器 ないし 土器類	甕	-	-	-	第1582 図0036	口縁部内面横線ナズ。口縁部外面に横目文。
1016	11/F	II	土器類	弥生土器 ないし 土器類	甕	-	-	-	第1582 図0036	台付急の腹部断面と推定。内外面磨練。外面に一對の突起と有糸の横方向沈線。

第90表 遺物観察表 (38)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 寸法	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
1017	12フ	Ⅲ	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	17.0	-	-	第156段 00Q36	口縁部内面横ナズ。口縁部外面に縦方向のハケ目ないし横 筋。胴部内面に縦方向のハケ目。
1018	13フ	Ⅷ	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	17.0	-	-	第156段 00Q36	口縁部内外面横ナズ。口縁部外面に黒色灰化物付着。
1019	14フ	Ⅷ	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	15.0	-	-	第156段 00Q36	口縁部内面横ナズ。口縁部外面に腐蝕痕。胴部外面に黒 色灰化物付着。14フ足と縦片接合。
1020	14フ	Ⅷ	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	14.2	-	-	第156段 00Q36	口縁部内面横ナズ。口縁部外面に腐蝕痕。胴部外面にハ ケ目。
1021	14フ	Ⅷ	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	-	-	-	第156段 00Q36	口縁部内面ナズ。口縁部外面に磨き面状の凹みと磨き面状 文。口縁部外面に黒色灰化物付着。
1022	17フ	ADP	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	-	-	-	第156段 00Q36	口縁部内面縦方向横ナズ。口縁部外面に磨き面状文。
1023	13フ	Ⅷ	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	-	-	-	第156段 00Q36	口縁部内面横ナズ。口縁部外面横ナズ。胴部外面に下向き の縦方向磨き文。口縁部外面に黒色灰化物付着。
1024	13フ	Ⅷ	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	23.0	-	-	第156段 00Q36	口縁部内面横ナズ。口縁部外面に縦方向・横方向の磨き文。 口縁部外面に厚く黒色灰化物付着。
1025	17フ	ADP	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	-	-	-	第156段 00Q36	口縁部内外面ナズ。口縁部外面に下向きの縦方向磨き文。
1026	14フ	Ⅷ	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	-	-	-	第156段 00Q36	口縁部内面横ナズ。口縁部外面に磨き文。胴部外面に下向 きの縦方向磨き文。口縁部外面に厚く黒色灰化物付着。
1027	11フ	Ⅷ	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	19.0	-	-	第156段 00Q36	口縁部内外面横ナズ。口縁部から胴部にかけての外面に下 向きの縦方向磨き文。
1028	14セ	Ⅲ	土器類	赤生土器 ないし 土師器	甕	12.4	-	-	第156段 00Q36	内外面磨き。胴部から胴部にかけての外面に黒色灰化物付 着。
1029	14フ	Ⅷ	土器類	土師器	高杯	20.3	-	-	第156段 00Q36	体部内外面へラミタキ。有段高杯。
1030	17フ	KT	土器類	土師器	高杯	-	-	-	第156段 00Q36	体部内面に黒色灰化物付着。体部内外面へラミタキ。有段高 杯。
1031	12フ	Ⅲ	土器類	土師器	盥	19.5	-	-	第156段 00Q36	口縁部内外面横ナズ。胎土が砂粒を多く含む。灰白色を呈 する。
1032	17フ	KT	土器類	土師器	甕	-	-	-	第156段 00Q36	胴部内面ナズ。胴部外面にハケ目。胎土に金雲母を含む。 5.5層。
1033	5フ	Ⅲ	土器類	土師器	甕	17.8	-	-	第156段 00Q36	内外面磨き。胴部から胴部にかけての内面に縦方向のハケ 目と微細凹痕。胴部外面に斜め方向のハケ目。胎土に金雲 母を含む。5.5層。
1034	13フ	Ⅷ	土器類	土師器	甕	22.0	-	-	第156段 00Q36	口縁部内外面横ナズ。胴部内面に縦方向のハケ目。
1035	12フ	Ⅷ	土器類	土師器	甕	18.0	-	-	第156段 00Q36	口縁部内外面横ナズ。胴部外面に黒色灰化物付着。
1036	16セ	Ⅷ	土器類	土師器	甕	15.0	-	-	第156段 00Q36	口縁部内外面横ナズ。
1037	17フ	-	土器類	土師器	甕	17.0	-	-	第156段 00Q36	口縁部内面磨きのため磨き面不整。口縁部内面横ナズ。胴部 内外面に斜め方向のハケ目。胴部外面に斜め方向のハケ目。 胴部外面に縦方向と斜め方向のハケ目。胴部外面下半に黒 色灰化物付着。
1038	18フ	KT	土器類	土師器	甕	-	-	7.4	第156段 00Q36	胴部内面に縦方向のハケ目。胴部外面上半に縦方向のハケ 目。下半に斜め方向のハケ目。胴部外面に斜め方向のハケ目。 胴部外面に斜め方向のハケ目。19フ足と縦片接合。
1039	16フ	KT	土器類	土師器	甕	12.5	-	-	第156段 00Q36	口縁部内外面横ナズ。胴部内面に縦方向のハケ目。胴部外 面に斜め方向のハケ目。
1040	7.0	Ⅲ	土器類	土師器	土師	(4.3)	(1.3)	(1.3)	第156段 00Q71	外面ナズ。孔径0.4cm、高さ5.6cm。
1041	6.0	Ⅲ	土器類	土師器	土師	(残存4.0)	(1.4)	(1.5)	第156段 00Q71	下壁をわずかに欠く。外面ナズ。孔径0.5cm、残存部分の高 さ3.7cm。
1042	5.5	Ⅲ	土器類	土師器	土師	(4.0)	(1.2)	(1.2)	第156段 00Q71	外面ナズ。孔径0.4cm、高さ4.9cm。
1043	5.5	Ⅲ	土器類	土師器	土師	(残存3.0)	(1.4)	(1.3)	第156段 00Q71	土壁を欠く。外面ナズ。孔径0.5cm、残存部分の高さ3.5cm。
1044	8.0	Ⅲ	土器類	土師器	土師	(3.1)	(1.3)	(1.3)	第156段 00Q71	外面ナズ。孔径0.4cm、高さ5.0cm。
1045	16.0	KT	土器類	土師器	ミハヤブ土 器	6.5	3.1	3.6	第156段 00Q36・39	体部内外面ナズ・オオエ。底部内外面ナズ・オオエ。底部 内面に凡灰。

第91表 遺物観察表 (39)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (口径)	底径 (高さ)		
1046	12フ	Ⅱ	土器類	土師器	納鉢形	(5.0)	(0.7)	(3.2)	第140図 D0206	中央に円形の貫通孔。孔の周囲隆起。表面・裏面にヘラ目。環状隆起を有し用して作った跡跡もとみられる。
1047	4フ	Ⅱ	土器類	須恵器	坪蓋	9.5	2.9	-	第140図 D0209	天井部内面凹転ナズ。天井部外面ナズ。底部内外面凹転ナズ。ラウラと破片存在。
1048	4フ	Ⅲ	土器類	須恵器	坪蓋?	11.0	-	-	第140図 D0210	底部内外面凹転ナズ。底部外面に放射状のヘラ目。華と同時存在。
1049	5フ	Ⅱ	土器類	須恵器	坪蓋	8.6	2.4	6.9	第140図 D0201	底部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ。底部外面ナズ。
1050	4フ	Ⅱ	土器類	須恵器	高弁	-	-	-	第140図 D0211	底部内外面凹転ナズ。
1051	9シ	Ⅲ	土器類	須恵器	高弁	-	-	-	第140図 D0212	底部内外面凹転ナズ。
1052	13セ	I	土器類	須恵器	高弁	-	-	-	第140図 D0213	底部内面に平ナズ。下半凹転ナズ。底部外面凹転ナズ。
1053	16フ	KD?	土器類	須恵器	高り蓋	14.9	-	-	第140図 D0214	底部内外面凹転ナズ。
1054	7ニ	Ⅱ	土器類	須恵器	高り蓋	約13.0	-	-	第140図 D0215	底部内外面凹転ナズ。
1055	7ナ	Ⅱ	土器類	須恵器	編み蓋	16.2	3.4	-	第140図 D0204	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。編み部凹転ナズ。底部内外面凹転ナズ。
1056	16フ	KD?	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0216	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。編み部凹転ナズ。底部内外面凹転ナズ。中央より外縁にかけて見ると、内面は瓦割状でより灰色を呈する。
1057	21ナ	KD?	土器類	須恵器	編み蓋?	14.8	-	-	第140図 D0217	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。底部内外面凹転ナズ。口縁に土割目存在。
1058	17フ	KD?	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0218	天井部内面凹転ナズ。編み部凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。
1059	6ニ	Ⅱ	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0204	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。編み部凹転ナズ。底部内外面凹転ナズ。天井部・底部外面に自然釉付着。
1060	8シ	Ⅱ	土器類	須恵器	編み蓋?	14.0	-	-	第140図 D0219	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。底部内外面凹転ナズ。
1061	14フ	KD?	土器類	須恵器	編み蓋?	13.0	-	-	第140図 D0206	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。底部内外面凹転ナズ。外面全面に自然釉付着。
1062	20ナ	KD?	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0209	仏尊状の特殊編み。内外面凹転ナズ。外面に自然釉付着。
1063	5ナ	Ⅲ	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0208	内外面無釉。焼成不良。
1064	7シ	Ⅲ	土器類	須恵器	編み蓋	14.1	-	-	第140図 D0200 + 36	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。底部内外面凹転ナズ。底部内面に黒着「筋」。土割目で灰色を呈する。
1065	5ナ	Ⅱ	土器類	須恵器	編み蓋?	13.0	-	-	第140図 D0217	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。天井部・底部内面に黒付着。転用説。
1066	5ナ	Ⅱ	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0218	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。天井部内面平滑化。天井部内面に黒付着。転用説。
1067	16フ	KD?	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0216	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ナズ。外面は念珠に自然釉付着のため調整不明。天井部内面平滑化。内面に黒付着。転用説。
1068	6ナ	Ⅲ	土器類	須恵器	編み蓋?	13.9	-	-	第140図 D0216	天井部内面凹転ナズ。天井部外面ヘラ目。底部内外面凹転ナズ。天井部内面に黒付着。転用説。
1069	16セ	KD?	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0217	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。底部内外面凹転ナズ。内面にほぼ全面に黒付着。転用説。
1070	19ナ	I	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0216	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。天井部内面平滑化。天井部内面に黒着「口」。
1071	16フ	KD?	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0207	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ナズ。編み部凹転ナズ。天井部内面平滑化。天井部内面に黒着。天井部内面に黒付着。転用説。
1072	15フ	KD?	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0216	天井部内面凹転ナズ。天井部外面凹転ヘラ目。天井部内面に黒付着。転用説。
1073	12号 K000236	-	土器類	須恵器	編み蓋?	-	-	-	第140図 D0216	底部内外面凹転ナズ。底部内面に黒付着。転用説。
1074	5ナ	Ⅲ	土器類	須恵器	無付帯	12.7	3.9	7.0	第141図 D0201	底部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ。底部外面平滑ナズ。

第92表 遺物観察表(40)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	形状	大きさ(cm)			実測図 写真 (枚数)	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径		
0075	21ヶ	K3F	土器類	須恵器	無台杯	12.5	3.6	9.0	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ。底部外周ナズ。
0076	19ヶ	K3F	土器類	須恵器	無台杯	11.8	3.6	10.9	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ。底部外周ナズ。
0077	5ヶ	B	土器類	須恵器	無台杯	12.9	3.1	8.0	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ。底部外周へフ切り痕ナズ。胎土粗く灰青色を多く含む。
0078	不明	-	土器類	須恵器	無台杯	-	-	8.0	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周へフ切り痕ナズ。底部内面平滑化。底部外面に墨書「□」。
0079	北条郷土 館出土区	-	土器類	須恵器	無台杯	-	-	6.7	第161図 00076	体部内外面凹転ナズ後ナズ。底部外周へフ切り痕ナズ。底部外面に墨書「□(濁8)」。
0080	20ヶ	K3F	土器類	須恵器	無台杯	-	-	7.4	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周へフ切り痕ナズ。構成あまく灰青色を呈する。
0081	17ヶ	K3F	土器類	須恵器	無台杯	15.9	3.5	13.0	第161図 00072	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部内外面のほぼ全面と体部の上半の内外面に墨付着。転用痕。
0082	21ヶ	K3F	土器類	須恵器	無台杯	-	-	8.0	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周へフ切り痕ナズ。底部内面平滑化。底部外面に墨書「□」。
0083	6ヶ	B	土器類	須恵器	有台杯	17.0	6.1	11.0	第161図 00077	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周凹転へフ割り。底部内面平滑化。底部外面に墨書「濁」。胎土粗密で灰白色を呈する。胎土に灰質を含む。胎土・色調不均等に類出する。
0084	16ヶ	K3F	土器類	須恵器	有台杯	18.2	5.7	13.1	第161図 00040	体部内外面凹転ナズ。底部内面自然剥離のため調整不明。底部外周凹転ナズ。底部外面に墨付着。転用痕。16ヶ溝・17ヶ足と縦行接合。
0085	21ヶ	K3F	土器類	須恵器	有台杯	-	-	11.4	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内外面凹転ナズ。
0086	14ヶ	B	土器類	須恵器	有台杯	15.7	5.3	11.9	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内外面凹転ナズ。
0087	21ヶ	K3F	土器類	須恵器	有台杯	15.2	3.5	11.5	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周へフ切り痕ナズ。
0088	20ヶ	K3F	土器類	須恵器	有台杯	14.1	4.1	10.2	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ。
0089	17ヶ	K3F	土器類	須恵器	有台杯	13.2	3.6	10.2	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内外面凹転ナズ。構成あまく灰白色を呈する。
0090	5ヶ	B	土器類	須恵器	有台杯	12.4	3.9	8.0	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ。底部外周ナズ。
0091	12ヶ	B	土器類	須恵器	有台杯	11.8	4.0	8.4	第161図 00040	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ。底部外周丁寧なナズへフ割り。
0092	16ヶ	I	土器類	須恵器	有台杯	16.2	3.5	8.1	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。
0093	不明	-	土器類	須恵器	有台杯	14.0	3.5	8.6	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周凹転へフ割り。底部内面平滑化。
0094	20ヶ	K3F	土器類	須恵器	有台杯	13.9	3.5	9.9	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周凹転ナズ。
0095	17ヶ	K3F	土器類	須恵器	有台杯	14.0	3.5	10.9	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内外面凹転ナズ。底部内面平滑化。
0096	5ヶ	B	土器類	須恵器	有台杯	13.0	3.6	8.2	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周凹転へフ割り。
0097	21ヶ	K3F	土器類	須恵器	有台杯	12.4	3.6	8.9	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周凹転ナズナズ。底部内面平滑化。20ヶ足と縦行接合。
0098	5ヶ	B	土器類	須恵器	有台杯	11.6	3.8	8.0	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周凹転ナズ。底部内面平滑化。
0099	16ヶ	K3F	土器類	須恵器	有台杯	11.6	3.1	9.0	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内外面凹転ナズ。
1100	6ヶ	-	土器類	須恵器	有台杯	13.1	3.5	9.7	第161図 00040	空形器。口縁部の1箇所を片口状に折り曲がっている。体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周ナズへフ割り。
1101	6ヶ	B	土器類	須恵器	有台杯	13.0	3.5	8.2	第161図 00046	体部内外面凹転ナズ。底部内面凹転ナズ後ナズ。底部外周凹転へフ割り。底部内面に墨付着。転用痕。底部外周に浅い2ヶ溝へフ書き平行線。

第93表 遺物観察表(41)

遺物 番号	出土 層位	方位	大分類	種別	部分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	直径 (高さ)		
1100	5ヶ	II	土器類	須恵器	看台坪	-	-	9.0	第143図 図64	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面 ナズ。底部外面に墨書「□」。
1100	16ヶ	III	土器類	須恵器	看台坪	-	-	8.6	第143図 図67	体部内外面凹削ナズ。底部外面に凹削糸切り残。底部外面に 墨書「□▲」。
1104	4ヶ	II	土器類	須恵器	看台坪	12.2	3.7	7.8	第143図 図68	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面 に墨書「□」。
1105	4ヶ	III	土器類	須恵器	看台坪	10.6	3.0	8.1	第143図 図69	体部内外面凹削ナズ。
1106	16ヶ	KDF	土器類	須恵器	看台坪	12.4	3.5	9.2	第143図 図90	体部内外面凹削ナズ。底部内面ナズ。底部外面凹削ナズ。 底部外面・体部内面に墨行。軸用残。
1107	5ヶ	II	土器類	須恵器	看台坪	-	-	8.4	第143図 図64	体部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面凹削へツ削リ。底部外 面にへツ書き。底部外面に墨行。軸用残。
1108	5ヶ	III	土器類	須恵器	看台坪?	-	-	10.6	第143図 図64	体部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面凹削へツ削リ。底部外 面に墨書「□」。
1109	6ヶ	-	土器類	須恵器	看台坪	13.6	3.3	10.0	第143図 図64	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面凹削 ナズ後ナリ。底部外面に墨行。軸用残。
1110	5ヶ	II	土器類	須恵器	看台坪	-	-	9.0	第143図 図64	体部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面凹削ナズ。底部外面に 墨書「□」。
1111	11ヶ	III	土器類	須恵器	看台坪	-	-	7.2	第143図 図96	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面 へツ削リ後ナリ。軸成みまく灰白色を呈する。
1112	6ヶ	-	土器類	須恵器	看台坪?	-	-	-	第143図 図64	体部内外面凹削ナズ。底部外面に墨書「□」。
1113	5ヶ	II	土器類	須恵器	看台坪?	-	-	-	第143図 図64	体部内外面凹削ナズ。底部外面に墨書「□」。
1114	15ヶ	KDF	土器類	須恵器	無台帳	14.0	4.4	7.6	第143図 図64	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面凹削へ ツ削リ。底部内面平滑化。
1115	8ヶ	II	土器類	須恵器	無台帳	12.2	3.3	5.9	第143図 図64	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面ナズ。
1116	15ヶ	KDF	土器類	須恵器	無台帳	12.4	3.0	6.3	第143図 図64	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面 へツ削リ後ナリ。
1117	20ヶ	KDF	土器類	須恵器	無台帳	12.7	3.1	6.9	第143図 図64	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面へツ削 リ残。軸成みまく灰白色を呈する。
1118	5ヶ	II	土器類	須恵器	無台帳	12.2	3.5	6.0	第143図 図64	体部内外面凹削ナズ。5ヶ9と破片検出。
1119	21ヶ	KDF	土器類	須恵器	無台帳	13.0	3.4	8.0	第143図 図64	口縁部外面に1本の沈線。体部内外面凹削ナズ。
1120	14ヶ	KDF	土器類	須恵器	無台帳	12.6	4.2	7.0	第143図 図67	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面に凹削 糸切り残。体部内面平滑ナリ。墨と底部内面に墨行。軸用残。
1121	4ヶ	II	土器類	須恵器	無台帳	13.0	4.0	6.0	第143図 図91	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面に凹削 糸切り残。軸土割い。体部外面に墨書「井」。
1122	4ヶ	III	土器類	須恵器	無台帳	13.4	3.2	6.6	第143図 図91	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面へツ削 リ後ナリ。底部外面に墨書「□▲」。
1123	3ヶ	II	土器類	須恵器	無台帳?	11.6	-	-	第143図 図96	体部内外面凹削ナズ。体部内外面に墨行。打明具として の使用が想定される。軸成みまく灰白色を呈する。
1124	7ヶ	II	土器類	須恵器	無台帳	11.4	4.3	5.2	第143図 図91・77	体部内外面凹削ナズ後ナリ。底部外面凹削ナズ。底部内面 凹削ナズ後ナリ。底部外面に凹削糸切り残。底部外面に墨書 「海」。
1125	4ヶ	III	土器類	須恵器	無台帳	12.8	4.0	5.6	第143図 図91	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面 に凹削糸切り残。軸成みまく赤褐色を呈する。
1126	5ヶ	III	土器類	須恵器	無台帳	11.4	3.2	6.0	第143図 図91	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面 へツ削リ後ナリ。底部内面平滑化。底部外面へツ書き。
1127	15ヶ	KDF	土器類	須恵器	無台帳	12.2	2.9	6.9	第143図 図96	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面 へツ削リ後ナリ。
1128	21ヶ	KF	土器類	須恵器	無台帳	13.0	4.2	6.9	第143図 図91	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ。底部外面に墨止 糸切り残。底部内面平滑化。
1129	5ヶ	II	土器類	須恵器	無台帳	11.6	3.1	6.0	第143図 図91・77	体部内外面凹削ナズ。底部内面凹削ナズ後ナリ。底部外面 へツ削リ後工具によるナズ。底部外面に墨書「□(溝?)」。

第94表 遺物観察表 (42)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細身	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	直径 (幅)		
1130	21ヶ	I	土器類	須恵器	無台輪	11.2	3.7	5.4	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面に回転糸切り痕。底部外面下部にまで及んでいる。底部内面平滑化。
1131	16ヶ	K7	土器類	須恵器	無台輪	12.4	4.0	6.0	第16402 図66	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面に回転糸切り痕。
1132	15ヶ	K9F	土器類	須恵器	無台輪	12.4	3.8	5.6	第16402 図66	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面へフ切り痕ナズ。
1133	4ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪	13.2	3.4	5.6	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面ナズ。底部外面に回転糸切り痕。底部内面平滑化。
1134	21ヶ	K9F	土器類	須恵器	無台輪	11.5	4.6	5.0	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面平滑化のための磨削不規。底部外面に磨き糸切り痕。
1136	12年度 試掘結果	-	土器類	須恵器	無台輪	12.7	3.8	6.2	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面に回転糸切り痕。底部内面平滑化。
1136	21ヶ	K7	土器類	須恵器	無台輪	12.5	3.2	6.0	第16402 図66	体部内外面回転ナズ。底部内面ナズ。外面へフ切り痕ありナズ。底部内面平滑化。
1137	4ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪	12.0	4.2	5.0	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面に回転糸切り痕。磨削。
1138	4ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪	-	-	5.4	第16402 図67	内面磨削。底部外面に回転糸切り痕。磨成あまり赤褐色へ灰色を呈する。底部外面に磨書「口」。
1139	9ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪?	約12.0	-	-	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。口縁部内面に磨付書。磨成あまり灰色を呈する。底部を欠く。口縁と体部形状から無台輪と推定。
1140	21ヶ	K9F	土器類	須恵器	無台輪	-	-	5.5	第16402 図61	底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面に回転糸切り痕。底部内面平滑化。底部外面に磨書「口」。
1141	4ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪	-	-	6.8	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面ナズ。底部外面に磨書「口」。
1142	4ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪	-	-	7.0	第16402 図67	底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面へフ切り痕ナズ。底部内面平滑化。底部外面に磨書「口」。
1143	19ヶ	K9F	土器類	須恵器	無台輪	-	-	5.9	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面に回転糸切り痕。底部内面平滑化。底部外面に磨書「口」。
1144	12年度 試掘結果	-	土器類	須恵器	無台輪	-	-	5.8	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面に回転糸切り痕。底部内面に磨書「口」。底部外面に磨書「口」。これら両方に文字である可能性が高い。磨成あまり灰白色を呈する。
1145	8ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪	-	-	7.0	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面へフ切り痕ナズ。底部外面に磨書「口」。
1146	16ヶ	K9F	土器類	須恵器	無台輪	-	-	5.6	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面に回転糸切り痕。底部外面へフ書き「口」。磨成あまり濃い褐色を呈する。
1147	9ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪	-	-	7.0	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面へフ切り痕ナズ。底部内面に磨書「口」。
1148	5ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪	-	-	約6.6	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面ナズ。底部外面に磨書「口」。
1149	8ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪	-	-	-	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部外面に磨書「口」。
1150	11ヶ	I	土器類	須恵器	無台輪	-	-	6.9	第16402 図66	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面に回転糸切り痕。内外面に交差する放射状の褐色着色がみられる。口縁部は流線(口ケリ)であるが、それらの中には部分的に植物繊維の痕跡が認められる。
1151	7ヶ	II	土器類	須恵器	無台輪	-	-	-	第16402 図61	体部内外面回転ナズ。底部外面に磨書「口」。
1152	8ヶ	II	土器類	須恵器	有台輪	17.6	5.9	10.0	第16402 図66	体部内外面回転ナズ。底部外面上半面回転ナズ。下半面へフ削り。底部内面回転ナズ後ナズ。底部内面回転ナズ削り。体部内面の大部分は底部外面の一部に自然釉付着。釉土質と釉の混入が多い。
1153	8ヶ	II	土器類	須恵器	有台輪	17.0	4.3	7.8	第16402 図66	体部内面回転ナズ。底部外面上半面回転ナズ。下半面へフ削り。底部内面ナズ。体部内面に自然釉付着。アミ状と板片状。
1154	5ヶ	II	土器類	須恵器	有台輪?	約18.3	-	-	第16402 図67	体部内外面回転ナズ。底部外面に磨書「口」。5ヶ年と板片付着。

第95表 遺物観察表 (43)

遺物番号	出土層	方位	六分筒	種類	線分	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	皿高 (厚さ)	底径 (幅)		
1155	4層	—	土器類	須恵器	有台輪	—	—	8.9	第14420 100877	体部上縁内面凹削ヘウ削り。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部外面ヘウ削り。底部外面に磨書「口」。
1156	7ス	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	15.9	5.9	8.8	第14420 100961	体部内面凹削ナゲ。体部外面上平削ナゲ。下平削削ヘウ削り。底部内面ナゲ。底部外面凹削ナゲ。体部内面に部分的に自然釉付着。7ス切・9切と縦片接合。
1157	8中	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	16.1	5.3	7.9	第14420 100911・77	体部内面凹削ナゲ。下縁を除く体部内面凹削ナゲ。体部内面下縁凹削ヘウ削り。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部外面ナゲ。底部内面平削化。体部外面に磨書「口」。底部外面に磨書「口」。
1158	20中	KDF	土器類	須恵器	有台輪	12.0	4.2	6.4	第14420 100961	体部内外面凹削ナゲ。ただし、外面下縁には部分的に凹削ヘウ削り。底部内面ナゲ。底部外面に自然釉付着。あるいは反転陶器とみるべきか。
1159	4層	—	土器類	須恵器	有台輪	12.7	4.3	7.3	第14420 100961	体部内外面凹削ナゲ。あるいは反転陶器か。
1160	8中	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	12.8	5.0	7.9	第14420 100961	体部内外面凹削ナゲ。底部内外面ナゲ。底部内面に重ね焼き痕。焼き跡がみちがましい。
1161	20中	KDF	土器類	須恵器	有台輪	10.9	3.7	5.2	第14420 100961	体部内外面凹削ナゲ。
1162	12層埋 試掘坑	—	土器類	須恵器	有台輪	—	—	8.9	第14420 100877	体部外面下縁部凹削ヘウ削り。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部外面ヘウ削り後ナゲ。底部外面に磨書「口」。
1163	6中	Ⅲ	土器類	須恵器	有台輪	—	—	8.6	第14420 100872	体部内外面凹削ナゲ。底部内面ナゲ。中央部を除く底部外面凹削ナゲ。中央部ナゲ。底部内面平削化。体部内面に自然釉付着。底部内外面に磨書。転用痕。
1164	7中	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	—	—	8.8	第14420 100877	底部内面凹削ナゲ。底部外面凹削ナゲ後ナゲ。底部内面平削化。底部外面に磨書「口」。
1165	8中	Ⅲ	土器類	須恵器	有台輪	—	—	8.1	第14420 100878	体部内外面凹削ナゲ。底部内外面凹削ナゲ。底部内面平削化。底部内面に重ね焼き痕。底部外面に磨書「口」。
1166	5中	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	—	—	7.9	第14420 100871	底部内面凹削ナゲ。底部外面に凹削点削り後。底部内面平削化。底部外面に磨書。転用痕。発酵で黄褐色を呈する。
1167	7中	Ⅲ	土器類	須恵器	有台輪	—	—	8.3	第14420 100873	底部内面凹削ナゲ。底部外面ナゲ。底部内面平削化。底部内面に磨書。転用痕。
1168	5中	Ⅲ	土器類	須恵器	有台輪	21.9	3.4	13.6	第14420 100961	体部内外面凹削ナゲ。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部外面凹削ヘウ削り。
1169	5中	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	18.8	3.7	8.8	第14420 100962	体部内面凹削ナゲ。下縁を除く体部外面凹削ナゲ。下縁部凹削ヘウ削り。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部外面凹削ヘウ削り。
1170	8中	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	14.6	3.5	6.0	第14420 100966	体部内外面凹削ナゲ。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部外面凹削ヘウ削り後ナゲ。
1171	18中	KDF	土器類	須恵器	有台輪	15.4	3.4	8.0	第14420 100966	体部内外面凹削ナゲ。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部内面平削化。
1172	5中	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	15.4	2.2	10.0	第14420 100966	体部内外面凹削ナゲ。底部内外面ヘウ削り。底部内面に自然釉付着。底部内面平削化。
1173	8中	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	14.2	2.0	7.0	第14420 100961	体部内外面凹削ナゲ。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部内面平削化。
1174	5中	Ⅲ	土器類	須恵器	有台輪	12.0	3.9	6.0	第14420 100962	体部内面凹削ナゲ。部分のみに凹削ヘウ削り。下縁を除く体部外面凹削ナゲ。体部外面下縁部ヘウ削り。底部内面ヘウ削り。中央部を除く底部外面凹削ヘウ削り。底部外面中央部ナゲ。中央部ナゲ。
1175	5中	Ⅲ	土器類	須恵器	有台輪	13.2	2.8	7.2	第14420 100962	体部内外面凹削ナゲ。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部外面凹削ナゲ。4ス切と縦片接合。
1176	5中	Ⅲ	土器類	須恵器	有台輪	14.6	3.1	7.3	第14420 100962	体部内外面凹削ナゲ。底部外面に磨書「口」。
1177	11ス	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	14.2	2.8	7.3	第14420 100961	体部内面凹削ナゲ。体部外面上平削ナゲ。下平削削ヘウ削り。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部内面に自然釉付着。底部内面に重ね焼き痕。底部外面に磨書。転用痕。
1178	7ス	Ⅲ	土器類	須恵器	有台輪	13.0	2.7	6.6	第14420 100962	体部内外面凹削ナゲ。底部内面凹削ナゲ。底部内面平削化。体部内面に自然釉付着。底部内外面に磨書。転用痕。
1179	7中	Ⅱ	土器類	須恵器	有台輪	14.5	2.8	6.4	第14420 100962・78	体部内外面凹削ナゲ。底部内面凹削ナゲ後ナゲ。底部外面凹削ナゲ。底部内面に磨書「口」。あるいは黄褐色を呈する。

第96表 遺物観察表(44)

遺物番号	出土地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(mm)			実測図 寸法 (単位)	観察の見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
1190	6 ヲ	Ⅱ	土器類	須恵器	有台盤	14.9	2.7	7.6	第166図 00020・28	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面に磨面。体部外面にも部分的に磨面が付着しており、転用疑いみられる。
1191	5シ	Ⅱ	土器類	須恵器	有台盤	13.6	3.2	9.6	第166図 00012・38	体部内外面回転ナズ。底部内面ナズ。底部外面へ切り傷ナズ。高台部に平行線状の凹線。体部外面に磨面「□」。
1192	6ス	Ⅱ	土器類	須恵器	有台盤?	17.0	-	-	第166図 0001	体部内外面回転ナズ。体部外面に磨面。転用疑。
1193	5ケ	Ⅱ	土器類	須恵器	有台盤?	14.2	-	-	第166図 000279	体部内外面回転ナズ。体部外面に磨面「□(実ナ)」。4 ヲXと破片接合。
1194	5ヨ	Ⅱ	土器類	須恵器	有台盤?	約18.9	-	-	第166図 0001	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。内面のはばた面に磨面。転用疑。6 ヲXと破片接合。
1195	10ス	Ⅱ	土器類	須恵器	有台盤?	14.5	-	-	第166図 0001	体部内外面回転ナズ。
1196	7ハ	Ⅱ	土器類	須恵器	有台盤?	-	-	7.2	第166図 00072	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面ナズ。底部内面平直化。底部内面に磨面「□」。底部外面上に部分的に磨面が付着していることから、割れた状態の胴体を利用した転用疑とみられる。
1197	5ケ	Ⅱ	土器類	須恵器	有台盤?	-	-	9.9	第166図 000279	底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面へ切り傷ナズ。底部内面平直化。底部外面に磨面「□(実ナ)」。底部内面に磨面。転用疑。
1198	5ケ	Ⅱ	土器類	須恵器	有台盤?	-	-	6.6	第166図 0001	底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面回転ナズ。底部外面に磨面「□」。底部内面にへき傷と磨面点存在。転用疑。焼成あまく灰白色を呈する。
1199	5ケ	Ⅱ	土器類	須恵器	有台盤?	-	-	-	第166図 0001	体部内外面回転ナズ。体部外面に磨面「□」。擦み痕の可能性あり。
1190	20チ	ⅢB?	土器類	須恵器	不明	-	-	12.6	第166図 0001	磨面等の磨面点磨面点の可能性があると思われるが、定かでない。体部内外面回転ナズ。
1191	20チ	I	土器類	須恵器	不明	-	-	8.6	第166図 0001	有台盤の有磨面の部分とみられる。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面回転ナズ。高台部に平行線状の凹線。底部外面に磨面。転用疑。
1192	4ケ	Ⅱ	土器類	須恵器	不明	19.0	-	-	第166図 0001	体部内外面回転ナズ。体部外面上平削回転ナズ。下平削転へつ削り。5ケア・6ケアと破片接合。
1193	13ソ	ⅢB?	土器類	須恵器	不明	-	-	10.6	第166図 00072	底部内面回転ナズ。底部内面回転へつ削り。中央部に凹削点あり。底部外面に磨面。転用疑。
1194	15ソ	ⅢB?	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第166図 0001	环手線の底部破片と推定。体部内外面回転ナズ。体部外面に磨面「□」。
1195	5ケ	Ⅱ	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第166図 0001	体部内外面回転ナズ。下部を除く体部外面回転ナズ。下部回転へつ削り。体部外面に磨面「□」。
1196	常葉野上 遺物区	-	土器類	須恵器	不明	-	-	9.4	第166図 0001	底部内外面回転ナズ後ナズ。底部内面平直化。高台部に平行線状の凹線。底部外面に磨面「□」。
1197	不明	-	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第167図 00026	底部内面ナズ。底部外面回転ナズ。底部内面に磨面「上」。
1198	15ソ	ⅢB?	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第167図 0001	磨面は定かでないが、磨面点の磨面とみられる。底部外面回転ナズ。底部外面ナズ。底部内面に磨面付着。転用疑。
1199	不明	-	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第167図 00026	环手線の底部破片と推定。底部内面回転ナズ。底部外面ナズ。底部内面平直化。底部外面へつ磨き(見ナ?)。磨面不明。
1200	21チ	I	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第167図 0001	环手線の底部とみられる。底部内面ナズ。底部外面へつ磨き「X」。
1201	5ヨ	Ⅱ	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第167図 0001	底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面へつ削りナズ。底部外面に磨面「□」。
1202	17ソ	ⅢB?	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第167図 0001	环手線の底部とみられる。底部内面回転ナズ。底部外面回転へつ削り。底部外面へつ磨き。
1203	7ケ	Ⅱ	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第167図 0001	磨面等の磨面点とみられる。体部内外面回転ナズ。体部外面に磨面「□」。
1204	7ヨ	Ⅱ	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第167図 0001	环手線の底部とみられる。磨面のため磨面不明。底部外面に磨面「□」。焼成あまく灰白色を呈する。

第97表 遺物観察表(45)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	形状	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (口径)	底径 (高さ)		
1205	5ヶ	II	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第147図 図版1	器口縁の修飾線付と推定。器部内外面同軸ナズ。器部外面に漆着「C」。
1206	5ヶ	II	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第147図 図版1	器・蓋の口径のほぼ底径付と推定。内外面同軸ナズ。器部内面に漆着「C」。
1207	20ヶ	I	土器類	須恵器	不明	-	-	-	第147図 図版1	器口縁の底径付と推定。器部内面ナズ。器部内外面同軸ナズ。器部内面に漆着「C」。
1208	12年度 試掘区19	-	土器類	須恵器	皿	9.9	11.2	-	第147図 図版2	口縁部内外面同軸ナズ。器部内外面同軸ナズ。器部外面上半同軸ナズ。下半へ方削り。器部内面ナズ。オキエ。器部外面へ方削り成り字ナズ。器底、褐色黒鉛筆1形式3段階。
1209	16ヶ	III	土器類	須恵器	蓋ナ	-	-	-	第147図 図版1	器部内外面同軸ナズ。器部外面中央部に直状文。12ヶ深と破片接合。
1210	16ヶ	KDF	土器類	須恵器	皿	-	-	-	第147図 図版1	器部内外面同軸ナズ。外面のほぼ全面と器部内面に自然焼付着。器部外面に直状文。
1211	14ヶ	II	土器類	須恵器	鉢	26.9	5.9	16.6	第147図 図版7	器部内外面同軸ナズ。器部内面同軸ナズ。器部外面ナズ。器部外面中央部に把手を見える。
1212	7ヶ	II	土器類	須恵器	鉢	-	-	13.0	第147図 図版1	器部内外面同軸ナズ。器部内面ナズ。
1213	9ヶ	II	土器類	須恵器	鉢	15.4	-	-	第147図 図版1	器部内外面同軸ナズ。表面・裏面とも器底の強い反色を呈するが、これは普遍的に黒色化した結果である可能性がある。
1214	19ヶ	I	土器類	須恵器	鉢	11.9	14.2	9.6	第147図 図版2	器部内外面同軸ナズ。器部内面ナズ。器部外面は大部分剥離。内面のほぼ全面に自然焼付着。
1215	17ヶ	KDF	土器類	須恵器	蓋蓋	11.6	-	-	第147図 図版1	天井部内面同軸ナズ。天井部外面同軸ナズ。口縁部内外面同軸ナズ。口縁部部に自然焼付着。
1216	21ヶ	KDF	土器類	須恵器	蓋蓋	9.6	-	-	第147図 図版1	天井部・口縁部内面同軸ナズ。外面は自然焼付着のため観察不明。
1217	17ヶ	KDF	土器類	須恵器	蓋蓋	約12.6	-	-	第147図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。口縁部内面に自然焼付着。
1218	19ヶ	I	土器類	須恵器	蓋蓋	10.9	-	-	第147図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。
1219	20ヶ	KDF	土器類	須恵器	蓋	20.9	-	-	第147図 図版7	器口縁口縁の口縁部と推定。口縁部内外面同軸ナズ。
1220	21ヶ	KDF	土器類	須恵器	蓋	約13.6	-	-	第147図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。
1221	17ヶ	KDF	土器類	須恵器	蓋	11.0	-	-	第147図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。口縁部内外面に部分的に自然焼付着。18ヶ深と破片接合。
1222	16ヶ	KDF	土器類	須恵器	蓋	11.0	-	-	第147図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。口縁部外面に自然焼付着。16ヶ深と破片接合。
1223	15ヶ	-	土器類	須恵器	蓋	11.2	-	-	第147図 図版1	口縁部内面同軸ナズ。口縁部外面同軸ナズ。オキエ。
1224	17ヶ	KDF	土器類	須恵器	蓋	16.6	-	-	第147図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。18ヶ深と破片接合。
1225	20ヶ	I	土器類	須恵器	蓋	10.3	-	-	第147図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。器部内外面同軸ナズ。
1226	4ヶ	II	土器類	須恵器	蓋	約21.0	-	-	第148図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。器部内外面同軸ナズ。口縁部内面に自然焼付着。
1227	19ヶ	KF	土器類	須恵器	蓋	-	-	-	第148図 図版7	口縁部内外面同軸ナズ。器部内外面同軸ナズ。外面に自然焼付着。器部外面に把手の痕跡あり。
1228	5ヶ	III	土器類	須恵器	蓋	11.2	-	-	第148図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。器部内外面同軸ナズ。外面に自然焼付着。
1229	17ヶ	KDF	土器類	須恵器	蓋	8.4	-	-	第148図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。内面には部分的にナズを加える。器部内外面同軸ナズ。内面には部分的にナズを加える。器底で黒褐色を呈する。
1230	5ヶ	III	土器類	須恵器	蓋	10.0	-	-	第148図 図版7	口縁部内外面同軸ナズ。器部内外面同軸ナズ。
1231	4ヶ	II	土器類	須恵器	蓋	12.0	-	-	第148図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。器部内外面同軸ナズ。
1232	8ヶ	II	土器類	須恵器	蓋	7.0	-	-	第148図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。器部内外面同軸ナズ。外面のほぼ全面に自然焼付着。
1233	4ヶ	II	土器類	須恵器	蓋	8.0	-	-	第148図 図版1	口縁部内外面同軸ナズ。器部内外面同軸ナズ。外面の大部分に自然焼付着。5ヶ深と破片接合。

第98表 遺物観察表(46)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	形状	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
1234	18F	KT	土器類	須恵器	壺	4.7	-	-	第169図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内外面回転ナズ。口頸部内面に自然軸付。
1235	17F	KDF	土器類	須恵器	壺	19.8	-	-	第169図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内外面回転ナズ。口頸部内面と外面の全面に自然軸付。
1236	17F	KDF	土器類	須恵器	壺	11.6	-	-	第169図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内外面回転ナズ。
1237	10シ	KDF	土器類	須恵器	壺	-	-	11.4	第169図 0304	腹部内外面回転ナズ。底部内外面回転ナズ。壺口縁の底面。
1238	5シ	■	土器類	須恵器	壺	-	-	10.9	第169図 0304	腹部内面上下回転ナズ。下半回転へラ削り。腹部外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。腹部内面ナズ。腹部内面中央部に3本の浅溝。腹部内面下部に「底面内面」-腹部内面上下に自然軸付。4コ線と破片接合。
1239	10ス	■	土器類	須恵器	壺	-	-	13.0	第169図 0304	腹部内外面回転ナズ。底部内外面ナズ。底部外面に平行溝状の浅溝。壺口縁の底面。
1240	8ス	■	土器類	須恵器	壺	-	-	6.2	第169図 0304	腹部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面ナズ。底部内面に自然軸付。
1241	17F	KDF	土器類	須恵器	壺	-	-	11.4	第169図 0304	腹部内面回転ナズ。腹部外面上下回転ナズ。下半回転へラ削り。
1242	21F	I	土器類	須恵器	壺	-	-	9.9	第169図 0304	腹部内外面回転ナズ。底部外面に本切り痕(印刻を伴わない)可能性高い。
1243	7シ	■	土器類	須恵器	壺	-	-	8.9	第169図 0304	腹部内面回転ナズ。腹部外面回転へラ削り。底部内面回転ナズ。底部内面に本切り痕。底部内面と腹部外面に部分的に自然軸付。
1244	20サ	KDF	土器類	須恵器	壺	-	-	10.7	第169図 0304	腹部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面へラ削り。底部内面に自然軸付。
1245	10V	KDF	土器類	須恵器	壺	-	-	11.8	第169図 0304	腹部内面ナズ。腹部外面回転へラ削り。底部内面自然軸付者のための調整不可。底部外面回転ナズ。
1246	21F	I	土器類	須恵器	壺	-	-	7.6	第169図 0304	腹部内面回転ナズ。腹部外面回転へラ削り。腹部外面-底部内面に自然軸付。
1247	15V	KDF	土器類	須恵器	壺	-	-	9.0	第169図 0304	腹部内外面回転ナズ。
1248	8シ	■	土器類	須恵器	壺	-	-	17.6	第169図 0304	腹部内面回転ナズ。腹部外面回転へラ削り。底部内面ナズ。壺口縁4部を多く含む。310線・373線と破片接合。
1249	7シ	■	土器類	須恵器	壺	-	-	-	第169図 0304	壺の腹部上半の破片と考えたが定かではない。腹部内外面回転ナズ。腹部外面に記号状ないし筋溝状のへラ書き。
1250	17F	KDF	土器類	須恵器	横瓶	3.8	8.5	-	第169図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内面回転ナズ。腹部外面回転へラ削り。腹部上半と口頸部内面に部分的に自然軸付者。2コ線アタの横瓶。
1251	19F	KDF	土器類	須恵器	壺	27.4	約44.0	19.8	第169図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内面ナズ。部分的に当て具痕あり。腹部内面に平行溝状の印字痕。底部内外面ナズ。腹部内面上下と底部内面に自然軸付。197線と破片接合。
1252	9シ	■	土器類	須恵器	壺	40.3	-	-	第169図 0304	口頸部内外面回転ナズ。
1253	16F	KDF	土器類	須恵器	壺	20.7	-	-	第169図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内面に同心円状の当て具痕。腹部外面に斜格子状の印字痕。177線と破片接合。
1254	17F	KDF	土器類	須恵器	壺	14.9	-	-	第169図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内面に同心円状の当て具痕。腹部外面に格子状の印字痕。125と同一個体の可能性あり。
1255	15V	KDF	土器類	須恵器	壺	22.2	-	-	第170図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内面中央部に指すえ。腹部内面に同心円状の当て具痕。腹部内面に平行溝状の印字痕。147線・157線・167線と破片接合。
1256	14F	KDF	土器類	須恵器	壺	14.9	-	-	第170図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内面に同心円状の当て具痕。腹部内面に格子状の印字痕。125と同一個体の可能性あり。
1257	17F	KDF	土器類	須恵器	壺	20.4	-	-	第170図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内面に同心円状の当て具痕。腹部外面に斜格子状の印字痕。167線と破片接合。
1258	5シ	■	土器類	須恵器	壺	24.0	-	-	第170図 0304	口頸部内外面回転ナズ。
1259	4シ	■	土器類	須恵器	壺	18.0	-	-	第170図 0304	口頸部内外面回転ナズ。腹部内面に同心円状の当て具痕。腹部外面に平行溝状の印字痕。壺底。5コ線と破片接合。

第99表 遺物観察表 (47)

遺物 番号	出土 層位	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	底径 (高さ)		
1260	15c	II	土器類	須恵器	甕	22.4	-	-	第1706 図6	口縁部内外面凹みナシ。口縁部内面上と外部外面の一部に自然釉付着。14.7x8.15.7と縦片接合。
1261	15f	KDF	土器類	須恵器	甕	-	-	14.8	第1706 図6	頸部内面ナシ。頸部外面に平行状の凹み残。底部内面ナシ。底部外面に木炭痕。頸部内外面と底部内面に自然釉付着。
1262	5c	II	土器類	須恵器	甕	23.8	-	-	第1706 図6	口縁部内外面凹みナシ。頸部内面に同心円状の当て具痕。頸部外面に引き目が認められるが、自然釉付着のため詳細不明。
1263	20e	KDF	土器類	須恵器	甕	-	-	-	第1710 図6	頸部内面に同心円状の当て具痕。頸部外面に平行状の凹凸痕と字目。
1264	19f	KDF	土器類	須恵器	甕?	23.0	-	-	第1710 図6	内外面磨滅のため観察不明。
1265	8c	II	土器類	須恵器	甕?	-	-	-	第1710 図6	内外面磨滅のため観察不明。
1266	14c	II	土器類	須恵器	甕?	-	-	19.6	第1710 図6	内外面磨滅。15.7x8と縦片接合。
1267	8c	II	土器類	須恵器	陶埴	(残存6.5)	(3.0)	(3.0)	第1710 図6	土壇・下層を欠く。外面磨滅。乳径1.3cm。残存部分の長さ4.9。
1268	5c	III	土器類	須恵器	陶埴	(6.2)	(3.0)	(3.9)	第1710 図6	外面に工具による横方向のナズ。乳径1.6cm。長さ40.9。
1269	8c	II	土器類	須恵器	陶埴	(5.1)	(2.3)	(3.4)	第1710 図6	外面ナズ。乳径0.6cm。長さ31.7。
1270	8c	II	土器類	須恵器	陶埴	(4.3)	(1.6)	(1.6)	第1710 図6	外面ナズ・胎オサエ。乳径0.6cm。長さ14.1。
1271	7c	II	土器類	須恵器	陶埴	(5.3)	(2.4)	(3.7)	第1710 図6	平中に磨滅部分多い。外面に工具による横方向のナズ。乳径1.1cm。残存部分の長さ27.6。
1272	13c	KDF	土器類	須恵器	陶埴	(5.3)	(2.9)	(3.9)	第1710 図6	外面ナズ・胎オサエ。外面に自然釉と他製物の一部が付着。乳径0.7cm。長さ50.4。
1273	12f(埋 戻層位)	-	土器類	須恵器	火舎	-	-	-	第1710 図6	土壇に底部の一部が埋つたに似る。頸部全面胎オサエ。
1274	12f(埋 戻層位)	-	土器類	須恵器	火舎	-	-	-	第1710 図6	下層面を除く頸部のほぼ全面へツ割り。下層面磨滅。
1275	9c	II	土器類	須恵器	火舎	-	-	-	第1710 図6	体部内面凹みナシ。底部内面凹みナシ。頸部全面胎オサエ。
1276	8e	-	土器類	須恵器	火舎	-	-	-	第1710 図6	体部内面凹みナシ。底部内面凹みナシ。頸部全面胎オサエ。焼成あまり灰白色を呈する。
1277	12f(埋 戻層位)	-	土器類	須恵器	火舎	-	-	-	第1710 図6	頸部全面胎オサエ。焼成あまり灰白色を呈する。
1278	7c	III	土器類	須恵器	円面碗	10.2	-	-	第1710 図6	破断面内面凹みナシ。部分的に工具による圧痕が認められる。破断面外面凹みへツ割り。頸部内外面凹みナシ。頸部外面に部分的に縦方向の平行状痕。破断面外面にへツ書き「メ」13.7。破断面外面に胎付着。また、縦めに平行状化している。
1279	6c	II	土器類	須恵器	円面碗	13.9	-	-	第1710 図6	破断面内外面凹みナシ。頸部内外面凹みナシ。頸部外に十字形とみられる透かしの孔と縦方向の平行状痕。破断面内面・頸部内外面に自然釉付着。
1280	6c	II	土器類	須恵器	円面碗	-	-	-	第1710 図6	頸部内外面凹みナシ。外面に縦方向の平行状痕。碗の左壁と右壁は磨滅が著されており、ともに方形の透かしの孔とみられる。
1281	20e	I	土器類	須恵器	円面碗?	-	-	-	第1710 図6	頸部内外面凹みナシ。外面に縦方向の平行状痕と貫通する2つの小孔が認められる。碗ではなく、蓋や壺などの可能性もある。
1282	9c	II	土器類	須恵器	円面碗?	-	-	-	第1710 図6	頸部内外面凹みナシ。外面に縦方向の沈降が1本の凸起められる。内外面に自然釉付着。
1283	8c	III	土器類	須恵器	円面碗	-	-	-	第1710 図6	頸部内外面凹みナシ。碗の左壁と右壁は磨滅が著されており。胎状は不明ながら透かしの孔を設けているものとみられる。
1284	17f	KDF	土器類	須恵器	円面碗?	-	-	-	第1710 図6	頸部内外面凹みナシ。外面に縦方向の平行状痕。外面に自然釉付着。
1285	8e	-	土器類	須恵器	菓子碗	-	-	-	第1710 図6	表面ナズへツ割り。左側面ナズ。裏面ナズ。裏面に頸部への刺刺痕あり。左側面に部分的に自然釉付着。左側面と裏面に部分的に胎付着。裏面凹み凹みと見えたが、胎かからの灰釉層とみることとも可能である。
1286	9c	-	土器類	瓦輪器類	碗	15.0	-	-	第1710 図6	灰白のはれた網とと思われる割離層が極めてきれいなため、この状態のままとして使用したものかもしれない。内面に無釉のため観察不明。体部外面と半面胎オサエ。半面は裏面へツ割り。底部内面凹みへツ割り。底部外面に磨滅「器口」のへツ書き「真」。9.8x8と縦片接合。

第100表 遺物観察表 (48)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
1287	10-A	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	13.4	4.2	7.2	第172図 002609	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面ナズ。底部内外面の大部分は体部内面の一部に磨ける。底部内面には染黒とみられる赤色の付着物も認められる。瓶用瓶。口穴短と瓶片付否。
1288	5シ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	17.2	5.3	8.9	第172図 002619	体部内面回転ナズ。体部外面上半回転ナズ。下半回転ヘラ磨り。底部内面回転ナズ後ナズ。底部内面に染黒つき。底部内面平直化。体部内面に自然磨ける。一部に自然磨り。
1289	8ヨ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	14.2	4.7	7.5	第172図 002629	内面は染黒のため観察不能。体部内面回転ナズ。底部外面ナズ。内面全面と口縁部内面の一部に自然磨り。
1290	5ク	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	15.6	4.7	7.4	第172図 002639	体部内面回転ナズ。体部外面上半回転ナズ。下半回転ヘラ磨り。底部内面回転ナズ後ナズ。底部内面に染黒つき。底部内面平直化。体部内面の大部分と口縁部内面の一部に自然磨り(あるいは自然磨り)。
1291	14セ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	13.6	3.9	6.9	第172図 002649	体部内面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面ナズ。底部内面平直化。体部内面に自然磨ける。
1292	19フ	ⅢD?	土器類	瓦輪陶器	甕	13.4	3.6	7.2	第172図 002659	内面は染黒のため観察不能。体部内面回転ナズ。底部内面回転ナズ。内面の全面と体部外面上半の一部に自然磨り。ただし、自然磨り可能性あり。
1293	8ヨ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	15.3	4.2	9.0	第172図 002669	体部内面回転ナズ。体部外面上半回転ナズ。下半回転ヘラ磨り。底部内面回転ナズ後ナズ。底部内面に染黒つき。底部内面平直化。
1294	5ケ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	14.0	4.2	7.1	第172図 002679	体部内面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面回転ナズ。底部内面に自然磨ける。底部内面に染黒つき。底部内面平直化。
1295	8中	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	12.0	3.7	6.1	第172図 002689	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面回転ヘラ磨り。底部内面に染黒つき。不明瞭ながら体部外面に部分的に自然磨り。
1296	8中	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	15.9	4.9	8.2	第172図 002699	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部内面平直化。
1297	8中	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	15.2	3.6	6.5	第172図 002709	体部内面回転ナズ。体部外面上半回転ナズ。下半回転ヘラ磨り。底部内面回転ナズ後ナズ。底部内面に染黒つき。底部内面平直化。染黒とみられる赤色の付着物も認められる。
1298	19-F	ⅢD?	土器類	瓦輪陶器	甕	12.3	4.0	6.2	第172図 002719	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面ナズ。底部内面に染黒つき。底部内面平直化。
1299	5ケ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	14.0	5.1	7.0	第172図 002729-79	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面回転ナズ。体部内面に自然磨ける。底部内面・高付部面に染黒つき。底部内面に磨き「L」(Ls)とヘラ磨き「M」。
1300	5ケ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	14.5	4.6	7.6	第172図 002730-79	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面回転ヘラ磨り。底部内面平直化。底部内面に染黒つき。底部内面に磨き「L」(Ls)とヘラ磨き「M」(L文字の可能性あり)。
1301	16ソ	ⅢD?	土器類	瓦輪陶器	甕	12.0	3.5	6.4	第172図 002749	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面回転ヘラ磨り。体部内面に自然磨り。底部内面に染黒つき。底部内面平直化。底部内面に磨き「L」。
1302	17ソ	ⅢD?	土器類	瓦輪陶器	甕	12.7	3.7	6.9	第172図 002759	内面は全面自然磨り付着のため観察不能。体部内面回転ナズ。底部外面ナズ。
1303	14ソ	ⅢD?	土器類	瓦輪陶器	甕	15.0	4.5	7.6	第172図 002769	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面ナズ。口穴短と瓶片付否。
1304	6ヨ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	13.0	3.5	7.6	第172図 002779	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部内面平直化。
1305	5ヨ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	14.2	4.3	6.8	第172図 002789	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ。底部外面回転ヘラ磨り。底部内面平直化。
1306	13年度 前庭坑1	-	土器類	瓦輪陶器	甕	12.3	4.2	6.4	第172図 002799	体部内外面回転ナズ。底部内面回転ナズ後ナズ。底部外面ナズ。底部内面に染黒つき。底部内面平直化。体部内外面に自然磨り(あるいは自然磨り)。
1307	9シ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	13.6	4.0	6.5	第172図 002809	体部内外面回転ナズ。底部内面に染黒つき。
1308	19チ	ⅢD?	土器類	瓦輪陶器	甕	約12.4	3.4	約6.0	第172図 002819	体部内外面回転ナズ。体部内面に自然磨り付着。
1309	16ソ	ⅢD?	土器類	瓦輪陶器	甕	13.0	4.0	6.9	第172図 002829	体部内外面回転ナズ。
1310	19-F	ⅢD?	土器類	瓦輪陶器	甕	12.0	3.8	6.6	第172図 002839	体部内外面回転ナズ。底部内外面回転ナズ。底部内面平直化。体部内面と体部外面上半の一部に自然磨り。自然磨り可能性あり。体部外面に染黒の一部とみられる赤色の付着物も認められる。

第101表 遺物観察表 (49)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	形状	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	直径 (厚さ)	底径 (高さ)		
1311	3ヶ	II	土器類	瓦輪陶器	碗	13.2	3.2	7.2	第175図 図62	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ。底部外面に凹輪 ホ切り施。底部内面平滑化。
1312	19ヶ	KDF	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	7.2	第175図 図63	体部内外面凹輪ナデ。底部内面ナデ。底部外面に凹輪ホ切り 後ナデ。体部内面に自然輪付着。
1313	7ヶ	II	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	6.2	第175図 図67	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ。底部外面に凹輪 へツ削り。体部内面に自然輪付着。底部内面平滑化。体部内 外面・底部内外面に磨付着。付着範囲は割れ口にまで及ん でおり。割れたのちに磁土として使用されたと思われる。転 写済。
1314	7ヶ	II	土器類	瓦輪陶器	碗?	-	-	7.6	第175図 図64	底部内面凹輪ナデ後ナデ。底部外面に凹輪ホ切り施。底部 外面に磨書「□」。
1315	8ヶ	III	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	7.6	第175図 図65	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ。底部外面に磨 書「□」。
1316	16ヶ	KDF	土器類	瓦輪陶器	碗	11.4	4.0	7.5	第175図 図67b	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ。底部内面平滑化。 底部外面に磨書「□」。
1317	19ヶ	KDF	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	6.0	第175図 図66	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ後ナデ。底部外面 ナデ。体部内面に自然輪付着。
1318	15ヶ	KDF	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	6.1	第175図 図68	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ後ナデ。底部外面 凹輪ナデ。底部内面平滑化。体部内面に自然輪付着。
1319	5ヶ	III	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	6.5	第175図 図67f	内外面磨削のため調整不明。高台部分を除く内外面全面に 瓦輪。底部内面に磨む様子の土質層1箇所あり。転写済。
1320	5ヶ	II	土器類	瓦輪陶器	碗	11.4	4.6	7.2	第175図 図69	底部内面凹輪ナデ。底部外面上半部凹輪ナデ。下半部凹輪 へツ削り。
1321	7ヶ	II	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	7.6	第175図 図68a	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ後ナデ。底部外面 に凹輪ホ切り施。底部外面に磨書「□」。
1322	19ヶ	KDF	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	7.2	第175図 図68b	体部内外面凹輪ナデ。底部外面に自然輪付着。底部外面に 磨書「□」。
1323	3ヶ	II	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	7.6	第175図 図67g	底部内面凹輪ナデ。底部外面ナデ。底部内面平滑化。底部 外面に磨書「□」。
1324	7ヶ	II	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	7.4	第175図 図68c	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ後ナデ。底部外面 に凹輪へツ削り。底部外面に磨書「□」。
1325	11ヶ	III	土器類	瓦輪陶器	碗?	-	-	7.6	第175図 図68d	底部内面凹輪ナデ後ナデ。底部外面に凹輪へツ削り。底部内 面に瓦輪。底部外面に磨書「□」。
1326	17ヶ	KDF	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	6.9	第175図 図68e	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ。底部内面平滑化。 底部内面に瓦輪あるいは自然輪あり。底部外面に磨書「□」。
1327	8ヶ	II	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	7.6	第175図 図68f	底部内面凹輪ナデ。底部外面に凹輪へツ削り。底部内面平滑化。 底部外面に磨書「□」。
1328	8ヶ	II	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	6.7	第175図 図68g	底部内面凹輪ナデ後ナデ。底部外面に凹輪へツ削り。底部外 面に磨書「□」(2文字の可能性あり)。
1329	14ヶ	KDF	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	6.8	第175図 図68h	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ。底部外面ナデ。 底部内面平滑化。体部内面に磨付着(磨書あり)。底部外面に 磨書「□」。
1330	5ヶ	III	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	6.6	第175図 図67h	底部内面凹輪ナデ。底部外面に凹輪へツ削り後ナデ。底部内 面平滑化。底部外面に磨書「A」。
1331	7ヶ	II	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	7.6	第175図 図68i	体部内外面凹輪ナデ。底部内面凹輪ナデ後ナデ。底部外面 ナデ。底部内面に自然輪付着。底部内面平滑化。底部外面 に磨書「□」(2文字あり)。
1332	不明	-	土器類	瓦輪陶器	碗?	-	-	6.0	第175図 図68j	内外面磨削のため調整不明。底部外面に磨書「□」。焼成み まく灰白色を呈する。
1333	14ヶ	KDF	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	6.2	第175図 図68k	底部内面凹輪ナデ後ナデ。底部外面に凹輪ホ切り後ナデ。底 部内面平滑化。底部外面に磨書「□」。
1334	18ヶ	KDF	土器類	瓦輪陶器	碗?	-	-	約6.9	第175図 図67i	底部内面凹輪ナデ後ナデ。底部外面ナデ。底部内面に磨付着。 転写済。
1335	10ヶ	-	土器類	瓦輪陶器	碗	-	-	6.0	第175図 図68l	体部内外面凹輪ナデ。底部内面に保とみられる黒色物が付 着。有明具として使用したものか。

第102表 遺物観察表 (50)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口徑 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
1336	6 ヲ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	7.0	第17400 0066-	内面は磨飾のため調整不明、体部内面凹削ナナ。底部外面凹削へつ削り、体部内面と底部内面に凹削、底部外面にも部分的に凹削、胎土調整、底部外面に磨行着、転用痕と判断するが、磨きである可能性もある。
1337	5 ヲ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	-	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。底部外面凹削ナナ。下部凹削へつ削り、体部外面に磨行「上」、底面みまくり磨行を認める。
1338	4 ケ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	-	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部外面に磨行「コ」、5ヶ所と破片接合。
1339	9 シ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	-	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部外面に磨行「コ」。
1340	19 9	Ⅲ0	土器類	瓦輪陶器	輪花甕	-	-	-	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。口縁部に輪花。
1341	4 ケ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕?	-	-	5.9	第17400 0067	体部内面凹削ナナ。底部内面凹削ナナ。体部内面に凹削。
1342	16 ヲ	Ⅲ0	土器類	瓦輪陶器	甕	13.5	3.1	7.0	第17400 0067a・7b	体部内面凹削ナナ。体部内面凹削ナナ。体部上半内面に部分的に凹削、底部外面平直化、体部・底部内面に磨行着、底部外面には朱塗とみられる赤色の付着物も認められる。転用痕。
1343	7 セ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	15.0	3.1	6.8	第17400 0067c・7d	体部内面凹削ナナ。体部内面凹削ナナ。体部外面ナナ。体部外面に磨行「上」。体部外面に朱塗とみられる赤色の付着物も認められる。転用痕。
1344	17 ヲ	Ⅲ0	土器類	瓦輪陶器	甕	16.0	3.0	8.2	第17400 0067f	体部内面凹削ナナ。体部内面凹削ナナ。体部外面凹削へつ削り。体部内面平直化、体部内面と体部上半に凹削(破片磨行)。
1345	21 9	Ⅲ0	土器類	瓦輪陶器	甕	14.8	3.0	7.8	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。内面には凹削へつ削りを部分的に併用する。底部内面凹削ナナ。体部内面平直化。
1346	19 9	Ⅲ0	土器類	瓦輪陶器	甕	13.9	3.2	6.8	第17400 0067g	体部内面凹削ナナ。体部内面凹削ナナ。体部外面凹削へつ削り。体部内面平直化。
1347	16 ヲ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	13.3	3.2	6.3	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部内面平直化。
1348	5 9	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	13.2	3.3	6.9	第17400 0067h	体部内面凹削ナナ。体部内面凹削ナナ。体部・体部内面平直化。
1349	6 9	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	13.9	3.5	7.0	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部内面に凹削(あるいは自然磨削)。
1350	多摩郡土 曜山IC	-	土器類	瓦輪陶器	甕	13.3	3.0	8.2	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。
1351	8 シ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	13.8	3.1	7.1	第17400 0067i	体部内面凹削ナナ。体部内面凹削ナナ。
1352	7 Ⅱ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	約14.0	2.0	約8.0	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部内面に自然磨削着。
1353	8 9	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	12.4	3.2	6.0	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部内面凹削ナナ。体部内面に朱塗着。体部内面全面と体部外面上半に凹削、底部外面に磨行「コ」。
1354	4 ヲ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	7.4	第17400 0067j	体部内面凹削ナナ。体部外面ナナ。体部外面に磨行「西」。
1355	不明	-	土器類	瓦輪陶器	甕	12.5	2.4	7.0	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部内面凹削ナナ。体部外面凹削へつ削り。体部外面に磨行着、転用痕。
1356	14 ヲ	Ⅲ0	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	9.0	第17400 0067k	体部内面凹削ナナ。体部内面凹削ナナ。体部外面凹削へつ削り。体部内面に凹削、体部内面に朱塗着。
1357	7 9	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	-	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部外面に凹削(あるいは自然磨削)。体部内面平直化、体部外面に磨行「コ」(西)。
1358	8 ヲ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	甕	-	-	6.7	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部内面凹削ナナ。体部内面平直化、体部外面に磨行「コ」。
1359	17 ヲ	Ⅲ0	土器類	瓦輪陶器	甕?	-	-	5.8	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部内面平直化。体部外面に磨行「コ」。
1360	19 9	Ⅲ0	土器類	瓦輪陶器	不明	-	-	7.6	第17400 0066-	体部内面磨飾のため調整不明、体部外面に凹削(あるいは自然磨削)。体部内面に凹削、体部内面にへつ削り。体部外面に磨行着、転用痕。
1361	6 ヲ	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	不明	-	-	6.2	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部内面平直化。体部外面に磨行「コ」。
1362	5 9	Ⅱ	土器類	瓦輪陶器	不明	-	-	-	第17400 0066-	体部内面凹削ナナ。体部外面ナナ。体部外面に磨行「コ」(底面凹削)。

第103表 遺物観察表 (51)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	部分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (最大)	器高 (最大)	底径 (最小)		
1363	6ヶ	B	土器類	灰輪陶器	段蓋	16.0	-	-	第17502 100671	外部内外面にナゲ。外部内面に灰輪。5ヶ所と破片接合。
1364	7ヶ	B	土器類	灰輪陶器	段蓋	13.0	-	-	第17502 100671	体蓋内外面にナゲ。本器部は白土部内外面に薄い灰輪。胎土断面で白→灰白白色を呈する。
1365	12ヶ 式試掘区4	-	土器類	灰輪陶器	段蓋	約16.5	-	-	第17502 100671	体蓋内外面にナゲ。胎土断面で灰白色を呈する。
1366	北東部土 層出区	-	土器類	灰輪陶器	段蓋	-	-	8.2	第17502 100671	内面は厚い塗粉のため観察不明。体蓋外面にナゲ。底部 外面に陶へツあり。
1367	北東部土 層出区	-	土器類	灰輪陶器	段蓋	-	-	-	第17502 100671	体蓋内外面にナゲ。内面全部と体蓋上半外面に灰輪。
1368	8ヶ	III	土器類	灰輪陶器	段蓋ナ	14.7	-	-	第17502 100671	体蓋内外面にナゲ。内外面に灰輪(内面の方が厚い)。ある いは薄過ぎ。
1369	6ヶ	B	土器類	灰輪陶器	長胴瓶	12.0	-	-	第17502 100671	口頸部内外面にナゲ。口頸部外外面に灰輪。
1370	17ヶ	KDF	土器類	灰輪陶器	長胴瓶	9.0	-	-	第17502 100671	口頸部内外面にナゲ。口頸部内外面に部分的に灰輪。胎 土断面。
1371	6ヶ	B	土器類	灰輪陶器	長胴瓶	13.4	-	-	第17502 100671	口頸部内外面にナゲ。口頸部外外面に灰輪。
1372	17ヶ	KDF	土器類	灰輪陶器	長胴瓶	9.2	-	-	第17502 100671	口頸部内外面にナゲ。口頸部内面に灰輪。ただし、自然 剥離の可能性あり。あるいは胎土混。
1373	7ヶ	B	土器類	灰輪陶器	小瓶	2.9	-	-	第17502 100671	口頸部内外面にナゲ。頸部内外面ナゲ・オオス。
1374	8ヶ	III	土器類	灰輪陶器	小瓶	-	-	7.4	第17502 100671	頸部内外面にナゲ。頸部内外面に灰輪。
1375	5ヶ	B	土器類	灰輪陶器	小瓶	-	-	5.6	第17502 100670	頸部内外面にナゲ。下部をなく頸部外面にナゲ。頸部 下部外面に陶へツあり。胎土断面にナゲ。頸部外面に 灰輪。底部外面に陶へツあり。
1376	19ヶ	KDF	土器類	灰輪陶器	小瓶	-	-	6.9	第17502 100671	頸部内外面にナゲ。底部内外面にナゲ。底部外面に 陶へツあり。頸部外外面に灰輪。底部内面に自然剥離行。3ヶ 所と破片接合。
1377	19ヶ	I	土器類	灰輪陶器	蓋	14.9	-	-	第17502 100671	口頸部内外面にナゲ。頸部内外面にナゲ。内面に自然 剥離行。外面に灰輪。
1378	21ヶ	KDF	土器類	灰輪陶器	蓋	11.2	-	-	第17502 100671	口頸部内外面にナゲ。頸部内外面にナゲ。測線のため 明確ではないが、口頸部内外面と頸部外外面に灰輪。
1379	16ヶ	KDF	土器類	灰輪陶器	蓋	4.7	5.8	5.9	第17502 100671	口頸部内外面にナゲ。頸部内外面にナゲ。底部内外面 に灰輪のため観察不明。底部外外面ナゲ。底部内外面をなくは ば全面に灰輪。
1380	6ヶ	B	土器類	灰輪陶器	蓋	-	-	-	第17502 100671	頸部内外面にナゲ。頸部外面上半にナゲ。下半の陶へツ あり。頸部上半に灰輪。7ヶ所と破片接合。
1381	21ヶ	KDF	土器類	灰輪陶器	蓋	-	-	9.6	第17502 100671	頸部内外面にナゲ。底部内外面にナゲ。頸部外外面に 陶へツあり。頸部外外面に灰輪。ただしこれは自然剥離の 可能性あり。底部内面に自然剥離行。
1382	14ヶ	KDF	土器類	灰輪陶器	蓋	-	-	9.0	第17502 100671	頸部内外面にナゲ。
1383	19ヶ	I	土器類	灰輪陶器	蓋	-	-	15.7	第17502 100671	頸部内外面にナゲ。底部内外面ナゲ・オオス。頸部外 外面に灰輪。底部内外面に自然剥離行。
1384	12ヶ 式試掘区17	-	土器類	灰輪陶器	蓋	-	-	12.0	第17502 100671	頸部内外面にナゲ(後ナゲ)。頸部外外面にナゲ(前ナゲ)。底部内 外面ナゲ。底部外外面に陶へツあり。中央部に陶へツありを 成す。
1385	5ヶ	B	土器類	灰輪陶器	蓋	-	-	15.0	第17502 100671	頸部内外面にナゲ。底部内外面にナゲ。頸部内外面・ 底部内面に灰輪。6ヶ所と破片接合。
1386	19ヶ	KDF	土器類	灰輪陶器	蓋	-	-	10.6	第17502 100671	頸部内外面にナゲ。底部内外面ナゲ。頸部外外面に灰輪。 ただし、自然剥離の可能性あり。底部内面に自然剥離行。あ るいは胎土混。
1387	8ヶ	B	土器類	灰輪陶器	陶埴	(6.9)	(3.3)	(3.4)	第17502 100671	外外面ナゲ・オオス。外外面に灰輪もしくは自然剥離。孔径 0.9cm。長さ78.9cm。
1388	16ヶ	KDF	土器類	灰輪陶器	陶埴	(7.3)	(4.0)	(4.1)	第17502 100671	外外面ナゲ・オオスによるナゲ・オオス。外外面に灰輪も しくは自然剥離。孔径0.9cm。長さ104.4cm。
1389	12ヶ 式試掘区3	-	土器類	緑釉陶器	不明	-	-	20.0	第17402 100630	瓶小瓶の口縁部とみられる。頸部内外面にナゲ。内外面 に緑釉。ただし均質でなく濃淡が認められる。胎土断面 で砂粒の混入なし。破片。
1390	12ヶ 式試掘区3	-	土器類	緑釉陶器	不明	-	-	-	第17402 100630	瓶小瓶の口縁部とみられる。口縁全面に緑釉。胎土断面で 砂粒の混入なし。破片。

第104表 遺物観察表 (52)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (最大)	器高 (最大)	口径 (最小)		
1391	東栗野土 塚出土	-	土器類	鉢輪陶器	不明	-	-	-	第17402 00030	柄と底の口縁部とみられる。ほぼ全面に緑釉。胎土断面で 赤釉の層入し、確認。
1392	東栗野土 塚出土	-	土器類	土師質土 器	皿	11.4	2.9	9.2	第17402 00079	体部内外面に黄ナズ・オスズ。体部外表面に黄ナズ。底部内 外面に黄ナズ・オスズ。胎土断面で灰白色を呈する。
1393	6 ス	Ⅱ	土器類	土師質土 器	皿	約18.0	3.4	約16.6	第17402 00081	体部内外面に黄ナズ。口縁部外表面に黄ナズ。口縁部を除く体 部内表面に黄ナズ。
1394	6 中	Ⅱ	土器類	土師質土 器	皿	8.6	2.1	5.9	第17402 00081	体部内外面に黄ナズ。底部内表面に黄ナズ。底部外表面に黄ナズ を塗り残。
1395	7 ス	Ⅱ	土器類	土師質土 器	皿	12.9	-	-	第17402 00081	体部内外面に黄ナズ。口縁部土師質。
1396	7 小	Ⅱ	土器類	土師質土 器	皿	10.0	1.9	6.9	第17402 00081	体部内外面に黄ナズ。底部内外面に黄ナズ。
1397	7 ス	Ⅱ	土器類	土師質土 器	皿	-	-	7.0	第17402 00081	体部内表面に黄ナズ。体部外表面に黄ナズ。底部内外面に黄ナズ。 底部外表面に黄ナズ。
1398	12年度 試掘状況	-	土器類	輸入磁器	白磁碗?	11.0	-	-	第17402 00080	口縁部を除く体部内外面に白色の白磁釉。
1399	不明	-	土器類	輸入磁器	白磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に灰白色の白磁釉。
1400	10 ス	Ⅱ	土器類	輸入磁器	白磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に灰白色の白磁釉。
1401	12年度 試掘状況	-	土器類	輸入磁器	青磁碗	14.2	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1402	7 中	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1403	不明	-	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1404	6 小	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1405	9 小	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部内面に黄ナズ文。
1406	16 フ	I	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1407	10 フ	I	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1408	12年度 試掘状況	-	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1409	7 中	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	4.9	第17402 00080	底部外表面に黄ナズ。体部内外面・底部内面に緑色の青 磁釉。底部内面にオスズナズ文。体部外表面に緑澤青文。底 部外表面に部分的に黒色釉が付着しているが、量が若干不足 かでない。
1410	6 小	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部内面に黄ナズ文。
1411	16年度 試掘状況	-	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1412	16 フ	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1413	12年度 試掘状況	-	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1414	6 小	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1415	不明	-	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	第17402 00080	底部外表面に黄ナズ。体部内外面・底部内面に緑色の青磁釉。 体部外表面に緑澤青文。
1416	8 小	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	6.9	第17402 00080	底部外表面に黄ナズ。底部内面に緑色の青磁釉。
1417	不明	-	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	5.2	第17402 00080	体部内外面と底部内面に緑色の青磁釉。底部外表面に黄ナズ 文。
1418	12年度 試掘状況	-	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	5.1	第17402 00080	底部外表面に黄ナズ。体部内外面・底部内面に緑色の青 磁釉。体部外表面に緑澤青文。
1419	7 小	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	6.9	第17402 00080	底部外表面に黄ナズ。体部内外面と底部内面に緑色の青 磁釉。ただし底部内面では釉欠に欠けている。
1420	8 中	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	-	-	5.6	第17402 00080	底部外表面に黄ナズ。底部内面に緑色の青磁釉。
1421	12年度 試掘状況	-	土器類	輸入磁器	青磁碗?	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。
1422	12年度 試掘状況	-	土器類	輸入磁器	青磁碗?	-	-	-	第17402 00080	体部内外面に緑色の青磁釉。
1423	7 中	Ⅱ	土器類	輸入磁器	青磁碗	16.4	-	-	第17402 00080	体部内外面・底部内外面に緑色の青磁釉。底部内面に黄ナズ 文。
1424	不明	-	土器類	輸入磁器	青磁碗?	10.8	-	-	第17402 00080	体部内面下部に黄ナズ。体部内面上部と外面全面に緑色の 青磁釉。

第105表 遺物観察表 (53)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
1425	12年度 試掘区1	—	土器類	輸入磁器	青磁鉢?	約20.5	—	—	第1260 D0830	鉢などの大型磁器の口縁部とみられる。体部内外面に緑色の青磁釉。
1426	6ヶ	II	土器類	山系陶	碗	12.2	—	—	第1260 D0831	体部内外面同軸ナズ。あるいは反軸同軸ナズ。
1427	9ヶ	II	土器類	山系陶	碗	—	—	8.0	第1260 D0831	体部内外面同軸ナズ。底部内面同軸ナズ。底部外面に同軸赤切り釉。高台にキミダラ釉。北部系山系陶。
1428	9ヶ	II	土器類	山系陶	碗	—	—	6.3	第1260 D0831	体部内外面同軸ナズ。底部内面同軸ナズ。底部外面に同軸赤切り釉。高台にキミダラ釉。北部系山系陶。8ヶ・9ヶ・5ヶと同形同種。
1429	20ヶ	KT	土器類	山系陶	碗	13.0	—	—	第1260 D0831	体部内外面同軸ナズ。外面には部分的にナズを加える。北部系山系陶。
1430	11ヶ	I	土器類	山系陶	碗	13.6	—	—	第1260 D0831	体部内外面同軸ナズ。北部系山系陶。
1431	8ヶ	II	土器類	山系陶	碗	15.0	—	—	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。南部系山系陶。6ヶ・8ヶ・7ヶ・8ヶと同形同種。
1432	21ヶ	KT	土器類	山系陶	碗	—	—	7.4	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。底部内面同軸ナズ。底部外面に同軸赤切り釉。南部系山系陶。
1433	6ヶ	III	土器類	山系陶	碗	16.2	5.0	2.6	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。底部内面同軸ナズ。底部外面に同軸赤切り釉。体部外面に黒付着。南部系山系陶。8ヶ・9ヶ・5ヶ・9ヶと同形同種。
1434	21ヶ	I	土器類	山系陶	碗	—	—	9.0	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ後ナズ。底部外面に同軸赤切り釉。高台にキミダラ釉。南部系山系陶。
1435	36ヶ	KDT	土器類	山系陶	小皿	8.0	1.9	4.6	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。底部内面ナズ・ナセテ。底部外面に同軸赤切り釉。底部内面平滑化。体部内面に緑磁釉外面に自然釉付着。南部系山系陶。
1436	8ヶ	III	土器類	山系陶	小皿	8.4	1.9	4.6	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。底部内面同軸ナズ。底部外面に同軸赤切り釉。南部系山系陶。
1437	11ヶ	III	土器類	山系陶	小皿	—	—	5.2	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。底部内面ナズ・ナセテ。底部外面に同軸赤切り釉。南部系山系陶。
1438	30ヶ	I	土器類	山系陶	小皿	—	—	5.0	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。底部内面同軸ナズ。底部外面に同軸赤切り釉。北部系山系陶。
1439	7ヶ	II	土器類	山系陶	鉢	38.0	—	—	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。7ヶと同形同種。
1440	8ヶ	II	土器類	山系陶	鉢	34.6	—	—	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。体部内面に褐色灰化物付着。
1441	7ヶ	II	土器類	山系陶	鉢	30.0	—	—	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。
1442	15ヶ	II	土器類	山系陶	鉢	約30.0	—	—	第1770 D0831	体部内外面同軸ナズ。
1443	30ヶ	KDT	土器類	珠洲焼	鉢	33.8	—	—	第1770 D0830	体部内外面同軸ナズ。体部内面平滑化。
1444	8明	—	土器類	珠洲焼	鉢	28.0	—	—	第1770 D0830	体部内外面同軸ナズ。
1445	15ヶ	KDT	土器類	珠洲焼	鉢	約28.0	—	—	第1770 D0830	体部内外面同軸ナズ。
1446	7ヶ	II	土器類	珠洲焼	鉢	—	—	—	第1770 D0830	体部内外面同軸ナズ。
1447	13ヶ	KDT	土器類	珠洲焼	鉢	—	—	—	第1770 D0830	体部外面同軸ナズ。体部内面に黒目。
1448	14ヶ	KDT	土器類	珠洲焼	鉢	—	—	—	第1770 D0830	体部内外面同軸ナズ。体部内面に黒目(単位9ヶ)。
1449	12ヶ	KDT	土器類	珠洲焼	鉢	—	—	10.6	第1760 D0830	体部内外面同軸ナズ。底部外面へり割。体部内面・底部内面に黒目(単位9ヶ)。
1450	12年度 試掘区10	—	土器類	珠洲焼	鉢	—	—	14.6	第1760 D0830	体部内外面同軸ナズ。体部内面・底部内面に黒目。底部内面に平行線状の圧痕。
1451	7ヶ	II	土器類	珠洲焼	鉢	—	—	14.0	第1260 D0830	体部内面黒帯の厚縁。体部外面同軸ナズ。体部内面に黒目。
1452	6ヶ	II	土器類	珠洲焼	鉢	—	—	10.6	第1760 D0830	体部内外面同軸ナズ。底部外面に同軸赤切り釉。体部内面平滑化。
1453	不明	—	土器類	青磁焼	甕	約35.0	—	—	第1760 D0831	口頸部内外面同軸ナズ。
1454	9ヶ	II	土器類	古瀬戸系 黒釉陶器	水注	—	—	—	第1260 D0831	胴部内面ナズ・ナセテ。胴部外面は磨滅のため調整不明。胴部外面に白っぽい緑色の灰釉。古瀬戸系陶器。
1455	6ヶ	II	土器類	古瀬戸系 黒釉陶器	磨付片口	15.0	—	—	第1260 D0831	体部内外面同軸ナズ。体部内面上と外面に緑色の灰釉。磨付片口は確認できないが、器形から磨付片口の可能性が高い。古瀬戸系陶器。
1456	4ヶ	III	土器類	古瀬戸系 黒釉陶器	折縁浅皿	約14.4	—	—	第1260 D0831	体部内外面同軸ナズ。体部内外面に白色の灰釉。磨付片口の可能性もある。

第106表 遺物観察表 (54)

遺物番号	出土順	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	幅 (厚さ)	底径 (厚)		
1457	69	Ⅱ	土器類	古瀬戸式 黒胎陶器	筒形甕	約24.0	-	-	第1740 00061	体部内外面回転ナシ。体部内面に灰オリーブ色の灰粒、 黒目付入意の可能性もある。
1458	69	Ⅱ	土器類	古瀬戸式 黒胎陶器	3角付大甕	-	-	8.6	第1740 00061	体部表面回転ナシ。体部内面に緑色の灰粒、黒瀬戸式 片焼。体部外面・底面内面に緑色の灰粒、黒瀬戸式。
1459	73	Ⅱ	土器類	古瀬戸式 黒胎陶器	鉢?	-	-	9.9	第1740 00061	体部内面に緑色の灰粒、底面内面に黒目付。中腹部に 回転ナシ。
1460	73	Ⅱ	土器類	古瀬戸式 黒胎陶器	鉄胎甕	10.8	2.7	6.6	第1740 00061	内外面等しい面輪のため観察不明。体部内面に黒目。底 部内面に黒目付焼。内外面にほぼ完全に白色焼、瀬戸・美濃 系の白灰粒の混入。
1461	93	-	土器類	古瀬戸式 黒胎陶器	甕	-	-	12.0	第1740 00061	体部から底部にかけて内面に黒目。体部外面を除く残存 部全面に黒色の灰粒、底面内面にわずかに黒目付焼を 残す。瀬戸・美濃系の白灰。
1462	139	Ⅲ	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網A 類	(35.2)	0.7	(10.7)	第1740 00063	右側の管状突起と反対下部の一部を欠くもの。ほぼ全 部を欠くことができる。左側加工部等はほとんど削 りナシ。特に表面は磨食が著しい。反対の筒縁部を削り 作っている。径目、タメ不明。
1463	173	KT	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網A 類	(残存38.1)	0.7	(残存8.6)	第1740 00063	上部と右側の管状突起を除く。反対下部は左半の方式と 異なる。これは使用者が削り加工した使用痕跡とみら れる。表面・裏面に黒目付焼によるとみられる灰粒の 混入も、管状部分のみである可能性もある。しかし、管 は磨食するための削り加工とみられる。径目、タメ不明。
1464	149	Ⅲ	木器類	器具	胴 曲形網	(残存40.6)	1.1	(10.8)	第1740 00064	輪縁を欠くもの。反対の形状からナスト形網A類とみ られる。反対下部の管状突起がほとんど欠けているが、 磨食した使用痕の可能性もある。径目、タメ不明。
1465	197	I	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網B 類	(35.6)	0.7	(9.8)	第1740 00062	ほぼ全周を磨くことができるもの。裏面は磨食が著しく、 表面は左半は磨食が良くない。輪縁に対して反対の中 腹部に黒目付焼によるとみられる灰粒の混入も、管状 部分のみである可能性もある。これは使用者の削り加 工によるとみられる。径目、タメ不明。
1466	169	KT	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網B 類	41.2	0.6	(11.6)	第1740 00065	ほぼ全周を磨くことができるが、裏面全面と表面左半は 磨食が著しい。表面左半側には加工痕跡が認められ る。径目、タメ不明。
1467	159	-	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網B 類	(42.7)	1.7	(残存7.1)	第1740 00065	左端を欠く。上部も欠けている可能性がある。下腹を 削ることはほぼ、全体に及ぶものではない。管状部分 は磨食がよい。表面・裏面には加工痕跡ほとんど認め られない。径目、タメ不明。
1468	173	KT	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網C 類	40.1	0.7	10.5	第1740 00062	全周のみである。当遺跡では最も残存状態の良い筒の 身である。表面・裏面に加工痕跡の残存が認められ る。全体に 分厚く、ほぼ全周にわたって管状突起とみられる。下 腹部のみは磨食してのみを削り、中央部を削っている。 輪縁の表面・裏面に、それぞれ一對の浅い溝が認められ るが、これは加工痕の可能性もある。径目、タメ不明。
1469	197	I	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網C 類	(44.7)	1.4	(8.7)	第1740 00065	ほぼ全周を磨くことができるが、左半は磨食が著しく 右半は磨食が良くない。輪縁中央の表面両面と左側面に 浅い溝が認められる。これは輪と結合のための可能性 がある。径目は、筒縁部を削り作っている。径目、タメ 不明。
1470	169	KT	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網C 類	(73.9)	1.1	(10.6)	第1740 00065	左端を1/3ほど欠く。左半の残存状態が良くないが、ほぼ 全周を削り加工されている。表面・裏面に、ほぼ全 面にわたって管状突起とみられる。これは加工痕とみ られる。径目は、輪縁部を削り作っている。径目、タメ 不明。
1471	209	KT	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網C 類	(残存67.9)	1.4	(7.3)	第1740 00065	上部・下部を欠く。全体に残存状態は良好ではない。輪 縁・反対側の左側に管状突起の残存が認められることか らナスト形網A類とみられる。反対側の右側に管状突起 とみられることから、反対側の右側に管状突起とみ られる。これは加工痕とみられる。径目は、輪縁部を 削り作っている。径目、タメ不明。
1472	179	KT	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網B 類	(残存46.4)	1.4	(残存16.1)	第1800 00064	既見網。反対側の大半を欠くも内腹には4本と推定さ れる。輪縁の上部に浅い溝が認められる。これは輪と 結合のための可能性もある。径目、タメ不明。
1473	219	I	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網B 類	(残存42.2)	1.4	(残存13.1)	第1800 00064	既見網。下部を欠く。表面は磨食が著しい。上部は表面に 削り加工の痕跡が認められる。裏面は左半側は比較的 平滑である。特に裏面に黒目付焼によるとみられる 灰粒の混入も、管状部分のみである可能性もある。こ れは加工痕とみられる。径目は、輪縁部を削り作って いる。径目、タメ不明。
1474	149	Ⅲ	木器類	器具	胴 曲形網 ナスト形網B 類	(残存28.4)	1.4	(残存4.2)	第1800 00064	上部・下部・右端を欠く。表面磨食と磨食が認められ る。表面の左半側部分とみられる。本来の形状不明 であるが、3~4本の可能性もある。径目、タメ不明。





第109表 遺物観察表 (57)

遺物 番号	出土 地点	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (高さ)	底径 (長さ)		
1510	15号	Y	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器 皿類	(残存15.1)	(1.4)	(残存5.3)	第180図 10097	残存部分はいずれも丸みとみられるが、側面に小孔が4箇所認められる。そのうち2箇所には木釘がはさまったまま残っている。全体、ヒメネ。
1511	6号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器 皿類	(残存9.4)	(0.6)	(残存8.0)	第180図 10098	側面に木釘孔とみられる小孔が2箇所認められる。うち下部付近の小孔には木釘が残っている。全体、ヒメネ。
1512	11号	Y	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器 皿類	(残存11.5)	(0.8)	(残存5.2)	第180図 10099	側面に1箇所、小孔孔に木釘がはさまったまま残っている。裏面に刀物痕が認められる。飯目、アサナチ。黒。
1513	9号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器 C類	(残存11.7)	(1.1)	(残存5.3)	第180図 10099	縁線部付近に貫通する小孔が2箇所認められる。側面に加工痕が認められる。飯目、アサナチ。黒。
1514	12号(複製 品)	一	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器 皿類	(7.6)	(0.4)	(7.3)	第180図 10099	貫通する小孔孔が3箇所認められ、そのうち1つには側面縁がはさまっている。表面には、凡の跡を連なるように円形の痕跡痕が残る。1511号と同様に加工痕が認められる。飯目、アサナチ。黒。
1515	5号	III	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器 皿類	(17.4)	(0.9)	(残存10.4)	第180図 10099	本体の平面形は円形とみられるが、あまり彫ってはいない。表面には周縁部に段差を設けており、段差をまたいで貫通する側面縁が2箇所認められる。表面・裏面に刀物痕が認められる。裏面にふんまし(コンパス)による円形加工のための目印が残っている。飯目、ヒメネ。
1516	6号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器 皿類	(残存15.8)	(1.4)	(残存7.5)	第180図 10099	表面には周縁部に段差を設けている。上縁付近に縁をまたいで貫通する側面縁が1箇所、下部付近にも1箇所、縁がはさまったとみられる痕跡が認められる。裏面には刀物痕が複数認められる。飯目、アサナチ。黒。
1517	6号	III	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器 皿類	(残存18.2)	(0.9)	(残存10.3)	第180図 10099	残存部分は全体の1/2程度とみられる。本体の平面形は中央に小孔を持つ円形と推定される。円孔周辺が凹化している。表面には周縁部に段差を設けており、段をまたいで貫通する側面縁が1箇所認められる。表面・裏面に刀物痕が認められる。飯目、ヒメネ。
1518	20号	XT	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器 皿類	(残存25.3)	(1.2)	(残存11.2)	第180図 10094	残存部分は全体の1/2程度とみられる。本体の平面形は中央に小孔を持つ円形と推定される。円孔周辺が凹化している。表面には周縁部に段差を設けており、段をまたいで貫通する側面縁が1箇所認められる。全体、ヒメネ。
1519	7号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(8.2)	(0.7)	(残存4.9)	第180図 10099	上縁と下半分欠く。裏面に刀物痕が認められる。飯目、アサナチ。黒。
1520	7号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存12.4)	(0.8)	(残存3.1)	第180図 10099	残存部分ほどく一部であるが、本体の平面形は円形とみられる。表面に二次加工痕がみられる。飯目、ヒメネ。
1521	8号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(16.8)	(0.9)	(残存10.6)	第180図 10099	上縁にV字状の切り欠き加工が認められる。裏面に刀物痕が認められる。飯目、ヒメネ。
1522	7号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存16.8)	(0.4)	(残存3.5)	第180図 10099	全体に磨食が盛んでおり、ゆがみが著しい。周縁部に段差を設けている。飯目、ヒメネ。
1523	7号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存16.4)	(0.7)	(残存3.8)	第180図 10099	本体の平面形は円形とみられるが、やや楕円形であった可能性もある。残存部分の全面にわたる細かな加工痕が多数認められる。半端である。全体、ヒメネ。
1524	6号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存8.3)	(0.4)	(残存4.0)	第180図 10099	残存部分ほどく一部であるが、本体の平面形は円形とみられる。表面に複数の痕跡が認められ、刀物痕と推定できるほど明確なものではない。飯目、ヒメネ。
1525	7号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存13.3)	(0.9)	(残存4.7)	第180図 10099	上縁と下半分欠くが、本体の平面形は円形であったとみられる。ただし、二次加工を受けている可能性がある。飯目、ヒメネ。
1526	9号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存9.2)	(0.4)	(残存3.2)	第180図 10094	表面・裏面・側面に磨食の痕跡が認められる。ただし、裏面と側面で凹状突起がみられる。飯目、ヒメネ。
1527	7号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存9.4)	(0.4)	(残存4.5)	第180図 10099	本体の形状は円形とみられるが、あるいは円形の半端部分かもしれない。飯目、ヒメネ。
1528	16号	KT	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存18.9)	(1.0)	(残存7.2)	第180図 10094	本体の平面形は楕円形であった可能性もある。周縁部に段差を設けている。全体、ヒメネ。
1529	6号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存24.9)	(1.1)	(残存7.5)	第180図 10099	平面形は楕円形となる可能性もある。裏面に磨食が著しい。左縁付近に貫通孔が1箇所認められる。表面下半分に刀物痕が認められる。飯目、ヒメネ。
1530	8号	II	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存26.5)	(1.0)	(残存5.3)	第180図 10099	残存部分が一部にとどまるため、本体の平面形は楕円形であった可能性もある。飯目、ヒメネ。
1531	8号	III	木蓋類	器具	動物骨器 円形動物骨器	(残存27.1)	(1.5)	(残存10.3)	第180図 10099	全体に磨食が盛んでいる。本体の平面形は円形とみられるが、やや楕円形であった可能性もある。左半部に凹み込みのようなものが認められるが、人為的な加工痕が4箇所認められる。飯目、ヒメネ。

第110表 遺物観察表 (58)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
1532	9シ	Ⅱ	木器類	器具	曲物器 曲物板	(残存)2.3	0.5	(残存)2.3	第187図 10204	残存部分は全体のごく一部とみられ、全体の形状は不明である。上下縁に対して直交方向にケビキを施している。1532と共に出土した。曜日、シノナ。
1533	9シ	Ⅱ	木器類	器具	曲物器 曲物板	(残存)6.7	0.5	(残存)3.4	第187図 10204	残存部分は全体のごく一部とみられ、全体の形状は不明である。上下縁に対して直交方向にケビキを施している。1532と共に出土した。曜日、シノナ。
1534	9シ	Ⅱ	木器類	器具	曲物器 曲物板	(残存)5.3	0.5	(残存)3.5	第187図 10204	残存部分は全体のごく一部とみられ、全体の形状は不明である。上下縁に対して直交方向にケビキを施している。1532と共に出土した。曜日、シノナ。
1535	9シ	Ⅱ	木器類	器具	曲物器 曲物板	(残存)4.5	0.5	(残存)3.5	第187図 10204	残存部分は全体のごく一部とみられ、全体の形状は不明である。上下縁に対して直交方向にケビキを施している。1532と共に出土した。曜日、シノナ。
1536	6中	Ⅱ	木器類	器具	曲物器 曲物板	(残存)1.5	0.3	(残存)2.1	第187図 10204	残存部分は全体のごく一部とみられ、上下縁に対して直交方向にケビキを施している。貫通する前後縁が残存するが、中透で隠れている。曜日、シノナ。
1537	8シ	Ⅱ	木器類	器具	軋臼 柄	(45.8)	1.2	(1.2)	第188図 10205	折れているが、ほぼ全形を窺うことが出来る。比較的丁寧な加工を施している。断面は丸形である。木孔とみられる木孔が認められ、柄杓の柄である可能性が高い。曜日、シノナ。
1538	8中	Ⅱ	木器類	器具	柄	(残存)9.5	1.4	(8.9)	第188図 10204	大きき上形状から、柄杓の柄板とみられる。下縁の一部を欠く。表面に2箇所の凹み(1箇所は、断面の厚縁が認められる。表面から凹み部にかけて)が認められる。曜日、アヌナウ。
1539	9フ	KTⅡ	木器類	器具	漆串	(残存)13.0	0.7	(2.2)	第188図 10206	下縁を欠く。上縁は左右両側から限りに切り落とす。欠け部がある。曜日、アヌナウ。
1540	16フ	KTⅡ	木器類	器具	形代 丸形	(残存)8.3	0.4	(2.2)	第188図 10206	右半を欠く。左縁は断面を表現したものと推定した。表面・裏面に目を表現したとみられる貫通しない木孔が認められる。1541と同じ個体の可能性がある。曜日、アヌナウ。
1541	9フ	KTⅡ	木器類	器具	形代 丸形	(残存)6.4	0.5	(1.6)	第188図 10204	左半と右縁を欠く。表面・裏面に押し込み切り込みが認められる。上縁は背の腹を表現していることとみられる。1540と同じ個体の可能性がある。曜日、シノナ。
1542	9フ	KT	木器類	器具	形代 丸形	(残存)11.3	0.4	(2.2)	第188図 10206	右縁(「尾節」)を欠く。断面・腹面は断面は切り欠きにより削削である。背を表現した上縁面には中央に半環状の凹みがあり、これはあるいは輪杓の表裏かもしれない。曜日、シノナ。
1543	17フ	K3F	木器類	器具	形代 丸形	(残存)8.1	0.4	(2.6)	第188図 10204	左縁(「頭節」)を欠く。上縁は背の腹を表現していることとみられる。貫通しない切り込みが表面に2箇所、裏面に1箇所認められる。曜日、シノナ。
1544	6中	Ⅱ	木器類	器具	形代 丸形	(残存)16.1	0.7	(2.6)	第188図 10206	上下・左右・表面を別側からの削削している。背の腹にふたつ押し込まれるのたれ方を上として提示した。また表面・裏面に2箇所ずつある切り込み(表面は押し込みが深まっている)を削削の押し込みと推定した場合にも、この上下が逆である。ただし、矢張り押し込みは深く削削を施した。左右の押し込みも同様である。削削の押し込みも同様である。削削したものは上下逆となる。曜日、シノナ。
1545	12年産 試掘区16	—	木器類	器具	形代 丸形	(残存)9.4	0.4	(3.1)	第188図 10206	右縁(「尾節」)を欠く。上縁は中央を大きく削削し背を表現していることとみられるが、軸に近い表面に認められない凹みに目を表現したとみられる貫通孔が認められる。曜日、アヌナウ。
1546	16中	KT	木器類	器具	形代 丸形	(残存)8.7	0.2	(1.7)	第188図 10206	右縁を欠く。左縁を断面・腹面は断面は削削し削削している。背や腹の表面は可動したと推定されない。表面・裏面に中央にみられる凹みは削削を押し込み切り込みを行うものである可能性がある。曜日、シノナ。
1547	9フ	K3F	木器類	器具	形代 丸形	(残存)14.0	0.7	(2.2)	第188図 10206	両縁を欠くが、上縁の形状から断面と推定した。あまり削削ではないものの、表面・裏面に押し込み切り込みが認められる。表面の表面は削削を押し込みしたものである可能性がある。上縁は、背の腹を表現していることとみられる。曜日、アヌナウ。
1548	6シ	Ⅱ	木器類	器具	形代 丸形	(残存)8.0	0.7	(2.2)	第188図 10206	左縁(「頭節」)を欠く。上縁は背の表面が削削に認められる。表面・裏面の下縁が削削を押し込みだとみられる切り込みが認められる。曜日、シノナ。
1549	17フ	K3F	木器類	器具	形代 丸形	(残存)9.7	0.4	(3.3)	第188図 10206	残存部分は全体の1/3程度にとどまるとみられる。表面の形状の推定は不明である。背の表面とみられる突起のある方を上としたが、定かたではない。上下縁と中央の凹みは削削の断面に目を表現したとみられる貫通孔が認められる。曜日、シノナ。
1550	17フ	I	木器類	器具	形代 丸形	(15.7)	0.7	(4.0)	第188図 10204	左縁は表面の形状をどめていない可能性が高い。右縁も頭節・尾節のいずれかとみられる。両縁が削削していることとみられる。曜日、シノナ。



第112表 遺物観察表 (60)

遺物番号	出土層位	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 寸法	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
1566	12年度 試掘層Ⅳ	Ⅰ	木器類	器具	杵子 A類	(残存17.0)	0.40	(4.0)	第19区 図版1	土層を欠くが、欠失部分はわずかとみられる。断面を縦ろし たこの形状であるが、中実である。志法。
1570	Ⅴ	Ⅱ	木器類	器具	杵子 A類	(36.5)	0.40	(7.3)	第19区 図版99	ほぼ定形品である。断面を縦ろし、口部の形状である。全体 に丁寧な加工が施され、断面は丸みを帯びている。口の部 分と身体部分で厚みは異なる。下部は磨滅してい るが、これは脱用に伴うものである可能性がある。志法、 アスチロ属。
1571	Ⅴ	Ⅱ	木器類	器具	杵子 B類	(36.4)	0.30	(5.6)	第19区 図版99	下部を欠くが、ほぼ定形品である。断面を縦ろし、口部 の形状である。全体に丁寧な加工が施されているが、断面 は異なる。口の部分より身体部分の方が厚みがやや 薄く、特に下部は丸く磨けている。志法、ヒノキ。
1572	7	Ⅱ	木器類	器具	杵子	(残存18.0)	0.70	(残存6.0)	第19区 図版1	下半身(身体)は大部分欠失している。残存部分の形状は、 各面とも丁寧である。断面には口縁部とみられる細かな磨 滅が認められる。志法、ヒノキ。
1573	12年度 試掘層Ⅲ	Ⅰ	木器類	器具	槌造品	(23.1)	0.20	(2.4)	第19区 図版102	先端が反り上がる。欠込みを施した断面を表面に立つ磨滅 の形状が、口縁の半円形部分の一部である可能性が高いと 判断した。志法、ケヤク属。
1574	12年度 試掘層Ⅲ	Ⅰ	木器類	器具	槌造品	(残存11.3)	0.70	(1.7)	第19区 図版102	右端を欠く。精巧な加工を施している。中央に溝を持ち、 端を丸くする形状から、機軸的な金属製器具の槌造品との 可能性が考えられる。1504・1504・1713は「出土土、志法、 ヒノキ」。
1575	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(23.9)	0.40	(0.8)	第19区 図版100	ほぼ定形品である。上部・下部とも尖らせてはいない。断面 はほぼ円形の部分から四角形に近い部分までみられる。 志法、ヒノキ。
1576	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(22.9)	0.70	(0.7)	第19区 図版100	折れているが、ほぼ定形品である。断面は不整な七角形で ある。下部は磨滅している。志法、ヒノキ。
1577	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(24.9)	0.40	(0.7)	第19区 図版100	上部はわずかに欠けている可能性がある。断面は六角形を 基本とするが、口縁部で円形に近い。両端とも尖らせ てはいない。志法、ヒノキ。
1578	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(21.1)	0.40	(0.8)	第19区 図版99	ほぼ定形品である。下部は磨滅している。断面は不整な長 方形の形状である。1579と共に出土している。志法、アス チロ属。
1579	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(18.5)	0.50	(0.6)	第19区 図版99	ほぼ定形品である。下部は1方向から斜めに切り落し、 丸くしている。断面は不整な形状である。1578と共に土 層に出土している。志法、アスチロ属。
1580	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存16.4)	0.50	(0.7)	第19区 図版100	土層を欠く。下部も欠いているが、欠失部分はわずかとみ られる。断面は不整な七角形である。志法、ヒノキ。
1581	7	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存18.7)	0.50	(0.5)	第19区 図版1	土層を欠く。彎曲が著しい。断面は七角形を基本とする。 志法、ヒノキ。
1582	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存15.4)	0.50	(0.5)	第19区 図版100	土層を欠く。断面は不整な六角形を基本とするが、一定し ていない。志法、ヒノキ。
1583	7	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存15.4)	0.70	(0.9)	第19区 図版100	土層を欠く。断面は八角形である。志法、ヒノキ。
1584	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存15.7)	0.30	(0.7)	第19区 図版1	土層を欠く。断面は結核形である。下部は尖らせてい る。志法。
1585	7	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存15.5)	0.50	(0.6)	第19区 図版1	土層を欠く。断面は八角形を基本とする。下部は尖らせて いる。志法。
1586	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存12.7)	0.40	(0.6)	第19区 図版1	土層を欠く。下部は磨滅している可能性がある。断面は六 角形を基本とするが、口縁部で部分異なる。志法。
1587	7	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存13.4)	0.50	(0.7)	第19区 図版1	土層を欠く。断面は六角形である。下部は尖らせてい る。志法。
1588	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存13.8)	0.40	(0.6)	第19区 図版100	土層を欠く。断面は整った円形である。下部は尖らせてい る。志法、ヒノキ。
1589	7	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存13.7)	0.40	(0.7)	第19区 図版100	土層を欠く。断面は不整な八角形である。下部は尖らせて いる。志法、ヒノキ。
1590	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存12.5)	0.50	(0.8)	第19区 図版1	土層を欠く。断面は不整な六角形である。志法。
1591	5	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存12.4)	0.40	(0.6)	第19区 図版100	土層を欠く。断面は比較的整った七角形である。下部は尖 らせている。志法、ヒノキ。
1592	6	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存12.4)	0.40	(0.7)	第19区 図版100	土層を欠く。横断面は不整な六角形を基本とする。志法、 ヒノキ。

第113表 遺物観察表 (61)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	直径 (高さ)		
1393	6号	II	木器類	器具	箸	(残存4.1)	0.5	0.6	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は台形～長方形である。下端は1方向から斜めに切られている。芯土、ヒノキ。
1394	5号	II	木器類	器具	箸	(残存12.4)	0.6	0.5	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な六角形である。芯土、ヒノキ。
1395	6号	II	木器類	器具	箸	(残存13.4)	0.6	0.6	第19年度 採取100	土層・下層を欠く。断面は不整な円形を基本とする。芯土、ヒノキ。
1396	8号	II	木器類	器具	箸	(残存12.0)	0.6	0.6	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な七角形を基本とするが、一定しない。芯土、ヒノキ。
1397	6号	II	木器類	器具	箸	(残存12.3)	0.7	0.7	第19年度 採取100	下層を欠く。断面は不整な六角形である。芯土、ヒノキ。
1398	5号	II	木器類	器具	箸	(残存11.7)	0.6	0.6	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な六角形である。芯土、ヒノキ。
1399	8号	II	木器類	器具	箸	(残存10.1)	0.5	0.7	第19年度 採取100	土層を欠く。下層は摩滅している可能性がある。断面は六角形である。芯土。
1400	7号	II	木器類	器具	箸	(残存16.4)	0.7	0.7	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な六角形である。下層は実らせている。芯土。
1401	6号	II	木器類	器具	箸	(残存11.5)	0.6	0.8	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は楕円形である。芯土、ヒノキ。
1402	6号	II	木器類	器具	箸	(残存12.4)	0.6	0.6	第19年度 採取100	土層を欠く。縁の加工を併せており、断面は一定していない。芯土、ヒノキ。
1403	6号	II	木器類	器具	箸	(残存11.3)	0.5	0.7	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な六角形である。下層は実らせている。芯土。
1404	7号	II	木器類	器具	箸	(残存9.4)	0.6	(残存0.7)	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は六角形である。下層は実らせている。芯土。
1405	4号	II	木器類	器具	箸	(残存8.7)	0.4	0.6	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な七角形である。芯土。
1406	5号	II	木器類	器具	箸	(残存9.1)	0.5	0.7	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な六角形である。芯土。
1407	6号	II	木器類	器具	箸	(残存9.0)	0.5	0.8	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は中央付近では狭長方形であるが、下層部では円形に近い。芯土、ヒノキ。
1408	5号	II	木器類	器具	箸	(残存16.1)	0.5	0.7	第19年度 採取100	土層を欠く。下層は欠くが欠大部分はわずかとみられる。断面は不整な六角形である。芯土。
1409	7号	II	木器類	器具	箸	(残存9.3)	0.6	0.6	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は七角形である。下層は実らせている。芯土。
1410	7号	II	木器類	器具	箸	(残存9.4)	0.4	0.6	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は六角形を基本とする。下層は実らせている。芯土、サワラ。
1411	8号	II	木器類	器具	箸	(残存14.0)	0.6	0.6	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は七角形である。下層は実らせている。芯土。
1412	7号	II	木器類	器具	箸	(残存8.9)	0.5	(残存0.6)	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は六角形である。下層は実らせている。芯土。
1413	6号	II	木器類	器具	箸	(残存16.0)	0.6	0.7	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な台形であるが、むしろ三角形に近い。下層は実らせている。芯土。
1414	6号	II	木器類	器具	箸	(残存8.5)	0.5	(残存0.5)	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は六角形である。下層は実らせている。芯土、ヒノキ。
1415	6号	II	木器類	器具	箸	(残存9.6)	0.6	0.7	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は七角形を基本とする。芯土。
1416	8号	II	木器類	器具	箸	(残存9.5)	0.5	0.7	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は六角形である。下層は実らせている。芯土。
1417	7号	II	木器類	器具	箸	(残存6.4)	0.5	(残存0.4)	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な六角形である。下層は実らせている。芯土。
1418	7号	II	木器類	器具	箸	(残存7.5)	0.7	0.7	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は八角形である。下層は実らせている。芯土。
1419	5号	II	木器類	器具	箸	(残存8.7)	0.6	0.6	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は一定しないが、四角形を呈する部分が見られる。芯土、ヒノキ。
1420	7号	II	木器類	器具	箸	(残存7.1)	0.4	(残存0.5)	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な七角形である。下層は実らせている。芯土。
1421	7号	II	木器類	器具	箸	(残存6.0)	0.5	0.6	第19年度 採取100	土層を欠く。断面は不整な八角形である。下層は実らせている。芯土、ヒノキ。

第114表 遺物観察表 (62)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
1620	7シ	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存0.0)	0.50	10.71	第19号 図版100	上端を欠く。断面は扁平な五角形一種四角形である。下端は丸まっている。志土、ヒノキ。
1621	6サ	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存0.0)	0.40	10.71	第19号 図版101	上端を欠く。断面は不整な六角形である。志土、ヒノキ。
1624	6シ	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存1.4)	0.71	10.83	第19号 図版100	上端を欠く。断面は不整な六角形である。志土、ヒノキ。
1625	6サ	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存5.3)	0.30	10.43	第19号 図版101	残存するのは下端部のみである。下端は尖らせている。志土、ヒノキ。
1626	6ス	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存9.7)	0.50	10.83	第19号 図版101	下端を欠く。断面は四角形である。志土、ヒノキ。
1627	8サ	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存0.5)	0.40	10.71	第19号 図版101	下端を欠く。断面は四角形である。残存部分の彫装が裏にしては磨いてあるため、裏ではない可能性もある。志土、ヒノキ。
1628	6ス	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存0.5)	0.71	10.71	第19号 図版100	上端を欠く。断面は角張る部分もあるが、ほぼ四角形である。志土、ヒノキ。
1629	6ス	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存9.3)	0.50	10.43	第19号 図版101	下端を欠く。断面は不整な五角形であるが、加工が比較的丁寧なため形に近い。志土、ヒノキ。
1630	6ス	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存9.7)	0.40	10.71	第19号 図版100	下端を欠く。断面は四角形である。志土、ヒノキ。
1631	6ス	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存5.1)	0.40	10.50	第19号 図版101	上端を欠く。断面は不整な五角形である。志土、ヒノキ。
1632	5→	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存6.0)	0.50	10.71	第19号 図版101	上端を欠く。断面は四角形である。志土。
1633	7→	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存7.1)	0.40	(残存0.4)	第19号 図版101	上端を欠く。断面は整った六角形である。下端は尖らせている。志土。
1634	7→	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存7.0)	0.40	(残存0.5)	第19号 図版101	上端を欠く。断面は不整な五角形である。下端を尖らせてはいないが、厚みは残っている。志土。
1635	4→	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存6.9)	0.40	10.43	第19号 図版101	上端を欠く。断面は不整な六角形である。志土。
1636	7シ	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存7.0)	0.50	10.43	第19号 図版101	上端を欠く。断面は八角形である。志土、ヒノキ。
1637	4→	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存6.7)	0.30	10.43	第19号 図版101	上端を欠く。断面は不整な六角形であるが、むしろ四角形に近い。志土。
1638	7サ	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存6.2)	0.50	(残存0.7)	第19号 図版101	上端を欠く。断面は扁平な六角形である。下端は尖らせている。志土。
1639	7サ	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存4.0)	0.40	10.50	第19号 図版101	上端を欠く。断面は四角形である。下端は尖らせている。志土。
1640	7→	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存5.3)	0.50	(残存0.4)	第19号 図版101	上端を欠く。断面は四角形に近い部分が多い。下端は磨滅している可能性がある。志土。
1641	7→	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存4.5)	0.40	(残存0.4)	第19号 図版101	上端を欠く。残存部分では、断面は五角形である。下端は尖らせている。志土。
1642	7サ	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存5.1)	10.43	(残存0.7)	第19号 図版101	上端を欠く。断面は扁平な六角形である。下端は尖らせている。志土。
1643	7サ	Ⅱ	木器類	器具	箸	(残存5.2)	0.40	(残存0.4)	第19号 図版101	上端を欠く。断面は不整な六角形である。下端は尖らせている。志土、ヒノキ。
1644	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(23.5)	10.43	10.83	第19号 図版101	下端のみ炭化している。志土。
1645	5→	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(22.8)	10.71	11.25	第19号 図版101	下端のみ炭化している。上端は磨いた。志土。
1646	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(25.7)	10.71	11.31	第19号 図版101	大きく彎曲している。下端のみ炭化している。志土。
1647	7→	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(24.9)	10.43	11.60	第19号 図版101	下端のみ炭化している。志土。
1648	5→	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(21.7)	10.93	11.71	第19号 図版101	下半部のみほとんどが炭化している。志土。
1649	9シ	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(17.5)	10.71	11.90	第19号 図版101	下端のみ炭化している。志土。
1650	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(17.0)	10.71	11.13	第19号 図版101	下端のみ炭化している。志土。
1651	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(残存17.0)	10.71	11.30	第19号 図版101	上端を欠く。下端のみ炭化している。志土。
1652	9シ	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(22.4)	10.40	10.90	第19号 図版101	下端のみ炭化している。大きく彎曲している。志土。
1653	8サ	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(16.0)	11.40	11.40	第19号 図版101	下端のみ炭化している。大きくS字状に彎曲している。当該部でも最も大きな火付日本丸である。志土。
1654	6→	Ⅱ	木器類	器具	火付日本丸箸	(34.5)	11.40	(2.4)	第19号 図版101	下端のみ炭化している。火付先としては大形である。志土。

第115表 遺物観察表 (63)

遺物 番号	出土 層位	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (長さ)		
1635	5 ㄱ	Ⅲ	木器類	器具	火付け木 A類	(27.1)	(1.2)	(2.0)	第194図 図版-	字跡のみ残している。表面には加工痕が多数認められるが、これは字跡によるものかもしれない。志丸。
1636	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(27.3)	(1.1)	(2.5)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1637	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(28.7)	(0.9)	(1.1)	第194図 図版-	字跡のみ残している。土層はきれいに切断されている。志丸。
1638	7 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(26.8)	(1.1)	(1.7)	第194図 図版-	字跡のみ残している。土層はきれいに切断されている。志丸。
1639	6 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(19.7)	(1.0)	(0.9)	第194図 図版-	字跡のみ残している。土層は斜めにきれいに切断されている。志丸。
1640	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(14.5)	(0.7)	(0.8)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1641	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(5.1)	(0.4)	(0.6)	第194図 図版-	字跡のみ残している。本来はさらに長かった可能性がある。志丸。
1642	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(6.9)	(0.6)	(1.2)	第194図 図版-	土層・字跡が残している。志丸。
1643	6 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(19.4)	(1.0)	(2.4)	第194図 図版-	字跡のみ残している。土層はきれいに切断されている。志丸。
1644	3 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(15.8)	(0.9)	(1.2)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1645	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(17.6)	(0.9)	(1.3)	第194図 図版-	字跡のみ残しているが、右端の炭化範囲が広い。志丸。
1646	6 ㄱ	—	木器類	器具	火付け木 A類	(17.2)	(0.6)	(0.7)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1647	9 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(16.1)	(0.4)	(0.8)	第194図 図版-	字跡が炭化しているが、右端は炭化範囲が広い。志丸。
1648	7 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(18.2)	(0.7)	(1.0)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1649	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(14.3)	(0.8)	(1.7)	第194図 図版-	字跡のみ残しているが、左端の炭化範囲が広い。表面には加工痕が残り、平滑である。志丸。
1670	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(13.6)	(0.5)	(0.7)	第194図 図版-	字跡だけでなく、全体に炭化している。火付け木とみてもいい。定かでない。志丸。
1671	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(残存13.3)	(0.6)	(1.1)	第194図 図版-	土層を欠く。字跡のみ残している。志丸。
1672	5 ㄱ	Ⅲ	木器類	器具	火付け木 B類	(残存12.1)	(0.5)	(1.0)	第194図 図版-	土層を欠く。字跡のみ残している。志丸。
1673	6 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(14.5)	(0.7)	(1.1)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1674	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(11.6)	(0.4)	(1.1)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1675	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(10.5)	(0.7)	(0.9)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1676	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 A類	(10.5)	(0.4)	(0.9)	第194図 図版-	土層と字跡が炭化している。両側面、特に右側面に加工痕が認められる。志丸。
1677	8 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 B類	(53.0)	(1.1)	(1.2)	第194図 図版-	字跡のみ残している。土層は斜めに切断されている。炭層では1653に表いで大きな火付け木である。志丸。
1678	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 B類	(残存24.3)	(1.1)	(1.9)	第194図 図版-	土層を欠く。字跡のみ残している。志丸。
1679	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 B類	(21.3)	(1.0)	(1.6)	第194図 図版-	表面と左側面では下部のほとんどが炭化しているが、裏面と右側面では炭化範囲は狭い。志丸。
1680	7 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 B類	(21.9)	(1.1)	(1.8)	第194図 図版-	炭化範囲が広く、特に表面では下部から中央まで進んでいる。他の事例に比べ厚みがあることから、火付け木として作られたものではない可能性がある。志丸。
1681	16 ㄱ	KD?	木器類	器具	火付け木 B類	(18.8)	(0.9)	(0.9)	第194図 図版-	字跡のみ残している。断面はほぼ正方形であり、火付け木としては整った形状である。志丸。
1682	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 B類	(16.6)	(1.4)	(1.6)	第194図 図版-	字跡のみ残している。右側面は平滑だが、他の面には軽微な加工痕が見える。志丸。
1683	5 ㄱ	Ⅲ	木器類	器具	火付け木 B類	(16.2)	(1.1)	(1.2)	第194図 図版-	字跡のみ残している。断面は方形であり、火付け木としては整っている。志丸。
1684	6 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 B類	(14.2)	(1.1)	(2.3)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1685	5 ㄱ	Ⅲ	木器類	器具	火付け木 B類	(8.4)	(0.7)	(1.3)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1686	5 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 B類	(10.4)	(1.2)	(2.1)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1687	5 ㄱ	Ⅲ	木器類	器具	火付け木 B類	(残存11.8)	(0.7)	(1.0)	第194図 図版-	土層を欠く。字跡のみ残している。志丸。
1688	7 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 B類	(14.0)	(0.9)	(1.2)	第194図 図版-	字跡のみ残している。志丸。
1689	4 ㄱ	Ⅲ	木器類	器具	火付け木 B類	(11.1)	(1.0)	(1.1)	第194図 図版-	字跡のみ残している。土層はきれいに切断されている。志丸。
1690	7 ㄱ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 C類	(29.4)	(1.4)	(2.5)	第194図 図版-	字跡のみ残している。土層も先端を支えている。志丸。

第116表 遺物観察表 (64)

遺物番号	出土層位	単位	大分類	種別	細分	大きさ(mm)			実測図 寸法	観察所見など
						口徑 (長さ)	器高 (厚さ)	直径		
8001	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 燵類	(27.8)	0.39	(1.2)	第196図 図版1	下端のみ炭化している。芯部。
8002	7ヶ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 燵類	(17.4)	0.77	(2.2)	第196図 図版1	下端のみ炭化している。芯部。
8003	7ヶ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 燵類	(11.6)	0.77	(2.4)	第196図 図版1	下端のみ炭化している。上端は斜めに切断されている。芯部。
8094	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 燵類	(13.5)	0.40	(2.1)	第196図 図版1	下端のみ炭化している。上端はやや傾いて切断されている。芯部。
8095	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 燵類	(残存23.5)	0.50	(1.4)	第196図 図版1	上端を欠く。下端のみ炭化している。芯部。
8096	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	火付け木 燵類	(19.3)	0.25	(2.5)	第196図 図版1	下端のみ炭化している。芯部。
8097	9ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(36.6)	0.77	(3.4)	第196図 図版1	ほぼ完全品とみられる。上端の右端付近の表面・裏面に、方角で深く削り加工が認められる。下端は両側面を削り、先端をゆるやかながらみさせている。あるいは番巾が狭い。ヒノキ。
8098	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(36.0)	0.40	(1.4)	第196図 図版1	断面は上端では不整な形状であるが、下端では三角形である。下端は薄く仕上げられている。あるいは木使用の火付け木の芯部。サワラ。
8099	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(残存26.1)	0.77	(2.4)	第196図 図版102	上端を欠く。下端もわずかに欠失しているものとみられる。表面・裏面・左右側面に加工が認められる。榎目、ヒノキ。
1700	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(22.3)	0.40	(3.1)	第196図 図版102	上端・下端の一部を欠く。形状は揃っており、下端を尖らせている。上端は削れている可能性があり、番巾とも考えられる。榎目、ヒノキ。
1701	18ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(残存25.4)	0.40	(1.6)	第196図 図版102	上端を欠く。下端も削らている。表面には細かな加工が認められる。榎目、ヒノキ。
1702	8ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(残存13.4)	0.50	(2.4)	第196図 図版1	上端を欠く。下端は尖らせている。大きさ・形状から、番巾の下端部分の可能性が高いと推定される。榎目、サワラ。
1703	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(13.2)	0.40	(1.2)	第196図 図版1	中央付近で折れ曲がっている。表面が削れている。番巾はいはほと木器品が。榎目、ヒノキ。
1704	21ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(残存15.4)	0.40	(1.2)	第196図 図版1	下端を欠く。上端は両側面を中央に向かって削り、先端も尖らせている。断面は矩形である。大きさ・形状から推定される。表面は不整な形状を呈せ、芯部は削られている。あるいは木使用の火付け木の芯部。サワラ。
1705	5ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(残存15.1)	0.77	(1.2)	第196図 図版1	上端を欠く。下端を表面・右側面・裏面から斜めに切り落とし、先端を尖らせている。上端左右側面にも同様の加工が認められる。芯部、ヒノキ。
1706	6ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(15.5)	0.77	(6.6)	第196図 図版1	上端は欠失している可能性がある。断面は長方形である。上端は尖らせている。響の可能性もある。芯部、サワラ。
1707	16ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(残存6.8)	0.20	(6.9)	第196図 図版1	上端を欠く。下端は尖らせている。番巾が。榎目、ヒノキ。
1708	17ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(残存7.4)	0.77	(6.8)	第196図 図版1	上端を欠く。下端は深く加工し、尖らせている。芯部、ヒノキ。
1709	8ヶ	Ⅱ	木器類	器具	申状木製品	(残存27.6)	(1.0)	(6.9)	第196図 図版1	下端を欠くが欠失部分はごくわずかとみられる。均等に削られている。表面は斜めに削り、先端も削られているように見られる。断面は不整な形状を呈せ、芯部は削られている。あるいは木使用の火付け木の芯部。サワラ。
1710	20ヶ	Ⅱ	木器類	器具	へら状木製品	(残存35.0)	(1.4)	(残存9.8)	第196図 図版102	下端を欠くが、欠失部分はほぼ大きくはないと推定される。表面は下端部を斜めに削り、先端は深く削るよう仕上げられている。断面は矩形である。大きさ・形状から推定される。表面は不整な形状を呈せ、芯部は削られている。あるいは木使用の火付け木の芯部。サワラ。
1711	6ヶ	Ⅱ	木器類	器具	へら状木製品	(残存30.1)	0.50	(3.3)	第196図 図版102	上端を欠く。表面は丁寧な加工が施されており、左右側面は尖り尖り削られている。断面は矩形である。響の可能性が高いと推定される。榎目、ヒノキ。
1712	8ヶ	Ⅱ	木器類	器具	へら状木製品	(残存14.6)	0.77	(残存2.0)	第196図 図版1	下端を欠く。残存部分は精巧で丁寧な作りである。へらのような形状と推定される。表面は削られている。あるいは木使用の火付け木の芯部。サワラ。
1713	12ヶ程度 破断品	Ⅱ	木器類	器具	へら状木製品	(11.0)	0.40	(3.0)	第196図 図版102	ほぼ完全品である。しゃもじのような形状であるが、小型すぎるため、掘り子以外の用途に使用されたとみられる。あるいは木器品の高さ、1314・1314・1713は一致しない。榎目、ヒノキ。
1714	9ヶ	Ⅱ	木器類	器具	板状木製品	(残存19.8)	(1.4)	(2.7)	第197図 図版1	下端を欠く。断面は長方形であるが、中央部では表面から右側面にかけて斜めに削り施している。榎目。

第117表 遺物観察表 (65)

遺物 番号	出土 地点	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
1715	8 中	B	木器類	器具	板状木製品	(19.25)	(0.30)	(残存2.4)	第197図 図版103	左側面を欠くとみられる。全体形状の復元は困難であり、残存部分のみより、形状から形状の可能性があると考えたものの定かではない。上端部・右側部・下端面は平滑である。表面は白色塗料を二次加工を施したものと見える(8中)が、板目、アスタリ風。
1716	14 F	KDF	木器類	器具	板状木製品	(残存19.3)	(1.0)	(9.0)	第197図 図版103	下端を欠く。上端面の切り離し方に関しては、縁材と見えるべきかもしれない。板目、ヒノキ。
1717	5 中	B	木器類	器具	板状木製品	(19.0)	(0.4)	(4.2)	第197図 図版103	平直形に整った短冊形である。動物容器的板状か、板目、アスタリ風。
1718	5 中	B	木器類	器具	板状木製品	(19.4)	(0.7)	(6.9)	第197図 図版103	平直形に整った短冊形である。上端・下端の切り離し方に関しては、板目、ヒノキ。
1719	6 中	B	木器類	器具	板状木製品	(18.8)	(0.4)	(6.8)	第197図 図版103	上端の一部を欠くが、ほぼ空型品である。彎曲しているが、平直形に比較的整った短冊形である。動物容器的板状か、板目。
1720	6 中	B	木器類	器具	板状木製品	(20.8)	(2.0)	(4.1)	第197図 図版103	表面は磨き合っており、本来の形状をどめていない。板目、ヒノキ。
1721	6 中	B	木器類	器具	板状木製品	(残存19.4)	(2.9)	(3.9)	第197図 図版103	下端を欠く。左側面も下平を欠く。断面は空型である。あるいは紐材か。板目。
1722	6 中	B	木器類	器具	板状木製品	(20.4)	(0.4)	(4.0)	第197図 図版103	2つに割れているが、全体を覆うことができる。平直形に整った短冊形である。動物容器的板状か、板目、ヒノキ。
1723	6 中	B	木器類	器具	板状木製品	(21.8)	(0.3)	(4.7)	第197図 図版103	動物容器的板状などの可能性があるが、定かではない。板目、ヒノキ。
1724	8 中	B	木器類	器具	板状木製品	(19.5)	(0.4)	(4.8)	第197図 図版103	右側面の端を欠くが、本表に整った短冊形の形状とみられる。下端には切り離しの跡についてとみられる形状が認められる。板目、ヒノキ。
1725	5 中	B	木器類	器具	板状木製品	(残存15.8)	(0.2)	(5.6)	第197図 図版103	下端を欠くが、平直形に整った短冊形とみられる。動物容器的板状か、板目。
1726	8 中	B	木器類	器具	板状木製品	(15.0)	(0.4)	(4.5)	第197図 図版103	表面に角材によるとみられる線か溝状痕が認められる。板目、ヒノキ。
1727	8 中	B	木器類	器具	板状木製品	(16.7)	(1.7)	(4.0)	第197図 図版103	ほぼ空型品とみられる。下端のみ縁の部分より帯状の厚さのままとしている。板目、ヒノキ。
1728	5 中	B	木器類	器具	板状木製品	(17.4)	(0.4)	(4.1)	第197図 図版103	空型品である。平直形に整った短冊形である。動物容器的板状か、板目。
1729	5 中	B	木器類	器具	板状木製品	(残存17.7)	(0.8)	(4.0)	第197図 図版103	下端を欠く。両側面に切り抜き加工を施している。板目、ヒノキ。
1730	8 中	B	木器類	器具	板状木製品	(残存13.2)	(0.5)	(残存5.6)	第197図 図版103	下端を欠く。右側面も本来の形状ではない可能性が高い。表面に線か溝状痕が多数認められる。板目、ヒノキ。
1731	16 中	K7	木器類	器具	板状木製品	(残存26.2)	(0.7)	(5.1)	第198図 図版103	下端を欠くものの形状が整った板である。貫通孔は表面が認められるが、形状がきれいなことから、後述の器とのつながりも含まれる可能性がある。板目、ヒノキ。
1732	6 中	B	木器類	器具	板状木製品	(44.6)	(1.7)	(残存5.8)	第198図 図版103	本来の板面を欠く可能性がある。下平は、表面は中絶縁材は充分あり、厚さではないものの、残存部はほぼ平直である。板目、ヒノキ。
1733	12 F	YH	木器類	器具	板状木製品	(23.4)	(0.9)	(4.4)	第198図 図版103	下端付近の裏面に部分的に剥離している。上端も欠失している可能性がある。断面は半整な三角形である。板目、アスタリ。
1734	21 F	K7	木器類	器具	板状木製品	(23.9)	(0.9)	(残存9.4)	第198図 図版103	右端を欠く。残存部分からは、本来は貫通孔であった可能性が考えられる。明確でないものの、残存部には2箇所、貫通孔の痕跡が認められる。溝板目、ヒノキ。
1735	26 F	KDF	木器類	器具	板状木製品	(残存9.7)	(0.4)	(2.7)	第198図 図版103	下端を欠く。溝板の両側面に切り抜きを施している。板目、ヒノキの可能性があると見えるが、定かではない。板目、ヒノキ風。
1736	7 中	B	木器類	器具	板状木製品	(残存9.1)	(0.3)	(2.5)	第198図 図版103	下端を欠く。上端付近の両側面に切り込みが2つつ認められる。板目、ヒノキ。
1737	15 中	Y7	木器類	器具	板状木製品	(残存19.8)	(1.6)	(2.9)	第198図 図版103	下端を欠く。あるいは縁材と見えるべきか。板目、アラ。
1738	3 中	B	木器類	器具	板状木製品	(25.7)	(1.4)	(2.3)	第198図 図版103	ほぼ空型品とみられる。表面に貫通しない長方形の穿通孔(4.5x0.8mm)に4箇所認められる。また横方向の穿通する浅い縦溝が多数認められる。これはほぼ垂直に、ほぼ1/2幅の長さとなり行間にまたがられることから、定規以降の遺物と見えるべきである。溝板目。

第118表 遺物観察表 (66)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 器具	観察見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
1739	12ソ	Ⅷ	木器類	器具	板状木製品	(25.3)	0.39	(2.1)	第199図 図版1	上端は断面に対して斜めに切削している。下端付近の表面の磨り方は異く、あるいは意図的破壊かもしれない。破目。
1740	5中	Ⅷ	木器類	器具	板状木製品	(19.9)	0.77	(4.0)	第199図 図版1	大きき・形状から瓦形である可能性があるが、残存状態が良くないため不明である。破目、ヒノキ。
1741	5シ	Ⅷ	木器類	器具	板状木製品	(残存20.8)	0.40	(3.6)	第199図 図版1	下端を欠く。上端面と左右側面には、比較的丁寧な加工を施している。あるいは黒曜石材か。破目、ヒノキ。
1742	16ソ	ⅧF	木器類	器具	板状木製品	(残存24.2)	0.40	(7.8)	第199図 図版1	下端を欠くほか、全体に残存状態は良好ではない。上端付近に貫通する小孔が立派な縁のられる。あるいは上縁の磨りか、油圧目、ヒノキ。
1743	7ス	Ⅷ	木器類	器具	板状木製品	(残存24.1)	0.39	(残存6.8)	第199図 図版1	本来は楕円形であったとみられ、器底の凹凸などの可能性がある。右側面の形状は、二次加工によるものである可能性が大きい。破目。
1744	5ウ	Ⅷ	木器類	器具	板状木製品	(残存23.7)	0.33	(5.6)	第199図 図版1	上端を欠く。右側面・下端を欠く。下端は表面・裏面から斜めに削り、先端を尖らせている。左右側面は平直である。下縁の断面は、多少斜めにせざるべからず、行子身の部分である可能性も考えられる。破目、ヒノキ。
1745	6ウ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(残存22.9)	0.40	(2.6)	第199図 図版1	上端を欠く。下端は表面を斜めに削って先端を尖らせている。断面には前後の加工を施したとみられるが、大部分欠失している。欠失部分と頂上部分の構造を調査が残っている。断面は円形である。芯材。
1746	17ウ	ⅧT	木器類	器具	棒状木製品	(残存23.6)	0.40	(2.9)	第199図 図版103	下端を欠く。断面は円形ないし楕円形である。器具の構造などの可能性が考えられる。芯材、サツマシ。
1747	8ウ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(残存23.4)	0.23	(3.7)	第199図 図版1	上端を欠く。裏面と左側面も大部分欠失している。表面と右側面は比較的丁寧に磨きをかけている。芯材。
1748	6ウ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(24.6)	1.20	(2.2)	第199図 図版1	ほぼ完成品とみられる。左側面は丸みを帯びている。芯材、ヒノキ。
1749	14ウ	ⅧT	木器類	器具	棒状木製品	(残存29.5)	0.40	(2.0)	第199図 図版1	上端を欠く。上端や下の全面を強く削り込み、前後に削りこんでいる。断面は半円ないし六角形である。下端を斜めに削り、尖らせている。芯材、ヒノキ。
1750	18ウ	ⅧT	木器類	器具	棒状木製品	(残存11.6)	0.20	(1.8)	第199図 図版1	上端を欠く。上端面には細かな加工を施している。断面は楕円形である。芯材、サツマシ。
1751	17ウ	ⅧT	木器類	器具	棒状木製品	(残存4.0)	0.40	(2.6)	第199図 図版1	上端・下端を欠く。断面は円形であるが、残すそのまま利用したものではない。芯材、サツマシ。
1752	6シ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(残存48.8)	1.40	(2.3)	第200図 図版1	上端・下端を欠く。断面は方形であるが、左半では丸みを帯びている。芯材。
1753	6ウ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(残存30.0)	1.40	(2.9)	第200図 図版1	上端・下端を欠く。全体に磨きかけがよい。本来の断面形状は不明とみられる。芯材、サツマシ。
1754	32ソ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(残存36.4)	0.40	(3.4)	第200図 図版1	上端・下端を欠く。本来はもっと長い棒状であったとみられる。横断面は半円ないし六角形であり、磨っていないため、端材と芯材をばまわしれない。芯材。
1755	不明	—	木器類	器具	棒状木製品	(残存25.8)	0.40	(残存4.2)	第200図 図版1	上端を欠く。表面から裏側面にかけては丸みを帯びるが、裏面は平らである。芯材、ヒノキ。
1756	8ウ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(22.8)	1.40	(1.9)	第200図 図版1	上端付近に加工痕が認められる。下端の形状が整っており、これは正常な加工であると思われる。上端の形状を削り、木製品ないし端材と異なることも可能である。芯材、ヒノキ。
1757	6ウ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(23.3)	0.40	(3.6)	第200図 図版1	上端の左端を1方向から削り落としている。それ以外の部分の断面は長方形である。芯材。
1758	16ウ	ⅧT	木器類	器具	棒状木製品	(残存22.0)	0.40	(2.2)	第200図 図版1	上端を欠く。裏面は平らである。横断面は半円ないし六角形とみられる。あるいは器具類の柄か。芯材、ヒノキ。
1759	13ウ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(残存16.7)	0.40	(1.9)	第200図 図版1	上端・下端を欠く。断面はほぼ楕円形である。裏面は凹凸している。芯材、サツマシ。
1760	7シ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(17.1)	0.30	(2.4)	第200図 図版1	あるいは黒曜石材か。破目。
1761	16ウ	ⅧT	木器類	器具	棒状木製品	(残存20.8)	0.23	(2.2)	第200図 図版1	上端を欠く。断面は円形である。断面が部分的に残っている。下端を削り落としているが、上端の形状を削り落としているわけではない。あるいは黒曜石材か。芯材、サツマシ。
1762	5ウ	Ⅷ	木器類	器具	棒状木製品	(残存17.8)	1.20	0.80	第200図 図版1	上端を欠く。下半を表面から左側面にかけて、丁寧に斜めに削り落とす。分厚い部分の左右側に仕上げられている。表面・裏面・側面には比較的丁寧に磨り加った痕跡が認められる。裏面は上端から丸みを帯びる痕跡も認められる。棒材などの一部端材の可能性もある。芯材、サツマシ・黒曜石材も可能。





第12表 遺物観察表 (69)

遺物 番号	出土 地点	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	直径 (高さ)		
1796	21P	KT	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(残存76.6)	(3.0)	(20.4)	第206図 図版10	土曜を欠くほか、全体は残存状態が良好でない。表面の大部分が剥がれ、裏面の中央と下縁部は残存し残っている。土曜部は本底、半円状のようである。断面に一方の切り欠き加工を施している。あるいは片側が折れ、破目、キズ等。
1799	4中	—	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(残存58.7)	(1.4)	(12.2)	第206図 図版108	土曜の右端を欠く。方形貫通孔が3箇所認められる。左右両端に1箇所ずつ切り欠き加工を施している。破目、アスナリキズ。
1800	8シ	III	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(21.2)	(1.4)	(13.0)	第206図 図版110	左右両面に一方の切り欠き加工が認められる。上下両面に縁の付いた溝も切り欠き加工が認められる。破目、キズ等。
1801	8シ	III	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(46.6)	(2.2)	(残存6.8)	第206図 図版10	右側面は大部分欠失していると思われる。左側面に切り欠き加工を施している。表面に交差する2本の溝が認められる。破目、キズ等。
1802	20P	KT	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(48.5)	(1.9)	(15.9)	第206図 図版108	ほぼ完整品とみられる。上縁部はやや削り加工が認められる。右右縁部は一方の切り欠き加工を施している。上縁付近の中央に貫通する方形孔が1箇所認められる。破目、キズ等。
1803	12P	III	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(51.2)	(1.7)	(15.6)	第206図 図版108	下縁中央の部は、後者の欠失とみられる。上縁は断面に対して右側の切り欠き加工を施している。断面に一方の切り欠き加工を施している。破目、キズ等。
1804	20P	KT	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(63.4)	(3.1)	(8.1)	第207図 図版110	断面は本型半円形西面である。上縁・下縁の切欠は縁によるものとみられる。破目、キズ等。
1805	5シ	III	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(残存72.4)	(3.1)	(11.0)	第207図 図版107	土曜を欠く。断面は長方形である。左側面に削り切り欠き加工を施している。破目、キズ等。
1806	21P	KT	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(残存76.5)	(2.9)	(16.3)	第207図 図版109	上縁右半と下縁右半を欠くが、欠失部分はほぼ欠きくはないとみられる。下縁は断面に対して斜めに切り欠き加工している。右側面は断面に対して垂直に削り取られている。土曜部は長方形ではない。表面に細かい溝状部がみられるが、古い房物か否か定かでない。左側面に削り切り欠き加工を施している。裏面は断面に削り取られている。破目、アスナリキズ等。
1807	7ス	III	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(61.6)	(1.5)	(16.3)	第207図 図版110	右側面は大部分欠失していると思われる。上縁部に1箇所、右側面に2箇所、左側面に1箇所切り欠き加工を施している。破目、キズ等。
1808	17P	YT	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(残存53.6)	(1.5)	(8.6)	第207図 図版108	上縁・下縁を欠く。下縁は斜削し、凹削している。下縁を除く右側面を半を削って幅を狭めている。断面は本型半円形であるが、やや彎曲している。破目、キズ等。
1809	6シ	III	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(20.3)	(0.5)	(8.4)	第207図 図版110	左端の下半を欠く。整った方形の貫通孔が1箇所認められる。破目、キズ等。
1810	7ス	III	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(残存34.5)	(1.8)	(18.7)	第207図 図版108	下縁の大部分を欠くが、本底は残存部分のように表面を磨いて厚みを減じて整形されたと思われる。右側に1箇所、下縁に1箇所、合わせると非面に貫通する円孔が認められる。右側面に2箇所、左側面に1箇所、切り欠き加工を施す半ば断面には加工が多数認められる。破目、キズ等。
1811	7ス	III	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(35.4)	(1.2)	(残存6.2)	第207図 図版108	右端を欠く。左側面に切り欠き加工を施している。下縁は幅と厚さを狭めている。破目、キズ等。
1812	20P	KT	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(20.4)	(1.8)	(8.8)	第207図 図版108	土曜は無く、断面は上部に切り欠き加工が認められる。破目、キズ等。
1813	7ス	II	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(残存41.4)	(3.2)	(11.6)	第207図 図版108	下縁を欠くほか、全体に残存状態が良好ではない。破目、キズ等。
1814	18P	KT	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(27.1)	(1.3)	(8.1)	第207図 図版108	下縁は溝のような工で磨き削り取られたものようである。これによって、上縁部には斜削しと下縁切欠の痕跡(断面欠失)が認められる。破目、キズ等。
1815	17P	KT	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(残存169.7)	(4.6)	(8.7)	第208図 図版110	両端を欠く。丁型半割材によるものではなく、左側面が表面に対して鋭角で、断面が長方形になっていない。残存部上縁では、表面を部分的に削り取っている。下縁でも同様の加工を施している可能性があるが詳細は不明である。現用部位不明の再材。歪れ、キズ等。
1816	17P	KT	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(残存71.7)	(5.2)	(5.7)	第208図 図版110	土曜を欠く。裏面は残存状態が良好ではないため、本底の断面率は不明である。表面中央部に切り欠き加工が認められる。ただし裏面まで貫通していないため、作業途中で放棄されたものである可能性がある。歪れ、キズ等。
1817	5シ	II	木蓋類	蓋材	埴輪部材 厚板	(49.5)	(2.8)	(18.2)	第208図 図版108	右上隅を欠く。全体に磨きが著しい。右右縁部に一方の切り欠き加工を施しており、その間に浅い溝が認められる。破目、キズ等。

第122表 遺物観察表 (70)

遺物番号	出土層位	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 寸法	実測図 写真	観察結果など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)			
1818	6ㇰ	Ⅱ	木器類	部材	埴輪部材	(45.0)	0.20	(3.5)	第206図 図版10		下腹が本来の形状とどめていない可能性がある。方形の器蓋孔が1箇所認められる。縦目、ヒノケ。
1819	6シ	Ⅱ	木器類	部材	埴輪部材 埴輪	(残存46.0)	0.13	(3.6)	第206図 図版109		下腹を欠く、残存部分が良くない。本来の断面形状は長方形であったとみられる。裏面と裏面を貫く筒状の長方形の器蓋孔が認められる。下腹は右側縁の縁直下から下腹縁まで高く、縦目、アヌナノ風。
1820	10フ	—	木器類	部材	埴輪部材	(残存55.8)	0.40	(3.7)	第206図 図版110		下腹を欠く。上腹も右側面を欠く。断面は不整な長方形である。縦材か。芯太。アヌナノ。
1821	8ㇰ	Ⅱ	木器類	部材	埴輪部材	(34.0)	0.40	(6.1)	第206図 図版11		全体に煎食が著しい。上腹と下腹に軒状の加工を施しているところから細目とみられるが、不完全なため、実測図の可能性もある。縦目、アヌナノ。
1822	18ㇰ	—	木器類	部材	埴輪部材	(26.6)	0.6	(4.5)	第206図 図版11		裏面は本来の形状とどめていないとみられる。裏面上腹付近の右端に縦目加工が認められる。芯太。アヌナノ。
1823	5ㇰ	Ⅱ	木器類	部材	埴輪部材 埴輪	(19.0)	0.20	(7.8)	第206図 図版109		ほぼ空形品であるが、裏面と左側面は煎食が著しい。右側面は中央部を上腹から下腹まで狭く、縁を付いている。裏の腹には上腹より上腹より縁がゆるい加工が認められる。裏面には煎食・煎食の縁に木理が認められる。これは加工の跡でなく、加工の可能性が高い。裏面と右側面は比較的平直であるが、上腹・下腹の切り離し方向が不明い。縦目、アヌナノ風。
1824	5シ	Ⅱ	木器類	部材	土木部材 杖	(残存71.0)	6.40	(7.4)	第206図 図版11		下腹を欠く。断面は円形である。下腹を2方向から切り落とし、丸めている。芯太。
1825	12フ	Ⅱ	木器類	部材	土木部材 杖	(62.0)	1.10	(3.7)	第206図 図版11		ほぼ空形品である。断面は、上半では表面の丸い円形であるが、下半では裏面を裏面に削削しているため方形となっている。下腹は上腹縁を斜めに削削して丸めている。丸太。丸太はつみれている。芯太。
1826	13ㇰ	Ⅱ	木器類	部材	土木部材 杖	(残存63.1)	0.20	(3.5)	第206図 図版11		上腹を欠く。残存部上腹が3箇にわたり残している。断面は不整な形である。下腹は中央部から縁に削削しているが、丸太は丸めてはいない。芯太。
1827	6ㇰ	Ⅱ	木器類	部材	土木部材 杖	(残存50.0)	0.40	(4.1)	第206図 図版11		上腹を欠く。下腹は3方向から削削り、丸太を丸めている。穴太部分と加工部分以外は、煎食が認められる。断面は円形である。芯太。
1828	18フ	Ⅱ	木器類	部材	土木部材 杖	(残存32.4)	0.10	(3.4)	第206図 図版11		上腹を欠く。下腹は削削している。裏面はそれ以外の部分も削削している。下腹は3方向から削削り、丸太を丸めている。丸太は丸めていない。芯太。
1829	20フ	Ⅱ	木器類	部材	土木部材 杖	(14.3)	0.20	(3.1)	第206図 図版11		ほぼ空形品である。下腹は2方向から削削り、丸太を丸めている。上腹は斜めに削削されている。芯太。
1830	6ㇰ	Ⅱ	木器類	部材	土木部材 杖	(残存27.2)	(残存2.9)	(残存4.0)	第206図 図版11		上腹を欠く。裏面は残存部分が良好でなかった。加工痕が強く残っている。裏面は木理が長方形で削削り、丸太である。下腹を全面から削削加工し、縦材に削削り出している。芯太。
1831	9シ	Ⅱ	木器類	部材	土木部材 杖	(残存31.0)	(3.6)	(3.3)	第206図 図版11		上腹を欠く。煎食が残る穴太の下腹を4方向から削削り、丸太を丸めている。アヌナノのような加工による丸太が認められる。芯太。
1832	6ㇰ	Ⅱ	木器類	部材	土木部材 杖	(24.7)	(4.0)	(4.3)	第206図 図版11		下腹は2方向から削削り、丸太を丸めている。断面は円形である。上半に削削り角縁が多数認められる。芯太。
1833	16フ	Ⅱ	木器類	部材	土木部材 杖	(残存41.3)	(3.2)	(3.5)	第206図 図版11		上腹を欠く。下腹は縁が斜めの削削り、丸太を丸めている。自然欠の断面で丸太で削削りした跡が認められる。また煎食が斜めに削削っている。芯太。
1834	7ㇰ	Ⅱ	木器類	部材	器蓋部材 器蓋	(残存22.4)	(1.0)	(3.4)	第206図 図版112		煎食の上れた形状で、加工も丁寧である。ほぼ空形を覆うことができた。中央に一定寸法の器蓋が認められることから、器の底面を覆う形で削削りされたことが推定される。メツの円孔は1箇所とあり、中に木理がはまっている。全体が煎食に覆われていたとみられるが、器蓋と木理の残りのみは残っている。煎食具部材（アヌナノ）であろう。縦目、ヒノケ。
1835	6シ	Ⅱ	木器類	部材	器蓋部材 器蓋	(5.6)	(1.7)	(1.7)	第206図 図版112		空形品とみられる。断面は四角断面に丸太を丸めている。断面は、器蓋は削削り落とした方形、縁は円形である。縁部下腹は斜めに削削りされている。加工が丁寧であることから、縁部などの可能性が考えられる。芯太。アヌナノ。
1836	7ㇰ	Ⅱ	木器類	部材	器蓋部材 器蓋	(残存5.1)	(残存1.3)	(2.4)	第206図 図版112		下腹を欠く。裏面は煎食を削削っていない可能性がある。縁部の断面と、その下に削削り・輪かきがある。断面は四角を削削り落とした形状の方形である。加工が丁寧であることから、縁部などの可能性が考えられる。芯太。アヌナノ。
1837	7ㇰ	Ⅱ	木器類	部材	器蓋部材 器蓋	(残存6.9)	(1.2)	(2.0)	第206図 図版112		上腹を欠く。丁寧加工を施している。残存部上腹には円孔を穿っているようである。器蓋の中央のうちの1本であろう。縦目、ヒノケ。

第123表 遺物観察表(71)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
1838	6号	II	木器類	部材	器具部材 紡織具等	(残存16.7)	(1.4)	(1.4)	第110図 図説112	下層を欠く。下層は欠込み状に段差を設けている。また表面に交差する線状の凹み(彫り)があり、彫り角が認められる。表面は両面を丁寧に削り、均等な3面を作っている。志丸、アスタリ属。
1839	11A	III	木器類	部材	器具部材 紡織具等	(残存22.3)	(0.4)	(1.4)	第110図 図説113	下層を欠く。中央に下層に磨面が1面が貫通している。左端付近に認められる切り込みも、同様の加工の機構の可能性がある。磨面の傾斜が、緩目。ヒメキ。
1840	8号	II	木器類	部材	器具部材 有孔挿板	(15.40)	(0.4)	(2.0)	第110図 図説113	貫通する小さな円孔が4箇所認められる。うち1箇所には良好の磨面が認められている。平面部は長方形。穴は方形の溝であり、断面は長方形である。小型の紡織器具が内側の一部か、板目。アスタリ属。
1841	7号	II	木器類	部材	器具部材 有孔挿板	(残存9.3)	(0.4)	(残存5.1)	第110図 図説114	下層を欠く。右端に欠失している可能性が高い。中央にごく小さな貫通孔が1箇所認められる。緩目。ヒメキ。
1842	8号	II	木器類	部材	器具部材 有孔挿板	(残存11.9)	(0.4)	(残存5.9)	第110図 図説114	本来の平面部は円形であったとみられるが、下層は人工的に切断されている可能性がある。二次加工を伴っている可能性もある。ごく小さな円形貫通孔が2箇所認められる。緩目。ヒメキ。
1843	6号	II	木器類	部材	器具部材	(20.2)	(1.7)	(10.8)	第110図 図説114	右端・左端の端平を欠く。右端の上半を一段高し削り出している。下層には中央部の凹み(彫り)が見られる。仕上げは使用時の二次加工からみられない。緩目。板目。ヒメキ。
1844	5号	II	木器類	部材	器具部材	(残存14.9)	(0.4)	(2.7)	第110図 図説115	下層を欠く。上層付近に貫通する小円孔が1箇所認められる。緩目。ヒメキ。
1845	7号	II	木器類	部材	器具部材	(残存16.4)	(0.4)	(5.7)	第110図 図説115	下層を欠く。貫通する小円孔が1箇所認められる。緩目。ヒメキ。
1846	6号	II	木器類	部材	器具部材	(残存15.4)	(1.4)	(6.3)	第110図 図説115	下層を欠く。右端付近に貫通しない長方形の孔が1箇所認められる。緩目。
1847	10A	III	木器類	部材	器具部材	(29.3)	(3.4)	(7.4)	第110図 図説115	断面下層の一部を欠く。中央の上下方に貫通孔あり。上層付近の表面に左右の側面に2本の溝を伴う矩形凹み(欠込み)が認められる。断面中央に大きな凹溝を認め、上層まで貫通している。表面に右側面に付着したとみられる黒い痕跡が認められる。あるいは右側の部材か。緩目。ヒメキ。
1848	3号	II	木器類	部材	器具部材	(44.9)	(1.7)	(1.9)	第110図 図説115	削れているものの、ほぼ矩形である。中央部に欠け、下層・下層には凹み(彫り)が認められる。断面は八角形である。表面が真直しいし右側が真直。志丸、アスタリ属。
1849	14号	VI	木器類	部材	器具部材	(残存45.9)	(1.5)	(2.6)	第110図 図説115	先端を欠くが、上層は欠込み状に段差を設けている。下層の本来の形状は不明である。断面は比較的細った長方形である。あるいは左側部材か。緩目。
1850	7号	II	木器類	部材	器具部材	(8.6)	(2.0)	(4.7)	第110図 図説115	ほぼ矩形とみられるが、右側面に欠失しているかもしれない。上層を軸状に削り出している。断面は半円形と推定される。緩目。志丸、アスタリ属。
1851	11A	III	木器類	部材	器具部材	(残存14.8)	(0.4)	(4.2)	第110図 図説115	下層を欠く。上層を半ば斜めに削り切断されている。右側面に切り欠き加工を施している。緩目。ヒメキ。
1852	7号	II	木器類	部材	器具部材	(8.0)	(2.4)	(4.3)	第110図 図説115	表面の下層付近に横方向の溝が別れているが、これは削りによるものとみられる。表面は面に段差を設けている。緩目。ヒメキ。
1853	7号	II	木器類	部材	器具部材	(10.1)	(1.4)	(4.5)	第110図 図説115	左側面に欠失している可能性がある。貫通する円孔が1箇所認められる。緩目。ヒメキ。
1854	7号	II	木器類	部材	器具部材	(14.2)	(1.4)	(3.2)	第110図 図説115	表面の上層・下層が凹凸しているが、形状からみれば穴ではないと推定される。上層部に1箇所認められる。断面には付着したとみられる黒い痕跡が認められる。上層付近の両側面にくぼけが認められる。緩目。ヒメキ。
1855	5号	III	木器類	部材	器具部材	(残存17.1)	(0.7)	(残存2.4)	第110図 図説115	残存部分が少ないため本来の形状は不明であるが、刃は磨面の痕跡だった可能性がある。左端にみられる半円形の痕跡は使用時の二次加工か、貫通する溝が1箇所認められる。表面に黒い凹溝が多数認められる。緩目。ヒメキ。
1856	6号	II	木器類	部材	器具部材	(12.9)	(2.4)	(3.2)	第110図 図説115	ほぼ矩形とみられるが、下層は欠失している可能性がある。中央付近に2つの円孔がつながった形状の貫通孔が認められる。下層面を削き、各面の整形は比較的丁寧である。緩目。
1857	5号	II	木器類	部材	器具部材	(残存12.3)	(0.4)	(2.7)	第110図 図説115	下層を欠く。貫通する円孔が2箇所認められる。緩目。ヒメキ。
1858	7号	II	木器類	部材	器具部材	(残存13.4)	(1.5)	(2.4)	第110図 図説116	下層を軸状に削り出しているが、先端を欠く。上層付近に貫通する小円孔を1箇所設けている。残存部にも同様の貫通孔の痕跡が認められる。志丸、アスタリ属。

第124表 遺物観察表 (72)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 器具	観察時見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
1830	7-3	Ⅱ	木器類	部材	器具部材	(13.2)	(2.3)	(3.2)	第11号 図版110	上面と下面の残存状態がよくないが、全体は丁寧な加工が施され、平直に仕上げている。右側面の中央部に浅溝を設けている。上面と下面はゆるやかな曲面である。あるいは浅溝の部材か。志忠、ヒノキ。
1860	7-シ	Ⅱ	木器類	部材	器具部材	(12.9)	(3.2)	(4.4)	第11号 図版116	上面の大部分を欠く。上面の一部は基部をどめているが判断しがた。あるいはもともとは上向きに加工されていた。上面を木軸に加工している。断面は不整な隅丸方形である。志忠、ヒノキ。
1861	20-フ	ⅢF	木器類	部材	器具部材	(26.4)	(6.4)	(4.2)	第11号 図版111	下面を欠く。全体に磨きが美しい。上面付近に貫通孔が認められるが、後世の破壊である可能性もある。榎目、ヒノキ。
1862	6-ケ	Ⅱ	木器類	部材	器具部材	(残存16.8)	(1.4)	(1.4)	第11号 図版111	上面・下面を欠く。断面は円形である。下面は軸状に加工された面とみられる。あるいは木製品が脱色するべきか。志忠、ヒノキ。
1863	5-シ	Ⅱ	木器類	部材	器具部材	(21.6)	(1.2)	(4.8)	第11号 図版115	右側面を欠く。ほぼ全形を復元することができる。貫通する小孔は2つ認められ、そのうちの1つには木封が残っていた。さらに反対の方向にも小孔が認められる。そのうちの1つには浅溝を施している。以上は形勢のとれた配置をなしている。榎目、ヒノキ。
1864	15-フ	ⅢF	木器類	部材	器具部材	(残存12.2)	(6.2)	(2.4)	第11号 図版111	下面を欠く。中央に貫通する円孔が1箇所認められる。榎目、ヒノキ。
1865	8-中	Ⅱ	木器類	部材	器具部材	(11.2)	(1.2)	(4.8)	第11号 図版115	下面面は、あるいは欠けているものかもしれない。上面面の右端と右端に浅状の切欠き加工を施している。中央に貫通する小孔が2箇所認められる。表面に斜線による凹凸みられる構造が認められる。小型の容器などの部材である可能性が考えられる。榎目、アスナロ属。
1866	17-フ	ⅢF	木器類	部材	器具部材	(11.6)	(1.8)	(3.7)	第11号 図版115	ほぼ全形である。下面面はやや傾い。平面面はほぼ右側面である。表面の左右両側面に浅状の切欠き加工が施されていることから、器具部材と推定される。榎目、ヒノキ。
1867	3-3	Ⅲ	木器類	部材	器具部材	(残存24.8)	(1.6)	(7.2)	第11号 図版116	上面を欠く。二次加工を受けている可能性が高く、定形小形部材が複製であったとみられる。下面に浅溝を設けており、貫通する小孔が2箇所認められる。また、上面の右側に貫通孔が2箇所認められる。断面中央や右下に貫通しない小孔が2箇所認められる。榎目、アスナロ属。
1868	13-フ	Ⅳ	木器類	部材	器具部材	(残存25.2)	(1.2)	(1.6)	第11号 図版116	上面を欠く。上面は軸状に削り出している。下面も本来は軸状の形状であったと推定される。志忠、ヒノキ。
1869	5-3	Ⅲ	木器類	部材	器具部材	(残存23.1)	(1.2)	(1.6)	第11号 図版111	両端に軸を作り出すが、ほとんど欠失している。軸の付け物には、いずれも貫通孔があったとみられる。志忠。
1870	7-サ	Ⅱ	木器類	部材	器具部材	(24.5)	(1.4)	(2.2)	第11号 図版116	ほぼ全形である。断面は円形の縁の上面を有線状に削り出している。志忠、ヒノキ。
1871	7-サ	Ⅱ	木器類	部材	器具部材	(23.6)	(1.2)	(1.4)	第11号 図版116	ほぼ全形とみられる。断面方形が形勢に整っている。上面と下面を軸状に加工している。断面は1箇所貫通する貫通孔が認められる。志忠、ヒノキ。
1872	5-3	Ⅲ	木器類	部材	器具部材	(29.7)	(2.4)	(3.8)	第11号 図版116	表面と裏面に割傷部分や腐食部分が多い。ほぼ全形を復元することができる。上面・下面は両端を削り、断面両側面に整形している。表面の中央部は削って浅溝を設けている。裏面の下面付近は曲線状になっている。榎目、アスナロ属。
1873	5-3	Ⅲ	木器類	部材	器具部材	(26.7)	(2.7)	(3.3)	第11号 図版116	口々に傾いている。中央に方形の孔を持つ。上面・下面は断面内側に加工を施している。志忠、ヒノキ。
1874	8-サ	Ⅱ	木器類	部材	器具部材	(残存25.0)	(3.6)	(4.5)	第11号 図版111	下面を欠く。上面も一部欠失している。全体に平直で、残存部分に浅溝を設けていることから、器具部材とみられる。志忠、ヒノキ。
1875	17-フ	Ⅰ	木器類	部材	器具部材	(18.7)	(1.8)	(2.2)	第11号 図版111	上面は欠失している可能性がある。表面は自動的平直であるが、裏面は丸みを帯びている。表面と裏面に浅い浅溝の加工を施している。上面にも加工痕が認められる。志忠、ヒノキ。
1876	7-3	Ⅲ	木器類	部材	器具部材	(残存5.4)	(1.2)	(2.8)	第11号 図版115	下面を欠く。また、裏面も本来の形状をどめていない可能性が示される。内面を削っている。断面は口の半状態で、上面中央部に浅溝が認められる。志忠、ヒノキ。
1877	6-ケ	Ⅱ	木器類	部材	器具部材	(22.6)	(6.8)	(7.5)	第11号 図版111	上面・下面の中央を木軸状に削っている。上面には木封が1箇所認められるが、下面の対応する位置にも同様の孔があった可能性がある。上面に浅溝を設けている。榎目、ヒノキ。
1878	4-フ	Ⅱ	木器類	部材	器具部材	(残存19.3)	(6.8)	(4.9)	第11号 図版111	下面を欠く。右側面残存部のほぼ全面に削り加工痕が認められる。下面付近には木封の加工が施されていたようである。榎目、ヒノキ。

第125表 遺物観察表 (73)

遺物 番号	出土 層位	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
1879	8号	II	木器類	部材	器具部材	(残存17.3)	(2.7)	(3.2)	第1400 図版116	上端を欠く。下端は大部分を欠くとみられる。下端を物差し加工している。断面は長方形である。芯材、アスナシは無い。
1880	8号	II	木器類	部材	器具部材	(残存9.6)	(0.5)	(3.6)	第1400 図版116	下端を欠く。中央に貫通する円孔が1つ認められる。椀目、ヒノキ。
1881	7号	II	木器類	部材	器具部材	(残存10.0)	(0.5)	(4.0)	第1400 図版116	下端を欠く。断面から上つたの長方形を穿っているが、いずれも完全な貫通してはいない。椀目、ヒノキ。
1882	8号	II	木器類	部材	器具部材	(残存9.2)	(0.5)	(2.6)	第1400 図版116	下端を欠く。左端付近に一定の切り込みが認められる。断面とみられる箇所はまっている。動物彫像を二次加工したもの。椀目、ヒノキ。
1883	15号	YT	木器類	部材	器具部材	(残存12.2)	(0.7)	(1.1)	第1400 図版116	上端を欠く。断面は円形を基本とするが、下端は幅広く細く加工加工している。断面のほぼ、管・棒だが、または高脚・1長などの形状の可能性もあると考査がある。定かではない。芯材、サワラ。
1884	5号	II	木器類	部材	器具部材	(11.0)	(0.6)	(1.8)	第1400 図版116	中央部は断面方形の棒状であるが、上端・下端は幅広くある。あるいは扁柱か。椀目、ヒノキ。
1885	4号	III	木器類	部材	器具部材	(残存11.5)	(0.5)	(3.0)	第1400 図版116	下端を欠く。貫通孔が1箇所認められるが、孔形状は整っていない。椀目、サワラ。
1886	8号	II	木器類	部材	器具部材 器具部材?	(9.2)	(0.7)	(1.1)	第1400 図版113	板状である。断面の一部を欠く。断面を除けば全面に彫刻の可能性のある。椀目、ヒノキ。
1887	12年度 試掘区4	-	木器類	部材	器具部材	(9.4)	(1.4)	(2.1)	第1400 図版116	完全品とみられる。平面形は左右対称ではなく片側の縁端のみが鋭角的。下端が平に開く。上端に断面内側の物を残している。断面の幅である。芯材、サワラ。
1888	5号	I	木器類	部材	器具部材	(残存9.9)	(1.2)	(1.1)	第1400 図版116	下端を欠くものの、精巧な作り的小型品である。円柱の上端を削り出して円錐状としている。その下も削り出しているが、その形状を一定断面内側の棒状である。芯材の存在を利用していると思われる。本来は二段であった可能性もある。あるいは扁柱か。芯材、サワラ製成木炭。
1889	8号	II	木器類	部材	器具部材	(残存8.6)	(0.7)	(3.4)	第1400 図版116	上端・下端の一部を欠く。下端付近に円孔が1つあったとみられる。精巧な作りで、上端は扁錐的。下端は直線的に削り上げている。椀目、ヒノキ。
1890	5号	II	木器類	部材	器具部材	(7.0)	(0.7)	(4.6)	第1400 図版116	下端は本来の形状をとめている可能性もある。中央に貫通する円孔が1つ認められる。椀目、キヌミ。
1891	6号	III	木器類	部材	器具部材	(3.0)	(0.7)	(残存2.5)	第1400 図版113	両端部を細く削り整形している。本来は残存部下方に軸がけりょうな形式であった可能性もある。中央に貫通する円孔が1箇所認められる。上端面右半には、線を描いている。椀目、ヒノキ。
1892	21号	KT	木器類	部材	器具部材	(残存4.8)	(0.4)	(1.2)	第1400 図版116	下端を欠く。上端は両側面を中央に向かって斜めに削り、先端を尖らせている。中央に貫通する円孔が1箇所認められる。道具(固定補助具)の一種か。椀目。
1893	6号	II	木器類	部材	器具部材	(残存6.6)	(0.7)	(3.0)	第1400 図版116	下端を欠く。全体形状は不明である。左右側面に一定の切り欠き加工を施している。この部分を仮に、仕上げが丁寧で精巧な作りである。器具部材、あるいは工具の柄とみられる。椀目。
1894	6号	II	木器類	部材	器具部材	(残存7.7)	(0.5)	(1.6)	第1400 図版116	下端は欠失している可能性が高い。右側面に切り欠き加工を施している。遺跡目、ヒノキ。
1895	5号	II	木器類	部材	器具部材	(6.3)	(2.1)	(残存2.2)	第1400 図版116	上端部は残りが、それ以外の各面は平直である。特に下端は丁寧な削りによって仕上げている。器部・断面は、芯材、ヒノキ。
1896	17号	KT	木器類	加工材	製板	(91.0)	(3.9)	(17.6)	第1400 図版118	全面に削り加工が施り、形状も整っていない。上下端部は削り出されたままであり、右側面は断面に一定の厚みをつけておいていない。表面に凹凸が著しい。断面は比較的滑らかなもの。平直ではない。椀目、サワラ。
1897	17号	KT	木器類	加工材	製板	(76.7)	(6.6)	(17.0)	第1400 図版118	平面形は斜辺に三角形。断面は円形～台形状である。表面は削り出し、断面は平直である。右側面は断面に一定の厚みをつけておいていない。表面に凹凸が著しい。断面は比較的滑らかなもの。平直ではない。椀目、サワラ。
1898	14号	YT	木器類	加工材	製板	(残存85.1)	(3.2)	(8.1)	第1400 図版118	上端を欠く。下端は両側面を削り切り落とし、三角形に整形している。断面をほとんど加工していないため、断面は斜方形ではない。遺跡目、サワラ。
1899	15号	YT	木器類	加工材	製板	(38.0)	(7.0)	(17.2)	第1400 図版118	下端は斜削りによって作られているが、左右対称ではない。全体に残存状態は良好でないが、断面は不整な三角形を基本とする。椀目、サワラ。

第126表 遺物観察表 (74)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(mm)			実測図 寸法	観察所見など
						口徑 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)		
1900	5㉓	Ⅱ	木器類	加工材	割板残材	(14.5)	(4.5)	(9.8)	第1480 図説116	表面は基本の曲面のままである。左右側面と裏面は粗く削られた状態のまま、磨削は施していない。上下端面は粗い切り角が認められる。板目、ヒノキ。
1901	16㉓	Ⅲ	木器類	加工材	割板残材	(16.7)	(1.4)	(7.9)	第1480 図説116	下端はきれいに斜めに切削されている。表面の下端付近は粗く削られている。板目同様で全面磨削のために磨削された部分か、もしくは製品を磨いたものと推定する。底板目、ヒノキ。
1902	6㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(18.2)	(2.4)	(4.4)	第1480 図説117	下端面のみやや幅広い、1903に類似する。板目、ヒノキ。
1903	6㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(18.4)	(3.4)	(4.4)	第1480 図説117	側面ははやや幅広い、1902に類似する。板目、ヒノキ。
1904	6㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(17.4)	(2.7)	(3.2)	第1480 図説117	横断面は整った形状である。上端面・下端面はいずれも粗く削り切られている。芯部、ヒノキ。
1905	5㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(16.8)	(3.2)	(3.7)	第1480 図説117	上端面はやや幅広いが、それ以外の各面は比較的平滑である。板目、ヒノキ。
1906	5㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(14.2)	(3.5)	(9.1)	第1480 図説117	表面・裏面は曲面であり、あまり平滑ではない。側面は比較的平滑である。上端面には粗い削り角が認められる。下端面はより平滑で、細による効果とみられる。板目、ヒノキ。
1907	7㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(12.0)	(3.5)	(5.4)	第1480 図説117	右側面の大部分、および裏面・右側面の一部が欠けている。表面・側面・下端面は比較的平滑であるが、上端面と裏面は幅広い。芯部、ヒノキ。
1908	6㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(11.5)	(3.5)	(10.4)	第1480 図説117	側面は比較的平滑だが、それ以外の各面は幅広い。板目、サワラ。
1909	4㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(14.2)	(3.4)	(5.2)	第1480 図説117	表面・裏面と側面は比較的平滑だが、側面は幅広い。板目、ヒノキ。
1910	6㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(12.8)	(4.2)	(6.6)	第1480 図説117	上端面は比較的平滑だが、それ以外の各面は幅広い。板目、ヒノキ。
1911	6㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(12.2)	(3.7)	(3.2)	第1480 図説117	各面いずれも平滑であるが、裏面は削られたままの状態である。芯部を伴う。板目、ヒノキ。
1912	7㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(10.2)	(5.1)	(4.1)	第1480 図説117	下端面は比較的平滑であるが、それ以外の各面は幅広い。板目、ヒノキ。
1913	5㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(6.4)	(2.7)	(3.8)	第1480 図説117	いずれの面も比較的平滑であるが、上端面の形状は平らではない。板目、ヒノキ。
1914	6㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(8.4)	(1.1)	(5.9)	第1700 図説117	下端面はやや幅広いが、それ以外の各面は比較的平滑である。底板目、ヒノキ。
1915	5㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(8.5)	(2.4)	(4.4)	第1700 図説117	全体に磨削が著しい。板目、サワラ。
1916	6㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(7.2)	(3.5)	(6.4)	第1700 図説117	全体に磨削・磨みが著しいが、各面いずれも比較的平滑である。芯部、ヒノキ。
1917	7㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(8.5)	(3.7)	(6.4)	第1700 図説117	各面いずれも幅広い。底板目、ヒノキ。
1918	5㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(10.0)	(2.4)	(6.9)	第1700 図説117	表面・裏面とも曲面である。各面いずれも比較的平滑であるが、側面の切削は細によるものとみられる。板目、ヒノキ。
1919	5㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(8.0)	(1.8)	(6.4)	第1700 図説117	表面・裏面と側面は比較的平滑だが、側面は幅広い。板目、ヒノキ。
1920	8㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(6.5)	(2.3)	(4.3)	第1700 図説117	全体に磨削は良好ではない。裏面は磨削をためていない。側面は比較的平滑である。板目、ヒノキ。
1921	5㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(10.8)	(2.1)	(8.0)	第1700 図説117	左側面は一部欠失。それ以外の各面は比較的平滑である。底の部分はきれいに切削されており、これは磨削によるものとみられる。底板目、ヒノキ。
1922	6㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(6.5)	(3.4)	(5.8)	第1700 図説117	右側面は下端面1箇所を斜めに切削されている。側面は左側面は比較的平滑であるが、それ以外の各面は幅広い。板目、ヒノキ。
1923	15㉓	Ⅲ	木器類	加工材	端材	(10.8)	(3.8)	(5.2)	第1700 図説117	側面は側面は比較的平滑である。表面は磨削をためていない可能性がある。裏面は粗く削られたままの状態である。板目、ヒノキ。
1904	7㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(7.0)	(2.4)	(5.1)	第1700 図説117	表面は比較的平滑であるが、裏面は粗く削られたままの状態である。側面は比較的平滑である。芯部、ヒノキ。
1925	9㉓	Ⅱ	木器類	加工材	端材	(3.9)	(3.2)	(3.7)	第1700 図説117	側面は右側面は比較的平滑であるが、その他の各面は幅広い。芯部、ヒノキ。

第127表 遺物観察表 (75)

遺物 番号	出土 層位	方位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	幅 (厚さ)	高さ		
1906	8 中	II	木器類	加工材	障材	(5.0)	(3.0)	(3.0)	第17図 図00117	表面中央に、縦方向の溝が認められる。各面いずれも比較的平滑である。底面、ヒノキ。
1907	19 下	I	木器類	加工材	障材	(4.5)	(3.0)	(3.7)	第17図 図00118	表面に、横割をつけた「横線」を設けている。裏面を除く各面の彫彫は比較的丁寧である。上層面には刺さるような鋭い突起は認められず、各面裏のたねまでで切り取られて残った障材と判断する。底面、アサギノ葉。
1908	8 中	II	木器類	加工材	障材	(4.0)	(1.7)	(3.0)	第17図 図00117	いずれの面も比較的平滑である。上層面は下層面に対して斜めである。底面、ヒノキ。
1909	9 中	II	木器類	加工材	障材	(7.0)	(2.3)	(3.0)	第17図 図00117	表面・裏面は比較的平滑であるが、それ以外の各面は鋭い稜目、ヒノキ。
1900	9 中	II	木器類	加工材	障材	(4.3)	(2.7)	(2.6)	第17図 図00117	形状は斬っていないものの、各面いずれも比較的平滑である。底面、ヒノキ。
1901	9 中	II	木器類	加工材	障材	(6.0)	(0.7)	(5.9)	第17図 図00117	上層面は少々削いが、それ以外の各面は比較的平滑である。底面、ヒノキ。
1902	7 中	II	木器類	加工材	障材	(5.4)	(5.1)	(4.8)	第17図 図00117	上層は平らに切磨している。下層は3方向から斜めに切り落としている。底面、アサギ。
1933	20 下	KT	木器類	彫刻木器	不明	(残存17.4)	(1.4)	(残存5.6)	第17図 図00119	飲食器の蓋か、細かく叩きつけているが、加工範囲や本来の形状は不明である。底面、アサギ。
1934	19 下	KDF	石器類	石器	凹底無蓋器	(残存2.95)	(0.3)	(残存1.5)	第17図 図00119	左側面下層を欠く。石材は下呂石。重さ1.7g。
1935	12 下	YH	石器類	石器	凹底無蓋器	(残存2.8)	(0.3)	(1.3)	第17図 図00119	左側面下層を欠く。石材は下呂石。重さ1.6g。
1906	8 中	II	石器類	石器	凹底無蓋器	(残存2.4)	(0.4)	(1.4)	第17図 図00119	先端を欠く。石材は下呂石。重さ1.1g。
1937	20 下	KDF	石器類	石器	凹底無蓋器	(残存2.3)	(0.4)	(1.4)	第17図 図00119	先端を欠く。石材は下呂石。重さ0.7g。
1938	12 下	YH	石器類	石器	凹底無蓋器	(1.9)	(0.3)	(1.2)	第17図 図00119	石材は下呂石。重さ0.7g。
1939	30 中	III	石器類	石器	凹底無蓋器	(2.0)	(0.6)	(1.8)	第17図 図00119	石材はチャート。重さ1.5g。
1940	17 下	KT	石器類	石器	凹底無蓋器	(2.5)	(0.5)	(1.5)	第17図 図00119	石材は砂。重さ1.2g。
1941	18 下	KDF	石器類	石器	凹底無蓋器	(残存2.3)	(0.4)	(残存1.5)	第17図 図00119	左側面下層を欠く。石材は下呂石。重さ0.7g。
1942	13 下	YH	石器類	石器	凹底無蓋器	(2.4)	(0.4)	(1.2)	第17図 図00119	石材は下呂石。重さ0.6g。
1943	6 中	II	石器類	石器	凹底無蓋器	(残存1.4)	(0.3)	(1.4)	第17図 図00119	先端の左側縁を欠く。石材は下呂石。重さ0.4g。
1944	7 中	II	石器類	石器	凹底無蓋器	(残存1.3)	(0.4)	(残存1.1)	第17図 図00119	先端・側面を欠く。石材は下呂石。重さ0.5g。
1945	5 中	II	石器類	石器	凹底無蓋器	(1.5)	(0.4)	(1.2)	第17図 図00119	先端は鋭突。重さ0.5g。
1946	18 下	KT	石器類	石器	凹底無蓋器	(残存1.4)	(0.4)	(残存1.4)	第17図 図00119	先端と右側面下層を欠く。石材は下呂石。重さ0.6g。
1947	19 下	KDF	石器類	石器	凹底無蓋器	(残存1.4)	(0.4)	(1.4)	第17図 図00119	先端と右側面下層を欠く。石材は砂礫石。重さ0.9g。
1948	12 中	I	石器類	石器	平底無蓋器	(1.7)	(0.3)	(1.3)	第17図 図00119	石材は砂礫石。重さ0.5g。
1949	17 下	KT B	石器類	石器	平底無蓋器	(残存1.7)	(0.3)	(残存1.3)	第17図 図00119	右側面平を欠く。石材は下呂石。重さ0.5g。
1950	15 中	KT	石器類	石器	凹底有蓋器	(4.3)	(0.7)	(1.7)	第17図 図00119	石材は下呂石。重さ3.2g。
1951	5 中	II	石器類	石器	凹底有蓋器	(残存2.4)	(0.8)	(1.2)	第17図 図00119	先端と底下層を欠く。石材は下呂石。重さ2.2g。
1952	13 下	YH	石器類	石器	凹底有蓋器	(2.1)	(0.5)	(1.2)	第17図 図00119	石材は砂礫石。重さ0.6g。
1953	16 下	KDF	石器類	石器	凹底有蓋器	(残存1.4)	(0.3)	(残存1.0)	第17図 図00119	先端と右側面下層を欠く。石材は下呂石。重さ0.9g。
1954	17 下	KDF	石器類	石器	凹底有蓋器	(残存1.3)	(0.4)	(1.5)	第17図 図00119	先端を欠く。石材は砂礫石。重さ0.7g。
1955	3 中	III	石器類	石器	平底有蓋器	(残存1.3)	(0.3)	(1.0)	第17図 図00119	先端を欠く。石材は下呂石。重さ0.3g。
1956	12 下	YH	石器類	石器	凸底有蓋器	(3.4)	(0.9)	(2.0)	第17図 図00119	石材は下呂石。重さ3.1g。
1957	18 下	KDF	石器類	石器	凸底有蓋器	(残存2.0)	(0.7)	(1.7)	第17図 図00119	先端を欠く。石材は下呂石。重さ3.2g。
1936	4 中	III	石器類	石器	(残存1.3)	(0.4)	(残存1.1)	第17図 図00119	先端と基部を欠く。石材はチャート。重さ0.6g。	
1939	12 中	YH	石器類	石器	(3.1)	(0.4)	(3.2)	第17図 図00119	凹部に刃こぼれが認められる。石材はチャート。重さ2.3g。	
1960	19 下	I	石器類	石器	(残存2.4)	(0.5)	(残存0.9)	第17図 図00119	先端を欠く。石材はチャート。重さ1.1g。	
1961	20 下	KDF	石器類	石器	(2.4)	(0.7)	(0.8)	第17図 図00119	石材は下呂石。重さ1.1g。	
1962	5 中	II	石器類	石器	(2.8)	(0.4)	(4.4)	第17図 図00119	凹部に刃こぼれが認められる。石材はチャート。重さ5.1g。	
1963	17 下	KDF	石器類	石器	(4.5)	(0.8)	(1.9)	第17図 図00119	石材はチャート。重さ3.9g。	
1964	18 下	KDF	石器類	ストーン ツール	(4.1)	(0.9)	(2.6)	第17図 図00119	石材は砂礫石。重さ7.1g。	
1965	19 下	KT	石器類	ストーン ツール	(2.0)	(2.2)	(0.8)	第17図 図00119	石材は砂礫石。重さ3.4g。あるいは石割か。	
1966	17 下	KT	石器類	ストーン ツール	(2.8)	(1.2)	(3.3)	第17図 図00119	石材は下呂石。重さ11.3g。	
1967	11 中	I	石器類	ストーン ツール	(残存4.4)	(0.9)	(3.4)	第17図 図00119	下層を欠く。石材はチャート。重さ7.1g。	
1968	19 下	I	石器類	ストーン ツール	(0.9)	(1.4)	(2.9)	第17図 図00119	石材は下呂石。重さ24.6g。	

第128表 遺物観察表(76)

遺物番号	出土地点	単位	大分類	種別	細身	大きさ(cm)			実測図 寸法	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
1969	12ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(11.3)	(2.40)	(5.7)	第219図 図版129	片割表面摩滅。表面の下端に磨状痕。石材は緑閃石。重さ162.4g。
1970	不明	—	石器類	打製石斧		(16.2)	(1.25)	(5.2)	第219図 図版129	石材は緑色片岩。重さ75.4g。
1971	17ノ	ⅧF	石器類	打製石斧		(15.8)	(2.40)	(7.1)	第219図 図版129	全体に摩滅している。表面の下半に部分的に磨状痕。石材は緑閃石。重さ485.3g。
1972	20ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(16.9)	(2.40)	(6.4)	第219図 図版129	全体に摩滅している。表面の下端に磨状痕。石材は緑閃石。重さ279.9g。
1973	18ノ	ⅧF	石器類	打製石斧		(13.5)	(4.1)	(6.4)	第219図 図版129	極めて分厚い。全体に摩滅している。表面の下端に磨状痕。石材は緑閃石。重さ309.3g。
1974	17ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(19.8)	(2.40)	(6.3)	第219図 図版129	片割表面摩滅。表面の下端に磨状痕。石材は緑色片岩。重さ219.7g。
1975	18ノ	ⅧF	石器類	打製石斧		(17.4)	(2.2)	(6.5)	第219図 図版129	片割表面・背面摩滅。表面は磨状痕も認められる。石材は緑閃石。重さ287.4g。
1976	13ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(15.9)	(2.40)	(7.7)	第219図 図版129	石材は緑閃石。重さ419.8g。
1977	14ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(14.7)	(2.7)	(6.8)	第219図 図版129	全体に摩滅している。石材は緑閃石。重さ523.3g。
1978	17ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(14.4)	(2.3)	(6.3)	第219図 図版129	全体に摩滅している。石材は緑閃石。重さ233.4g。
1979	17ノ	ⅧF	石器類	打製石斧		(13.5)	(2.40)	(6.2)	第219図 図版129	石材は緑閃石。重さ279.1g。
1980	12ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(14.4)	(3.3)	(6.2)	第219図 図版129	全体に摩滅している。表面・背面の下端に磨状痕。石材は緑閃石。重さ433.9g。
1981	15ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(16.4)	(4.4)	(9.4)	第219図 図版129	片割表面・背面摩滅。表面には磨状痕も認められる。石材は濃緑色閃石。重さ374.9g。
1982	15ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧	(横身24.7)	(2.1)	(6.9)		第219図 図版129	上縁を欠く。片割表面・背面摩滅。石材は緑閃石。重さ243.9g。
1983	19ノ	ⅧF	石器類	打製石斧		(17.2)	(3.9)	(6.7)	第219図 図版129	石材は緑閃石。重さ529.4g。
1984	8ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(14.2)	(2.40)	(5.7)	第219図 図版129	表面・背面の下端付近に磨状痕。石材は緑閃石。重さ278.7g。
1985	12ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(11.4)	(2.40)	(5.4)	第219図 図版129	石材は緑閃石。重さ158.1g。
1986	14ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(16.8)	(1.3)	(5.1)	第219図 図版129	表面の下端付近に磨状痕。石材は緑閃石。重さ184.6g。
1987	17ノ	ⅧF	石器類	打製石斧		(16.8)	(2.2)	(5.6)	第219図 図版129	表面の下端に磨状痕。石材は緑閃石。重さ155.7g。
1988	14ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(16.1)	(1.4)	(6.2)	第219図 図版129	片割表面・背面摩滅。石材は緑色片岩。重さ303.3g。
1989	17ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(16.2)	(1.4)	(4.6)	第219図 図版129	全体に摩滅している。石材は緑閃石。重さ63.4g。
1990	19ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(16.2)	(1.1)	(5.4)	第219図 図版129	表面の下端に磨状痕。石材は緑色片岩。重さ82.9g。
1991	18ノ	ⅧF	石器類	打製石斧		(16.1)	(2.1)	(5.4)	第219図 図版129	表面の下半に磨状痕。石材は緑閃石。重さ125.2g。
1992	14ノ	ⅧF	石器類	打製石斧		(16.9)	(1.4)	(5.3)	第219図 図版129	全体に摩滅している。石材は緑閃石。重さ114.4g。
1993	21ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(16.2)	(1.7)	(4.9)	第219図 図版129	全体に摩滅している。石材は緑閃石。重さ96.8g。
1994	12ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(16.2)	(1.4)	(6.7)	第219図 図版129	全体に摩滅している。表面の下端に磨状痕。石材は緑閃石。重さ119.4g。
1995	6ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(16.4)	(2.40)	(4.5)	第219図 図版129	表面の下端に磨状痕。石材は緑閃石。重さ191.2g。
1996	14ノ	ⅧF	石器類	打製石斧		(15.4)	(1.9)	(6.2)	第219図 図版129	全体に摩滅している。石材は緑閃石。重さ241.6g。
1997	16ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(16.1)	(2.9)	(6.7)	第219図 図版129	片割表面・背面摩滅。石材は緑閃石。重さ189.4g。
1998	15セ	ⅧF	石器類	打製石斧		(12.5)	(2.8)	(5.2)	第219図 図版129	全体に摩滅している。石材は砂岩。重さ181.9g。
1999	12ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(11.5)	(2.2)	(6.2)	第219図 図版129	片割表面・背面摩滅。表面・背面の下端付近に磨状痕。石材は濃緑色閃石。重さ298.1g。
2000	19ノ	ⅧF	石器類	打製石斧		(6.8)	(2.4)	(4.8)	第219図 図版129	全体に摩滅している。表面下半に磨状痕。石材は緑閃石。重さ79.4g。
2001	16ノ	Ⅷ	石器類	打製石斧		(8.5)	(1.4)	(4.4)	第219図 図版129	表面の下端に磨状痕。石材は緑閃石。重さ70.1g。

第129表 遺物観察表 (77)

遺物 番号	出土 地点	層位	大分類	種別	細分	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器底 (厚さ)	底径 (高さ)		
2002	18.9	KDF	石器類	打製石斧	(残存4.3)	(2.7)	(8.8)	第124図 図版120	上縁を欠く。両側表面・裏面磨滅。表面の下縁に磨状痕。石材は濃褐色。重さ433.6g。	
2003	17.7	KT	石器類	打製石斧	(19.4)	(1.1)	(8.4)	第125図 図版120	上縁の一部を欠く。使用痕は認められない。石材は濃褐色。重さ279.6g。	
2004	11.7	III	石器類	打製石斧	(8.6)	(1.9)	(4.7)	第124図 図版1	表面・裏面の下部付近に磨状痕。石材は緑褐色。重さ380.6g。	
2005	15.5	III	石器類	打製石斧	(8.6)	(1.4)	(5.6)	第124図 図版120	表面の左右側縁下半が磨滅している。石材は濃褐色。重さ99.6g。	
2006	14.7	VI	石器類	打製石斧	(8.8)	(1.4)	(5.2)	第124図 図版1	左側縁は欠失している可能性がある。石材は緑色片岩。重さ100.9g。	
2007	17.7	KDF	石器類	打製石斧	(残存2.5)	(2.9)	(12.8)	第124図 図版120	片側表面・裏面磨滅。表面には磨状痕も認められる。石材は濃褐色。重さ622.9g。	
2008	12.7	VI	石器類	打製石斧	(残存16.8)	(1.7)	(残存12.5)	第124図 図版120	上縁を欠く。両側表面・裏面磨滅。表面・裏面の下部付近に磨状痕。石材は濃褐色。重さ321.6g。	
2009	16.9	KTII	石器類	打製石斧	(残存1.4)	(2.1)	(11.6)	第124図 図版120	上縁を欠く。両側表面・裏面磨滅。表面・裏面の下部に磨状痕。石材は濃褐色。重さ330.1g。17号と類似。報告。	
2010	7.X	III	石器類	磨製石斧	(20.2)	(4.7)	(7.1)	第125図 図版121	上縁の一部を欠く。基部上半に研磨痕。下半に磨打痕。両側に使用痕(使用に伴う欠損あり)。石材は緑色片岩。重さ120.9g。	
2011	18.9	KDF	石器類	磨製石斧	(残存7.9)	(3.4)	(4.8)	第125図 図版121	上縁を欠くほか、表面・裏面に使用に伴うとみられる大きな割傷が認められる。基部に研磨痕。石材は緑褐色。重さ146.7g。	
2012	5.9	II	石器類	磨製石斧	(11.4)	(2.7)	(5.6)	第125図 図版121	片側を欠く。基部に研磨痕。両側に使用痕。石材は緑褐色。重さ205.6g。	
2013	12.7	VI	石器類	磨製石斧	(8.8)	(2.4)	(4.4)	第125図 図版121	基部に研磨痕。両側に使用痕。石材は緑褐色。重さ193.1g。	
2014	5.9	III	石器類	紡錘車	(4.4)	(0.9)	(4.6)	第125図 図版119	貫通する円孔が2箇所に認められる。表面と周縁部は平滑で、磨状痕が認められる。基部は磨滅。平滑部は平直でない。石材は緑褐色。残存部分重さ94.1g。	
2015	13.9	VI	石器類	紡錘車	(6.4)	(1.3)	(6.4)	第125図 図版119	全面磨滅し平滑である。また、細かな磨状痕が認められる。石材は緑褐色。重さ66.1g。14.9号と類似。報告。	
2016	20.7	KT	石器類	石包丁	(14.2)	(6.7)	(5.9)	第125図 図版118	磨製の石包丁である。ほぼ定形品である。刃部が内側に彎曲し、平滑部は100μm程度厚い。中央部付近に刃部の貫通孔と2箇所に認められる。表面には横方向の細かな磨滅が認められる。基部は磨滅し滑らかである。磨滅はほとんど認められない。石材は緑褐色。重さ53.8g。	
2017	16.9	KT	石器類	磨錘	(5.2)	(2.4)	(8.9)	第125図 図版119	表面・裏面の側面から穿孔されている。石材は磨滅の軟質の緑褐色である。重さ3.7g。	
2018	19.9	KDF	石器類	石冠	(残存12.6)	(残存5.4)	(残存6.8)	第125図 図版121	横断面は丸みを帯びた二等三角形であり、均等に削られている。また、各面平滑である。左側面には磨打痕が認められる。石材は緑褐色。重さ201.7g。	
2019	20.9	I	石器類	砥石	(7.8)	(2.2)	(5.2)	第126図 図版121	砥面は表面・左側面・右側面の3面。石材は緑褐色。重さ62.7g。	
2020	9.9	II	石器類	砥石	(10.9)	(4.2)	(8.4)	第126図 図版121	砥面は表面・裏面・左側面・右側面の4面。石材は緑褐色。重さ101.9g。	
2021	12.7	VI	石器類	砥石	(18.4)	(6.2)	(17.1)	第126図 図版121	砥面は表面・裏面・上縁面・下縁面の4面。表面・裏面には磨打痕と磨滅によるとみられる痕。側面が多数認められるが、これは平滑化した砥面を再生するために人為的に磨くしたものとみられる。石材は砂岩。重さ408.9g。	
2022	3.9	II	石器類	砥石	(8.4)	(2.2)	(5.7)	第126図 図版121	砥面は表面・裏面・右側面・左側面の4面。平滑化はしていないものの、下縁面に磨状痕が認められる。石材は緑褐色。重さ68.7g。	
2023	7.9	II	石器類	砥石	(14.5)	(5.2)	(6.8)	第126図 図版121	砥面は表面・上縁面の2面。石材は片岩。重さ202.9g。	
2024	7.9	II	石器類	砥石	(14.9)	(4.4)	(5.2)	第126図 図版121	砥面は表面・右側面の2面。石材は片岩。重さ419.3g。	
2025	6.9	II	石器類	砥石	(9.6)	(3.2)	(4.4)	第127図 図版121	砥面は表面・裏面・右側面・左側面の4面。右側面には刃物によるとみられる磨滅の痕が多数認められる。石材は片岩。重さ208.3g。5.9号と類似。報告。	
2026	11.7	III	石器類	砥石	(16.2)	(3.2)	(11.4)	第127図 図版121	砥面は表面1面のみの面に磨滅の痕が多数認められる。石材は砂岩。重さ743.1g。	

第130表 遺物観察表 (78)

調査番号	出土地点	単位	大分類	種別	細分類	大きさ(cm)			実測図 写真	観察所見など
						口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)		
3027	7-A	Ⅱ	石器類	砥石		08.31	03.11	06.21	第2780 図説121	砥面は表面・裏面・左側面・右側面の4面。石材は花崗岩。長さ270.2g。
3028	8-S	Ⅱ	石器類	砥石		04.13	1.40	15.21	第2780 図説121	横断面は三角形であり、砥面は3面。石材は凝灰岩。長さ26.7g。
3029	8-S	Ⅱ	石器類	砥石		11.01	03.25	15.21	第2780 図説121	砥面は表面・裏面・左側面・右側面の4面。石材は花崗岩。長さ271.9g。
3030	8-F	Ⅱ	石器類	砥石		11.77	03.11	08.83	第2780 図説121	欠失部分が多く、本来の形状は不明。砥面は表面・右側面の2面。石材は砂岩。長さ219.4g。
3031	14-F	3B7	石器類	磨石		10.03	4.75	06.53	第2780 図説121	横断面は平断面五角形であり、表面とも平滑で、細かな磨痕が認められる。また、主に面の境付近には磨痕が認められる。石材は凝灰岩。長さ294.7g。
3032	8-F	Ⅱ	石器類	不明		02.40	00.40	09.63	第2780 図説119	全面、極めて平滑である。石材不明。長さ1.0g。
3033	7-F	Ⅱ	石器類	不明	(残存3.3)	00.90	00.30	02.25	第2780 図説119	中央に貫通しない穿孔のみ認められ、有孔製品の未製品と考えられる。表面・裏面に磨痕。石材は凝灰岩。長さ5.6g。
3034	12-F	Ⅲ	金属器類	銅剣		08.90	00.20	11.00	第2840 図説122	即基式の有葉銅である。鍔身の断面は薄く、経線型である。長さ2.3g。
3035	10-F	3B7	金属器類	耳環		11.81	00.20	11.90	第2840 図説122	銅製。長さ3.4g。
3036	10-A	Ⅱ	金属器類	古銭		02.53	00.13	02.53	第2840 図説122	銅製。寛永通宝(崇、750年初鋳)。長さ2.7g。
3037	7-F	Ⅱ	金属器類	古銭		02.40	00.13	02.31	第2840 図説122	銅製。親正宝(永享、1094年初鋳)。長さ2.4g。
3038	不明	-	金属器類	古銭		02.43	00.13	02.43	第2840 図説122	銅製。享和正宝(定永、1054年初鋳)。長さ2.9g。
3039	12年度 調査区13	-	金属器類	古銭		02.41	00.13	02.41	第2840 図説122	銅製。親正宝(永享、1094年初鋳)。長さ3.6g。
3040	5-F	Ⅱ	金属器類	古銭		02.31	00.13	02.31	第2840 図説122	銅製とみられるが、表面・裏面ともに金色を帯びる部分がある。聖永元宝(永享、1161年初鋳)。長さ2.6g。
3041	0-F	Ⅱ	金属器類	古銭		02.31	00.20	02.31	第2840 図説122	銅製。元亨通宝(永享、1090年初鋳)。長さ2.2g。
3042	実業科土 器出土区	-	金属器類	古銭		02.43	00.13	02.43	第2840 図説122	銅製。寛永通宝(新寛永銭)。長さ2.9g。
3043	不明	-	金属器類	古銭		02.41	00.13	02.41	第2840 図説122	銅製。寛永通宝(新寛永銭)。長さ2.5g。
3044	12年度 調査区19	-	金属器類	古銭		02.41	00.13	02.41	第2840 図説122	銅製。寛永通宝(古寛永銭)。長さ2.8g。
3045	8-F	Ⅱ	金属器類	古銭		02.11	00.13	02.11	第2840 図説122	銅製。寛永通宝(新寛永銭)。長さ1.5g。
3046	12年度 調査区11	-	金属器類	小銅	(残存10.8)	00.20	11.20	11.20	第2840 図説122	片は鉄製で大部分残っていない。柄は真鍮製で、金色の鍍金を施している。裏面・前面に金として残存部分ごく細かな磨痕が認められるが、これにヤスリ目というより磨痕である可能性が高い。裏面と柄には柄の方向の線がヤスリ目が見られる。
3047	12年度 調査区11	-	金属器類	小銅	(残存9.6)	00.40	11.31	11.31	第2840 図説122	片は鉄製で、大部分残っていない。柄は真鍮製で、金色の鍍金を施している。表面・裏面に金として残存部分ごく細かな磨痕が認められるが、これにヤスリ目というより磨痕である可能性が高い。裏面と柄の境目が見える。
3048	7-F	Ⅱ	銅器類遺物	銅口	(残存7.5)	(残存6.8)	(残存2.3)		第2840 図説122	先端に広く縁が付き出す。外面磨滅劣化。長さ156.4g。外径8.8cm、内径2.4cm。
3049	12年度 調査区14	-	その他 特殊品	銅道具	銅鉢	17.6	9.3	15.3	第2840 図説122	体壁内外面粗面せず。底面外面に布目。敷土極めて粗く砂粒の侵入あり。
3050	6-F	Ⅱ	その他 特殊品	鍍甲製品	鍍	(残存5.9)	00.40	(残存1.4)	第2840 図説122	本来の形状は不明である。表面に鍍の文様を刻んでいる。材質は鍍甲とみられる。鎌倉時代については明らかでないが、江戸時代は偽品。

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 花粉化石群集の分析

#### 1 はじめに

野内遺跡C地区では水田跡とみられる遺構を検出し、また、隣接する野内遺跡B地区でも、平安時代頃の鍛冶工房跡など、多数の遺構を検出している。そのような人々の活動の痕跡が、伐採に伴う植生の変化などといった形で検出できる可能性があるため、花粉化石群集の分析を行った。分析は、新山雅広（株式会社バレオ・ラボ）が担当した。

#### 2 試料

花粉化石群集の検討は、古代水田区域である6セグリッド東壁と、古墳時代水田区域である15タグリッドの2地点より採取した合計9試料について行った。以下に、各地点の試料を記載する。なお、これら9試料については、プラント・オパール分析も行った（第2節）。

##### ①6セグリッド東壁（4試料；試料2～5）

木器類のほか須恵器・灰釉陶器が出土した区域に当たる。試料を採取した層を基本層序に基づき記す。この地点ではIV層が存在しないため、試料はII～Va層より採取した。試料2採取層は黒色粗砂混じり粘土（II層）で、植物遺体・炭化物片を含む。試料3・試料4は黒色砂混じり粘土（試料3：IIIa層、試料4：IIIb層）で、植物遺体・炭化物片を含む。試料5は暗灰黄色細砂混じり粘土（Va層）で、植物遺体・炭化物片を含む。II～III層は主に古代の遺物を含むが、中世以降の遺物も含む。V層は遺物を含まない。なお、試料3が水田畦畔とみられる高まりが検出された層の試料である。

##### ②15タグリッド（5試料；試料1～5）

木器類のほか弥生土器ないし古墳時代土師器が出土した区域に当たる。試料1採取層は黒色砂混じりシルト質粘土（KT層）で、草本遺体（茎・根状）を多く含む。試料2は黒褐色粘土（YT層）で草本遺体（葉・茎・根状）を含む。試料3はオリーブ黒色砂混じり粘土（YT層）で、草本遺体（茎・根状）が目立つ。試料4は黒色粘土で砂が少し混じり、草本遺体（茎・根状）を含む。試料5は黄灰色粘土で、砂が少し混じり、草本遺体（茎状）が目立つ。試料1・試料2が弥生時代～古墳時代の遺物を包含する層の試料であり、試料3が水田畦畔とみられる高まりが検出された層の試料である。

#### 3 方法

花粉化石の抽出は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレバラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレバラート全面を走査し、その間に出現

した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

#### 4 分析結果

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉32、草本花粉24、形態分類で示したシダ植物胞子2である(第131表、第229図、図版123)。以下に、各地点の花粉化石群集を記載する。

##### ①6セグリッド東壁の花粉化石群集

本地区の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって、下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯(試料5):シダ植物の単条型胞子と不明花粉がわずかに産出したのみであり、図示できなかった。

II帯(試料4):樹木花粉の占める割合は40%程度である。その中で、コナラ亜属が30%強で最も高率であり、次いでハンノキ属が20%弱、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が10%強で出現する。他に、クリ属が約6%、ノグミ属、サワグルミ属-クルミ属、シイノキ属、カエデ属、トネリコ属などが低率で出現する。草本花粉は、イネ科が10%程度、カヤツリグサ科が6%程度で出現するほかは概ね1%以下の低率であり、サジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属、ギシギシ属、ヨモギ属などが出現する。シダ植物胞子は、単条型胞子が40%弱と高率である。

III帯(試料2・3):樹木花粉の占める割合は40~50%前後である。依然としてコナラ亜属が高率であるが、徐々に減少する傾向があり、20%前後の出現率である。また、ハンノキ属も急減し、5%未満となる。逆に、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は、漸増する傾向であり、上位では30%弱とコナラ亜属を上回る出現率である。他では、10%未満であるが、コウヤマキ属、スギ属、カバノキ属、ブナ属、アカガシ亜属が比較的に目立ち、マツ属単維管束亜属、マツ属複維管束亜属、ヤナギ属、クルミ属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属などが低率で出現する。草本花粉は、イネ科が増加傾向を示し、上位では40%弱に達する。次いで、カヤツリグサ科が10%弱で出現する。他は、概ね1%以下の低率であり、ヨモギ属、ヒルムシロ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ソバ属、アブラナ科、キカシグサ属、アリノトウグサ属、オオバコ属、ツリガネニンジン属-ホタルブクロ属、タンポポ科などが出現する。単条型胞子は減少傾向を示し、上位では約7%である。

##### ②15タグリッドの花粉化石群集

本地点の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって、下位より2つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯(試料3~5):十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかつた。樹木花粉では、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属などが産出し、草本花粉はイネ科、セリ科、ヨモギ属が僅かに産出した。シダ植物胞子は単条型胞子が比較的に目立ち、特に試料5では多産した。

II帯(試料1・2):樹木花粉の占める割合は50%強であり、コナラ亜属とハンノキ属が高率である。コナラ亜属は下位では40%強に達するが、上位では約17%に急減する。逆に、ハンノキ属は下位では約17%であるが、上位では40%弱に増加する。他では、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ

第131表 花粉化石産出一覧

和名	学名	6セ				15タ				
		2	3	4	5	1	2	3	4	5
樹木										
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ヒノキ属	<i>Abies</i>	4	1	1	-	2	3	1	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	3	1	-	-	-	-	-	-	1
マツ属単葉常緑樹属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylois</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-
マツ属単葉常緑樹属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylois</i>	5	1	7	-	4	2	-	-	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	14	3	7	-	5	3	1	-	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	10	17	12	-	3	3	-	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	15	20	10	-	13	4	-	-	-
イタドリ-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	75	50	35	-	20	2	-	-	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-
ノグルミ属	<i>Platyocarya</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヤウグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	2	1	4	-	-	0	-	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-
ワカシラ属-アサギ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	10	10	7	-	2	5	1	-	-
ハンパシ属	<i>Corylus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	21	15	6	-	5	2	-	-	-
ハシノキ属	<i>Alnus</i>	5	12	57	-	67	35	3	-	-
ブナ属	<i>Fagus</i>	15	21	12	-	7	2	-	-	-
コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	46	59	94	-	39	72	6	-	2
コナラ属アカガシ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	12	16	8	-	11	2	-	-	-
クリ属	<i>Castanea</i>	9	4	16	-	33	3	-	-	-
クワシノキ属	<i>Castanopsis</i>	1	1	4	-	1	1	-	-	-
ニレ属-ウヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	2	5	-	-	4	2	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	1	-	1	-	1	1	-	-	-
サクラ属近縁種	cf. <i>Prunus</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-
モミジノ木属	<i>Flex</i>	2	-	-	-	-	1	-	-	-
ニシキギ属	<i>Eucaryus</i>	2	1	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	1	-	3	-	-	3	1	-	-
トナリノ木属	<i>Aesculus</i>	4	-	-	-	11	4	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	1	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	1	-	-	1	2	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-
草本										
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サジメゴケ属	<i>Allium</i>	3	-	1	-	-	-	-	-	-
ホマダカ属	<i>Sagittaria</i>	3	-	1	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	153	79	77	-	14	10	-	-	1
カヤナギグサ科	Cyperaceae	89	35	40	-	4	3	-	-	-
セトクサ属	<i>Eriocaulon</i>	-	1	1	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	2	-	-	-	1	-	-	-	-
ゴシキギ属	<i>Rumex</i>	-	2	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アザミ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	-	-	-	4	-	-	-
他のキンポウゲ科	Other Ranunculaceae	1	1	1	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	2	4	-	-	-	2	-	-	-
キジムシロ属近縁種	cf. <i>Potentilla</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	<i>Metula</i>	3	-	-	-	-	-	-	-	-
アカバナ属	<i>Epiobion</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アサノトウゴサ属	<i>Bilobopsis</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	-	4	-	1	5	2	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ツリガネニンジン属-ホタルブクロ属	<i>Adenophora - Campanula</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-
豆七草属	<i>Artemisia</i>	10	14	11	-	2	1	-	-	1
他のキク科	Other Tubuliflorae	1	5	3	-	-	2	-	-	-
タンポポ科	Liguliflorae	1	2	-	-	-	-	-	-	-
シダ植物										
単葉型胞子	Monolete spore	37	82	366	2	202	137	16	11	73
二葉型胞子	Trilete spore	11	5	19	-	2	3	1	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	567	943	292	0	232	171	16	0	3
草本花粉	Nonarboreal pollen	355	142	142	0	22	27	2	0	3
シダ植物胞子	Spores	50	67	279	2	204	140	17	11	73
花粉+胞子送粉	Total Pollen & Spores	690	1172	713	2	469	338	35	11	78
不明花粉	Unknown pollen	16	14	14	-	24	10	1	0	2

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す



科-ヒノキ科、クリ属などが比較的目的立ち、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クリ属は増加傾向を示し、上位で10%前後になる。また、マツ属複雑管束亜属、アカガシ亜属、トチノキ属、トネリコ属なども低率で出現する。草本花粉は、イネ科が3%程度で若干目立つ他はいずれも低率であり、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、カラマツソウ属、セリ科、ヨモギ属などが出現する。シダ植物胞子は、単条型胞子が40%を超える高率出現である。

## 5 考察

### 弥生時代ないし古墳時代初頭頃まで（15タ-I帯）の古植生及び古環境

花粉化石の産出個数が非常に少なく、古植生についての推定はできなかった。花粉化石は水成堆積物であれば良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では、化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。検討した試料は、植物遺体を含む概ね還元色の粘土であり、水付き堆積物と予想されたが、花粉化石が保存されていないことから、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものと考え難い。試料3・4は、概ね黒色の堆積物であることから土壌の可能性が考えられる。なお、試料3は、水田畦畔とみられる高まりが検出された土層より採取されたが、花粉化石は良好に保存されておらず、プラント・オパール分析でもイネは全く検出されなかった。このことから、両分析からは稲作の可能性は低いと考えられ、遺構を支持する結果は得られなかった。

### 古墳時代～古代頃（6セ-II帯、15タ-II帯）の古植生及び古環境

コナラ亜属、ハンノキ属が卓越する落葉広葉樹林が発達していたと推定される。丘陵部や微高地上にはコナラ亜属を主体にクリ属などが混じり、古代には針葉樹のイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科も主要素であったとみられる。また、丘陵斜面から谷間にかけては、サワグルミ属-クルミ属、トチノキ属などから成る林分が成立していたであろう。一方、低地部では、ハンノキ属を主体にトネリコ属などが混じる湿地林が成立しており、林床にはシダ植物胞子が繁茂し、イネ科、カヤツリグサ科なども混じていたであろう。また、古代には、プラント・オパール分析の結果（第2節）から、稲作地の存在が推定される。花粉分析の結果では、イネ科花粉の出現率は高率とは言えないが、水田にしばしば雑草として生育するサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属が随伴する。おそらく、低地部はハンノキ属湿地林が広い面積を占めていたが、一部には水田が存在していたであろう。

### 古代～中世以降（6セ-III帯）の古植生及び古環境

コナラ亜属は依然として卓越していたが、徐々に林分を狭め、代わってイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が徐々に増加し、コナラ亜属とともに卓越していたと推定される。このイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の増加は、植林によることが一因として考えられる。低地部のハンノキ属湿地林は急減したと考えられるが、水田開発などによる伐採が原因である可能性が高いと思われる。イネ科花粉は増加傾向が見られ、試料2（II層）では急増するが、これは水田の面積が増加していったことを示唆しているであろう。このように、古代頃までの低地部は大規模なハンノキ属湿地林が成立していたが、それ以降は水田の占める割合の方が増加したことが推定される。栽培状況については、水田稲作以外にも試料2（II層）の時期にはソバ栽培が行われるようになったと考えられる。このような耕作地の成立に伴い、アカザ科-ヒユ科、アリノトウグサ属、オオバコ属などの雑草類が繁茂するようになったであろう。

## 第2節 プラント・オパール分析

### 1 はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物とも言われ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。こうして吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積され植物珪酸体が形成される。プラント・オパールとはこの植物珪酸体が、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となったもののことである。

野内遺跡C地区の発掘調査において畦畔と考えられる高まりが認められ、このことから推測される稲作を検証する目的で、他層位を含め土壌試料を採取した。この土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果を以下に示し、野内遺跡C地区の稲作について検討する。分析は、鈴木茂（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

### 2 試料と分析方法

分析用試料は6セグリッドの4試料（試料番号2～5）と15タグリッドの5試料（試料番号1～5）の計9試料である。これらは前節で報告した花粉化石群集分析の試料と同一のものである。

プラント・オパール分析は、これら9試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルソーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40 $\mu$ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 $\mu$ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定及び計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

### 3 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（第132表）、それらの分布を第230図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。写真は図版124に掲載した。

6セグリッド：検鏡の結果、上位3試料よりイネのプラント・オパールが検出された。産出傾向は上部に向かい急増しており、個数的にはすべて10,000個以上と多く、最上部試料2では65,000個に達している。またイネの穎（稃殻）の部分に形成される珪酸体の破片が試料2で多く観察されている。

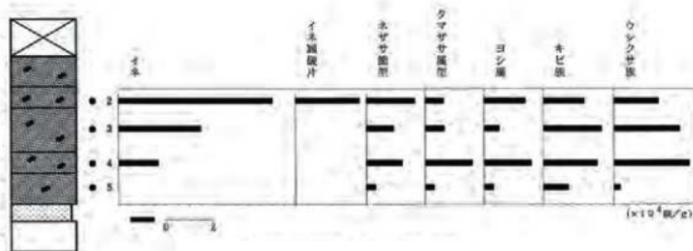
イネ以外ではウシクサ族が多く、上位3試料の産出傾向はイネと反対に上位に向かい減少している。キビ族も多く、全試料10,000個を越え、植物珪酸体の生産量が小さいキビ族としては非常に高い数値を示している。ヨシ属も試料2や4で20,000個近くとキビ族と同様に、ヨシ属としては非常に多く検出されている。その他、クマザサ属型は試料4でやや多く観察されているが、上部に向かい減少しており、ネザサ属型は最下部試料5を除き10,000個を越えている。

15タグリッド：最上部試料1のみにおいて、多くのイネのプラント・オパールが検出されている。イネ以外について、ヨシ属が多く検出されているが上部2試料では急減している。ウシクサ族も下部で多く、上部で急減しており、同様の傾向がキビ族に認められる。反対にクマザサ属型は上部に向かい増加しており、その他ネザサ属型が若干検出されており、最上部試料1で最も多く約5,000個を示

第132表 試料1g当たりのプラント・オパール個数

グリッド	試料番号	イネ (個/g)	イネ籾破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
6セ	2	65,200	27,000	20,700	8,000	3,600	17,500	17,500	19,100	19,100
	3	34,800	0	11,600	8,300	5,900	6,600	24,800	28,200	14,900
	4	16,900	0	15,300	19,900	3,400	19,900	23,000	32,200	33,700
	5	0	0	4,000	4,000	10,000	4,000	10,700	2,700	10,700
15タ	1	27,000	0	5,400	10,800	2,300	5,400	1,800	7,200	5,400
	2	0	0	1,400	8,400	1,100	11,200	8,400	12,600	14,000
	3	0	0	3,800	3,800	7,300	24,300	10,200	25,600	15,400
	4	0	0	0	1,300	1,200	21,400	0	6,300	3,800
	5	0	0	1,400	2,800	0	19,700	7,000	25,300	8,400

6セグリッド



15タグリッド



第230図 6セ・15タグリッドのプラント・オパール分布図

している。

#### 4 考察

上記したように、6セグリッドでは試料4より上位で、また15タグリッドでは最上部試料1のみイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田跡の検証例を示すと、イネのプラント・オパールが試料1 g 当り5,000個以上という高密度で検出された地区から推定された水田跡の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原 1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。野内遺跡C地区ではイネのプラント・オパールが得られた試料すべてが10,000個以上を示しており、検出個数のみからはこれらの層準において稲作が行われていた可能性は高いと判断される。時期について、6セグリッドでは試料4の古代以降、15タグリッドでは試料1の古墳時代頃が考えられ、このことからC地区では古墳時代以降に稲作が行われるようになったと判断されよう。

なお、15タグリッドの試料3層準には水田畦畔とみられる高まりが認められた。しかしながらプラント・オパール分析でイネは検出されなかったことから、この試料3層準における稲作の可能性は低いとプラント・オパール分析からは判断されよう。

なお、ススキやチガヤなどのウシクサ族が多く検出されていることから、遺跡周辺に成立していたであろう森林の林縁部や上記した稲作地周辺の空き地などの日のあたる開けたところにキビ族やネザサ節型のササ類(ケネザサ・ゴキダケなど)とともに草地を形成していたことが考えられる。一方クマザサ属型のササ類(スズタケ・ミヤコザサなど)については、森林の下草の存在で分布を広げたと推測される。ヨシやツルヨシなどのヨシ属について、15セグリッドでは稲作が行われ始める以前において大群落を形成していたことが考えられる。すなわちこのヨシ原を切り開き稲作が行われるようになったと推測され、その後ヨシ属は稲作地やその周辺の水路などに生育していたとみられる。なお、ウシクサ族やキビ族もヨシ属と同様の産出傾向を示していることから、ウシクサ族についてはヨシと同じようなところにみられるオギが、またキビ族については好水性のイヌビエなどが分布していたのではないかと思われる。このキビ族についてはその形態からアワ・ヒエ・キビといった栽培種によるものか、エノコログサ・スズメノヒエ・タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明であるが、稲作以前では好水性のイヌビエなどが、また稲作時ではタイヌビエなどの水田雑草類の可能性が考えられよう。

#### 参考文献

- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志(1984) プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—。考古学ジャーナル, 227, p.2-7.
- 藤原宏志・佐々木彰(1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究(2) —イネ(Oryza)属植物における機動細胞珪酸体の形状—。考古学と自然科学, 11, p.9-20.

### 第3節 掘立柱建物跡柱根の放射性炭素年代測定

#### 1 はじめに

野内遺跡C地区で検出した掘立柱建物跡の年代を検討するため、柱穴内で出土した柱根を対象として加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。分析は、小林統一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・瀬谷薫・藤根久(株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループ)が担当した。

#### 2 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第133表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた $^{14}\text{C}$ 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$ 年代、暦年代を算出した。

#### 3 結果

第134表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行った $^{14}\text{C}$ 年代、 $^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、第231図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代(yrBP)の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期5730 $\pm$ 40年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal13.10(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

#### 4 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。いずれの試料もクリ材であるが、最外年輪部分を採取して測定した。

掘立柱建物跡SH1の独立棟持柱に当たる柱穴352Pの柱根(遺物番号21、PLD-4794)は、 $1\sigma$ 暦年代範囲においてCal AD 690-750年(46.1%)、 $2\sigma$ 暦年代範囲においてCal AD 680-870年(95.4%)

第133表 放射性炭素年代測定試料及び処理

測定番号 (遺物番号)	遺構データ	試料データ	前処理	測定
PLD-4794 (遺物番号21)	掘立柱建物跡 S H 1 352 P (独立棟持柱)	試料の種類: 生材 (クリ) 試料の性状: 最外年輪 状態: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	Paicolabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4795 (遺物番号20)	掘立柱建物跡 S H 1 346 P	試料の種類: 生材 (クリ) 試料の性状: 最外年輪 (1~2年分) 状態: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	Paicolabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5511 (遺物番号17)	掘立柱建物跡 S H 1 239 P	試料の種類: 生材 (クリ) 試料の性状: 最外年輪 状態: wet カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	Paicolabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

第134表 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

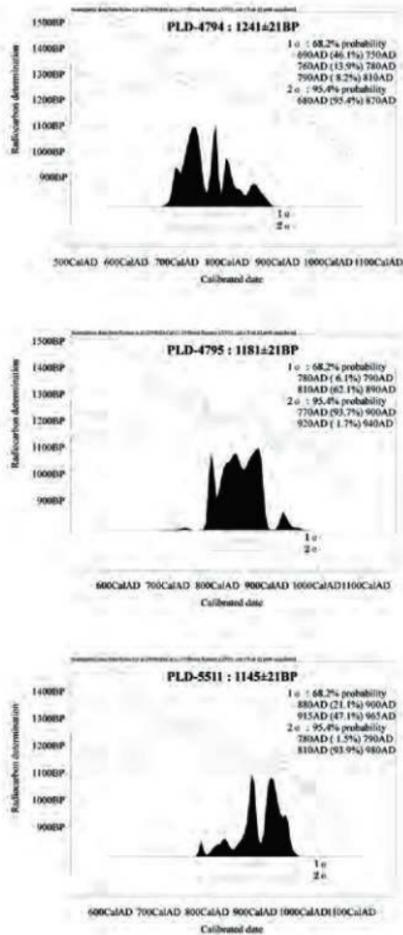
測定番号 (遺物番号)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年時代に校正した年代範囲		暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )
			1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲	
PLD-4794 (遺物番号21)	-28.09 $\pm$ 0.15	1240 $\pm$ 20	690AD (46.1%)750AD 760AD (13.9%)780AD 790AD (8.2%)810AD	680AD (95.4%)870AD	1241 $\pm$ 21
PLD-4795 (遺物番号20)	-26.85 $\pm$ 0.14	1180 $\pm$ 20	780AD (6.1%)790AD 810AD (62.1%)890AD	770AD (93.7%)900AD 920AD (1.7%)940AD	1181 $\pm$ 21
PLD-5511 (遺物番号17)	-27.54 $\pm$ 0.19	1145 $\pm$ 20	880AD (21.1%)900AD 915AD (47.1%)965AD	780AD (1.5%)790AD 810AD (93.9%)980AD	1145 $\pm$ 21

であり、2 $\sigma$  暦年代範囲において7世紀末~9世紀末の年代を示している。掘立柱建物跡 S H 1 の柱穴346 P の柱根 (遺物番号20、PLD-4795) は、1 $\sigma$  暦年代範囲においてCa1 AD 810-890年 (62.1%)、2 $\sigma$  暦年代範囲においてCa1 AD 770-900 (93.7%) であり、2 $\sigma$  暦年代範囲において8世紀末~9世紀末の年代を示している。掘立柱建物跡 S H 1 の柱穴239 P の柱根 (遺物番号17、PLD-5511) は、1 $\sigma$  暦年代範囲においてCa1 AD 915-965 (47.1%)、2 $\sigma$  暦年代範囲においてCa1 AD 810-980 (93.9%) であり、2 $\sigma$  暦年代範囲において9世紀初め~10世紀末の年代を示している。

以上の結果から、S H 1 は平安時代前半の建物の跡である可能性が高いことが明らかとなった。

#### 参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2), 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代, 3-20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.



第231図 放射性炭素年代測定暦年較正結果

## 第4節 金属器類の成分分析

### 1 はじめに

野内遺跡C地区で出土した金属器類のうち3個体について、株式会社吉田生物研究所において成分分析を実施した。その結果は、以下のとおりである。

### 2 試料と方法

分析対象としたのは、遺物番号774・2034・2035の5箇所（第135表、第232図）である。蛍光X線分析を行い金属元素を同定した。装置はRIGAKU製の波長分散型蛍光X線分析装置ZSX-PRIMUS IIを用いた。

### 3 分析結果

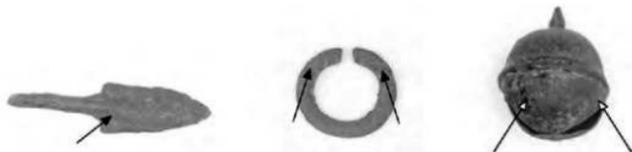
成分分析結果のスペクトルを付し、その結果を第136表に示す。ただし、そのデータには、土中成分(Na～Fe)も含まれるため、数値は参考資料である。分析No.1鍬、分析No.2耳環（地）、分析No.3耳環（緑錆部分）、分析No.4鈴（地）は銅（Cu）が主成分である。分析No.5鈴（黒色部分）は主要金属成分が無く、土中成分と鈴（地）からの影響が計測されている。

### 4 考察

遺物番号2034（鍬）は銅（Cu）が主成分で、微量成分として鉛（Pb）、銀（Ag）、錫（Sn）、アンチモン（Sb）、ビスマス（Bi）が検出されている。このうちの銅、鉛、錫の成分から、鍬は青銅製であると判断される。他の微量成分は銅、鉛、錫の精錬過程で残留した元素と考えられる。

遺物番号2035（耳環）は銅（Cu）が主成分で、微量成分として砒素（As）、銀（Ag）、ビスマス（Bi）が検出されている。このうちの銅の成分から、銅地の耳環と判断される。他の微量成分は銅の精錬過程で残留した元素と考えられる。耳環内側の緑錆部分は銅（Cu）が主成分で、微量成分として砒素（As）が検出されている。このことから緑錆部分には金銀の箔などは残留せず、銅錆と考えられる。

遺物番号774（鈴）は銅（Cu）が主成分で、微量成分としてビスマス（Bi）が検出されている。このうちの銅の成分から、鈴は銅製と判断される。鈴表面の黒色部からは主成分となる成分は検出されず、検出された金属成分の銅は鈴の地金の影響と考えられる。鉛、錫については由来は不明である。このため黒色部は金属ではなく有機質と思われ、表面の光沢などから漆膜の可能性が考えられる。



第232図 金属器類の成分分析位置

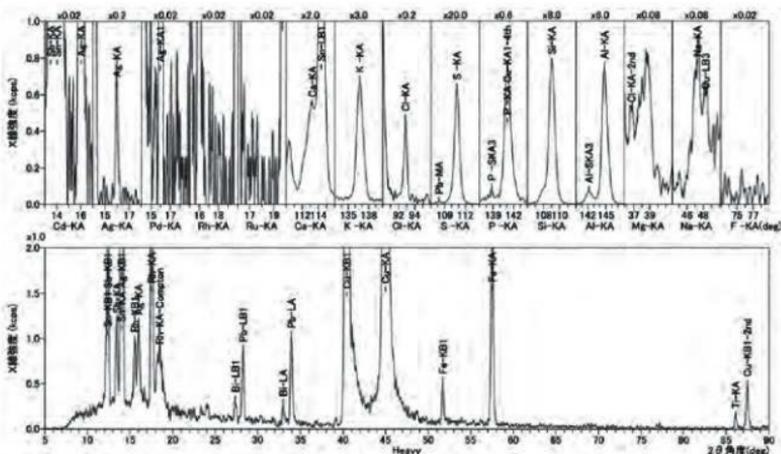
第135表 金属器類の成分分析試料一覧

遺物番号	分析No.	試料名	概要
2034	1	鏝	緑錆に覆われている。
2035	2	耳環(地)	表面は赤錆色。
	3	耳環(緑錆部分)	耳環の内側に少しある。表面は緑錆色。
774	4	鈴(地)	全体的に緑錆色。一部に赤錆色と黒色あり。
	5	鈴(黒色部分)	表面に光沢あり。

第136表 金属器類の成分分析結果一覧

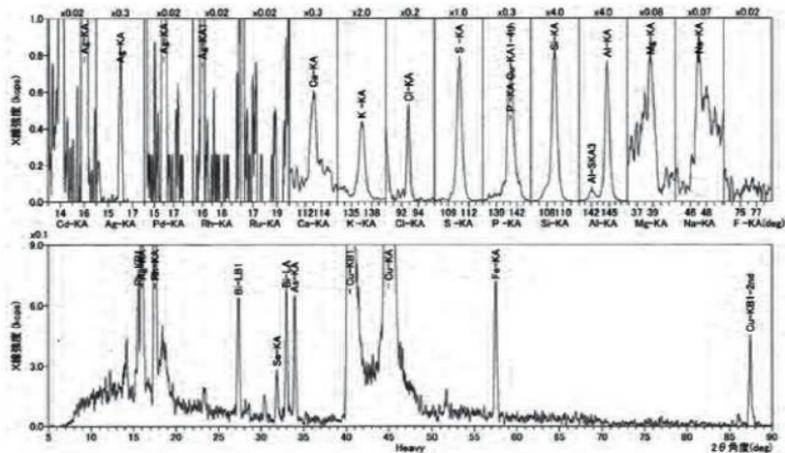
元素	No. 1 (wt%)	No. 2 (wt%)	No. 3 (wt%)	No. 4 (wt%)	No. 5 (wt%)
Na	0.71	0.80	-	2.38	-
Mg	-	0.28	-	0.51	1.21
Al	5.62	5.40	8.99	8.76	16.70
Si	8.07	6.17	13.20	10.60	31.10
P	0.18	0.12	0.14	0.13	3.90
S	6.41	0.52	3.66	2.65	4.52
Cl	0.17	0.25	-	0.71	6.02
K	0.86	0.42	1.01	1.33	5.59
Ca	0.42	-	0.36	0.18	4.92
Ti	0.21	-	-	-	-
Fe	0.62	0.17	0.53	0.24	5.50
Cu	71.00	83.90	71.60	72.20	13.50
As	-	0.26	0.50	-	-
Pb	0.71	-	-	-	4.72
Ag	0.31	0.82	-	-	-
Sn	4.04	-	-	-	2.29
Sb	0.40	-	-	-	-
Bi	0.17	0.68	-	0.15	-

試料No.1

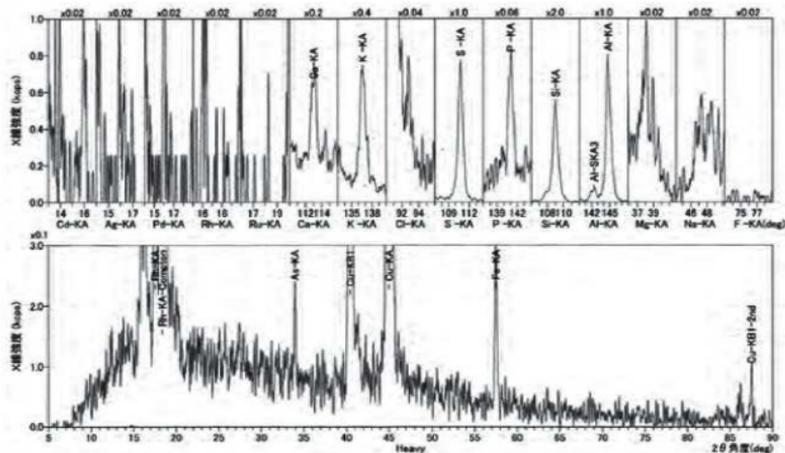


第233図 銅鏝の成分

試料No.2

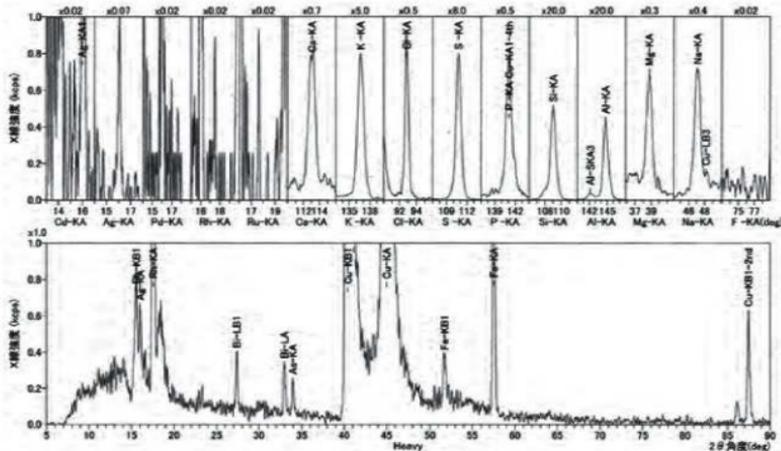


試料No.3

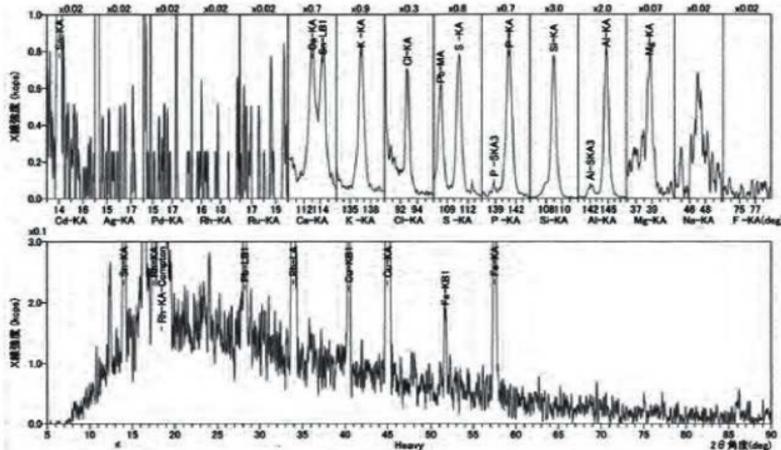


第234図 耳環の成分

試料No.4



試料No.5



第235図 銅鈴の成分

## 第5節 木器類の樹種同定

### 1 はじめに

野内遺跡C地区では、破片数で数えて28,963点にのぼる膨大な量の木器類が出土した。そのため、整理作業の進行に伴い、平成17年度、20年度、21年度に主要な個体について樹種同定を実施した。実施年度別内訳は、平成17年度が7個体、20年度が83個体、21年度が498個体である。そのほか、個別の機会に樹種を同定できたものが2個体あり、掲載910個体中、樹種同定実施総数は590個体となる。なお、この中には別材を組み合わせ1個体を構成していたため2箇所を試料採取が必要であったものが3個体含まれており、実施件数としては593件となる。

年度ごとの所見等が必ずしも一致しているとは限らないことから、以下、必要とされる編集作業を加えた上で、各年度の分析担当者による報告内容をそのまま掲載する。ただし、同定結果を基にした考察は、すべての出土木器類を見渡した上で行う必要があるため、章を改め、第5章第1節において行うこととする。同定結果についても、本節で実施年度ごとに分散して列挙することは控え、集約して第5章第1節に掲載する(134～145頁)。なお、木器個々の同定結果は、すべて「遺物観察表」(15～92頁)にも記載してある。

各年度の分析は、平成17年度は植田弥生(株式会社パレオ・ラボ)、20年度は株式会社吉田生物研究所、21年度は小林克也・黒沼保子(株式会社パレオ・ラボ)が担当した。

### 2 平成17年度実施の樹種同定

#### (1) 試料と方法

対象としたのは、掘立柱建物跡SH1の柱穴222P・223P・238P・239P・241P・346P・352Pで出土した柱根と礎板、合わせて7個体である。それらのうち柱根3個体については放射性炭素年代測定も併せて実施しており、その結果は第3節に記載してある。

同定に当たっては、材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラルで封入し、永久プレパラート(材組織標本)を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

#### (2) 結果

同定の結果、柱根と礎板は、すべてクリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科)が使用されていたことが明らかとなった。クリは、広葉樹材の中では特に耐久性・耐水性に優れた材質として知られている。縄文時代から柱に利用されていたことが広く知られており、建築材として有用な材である。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載する。クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通にみられる落葉高木である。年輪のはじめに大型の管孔が配列し徐々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

材の3方向の組織写真を図版125に提示する。

### 3 平成20年度実施の樹種同定

#### (1) 試料と方法

木器83個体(84点)を対象として実施した。剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。使用顕微鏡はNikon DS-Fi1である。

#### (2) 結果

同定した針葉樹5種、広葉樹4種の顕微鏡写真を示し(図版126~153)、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* D. Don) 図版126

(遺物番号1729)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

ヒノキ科ヒノキ属(*Chamaecyparis* sp.) 図版126・127

(遺物番号896・1735・1777)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

ヒノキ科アスナロ属(*Thujaopsis* sp.) 図版127~146

(遺物番号73・143・153・182・292・691・698・788・876・891・892・895・899・1494・1496・1497・1498・1502・1504・1512・1513・1516・1519・1540・1547・1554・1562・1565・1566・1567・1570・1578・1579・1710・1715・1717・1767・1771・1783・1784・1786・1787・1791・1793・1797・1799・1806・1819・1823・1838・1840・1850・1858・1865・1867・1872・1879・1927)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

ヒノキ科クロベ属クロベ(*Thuja standishii* Carriere) 図版146・147

(遺物番号890・1774・1896)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に偏って接線状に存在する。柾目では放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に2~6個ある。放射組織の水平壁が接線壁と接する際に水平壁は山形に厚くなり、接線壁との間に溝のような構造(インデンチャー)ができ、よく発達しているのが認められる。板目では放射組織は全て単列であった。

数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。クローベは本州、四国に分布する。

針葉樹 図版147

(遺物番号1565 紡錘車の軸部分)

柾目、板目は採取出来なかった。木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に接線配列である。

ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* Endlicher sect. *Cerris*)

図版148~150

(遺物番号874・1463・1464・1467・1469・1470・1478・1481)

環孔材である。木口では大道管(～430 $\mu$ m)が年輪界にそって1～数列並んで孔圍部を形成している。孔圍外では急に大きさを減じ、厚壁で円形の小道管が単独に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には櫛状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。クスギ節はクスギ、アベマキがあり、本州(岩手、山形以南)、四国、九州、琉球に分布する。

ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) 図版150~152

(遺物番号881・897・1788・1796・1805・1860・1897)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で単独の大道管(～500 $\mu$ m)が年輪にそって幅のかなり広い孔圍部を形成している。孔圍外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino) 図版153

(遺物番号1488・1493)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管(～270 $\mu$ m)が1列で孔圍部を形成している。孔圍外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圍部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔組織)。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

ミツバウツギ科ミツバウツギ属ミツバウツギ (*Staphylea Bumalda* DC.) 図版153

(遺物番号192)

散孔材である。木口では道管(～70 $\mu$ m)がほぼ単独、ときに2～4個不規則に複合する。柾

目では道管は階段穿孔を有し、階段数は30以下となる。道管側壁に交互壁孔。軸方向柔細胞は散在する。道管放射組織間壁孔は中型のふるい状でまばらに分布する。放射組織は異性である。板目では放射組織は1～8列となり、高さは1mm以下となる。ミツバウツギは北海道、本州、四国、九州に分布する。

#### 参考文献

- 島地 謙・伊東隆夫1982『図説木材組織』地球社  
 島地 謙・伊東隆夫1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版  
 伊東隆夫1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ』京都大学木質科学研究所  
 北村四郎・村田 源1979『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ』保育社  
 深澤和三1997『樹体の解剖』海青社  
 奈良国立文化財研究所1985『奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇』  
 奈良国立文化財研究所1993『奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇』

### 4 平成21年度実施の樹種同定

#### (1) 試料と方法

木器498個体(500点)を対象として実施した。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。樹種同定は材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(板目)についてカミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。同定にあたり、分析担当者は能城修一氏(森林総合研究所)から御教示を得た。なお、作製したプレパラートは当センターにおいて保管している。

#### (2) 結果

同定の結果、針葉樹のヒノキとサワラ、ネズコ、ヒノキ科、モミ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属、カヤ、スギの9分類群と、広葉樹のアサダとクリ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属(以下アカガシ亜属と呼ぶ)、コナラ属クスギ節(以下クスギ節と呼ぶ)、コナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)、ケヤキ、モクレン属、イスノキ、ナシ亜科、サクラ属、トネリコ属トネリコ節(以下トネリコ節と呼ぶ)、トネリコ属シオジ節(以下シオジ節と呼ぶ)の13分類群と、単子葉のタケ亜科1分類群の計23分類群が産出した。ヒノキが最も多く328点産出し、サワラが68点、クリが38点、マツ属複雑管束亜属が13点、クスギ節が12点、スギが7点、ケヤキが6点、アサダが5点、コナラ節とモクレン属が各3点、ヒノキ科とモミ属とサクラ属とシオジ節が各2点、その他の樹種が各1点産出した。

次に同定された材の特徴を記載し、光学顕微鏡を図版に示す(図版154～158)。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版154 1a-1c (遺物番号1910)・2a-2c (遺物番号1811)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、2～10細胞高となる。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版154 3a-3c (遺物番号776)・4a-4c (遺物番号803)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや厚く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、2～12細胞高となる。分野壁孔は中型の大きく開いたヒノキ型で1分野に2個みられ、壁孔は大きく傾く。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

ネズコ *Thuja standishii* (Gordon) Carriere ヒノキ科 図版154 5a-5c (遺物番号729)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや厚く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1～7細胞高となる。分野壁孔は中型のスギ型で、1分野に2個みられる。

ネズコは岐阜県から東の本州中部、北部の中央山地から日本海側にかけて多く分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で、切削等の加工は非常に容易である。

ヒノキ科 Cupressaceae 図版154・155 6a-6c (遺物番号731)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹であるが、2年輪にまたぐ切片が採取できなかった。放射組織は単列で、1～4細胞高となる。分野壁孔は壁が融解し、分野の形状が確認できず、ヒノキ科までの同定に留めた。

モミ属 *Abies* マツ科 図版155 7a-7c (遺物番号1890)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は2～12細胞高となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には北海道に分布するトドマツ、亜高山帯など高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高域に分布するモミなどがありいずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易で、割裂性も大きい。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyton* マツ科 図版155 8a-8c (遺物番号541)

仮道管と放射組織、放射仮道管、垂直および水平樹脂道で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は1～8細胞高となる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側へ鋸歯状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育する。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。マツ属単維管束亜属 *Pinus* subgen. *Haploxyton* マツ科 図版155 9a-9c (遺物番号1762)

仮道管と放射組織、放射仮道管、垂直および水平樹脂道で構成される針葉樹であるが、水平樹脂道は確認できなかった。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、1～5細胞高となる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は平滑である。

マツ属単維管束亜属には、ゴヨウマツやハイマツなどがあり代表的なゴヨウマツは北海道南部から九州まで分布する常緑高木の針葉樹である。材の重さや硬さは中庸で、切削加工等は容易である。

カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 図版155 10a-10c (遺物番号1588)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は3~12細胞高となる。分野壁孔は小型のトウヒ型で、1分野に2~3個みられる。仮道管の内壁には、2~3本で1対のらせん肥厚が明瞭にみられる。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で水湿によく耐える。

スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科 図版155・156 11a-11c (遺物番号1804)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行はやや緩やかである。放射組織は単列で、2~10細胞高となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で切削などの加工が容易な材である。

アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版156 12a-12c (遺物番号1472)

中型の道管が単独ないし2~6個放射方向に複合してやや疎に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、1~4列となる。

アサダは北海道中南部から九州にかけての温帯から暖帯上部に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で割れにくく、切削加工等は困難である。

クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図版156 13a-13c (遺物番号539)・14a-14c (遺物番号1764)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は同性で単列となる。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版156 15a-15c (遺物番号1491)

やや小型の道管が単独ないし2~3個複合して密に散在する散孔材である。晩材部では道管は径を減じる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、大きなものは10列以上となる。

ブナ属にはブナイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は重硬で強度があるが、切削加工は困難でない。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版156 16a-16c (遺物番号1485)

大型の道管が単独で放射方向に配列するが、木口面で2年輪をまたぐ切片を採取できなかった。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。以上の形質より、放射性の散孔材であるアカガシ亜属であると考えた。

コナラ属アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強靱で耐水性があるが、切削加工は困難である。

コナラ属クスギ節 *Quercus* sect. *Aegirops* ブナ科 図版157 17a-17c (遺物番号903)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では急に径を減じた壁が厚くて丸い道管が疎ら

に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で切削などの加工はやや困難である。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版157 18a-18c (遺物番号540)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では急に径を減じた壁が薄くて角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重くて強靱だが切削加工はやや難しい。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版157 19a-19c (遺物番号258)

年輪のはじめに大型の道管が1列並び、晩材部では急に径を減じた道管が多数複合して接線~斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1~2列が方形となる異性で、1~6列となる。放射組織の上下端には、大きな結晶がみられる。

ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに好んで生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難でない。

モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図版157 20a-20c (遺物番号188)

小型の道管が単独ないし2~3個複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁の道管相互壁孔は交互~階段状となる。放射組織は上下端1列が方形となる異性で、1~3列となる。

モクレン属にはホオノキ、コブシなどがある。代表的なホオノキは、山間の肥沃なところに散生する落葉高木の広葉樹で、材は軽軟で堅くなく、切削その他の加工は極めて容易である。

イスノキ *Distylium racemosum* Siebold et Zucc. マンサク科 図版157 21a-21c (遺物番号1563)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は1~3列程度の帯状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1~3列が方形ないし立方となる異性で、1~2列となる。放射組織の単列部と多列部は、同じ大きさになる。

イスノキは本州の東海や南近畿、山陽の本州南部、四国、九州などの温帯中南部に分布する、常緑高木の広葉樹である。材は非常に重硬で強度が大きく、切削加工等は困難で割れにくい。

ナシ亜科 Subfam. *Malloideae* バラ科 図版157・158 22a-22c (遺物番号1761)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、1~3列となる。

ナシ亜科はナナカマド属やサイフリボク属、カマツカ属など11属を含む、落葉ないし常緑の高木または低木である。材組織ではカマツカ属以外の識別は出来ず、カマツカ属以外のナシ亜科の樹種と考えられる。

サクラ属 (広義) *Prunus* s. l. バラ科 図版158 23a-23c (遺物番号1746)

中型の道管が単独ないし2~5個放射~斜線状に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が方形となる異性で、1~4

列となる。

広義のサクラ属には、モモ属、スモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属、バクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できず、広義のサクラ属とした。トネリコ属トネリコ節 *Fraxinus* sect. *Ornus* モクセイ科 図版158 24a-24c (遺物番号902)

年輪のはじめに大型の道管が1列並び、晩材部では急に径を減じた道管が単独ないし2~3個複合して疎に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状ないし翼状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1~3列となる。

トネリコ属トネリコ節にはヤマトアオダモやマルバアオダモなどがあり、一般的なマルバアオダモは日本各地の丘陵地や山地で普通に見られる落葉高木の広葉樹である。材はトネリコ属シオジ節より重硬で、強くて粘りがあり、加工性は中庸程度である。

トネリコ属シオジ節 *Fraxinus* sect. *Fraxinaster* モクセイ科 図版158 25a-25c (遺物番号1776)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では急に径を減じた道管が単独ないし2~3個複合して疎に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状ないし翼状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1~3列となる。

トネリコ属シオジ節にはシオジとヤチダモがあり、現在の植生ではシオジは関東以西の温帯に分布し、ヤチダモは中部以西の亜寒帯から温帯の、河岸や湿地などの肥沃な湿潤地に分布する落葉高木の広葉樹である。材の性質は類似して中庸ないしやや重硬で、乾燥は比較的容易、切削加工等は容易である。

タケ亜科 Subfam. *Bambusoideae* イネ科 図版158 26a (遺物番号513)

向軸側に原生木部、その左右に2個の後生木部と背軸側に節部で構成される維管束がみられる単子葉植物の秆である。繊維鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部に関わりなく厚くなる。タケ亜科はいわゆるタケ・ササの仲間、日本には12属ある。

## 5 小結

590個体(593件)の同定結果は、すでに「遺物観察表」(15~92頁)に記載してあるが、次章において、器種ごとにまとめ直した形で改めて掲載する(134~145頁)。分析実施時の諸条件が同一ではなかったためか、全年度で必ずしも同一の視点による同定結果が得られたとは限らないようである。この点にも留意しつつ、同定結果から見出すことのできる野内遺跡の出土木器類の特質等について、次章で総括することとする。



て、個体個々の帰属時期を特定することまでは困難であるとしても、木器類各器種の出土位置分布を土器類のそれと重ね合わせるにより、大局を捉えることは可能であると予想される。以下、木器類各器種について、「弥生土器・土器集中区域」、「須恵器・灰軸陶器集中区域」のどちらで出土する傾向があるのか、検証作業を進めてみる<sup>21)</sup>。

前章までにも度々記したとおり、野内遺跡C地区では発掘区の北半と南半とで土器類の出土傾向に際立った相違が認められる。すなわち、北半では古代、それも平安時代前半頃の須恵器と灰軸陶器が主体を占めるのに対し、南半では弥生土器や古墳時代初頭の土器など、より古い時代の土器を多く含むようになる。このことを視覚的に示すために、5m四方の細分グリッドごとに土器類の組成を求めた結果を第9図としてすでに提示してある（第1分冊14頁）。弥生土器・土器集中区域と須恵器・灰軸陶器集中区域とでは面積が対等というわけではなく、後者の方がやや広い。さらに、北が高く南が低い地形のため、発掘区南半では北半からの流れ込みとみなすべき遺物が少なくない一方で、その逆はあまりみられないようである。検証を進めるに当たり、以上を念頭に置くこととしたい。

掲載した木器類910個体について出土地点を確認し、土器類の出土位置分布と重ね合わせてみると、第137表に示したような結果を得ることができる。弥生土器・土器集中区域から出土したものの155個体に対し、須恵器・灰軸陶器集中区域から出土したものが728個体となり、そのほかに判別不能のものが27個体ある。出土遺物量の多い大型の溝状遺構の多くが発掘区北半の古代水田跡周辺に広がることから考えて、この結果に奇異な点はない。さらに付言すれば、須恵器・灰軸陶器集中区域に属する個体数がこれほどまでに多いのは、特に個体数の多い器種である箸と火付け木がこちらの区域で集中的に出土したことが大きな要因となっている。

次に、器種別にみてゆくと、以下のような傾向を読み取ることができる。

- ① 鉾は、弥生土器・土器集中区域に偏る傾向が顕著である。
- ② 挽物容器（漆器）は、すべて須恵器・灰軸陶器集中区域で出土している。
- ③ 楕円形曲物容器は、すべて弥生土器・土器集中区域で出土している。
- ④ 円形曲物容器及び曲物側板は、須恵器・灰軸陶器集中区域に偏る傾向が顕著である。
- ⑤ 組物容器は、須恵器・灰軸陶器集中区域に偏る傾向が顕著である。
- ⑥ 馬形は、どちらかの区域に偏ることなく、両区域にわたり広く散在する。
- ⑦ 下駄は、ほとんどが須恵器・灰軸陶器集中区域で出土している。
- ⑧ 杓子は、すべて須恵器・灰軸陶器集中区域で出土している。
- ⑨ 箸は、須恵器・灰軸陶器集中区域に偏る傾向が極めて顕著である。
- ⑩ 火付け木は、須恵器・灰軸陶器集中区域に偏る傾向が極めて顕著である。
- ⑪ 模造品は、すべて須恵器・灰軸陶器集中区域で出土している。
- ⑫ 串状木製品・へら状木製品・板状木製品・棒状木製品といった用途を特定し難い製品もまた、どちらかといえば須恵器・灰軸陶器集中区域で多く出土している。
- ⑬ 柱根を除く建築部材は、両区域にわたり散在し、弥生土器・土器集中区域における出土数が須恵器・灰軸陶器集中区域における出土数に拮抗する。
- ⑭ 柱根は、すべて須恵器・灰軸陶器集中区域で出土している。
- ⑮ 土木部材（杭・横木）は両区域にわたり散在する。

⑯器具部材は、須恵器・灰釉陶器集中区域に偏る傾向が極めて顕著である。

⑰割板は、すべて弥生土器・土師器集中区域で出土している。

⑱端材は、すべて須恵器・灰釉陶器集中区域で出土している。

さて、それでは第137表から読み取れる上記の事象①～⑱を、どのように評価すべきであろうか。まず指摘できるのは、個体数の多い器種では、概ねどちらかの区域に偏る傾向が現われていることである。弥生土器・土師器集中区域で出土する傾向が認められるものとして、鉢・楕円形曲物容器・割板、須恵器・灰釉陶器集中区域で出土する傾向が認められるものとして、挽物容器・円形曲物容器及び曲物側板・組物容器・下駄・杓子・箸・火付け木・模造品・柱根・器具部材・端材、以上を挙げることができる。偏りが検出されないのは、柱根を除く建築部材と土木部材、それに馬形くらいにとどまる。この結果については、器種による出土区域の偏りを、予想を超えて検出できたと評価してよいと考えられる。文字の使用に関わる器種である木簡（遺物番号1564）が弥生土器・土師器集中区域で出土するなど、明らかに移動した個体が存在するとはいえ、それらは木器類全体の偏在傾向を抽出するのに障害とはならない程度にとどまっているとみなすことができる。

次に、そうした器種ごとの偏り方が、意味ある方向性を持っていることに注目したい。一般に弥生時代から古墳時代にかけて広く普及たとされる鉢は、弥生土器・土師器集中区域に偏って出土している。古代以降の遺跡で出土することの多いとされる円形曲物容器・下駄・杓子・箸・火付け木などは、明らかに須恵器・灰釉陶器集中区域に偏っている。この点は特に重視すべきであろう。なぜなら、上記の偏在傾向が偶然の所産ではなく、既往の研究に照らしても問題のない方向性を備えたものであることを示しているからである。なお、年代測定の結果に照らした場合にも、年輪年代測定結果が576年 $\pm$ aとの結果を示す楕円形曲物容器（遺物番号1499）が弥生土器・土師器集中区域で出土し、他方、放射性炭素年代測定結果が平安時代前半頃との結果を示す柱根3個体（遺物番号17・20・21）はいずれも須恵器・灰釉陶器集中区域で出土しており、矛盾はみられない。したがって、当発掘区においては土器類と木器類との間に、相伴という表現こそ適当ではないものの、とりあえず、「出土区域を同じくするものは帰属時期もまた近い」という程度には相関関係が存在すると捉えることが許されるであろう。

## 2 樹種の選択

出土した木器類各器種の樹種選択を、一覧にして掲げる（第138表）。まず目をひくのは、ヒノキを多用していることである。ヒノキと同定された試料は329例を数え、これは分析実施593件の55%に当たる。円形曲物容器底板・曲物側板・柄杓・馬形・連歯下駄・杓子・箸・火付け木・へら状木製品・板状木製品・割板残材・端材など、主要器種の大半において、他の材を圧する卓越ぶりを示している。これは、ヒノキが加工しやすく優秀な材であるとともに、当地域では豊富な材であったためと考えられる。材の質にこだわる必要がなく、雑木の類で十分用をなすと思われる火付け木においても多用されていることから、ヒノキは遺跡周辺で容易に得ることができたと推測される。同じくヒノキ属に属するサワラが多用されているのも、同様の理由によるのであろう。ただし、建築部材と土木部材ではサワラの方がヒノキより優勢となっており、これは耐水性の点ではヒノキに勝るとされるサワラの利点を考慮した選択であった可能性がある。それらに比較すると、同じく針葉樹であり、今日では多用

第138表 木器類各器種の樹種選択

種別 器種	器具																												計															
	紙		漆		漆		漆		漆		漆		漆		漆		漆		漆		漆		漆		漆		漆			計														
	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆																
針葉樹																													1															
マツ属																														1														
常緑広葉樹系属																														13														
マツ属																														13														
常緑広葉樹系属																														13														
モミ属																														13														
ヒノキ科																														13														
ヒノキ属																														13														
ヒノキ																														229														
サクラ																														68														
アサギ																														94														
カシ																														3														
スズナギ																														1														
アスナギ																														54														
カヤ																														1														
モクレン属																														3														
イヌノキ																														1														
ケヤキ																														8														
アサギ																														4														
タリ																														52														
ブナ属																														1														
アサギ																														1														
コナラ属																														1														
クヌギ属																														28														
サクラ属																														1														
ナシ属科																														1														
トネリコ属																														1														
シロギ																														1														
ミツバウツギ																														1														
タケ属科																														1														
合計	39	1	3	1	1	1	1	8	3	36	9	4	1	2	1	2	2	19	1	1	10	1	1	2	1	2	0	0	64	62	3	15	4	33	22	65	8	54	71	7	4	34	1	593

されるスギがわずかに9例にとどまるのはやや意外であるが、往時においては、それだけヒノキ・サワラが好まれ、常用されたと受け止めることができる。

ところで、ヒノキ・サワラに次いで3番目に多いアスナロ属もまた、ヒノキ科に属し、同様の性質を備える材である。しかし、アスナロ属が58例に達するとする同定結果には、いくらか疑問がある。飛騨地域においては、アスナロ属は、高山市街地の南方に位置する位山（高山市一宮町）以南でしか自生が確認されず、それもヒノキほど顕著ではないとされている。古墳時代から古代にかけての遺跡周辺の植生が十分に明らかとなっていないとはいえ<sup>31)</sup>、往時においても、遺跡の位置する高山盆地ではヒノキほど容易に入手できる材ではなかった可能性が高い<sup>4)</sup>。したがって、本書においては、分析結果に従い、アスナロ属をヒノキとは区別したまま記載しておいたが、当時、そのような使い分けが行われたとは限らないことをお断りしておきたい。

一方、ヒノキを用いることをあえて避けたとみられる器種もある。特に顕著なのは鉄にみられる用材選択である。鉄ではヒノキは全く用いられず、クヌギ節が大半を占め、アサダとコナラ節がそれを補完する。これは、特に耐久力を必要とされる器具であることを考慮し、堅く強度に優れた材を選択した結果であろう。特にクヌギ節は、確認20例中、19例が鉄であり、残る1例も鉄素材として持ち込まれたとみられる割板であることから、古墳時代の鉄に限って選択された材であったと捉えることができる。なお、他地域で鉄の用材として常用されるアカガシ亜属は全くみられないものの、1個体のみ出土した泥除けに用いられている。

次に、建築部材ではクリを比較的多く用いる傾向が認められることも重視したい。柱根はすべてクリとの結果を得ており、柱根以外でも10例みられる。同様に、土木部材（杭）でも分析対象54個体の半数、27例に達している。第3章第4節にも記したように、古墳時代水田に関わる溝状遺構でも、古代水田に関わる溝状遺構でも、クリ材の杭は出土しており、時代を問わず同じ用途に使われたことが判明している。加工性の点では劣るものの、耐久性・耐水性に優れるというクリ材の性質を知り尽くした上での選択がなされたとみることができる。器具や器具部材の用材としてはほとんど選ばれていないことも、そのことを裏付ける。

挽物容器（漆器）ではケヤキが主体を占め、ブナ属がそれを補完する。この用材選択は、全国的傾向と軌を一にするものである。ケヤキは他の器種では円形曲物容器で1例みられるのみであり、ほぼ挽物容器に限って用いる材と認識されていたことが分かる。そのほか、珍しい材として、櫛のみにみられるイスノキを挙げることができる。イスノキは極めて強度が高くて割れにくく、櫛に用いるのにふさわしい材であるが、飛騨地域では自生しない。

当発掘区の出土木器類の樹種選択傾向について、以下のようにまとめることができる。

- ①全般に、ヒノキ属のヒノキ・サワラを多用する傾向が極めて顕著である。小型の器具から大型の建築部材まで、幅広い用途に用いている。
- ②柱や杭ではクリを選択する傾向が認められる。
- ③そのほかにも、鉄のクヌギ節・アサダ・コナラ節、泥除けのアカガシ亜属、挽物容器のケヤキ・ブナ属、櫛のイスノキなど、いくつかの器種では、用途にふさわしい材をあえて選んでいる。

では次に、野内遺跡におけるこのような樹種選択傾向を、周辺遺跡や他地域の事例と比較検討してみたい。

まず、古代以降の木器類については、飛騨地域では大がかりな樹種同定の実施例として、杉崎廃寺跡（飛騨市古川町）が知られている<sup>61</sup>。杉崎廃寺跡では、寺院存続期である白鳳時代から平安時代初頭に属するものを主体とする木器類800個体について実施している。その結果、多くは針葉樹を選択していること、なかでもヒノキ科ヒノキ属の使用が顕著であること、ただし柱材はいずれもクリであること、以上のような傾向が確認されている。野内遺跡の須恵器・灰釉陶器集中区域出土の木器類と共通する傾向を示していることと捉えることができる。下駄・杓子・箸・曲物容器にヒノキ属を多用するなど、器種ごとの樹種選択傾向も類似している。杉崎廃寺跡の事例と野内遺跡とでは確認器種や帰属時代幅に差異があることから単純に比較はできないものの、両遺跡の樹種同定結果から判断して、ヒノキ属を多用する一方で、柱材にはあえてクリを選択するというあり方が、古代の飛騨地域において広く共通する用材選択であった可能性は高いと思われる。

古墳時代については、飛騨地域には比較の対象となる事例はない。そこで、周辺地域との比較を試みる。榎田遺跡（長野県長野市）では、5世紀初頭から中世に至る455個体の木器類について、樹種同定が行われている<sup>62</sup>。特に注目されるのは、沼址SG3から出土した300個体余りの5世紀代の木器類であり、それらの中には鉄製U字形刃先を装着するタイプの曲柄鎌などがみられる。用材選択で特徴的なのは、鎌をはじめとする74個体の農具類中、クヌギ節が26個体、アサダが13個体、コナラ節が9個体を占め、この3樹種で過半数に達していることである。この用材選択は、野内遺跡の古墳時代木製農具にみられる傾向に類似する。特に注目されるのは、全国的にも農具としての用例が稀なアサダの選択例を共有することである。信州と同じく飛騨からは近い北陸地方の事例、例えば下老子佐川遺跡（富山県高岡市）の弥生時代後期の木製農具中にコナラ節・クヌギ節はあってもアサダはみられないことを念頭に置いたら<sup>71</sup>、このことは大いに強調してよいであろう。

信州地域と飛騨地域は、鎌に最も適した用材であるアカガシ亜属が自生しないなどの点で植生が共通しており、両地域では広く同様の選択がなされた可能性がある<sup>81</sup>。野内遺跡の古墳時代木製農具にみられる用材選択が、当時の信州から飛騨にかけての地域における典型的様相である可能性は小さくないであろう。

### 3 木取りの選択

本書では、木器類の木取り方法について、「板目」、「柾目」、「追柾目」、「芯去」、「芯持」、「半割り」、「みかん割り」、「横木取り」、以上の8類に分類している（第27表、第1分冊167頁）。第139表に判定結果の一覧を掲げる。対象とした909件（906個体）中、56%に当たる511件を芯去材が占めるが、これは主として、個体数の特に多い器種である箸・火付け木の大部分が芯去材であることを示すにすぎない。検討対象とすべきは、柾目取りか板目取りかの選択のあり方である。

板のような平たい形状の木製品の場合、材を取るに当たっては、柾目取りか板目取りかの選択を迫られることとなる。柾目取りは、年輪と直交して材を切り出すため、歩留まりは良くないものの取縮や変形の少ない優れた材を得ることができる。ちなみに、やや斜めに切り出した場合は追柾目取りとなる。これに対して、板目取りは、年輪に沿って材を切り出すため、得られた材は反りを生じやすいものの、歩留まりは良い。そのため一般に、高い質や強度を求められる製品には柾目材がふさわしいとされ、数を揃えることが優先される場合には板目材を選択することとなる。もちろん、森林資源が



そこで、より幅広い時期にわたる豊富な出土品に恵まれた事例に手掛かりを求めることとし、県内を代表する木器出土遺跡である柿田遺跡<sup>10)</sup>(可児市・可児郡御嵩町)に目を向けることとする。柿田遺跡では2万点を超える木器類が出土し、その時期幅は弥生時代前期から室町時代に至る。報告書では個々の個体について、各々の出土した遺構の属する時期を記載しているの、それを基に木取り選択の変遷を知ることができる。当遺跡と重なる時代を対象とし、本書で採用しているのと同じ木取り分類に従い、板状木器類の木取りを判定してみる。

まず、古墳時代については、前半では板目12個体、柀目25個体、追柀目3個体、後半では板目45個体、柀目64個体、追柀目21個体となり、柀目取り優位が確認される。続いて古代についても、板目52個体、柀目67個体、追柀目26個体との結果を得ることができ、やはり柀目取りの優位は維持されていると判断される。しかし、ここまでの結果から、時代が下るに従い、板目取りの占める割合が高くなってきていることも窺える。そのことを端的に示すのが、続く中世前期における変化である。中世前期の木器類では、板目70個体、柀目56個体、追柀目20個体という結果となり、ここで初めて板目取りが柀目取りを押さえて優勢となるのである。資料数に恵まれるとともに長期にわたる変遷を追うことが可能な柿田遺跡のような遺跡は限られるため、他遺跡との比較検討はここまでとせざるを得ないが、柀目取りが優位を占めるとするのは、県内の遺跡でも古代までにおいては、特に珍しくはない現象と言えよう。

以上から当遺跡の木器類にみられる木取りの傾向については、特に突飛なものではないと判断しておく。さらには、当遺跡の木器類には厳密な帰属時期が明らかでないものも多く、中世以降に下るものがある程度含まれているとみられるものの、それらの占める割合は、木器類の木取り選択の全体傾向に影響を及ぼすほど大きなものではないと判断してよいであろう。柀目取りの優位が顕著であるという、当遺跡の木器類にみられる木取り選択傾向は、それらの大半が古代までの時期に属することを示唆するように思えるのである。

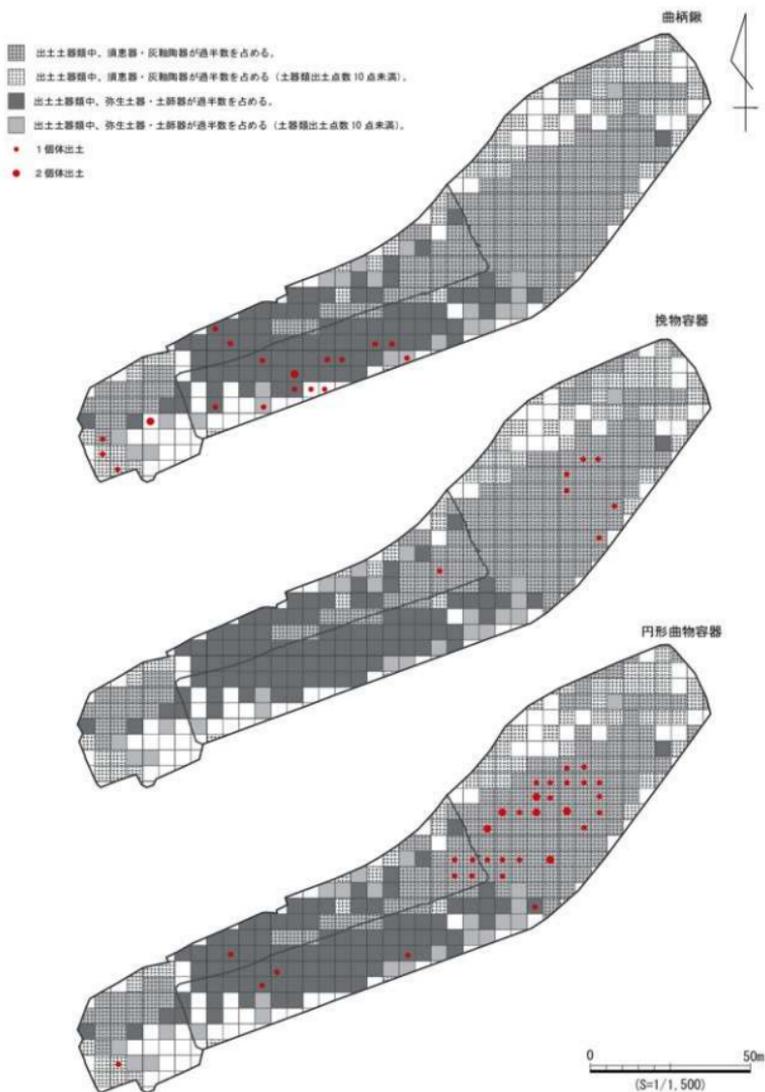
器種ごとにみてゆくと、器種によっては意識的に木取り方法を選んでいることが分かる。最も明確なのは、やはり鍔である。25個体中24個体が柀目ないし追柀目を選んでおり、板目は皆無である。前述のとおりクヌギ節・アサダ・コナラ節といった堅い材を選ぶとともに、木取りにおいても変形に強い柀目を選んでいるのであろう。その他の器種では、馬形で柀目18個体に対し板目1個体という極端な偏在が認められるのが注目される。馬形の場合には、特に強度が必要とされるとは思えないことから、それらが森林資源が豊富で贅沢な木取りを許された時代の所産であることを物語るものと受け止めた。なお、馬形が既存の板状の木製品からの二次加工品であったとしても、やはり柀目取り優位の時代に属することを示唆する点で違いはない。

#### 4 主要器種各論

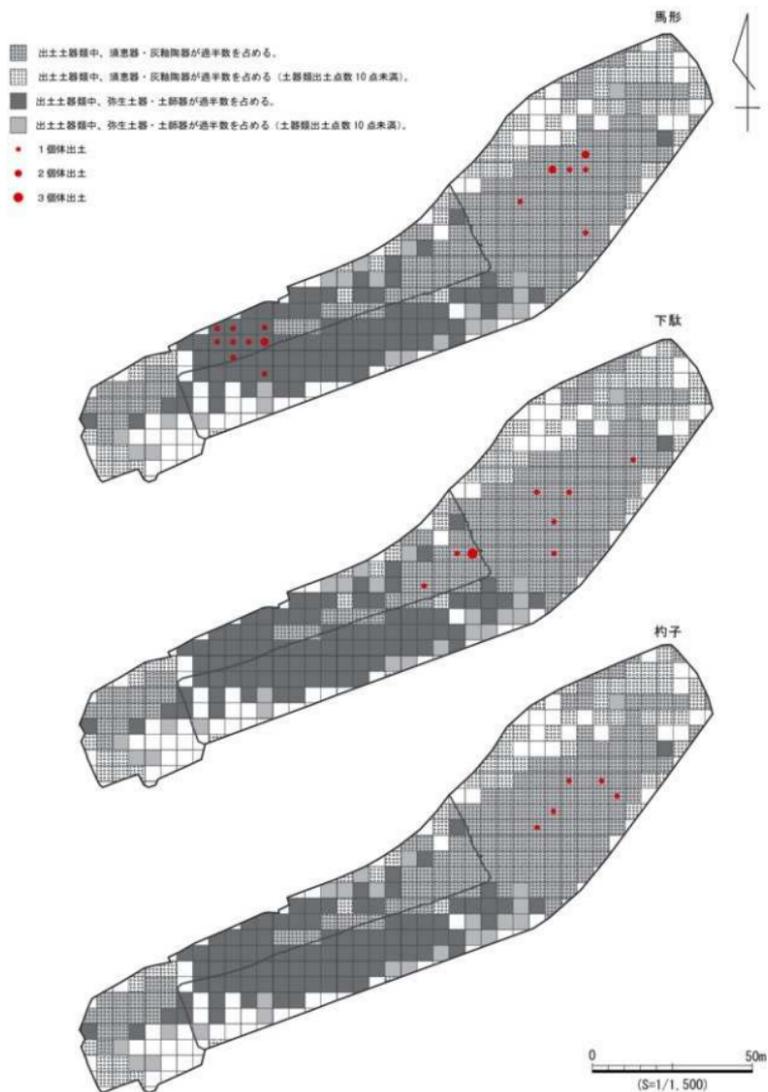
ここまでの検討結果を踏まえ、主要器種の使用年代等について、所見をまとめておく。すべての器種について明快な結論に至るわけではないが、現時点で収集し得る限りの情報をここに集約する。土器類の出土傾向を示した第9図に、主要器種の出土地点を重ねたものを掲載する(第236図・第237図)。

##### (1)「弥生土器・土師器集中区域」出土の器種

弥生土器・土師器集中区域でまとまった数が出土した器種は、鍔・楕円形曲物容器・割板である。



第236図 木器類主要器種の出土地点分布（1）



第237図 木器類主要器種の出土地点分布(2)

割板が存在することは、集落内に素材の板を製品に加工するような施設が存在したことを示唆する点で重要ではあるが、確認個体数が少ないため、これ以上追究しない。ここでは鋸を取り上げる。1個体のみ出土した泥除けについても鋸の一種とみなし、ここで併せて取り上げる。

#### 鋸

鋸は25個体確認した。弥生土器・土器器集中区域に偏る傾向が顕著である。分類可能な状態の21個体中、直柄鋸はわずか1個体にすぎず、20個体は曲柄鋸である。また、曲柄鋸は、確認し得る限りでは、すべてナスビ形鋸である。第3章第4節に記したように、野内遺跡のナスビ形鋸はA～F類に分類できる(第108図、第1分冊168頁)。すなわち、刃部全体が曲線的で、下膨れ形状となるA類(遺物番号1462・1463)、刃部上端の肩の部分が張り、側縁が直線的で、短く幅広なB類(遺物番号1465～1467)、刃部上端の肩の部分が張り、側縁が直線的で、細長いC類(遺物番号1468～1471)、刃部が分岐し複数の歯を持つD類(遺物番号1472～1474・1478)、刃部中央に透かし孔を持ち、下端に鉄刃装着用の加工が認められるE類(遺物番号1479)、極めて幅広で、下端に鉄刃装着用の加工が認められるF類(遺物番号1480)、以上の6類である。

これらの鋸は、いずれも飛騨地域では初めての出土例である。伊勢湾地方で創出され、東日本を中心とする広い地域で用いられたとされる東海系曲柄鋸<sup>11)</sup>を思わせる要素を備える個体が見当たらないことを、組成上の大きな特徴とする。また、北陸地方を中心に分布するとされる、軸部に柄孔を持つナスビ形鋸<sup>12)</sup>もみられない。その一方で、当遺跡のナスビ形鋸E類は、刃部にスリット状の透かし孔を持っており、そのような鋸は信州北部に分布域の中心を持つとされる<sup>13)</sup>。また、又鋸では四又鋸が多いのも当遺跡の特徴であるが、これも信州と共通する。前述のとおり、鋸の用材にアサダを選択することがあるのも信州と同じである。以上から、野内遺跡の古墳時代の鋸は、近隣地域の中では信州に類似する特徴を備えると判断する。

鋸の各個体について、土器類との伴関係から細かく年代を特定することは困難である。それでもナスビ形鋸については、木器類の中でも編年研究が進んでいる器種であることから、全国での既往の出土例に照らし、帰属時期を推定することが可能と判断する。当発掘区のナスビ形鋸には、帰属時期が弥生時代に遡ることが確実視される個体はない。木製の刃部をそのまま使用するA～D類と、刃部に鉄製の刃先を装着しての使用が想定されるE類・F類とでは、後者の方が新しいタイプであることに疑問の余地はないであろう。また、装着する刃先が小型で、それまでのナスビ形鋸の器形の特徴を多く残すE類と、笠状突起を痕跡程度にしか残さず、器形そのものが大きく変質しているF類とでは、後者の方が新しいとみてよい。暦年代で言えば、A～D類は古墳時代前期の3～4世紀代、E類は古墳時代中期の5世紀代、F類は古墳時代後期の6～7世紀頃に比定できるであろう<sup>14)</sup>。したがって、当発掘区で出土した鋸は、飛騨地域では初の出土例であるにとどまらず、当地域の古墳時代における木製農具の変遷を具体的に示す基本資料に位置付けることができる。

#### 泥除け

遺物番号1485の泥除けについては、周辺諸地域での出土例との比較から、ナスビ形鋸の大部分と同じ古墳時代前期に属するとみてよいであろう。しかし、泥除けはこの1個体のみしか出土せず、しかも当遺跡では、泥除けを装着可能な身幅の広い鋸は全く出土していない。さらに注目されることに、この個体の樹種は、樹種同定を実施した木器類全個体中、唯一のアカガシ亜属である。おそらく、他

所から持ち込まれた見本品のようなものと捉えるべきであり、当地域において古墳時代に同様の器具が広く普及したことを意味するわけではなからう。なお、この個体は、これまでのところ飛騨地域では唯一の出土例である。

## (2) 「須恵器・灰軸陶器集中区域」出土の器種

須恵器・灰軸陶器集中区域では、より多様多様な木器類が出土した。それらの中には、遺物番号1538(桶)、遺物番号274(容器蓋)など、中世以降に属することが確実に認められる個体が含まれることから、平安時代前半を前後する時期に属するとみて問題ない器種と、帰属時期がより新しいとみるべき器種が混在するものと判断される。ただし、当発掘区では、確認できた限りでは板材はすべて打割製材によるものであって、大型縦挽き鋸を使用した挽割製材の痕跡は全く確認されないことから、挽割製材普及後の中世後期以降に属するものは、あまり多くはないものと思われる。

この区域でまとまった数が出土したのは、挽物容器・円形曲物容器・組物容器・下駄・杓子・箸・火付け木・模造品・柱根・器具部材・端材である。以上のうち、主要な器種を取り上げ、所見をまとめておく。

### 挽物容器

須恵器・灰軸陶器集中区域で出土した器種のうち、帰属時期が中世に下る可能性の高いものとして挙げられるのが挽物容器である。当発掘区で確認した挽物容器は、すべて全面に黒漆を塗った漆器椀・皿である。掲載した8個体中、7個体では赤色漆絵が描かれている。また、これら7個体の木胎の樹種は、いずれもケヤキであり、赤色漆絵が描かれていない漆器皿(遺物番号1491)のみ、ケヤキではなくブナ属を用いている。

近年の四柳嘉章氏の研究によれば、漆器においては、伝統的用材のケヤキが鎌倉時代後期まで上質漆器の木胎に欠かせぬ材とされる一方で、平安時代後期以降、ブナがケヤキの代用品として普及し、用材が多様化する室町時代にはケヤキを抑えて主流となるとされる。また、赤色漆絵漆器が登場する時期は、12世紀末頃とされる<sup>15)</sup>。以上の研究動向を踏まえ、赤色漆絵を施すケヤキの椀・皿を主体とする当発掘区の漆器の帰属時期については、中世前期の鎌倉時代頃と捉えておきたい。なお、この挽物容器の検討結果から、須恵器・灰軸陶器集中区域出土の木器類のすべてが平安時代前半の灰軸陶器普及期までに属するとは限らず、帰属時期が中世にまで下るものが含まれることが再確認される。したがって、個体の属性そのものから帰属時期を明らかにできないもの、例えば器具部材などの中にも、古代ではなく中世以降に属するものが含まれる可能性は高いと思われる。

### 円形曲物容器

円形曲物容器は、飛騨地域では杉崎廃寺跡(飛騨市古川町)で出土しているものの、側板の断片のみであり、全形を窺うことのできる個体は見当たらない<sup>16)</sup>。遺物番号147・1507のような側板と底板が共に残存する個体は、飛騨地域では初めての出土例となる。

中世以降にも多い器種であるため、一般に古代と中世の製品を見分けるのは容易ではないとされている。しかし、当発掘区の出土品には、古代の円形曲物容器の特徴を窺うことができる。まず、底板と側板の結合方法に着目すると、底板周縁部に段差を設けて側板を載せ、樹皮紐で結合するタイプ、すなわち第3章第4節においてE類としたものがみられることに気付くが、これは古代に盛行したとされる結合方法である。また、木取り方法に着目すると、底板39個体中、柁目取りが24個体とほぼ3

分の2を占めており、柁目取りが優勢である。これも中世というよりは古代の製品に多い特徴である。さらに、底板は概して薄手の作りで、周縁の成形なども丁寧であるように見受けられる。これもまた、古代の製品の特徴とみてよいであろう<sup>17)</sup>。以上から、当発掘区の円形曲物容器については、古代の製品が大半を占めると捉えておく。ただし、第3章第4節にも記したように、個体間に大きな型式差が認められることから、一部の個体の帰属時期が中世以降に下る可能性はある。

#### 馬形

馬形の出土例としては、県内の遺跡では柿田遺跡<sup>18)</sup>に次いで2例目となる。律令制祭祀の体系化に密接に関わる祭祀具とされ、7世紀から9世紀にかけて全国的な広がりをみせるとされる<sup>19)</sup>。普及時期が比較的限定される器種であることから、当発掘区の馬形についても、それを大きく逸脱するとは考え難く、平安時代前半頃の遺物とみて問題ないであろう。先にも記したとおり、柁目取りの個体が多いことも傍証となる。なお、第137表及び第237図に明らかとなっており、出土地点が須志器・灰軸陶器集中区域に偏ることなく、広く散在しているのがやや奇異に思えるが、これは流れに投じるという馬形の使用上の特性のため、下流側の弥生土器・土師器集中区域まで流された個体が少なくなかったためと考えられる。

#### 下駄

当遺跡では下駄は15個体確認しているが、差歯下駄は1個体のみで、残る14個体は連歯下駄である。それらの帰属時期について、現研究段階では絞り込むのが難しい。第3章第4節では古墳時代に遡る可能性はないことを述べておいたが、ここでは近隣の事例に手掛かりを求め、さらに考察を進めたい。県内における中世までの主な既知事例を掲げる(第140表)。

飛騨地域では、当遺跡のD地区と杉崎庵寺跡で出土しているものの、年代推定の可能な事例に恵まれない。県内で比較の対象となるのは、古墳時代から中世後期に至る40個体の下駄が出土した柿田遺跡の事例である。柿田遺跡例では、当発掘区の主流である連歯下駄A類と同様の、歯の削り出しが台から連続し、歯は台形を呈し、歯が台に対して直立するという属性を備える連歯下駄は、中世前期にも中世後期にもみられる<sup>20)</sup>。

県外では、まず、北陸地方の事例に目を向けてみると、平安時代から中世後期に至る幅広い時代にわたりA類と同様の下駄が出土しているほか<sup>21)</sup>、当遺跡の連歯下駄B類(歯上端と台との境の部分が屈曲し歯が強く外側へ張り出すタイプ)と同様の下駄も散見される<sup>22)</sup>。さらに、『木器集成図録 近畿古代編』によれば、B類の有無については定かではないものの、A類と同様の特徴を備える連歯下駄は、近畿地方では平安時代にすでに普遍的にみられるようである<sup>23)</sup>。さらに、12世紀に属することが確実視される柳之御所遺跡(岩手県平泉町)の出土例<sup>24)</sup>を当遺跡の出土品と比較してみると、多くの個体は当発掘区のA類に相当し、型式上の大きな差異は認めたいことが確かめられる。

以上から、少なくともA類については、平安時代から中世後期に至る幅広い時代にみられるタイプと捉えてよいであろう。当発掘区の出土品については、出土地点とその周辺における土器類の組成との整合性を重視するならば、平安時代前半頃に位置付けることに無理はない。とはいえ、須志器・灰軸陶器集中区域では、中世以降に下る土器類・木器類もまた出土しているという状況も考慮する必要がある。したがって、当発掘区出土の下駄の帰属時期については、とりあえず、古く位置付ける場合には平安時代前半頃とみることが可能であるが、新しく位置付ける場合には中世後期にまで下る可

第140表 県内遺跡での下駄の出土例

遺跡名	遺物番号	出土地点	型式	平面形	前意の位置	前意の削り出し方	歯の形状	歯の立ち方	時代・時期	
野内遺跡D地区	65	竪立柱建物跡5	連歯下駄	—	—	台から連続	—	直立	中世前期	
	155	遺物包含層	差歯下駄	隅丸長方形	—	—	—	—	—	
	156	遺物包含層	連歯下駄	長方形	中央	台から連続	—	直立	—	
杉崎院寺跡	137	遺物包含層	連歯下駄	隅丸長方形	中央	台から連続	方形	直立	中世以降	
	138	遺物包含層	連歯下駄	隅丸長方形	中央	台から連続	—	直立	中世以降	
	139	遺物包含層	連歯下駄	隅丸長方形	中央	台から連続	方形	直立	中世以降	
	140	遺物包含層	連歯下駄	隅丸長方形	中央	台から連続	方形	直立	中世以降	
	141	遺物包含層	連歯下駄	隅丸長方形	中央	台から連続	方形	直立	中世以降	
松遊跡	—	区画溝	連歯下駄	楕円形	中央	台から連続	—	直立	中世前期	
曾根八千町遺跡	286	SD12	連歯下駄	隅丸長方形	片寄る	台側縁内側から削り出す	台形	外開き	古墳後期	
柿田遺跡	6301	NR95・SD208	連歯下駄	隅丸長方形	片寄る	台から連続	方形	直立	古代	
	6302	NR48	連歯下駄	隅丸長方形	片寄る	台から連続	方形	直立	古墳時代	
	6303	SK103	連歯下駄	隅丸長方形	片寄る	—	—	—	—	
	6304	SD107	連歯下駄	隅丸長方形	片寄る	台から連続	方形	外開き	古墳後半	
	6305	遺物包含層	連歯下駄	楕円形	片寄る	—	—	—	—	
	6306	NR43	連歯下駄	楕円形	中央	台から連続	台形	直立	中世前期	
	6307	SE1	連歯下駄	楕円形	中央	台から連続	台形	直立	中世前期	
	6308	SD60	連歯下駄	隅丸長方形	中央	台から連続	方形	直立	中世前期	
	6309	遺物包含層	連歯下駄	楕円形	中央	台から連続	—	—	—	
	6310	SW61	連歯下駄	隅丸長方形	中央	台から連続	台形	直立	中世前期	
	6311	SE1	連歯下駄	楕円形	中央	台から連続	方形	直立	中世前期	
	6312	P754	連歯下駄	楕円形	中央	台から連続	台形	直立	—	
	6313	NR95	連歯下駄	隅丸長方形	中央	台から連続	台形	直立	—	
	6314	SK53	連歯下駄	楕円形	中央	台から連続	台形	直立	—	
	6315	SW43	連歯下駄	隅丸長方形	中央	台側縁内側から削り出す	台形	直立	中世後期	
	6316	NR44	連歯下駄	楕円形	中央	台から連続	台形	直立	古代?	
	6317	SM284	連歯下駄	楕円形	中央	台から連続	台形	直立	中世後期	
	6318	SD204	連歯下駄	楕円形	中央	台側縁内側から削り出す	台形	直立	中世後期	
	6319	SW43	連歯下駄	楕円形	中央	台から連続	台形	直立	中世後期	
	6320	SD18	連歯下駄	隅丸長方形	中央	—	—	—	—	
	6321	SK52	連歯下駄	—	中央	—	—	—	—	
	6322	SK32	連歯下駄	隅丸長方形	中央	—	—	—	—	
	6323	SK52	連歯下駄	—	—	—	—	—	—	
	6324	NR95・SD208	連歯下駄	隅丸長方形	—	—	台から連続	—	直立	古代
	6325	SD60	連歯下駄	楕円形	—	—	—	—	—	中世前期
	6326	NR43	連歯下駄	—	—	—	—	—	—	中世前期?
	6327	SW60	連歯下駄	隅丸長方形?	—	—	台との境が屈曲する	台形	直立	中世前期
	6328	NR95	連歯下駄	—	—	—	台から連続	—	—	—
	6329	NR44	連歯下駄	楕円形	—	—	台から連続	台形	直立	古代?
	6330	SD99	連歯下駄	楕円形	—	—	台から連続	台形	直立	—
	6331	SD155	連歯下駄	長方形	—	—	—	—	—	中世前期
	6332	SM284	差歯下駄	楕円形	—	—	—	台形	直立	中世後期
	6333	SM284	連歯下駄	楕円形	—	—	台から連続	台形	直立	中世後期
6334	SW43	—	—	—	—	—	台形	—	中世後期	
6335	遺物包含層	—	—	—	—	—	台形	—	—	
6336	SD18	—	—	—	—	—	台形	—	中世前期	
6337	NR57	—	—	—	—	—	台形	—	中世前期	
6338	SE1	—	—	—	—	—	台形	直立	中世前期	
6339	遺物包含層	—	—	—	—	—	台形	—	—	
6340	SE1	—	—	—	—	—	—	—	中世前期	

- 1 近世以降の事例は省略した。
- 2 「—」は「不明」を意味する。
- 3 時代・時期については報告書での記載を参照したが、一部、推定所見を記した箇所がある(「?」を付記)。
- 4 太字は、野内遺跡で主体を占める連歯下駄A類と共通する属性を示す。
- 5 出典は以下の通りである。

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』  
 古川町教育委員会1998『杉崎院寺跡発掘調査報告書』  
 大垣市教育委員会1997『松遊跡現地説明会資料』  
 大垣市教育委員会1997『曾根八千町遺跡』  
 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『柿田遺跡』

性能も排除できないと考えておく。今後の調査の進展による、検証に耐え得る良好な資料の蓄積を待つこととしたい。

### 杓子

杓子は、飛騨地域では杉崎庵寺跡における出土例が知られている<sup>25)</sup>。それらの多くは、寺院の伽藍の西を南北に限る溝状遺構（排水施設）から出土しており、古代に属する遺物であることに疑問の余地はほとんどない。杉崎庵寺跡の杓子には、当遺跡のA類（身の先端が丸みを帯びて半円状をなすもの）とB類（身の先端がやや角ばるもの）が共存するなど、当発掘区の出土品との間に共通点が認められる。

以上のような近隣遺跡の事例との間にみられる類似と、確認した6個体すべてが須恵器・灰軸陶器集中区域で出土するという極端な偏在を示す器種であることを併せ考え、当遺跡の杓子は、灰軸陶器普及期の平安時代前半頃に属すると判断する。

### 箸

破片数で298点確認したが、第3章第4節に掲げた出土地点一覧（第30表、第1分冊179頁）にも明らかとなっており、出土地点が須恵器・灰軸陶器集中区域に偏る傾向が極めて顕著である。311SDでまとまった数が出土しており、この遺構では輸入磁器や山茶碗など中世に属する土器類もわずかながら出土しているため、そのことを重視するならば、帰属時期が中世に下る可能性を視野に入れることとなる。しかし、出土土器類の大半が須恵器で占められ、灰軸陶器さえわずかしき含まれない321SD・324SDでも出土例がみられることと、墓339SKにおいて当発掘区では最も古い部類に属する灰軸陶器碗（遺物番号930）と共に出土していることから、やはり、灰軸陶器の普及期かそれに先立つ時期に使用が始まっていたとみるべきであろう。

なお、箸状の木製品は、一般に9世紀頃に全国的に普及するとされており<sup>26)</sup>、以上の検討結果は全校的趨勢に矛盾しない。ちなみに飛騨地域では、古代の箸と思われるものは、杉崎庵寺跡でも出土している<sup>27)</sup>。

### 火付け木

破片数で2,401点確認しており、当発掘区では確認数の最も多い器種である。須恵器・灰軸陶器集中区域の広い範囲で出土しているものの、第3章第4節に掲げた出土地点一覧（第31表、第1分冊180頁）に明らかとなっており、321SD・324SDといった、出土遺物の大半を須恵器が占め、灰軸陶器があまり含まれない遺構からも多数出土していることから、灰軸陶器の普及期かそれに先立つ時期に使用が始まっていた可能性が高い。当遺跡のD地区で掘立柱建物跡の柱穴などから出土した同様の器具については中世前期頃のものとして結論づけられているが<sup>28)</sup>、当発掘区の出土品については、平安時代前半までに位置付けられる古代の遺物と捉えて問題ないと判断する。

### 端材

本書で端材と呼んでいるのは、厚み調整や面加工を経た製品の板や角材など的一端を、長さ調整のために切り落としたことにより生じた木片である。したがって、原木を割板に加工した際に生じたものや、割板を製品の板や角材に加工した際に生じたものは除外している。第3章第4節にも記したように、建築部材由来とみられるものと、器具ないし器具部材由来とみられるものが混在する。

掲載した端材は、すべて須恵器・灰軸陶器集中区域で出土したものである。本書に掲載した端材は確認個体のすべてではないため、未掲載品にまで視野を広げれば弥生土器・土師器集中区域での出土

例が皆無とまでは言えないものの、それでも須恵器・灰釉陶器集中区域に偏る傾向は否定できない。関連して、須恵器・灰釉陶器集中区域では、端材はまとまった数が確認されている一方で、割板や割板残材はわずかしか出土していないことにも注目したい。

以上から、集落内で器具や部材の長さ等の微調整作業を日常的に行うようになったのは古代以降であること、にもかかわらず、その時期に本格的な製品加工施設が集落内やその周辺に営まれることはなかったこと、これら2点を指摘することができる。

## 5 野内遺跡出土木器類の特徴

ここまでの検討結果をまとめる。

- ①弥生土器・土師器集中区域の出土品と須恵器・灰釉陶器集中区域の出土品との間に器種組成上の差異が認められることから、当発掘区の出土木器類は、出土区域を手掛かりとし、帰属時期を異にする2群に大別することができる。
- ②弥生土器・土師器集中区域で出土した木器類には、弥生時代に遡ることが確實視される個体はみられず、古墳時代前期以降の製品で占められると判断される。
- ③古墳時代に属する器種には、鉢・楕円形曲物容器・割板がある。鉢には古墳時代前期・中期・後期の残存状態良好な個体が含まれており、古墳時代における当地域の木農具の変遷を具体的に示す基本資料に位置付けることができる。
- ④須恵器・灰釉陶器出土区域で出土した木器類には、平安時代前半頃に属するとみられるものが多く、基本的には古代の遺物が大半を占めると判断される。ただし、帰属時期が中世以降に下ることが確實視される個体も含まれることから、すべてが古代の遺物というわけではないことに注意を要する。
- ⑤平安時代前期頃に属する器種には、円形曲物容器・馬形・杓子・箸・火付け木・柱根・端材がある。いずれも当地域の古代の木器類を代表する基本資料に位置付けることができる。端材が含まれることから、古代以降、集落内で器具や部材の長さ等の微調整作業が日常的に行われたとみられる。
- ⑥中世以降に属する器種としては、桶・挽物容器などを挙げることができる。下駄についても、その可能性があるほか、多数出土している器具部材の中にも、同様の可能性を考えるべきものも含まれるとみられる。
- ⑦弥生土器・土師器集中区域と須恵器・灰釉陶器集中区域の両方で多数出土したものには、建築部材・土木部材がある。これは、いずれの時期においても木造建築物が建てられ、また、水流制御等のための造作が行われたことを示す。
- ⑧用材については、いずれの時期においてもヒノキを多用する傾向が認められ、主として周辺で入手できる材を用いたものとみられる。ただし、櫛のイスノキ、泥除けのアカガシ亜属といった飛騨地域では自生しないとされる材もわずかながら確認される。
- ⑨そのほかにも特定の器種では用途にふさわしい材を選んでおり、器種ごとの用材選定に明確な基準が存在したことが窺える。古墳時代の銀におけるクスギ節・アサダ・コナラ節、中世の挽物容器におけるケヤキがそれに該当し、さらに、柱や杭では、時代を問わずクリを比較的多く

選択する傾向が認められる。

④木取りについては、板状の材を得る場合、いずれの時期においても板目取りより柁目取りを選択している。特に強度を必要としない器種にもそうした傾向が認められることから、当発掘区の出土木器類の大部分が森林資源の豊富な古代頃までの所産であることが窺える。

⑤強度を必要とされる鉢では柁目取りを選ぶなど、特定の器種では意識的に木取り方法を選択していることも明らかである。いずれの時期においても、木取りの選択について基準が存在したことが窺える。

補足するなら、まず、切り倒しただけで加工が施される前の段階の伐採木が出土していないことを挙げるべきであろう。すなわち、原木に打割製材を施して割板への加工を行う製材所のような大規模な加工施設は、集落内にも、その周辺にも、存在しなかったと判断されるのである。関連して、未製品がほとんど確認されていないことに注目したい<sup>29)</sup>。これらのことが示唆するのは、野内遺跡の集落内やその周辺では木器類の集中的な生産は行われておらず、この集落が集落外へ広く製品を供給する生産拠点として機能することはなかったということである。これは、古墳時代、古代以降のいずれにおいても言えることである。当遺跡で出土した木器類のほとんどは、この集落で消費するために他所から持ち込まれたか、必要に応じて集落内で自給自足的に製作されたものであるとみなすことができる。

以上も念頭に置き、それら集落で消費された木器類を改めて眺めてみると、樹種と木取りの選択に関する基準の存在が認められるにとどまらず、器種によっては形状や製作技法にある程度の均質性を窺うことも可能である。例を挙げれば、古墳時代の鉢、古代の円形曲物容器・馬形・杓子・箸、そして中世の挽物容器などに、そうした傾向を見て取ることができる。このことから、木器類のうち、ある程度の複雑さを備えた器種については、素人の手になるものではなく、木器製作に慣れた集団による製品であったと考えたい。その一方で、製作面での専門性が低く、製品とさへ呼び難い火付け木や土木部材などもまた大量に存在することは、集落内の一般住人による活発な樹木利用を示すものと捉えられよう。古代以降における端材の存在も、集落内における簡単な器具の製作や調整・転用等の工作を示唆するものであり、同様の文脈で捉えるべき事象と判断する。

#### 第5章 第1節 注

- 1) 本節での考察をはじめ、本書に掲載した木器類の報告については、山田昌久氏（首都大学東京）から賜った多岐にわたる御教示を拠り所とした部分が多い。特に記して感謝の意を表する。
- 2) 出土した木器類のうち、実測図を掲載した910個体を主な検討対象としている。第3章第4節に記したとおり、本書では部材・加工材や「〇〇状木製品」以外、すなわち器種名を特定できた器具については、特に個体数の多い箸・火付け木を除き、ほぼすべての確認個体を掲載しているので、この方針により木器類全体の検証に支障を来すことはないと考えられる。
- 3) 第4章第1節に掲載した花粉化石群集の分析結果では、ヒノキとアスナロ属を含むヒノキ科の存在自体、明らかとなっていない。
- 4) 飛騨地域の植生については、大森清孝氏（飛騨生熊調査研究室）と中島照雅氏（高山市林務課）から御教示を賜った。なお、大森氏からは、遺跡付近を流れる川上川は位山に源を持つことから、位山で伐採されたアスナロ属の材が水源により遺跡付近にまで運ばれた可能性はあるのではないかとの御指摘を受けた。

- 5) 古川町教育委員会1998『杉崎廃寺跡発掘調査報告書』113～145頁、及び付編。
- 6) 長野県埋蔵文化財センター1999『榎田遺跡』第2分冊175～205頁、363～391頁。
- 7) 財団法人富山県文化振興財団2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』第五分冊327～336頁。
- 8) ただし、野内遺跡では、花粉化石群の分析において、アカガシ亜属の花粉が検出されている。第4章第1節を参照のこと。
- 9) 前掲注5) 文献と同じ。
- 10) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『柿田遺跡』。
- 11) 樋上昇2000「3～5世紀の地域間交流—東海系曲柄鉢の波及と展開—」『日本考古学』第10号など。
- 12) 深堀茜1999「北陸の木製農具集成(1)」『富山考古学研究』第2号など。
- 13) 前掲注11) 文献。
- 14) 鋳をはじめとする木製農具類の年代観については、山田昌久氏(首都大学東京)から御教示を賜った。
- 15) 漆器の用材と加飾の変遷については、下記の文献を参照した。
  - ①四柳嘉章2006『ものと人間の文化史131-I 漆I』法政大学出版局
  - ②四柳嘉章2009『漆の文化史』岩波書店
- 16) 前掲注5) 文献所載の遺物160～162番。
- 17) 円形曲物容器の年代観については、山田昌久氏(首都大学東京)と鈴木正貴氏(愛知県埋蔵文化財センター)から御教示を賜った。
- 18) 前掲注10) 文献。同書には19個体の馬形を掲載している(遺物6773～6791番)。
- 19) 箕澤一郎1996『日本の美術361 まじないの世界II(歴史時代)』至文堂、41～44頁など。
- 20) 第140表にも示したように、遺物6307番・6317番・6319番などが当発掘区の連南下駄A類に類似する。詳しくは、前掲注10) 文献を参照されたい。
- 21) 北陸中世土器研究会1996『飾る・遊ぶ・祈るの木製用具』を参照した。該当する事例のうち、貝田遺跡(石川県羽咋郡富喜来町)出土例は12世紀中葉に位置付けられている。なお、同書所収の、岩田隆1986「中世遺跡出土の下駄」及び、四柳嘉章・下村好美1996「能登の木製用具 下駄の研究手法と木製品にみる中世の民間信仰」では、資料集成と考察がなされている。
- 22) 前掲注21) 文献所載の気多社僧坊群(石川県羽咋市寺家町)出土例(時代不明)、梅原胡堂堂遺跡(富山県西礪波郡福原町)出土例(中世後期)に、当発掘区の連南下駄B類に似るものがみられる。
- 23) 奈良国立文化財研究所1985『木器集成因縁 近畿古代篇』所載の2214番(平城京左京一条三坊出土、9世紀前半)、2218番(平城宮出土、8世紀後半)、2309番(滋賀県鴨志遺跡出土、9世紀後半～10世紀前半)など。
- 24) 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995『柳之御所跡』所載の遺物583～593番、1149～1157番など。
- 25) 前掲注5) 文献所載の遺物142～148番。
- 26) 秋田裕毅2002『ものと人間の文化史104 下駄 神のはきもの』法政大学出版局、275頁。
- 27) 前掲注5) 文献所載の遺物152～159番。ただし、154番は下端が炭化しており、火付け木の可能性がある。
- 28) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』所載の遺物14番など。
- 29) 未製品と断定できるものはほとんどみられないが、可能性のあるものとして、加工途上に見える遺物番号878(板状木製品)、枅穴を作りかけている遺物番号1821(建築部材)などを挙げることができる。

第141表 木器類の属性一覧(1)

遺物 番号	種別	細分1	細分2	細分3	出土地点	層位	出土地点 K号 S: 遺物部・ 民俗部 集中区域 Y: 弥生土 部・土師部 集中区域	木取り	種類	測定実施年度		
										17 年度	18 年度	21 年度
873	器具	網	曲柄網		1067M	—	Y	横目	クヌギ			1
874	器具	網	曲柄網		1067M	—	Y	横目	クヌギ			1
1462	器具	網	曲柄網	ナスビ形網A類	13丁	Y	Y	横目	クヌギ			1
1463	器具	網	曲柄網	ナスビ形網A類	17丁	K	Y	横目	クヌギ			1
1464	器具	網	曲柄網		14丁	Y	—	横目	クヌギ			1
1465	器具	網	曲柄網	ナスビ形網B類	19丁	Y	—	横目	クヌギ			1
1466	器具	網	曲柄網	ナスビ形網B類	16丁	K	Y	横目	クヌギ			1
1467	器具	網	曲柄網	ナスビ形網B類	15丁	—	Y	横目	クヌギ			1
1468	器具	網	曲柄網	ナスビ形網C類	17丁	K	Y	横目	クヌギ			1
1469	器具	網	曲柄網	ナスビ形網C類	19丁	I	—	横目	クヌギ			1
1470	器具	網	曲柄網	ナスビ形網C類	16丁	K	Y	横目	クヌギ			1
1471	器具	網	曲柄網	ナスビ形網C類	20丁	K	S	横目	クヌギ			1
1472	器具	網	曲柄網	ナスビ形網D類	17丁	K	Y	横目	アサギ			1
1473	器具	網	曲柄網	ナスビ形網D類	21丁	I	S	横目	クヌギ			1
1474	器具	網	曲柄網	ナスビ形網D類	14丁	Y	Y	横目	クヌギ			1
1476	器具	網	曲柄網	ナスビ形網E類	21丁	K	S	横目	クヌギ			1
1479	器具	網	曲柄網	ナスビ形網E類	12丁	Y	Y	直根目	クヌギ			1
1480	器具	網	曲柄網	ナスビ形網F類	14丁	Y	—	横目	コナラ			1
1481	器具	網	曲柄網		15丁	Y	Y	横目	クヌギ			1
1484	器具	網	曲柄網	曲柄(双柄)	15丁	Y	Y	芝	アサギ			1
1485	器具	網	曲柄網	平網	14丁	S	Y	横目	クヌギ			1
1475	器具	網	曲柄網		20丁	K	Y	横目	アサギ			1
1476	器具	網	曲柄網		20丁	K	S	横目	アサギ			1
1477	器具	網	曲柄網		21丁	K	S	横目	アサギ			1
1482	器具	網	曲柄網		17丁	K	—	横目	クヌギ			1
1485	器具	浮網?			21丁	K	S	横目	アサギ少部属			1
1486	器具	出下駄			7丁	S	—	直根目	ヒノキ			1
1487	器具	出下駄			5丁	S	—	横目	ヒノキ			1
887	器具	釣物器			1067M	—	Y	横目	サワラ			1
290	器具	釣物器	漆器類?		3115D	—	S	横木取り	ケヤキ			1
291	器具	釣物器	漆器類?		3115D	—	S	横木取り	ケヤキ			1
1488	器具	釣物器	漆器類		5丁	E	S	横木取り	ケヤキ			1
1489	器具	釣物器	漆器類?		6丁	E	S	横木取り	ケヤキ			1
1490	器具	釣物器	漆器類		北東部土師地区	—	S	横木取り	ケヤキ			1
1491	器具	釣物器	漆器類		10丁	S	S	横木取り	アサギ			1
1492	器具	釣物器	漆器類		5丁	E	S	横木取り	ケヤキ			1
1493	器具	釣物器	漆器類		5丁	E	S	横木取り	アサギ			1
888	器具	櫛形曲物器			1067M	—	Y	横目	ヒノキ			1
1498	器具	曲物器	櫛形曲物器		20丁	K	Y	横目	アサナ川			1
1499	器具	曲物器	櫛形曲物器		20丁	K	Y	直根目	ヒノキ			1
88	器具	曲物器	円形曲物器		1254T	横土	S	横目	ヒノキ			1
147	器具	曲物器	円形曲物器	A類	1255T	横土	S	横目	ヒノキ			1
146	器具	曲物器	円形曲物器	B類	3115D・3065T	直(筒状)	S	横目	アサナ川			1
298	器具	曲物器	円形曲物器	A類	1256M	—	S	横目	ケヤキ			1
299	器具	曲物器	円形曲物器	A類	1256M	—	S	横目	ヒノキ			1
685	器具	曲物器	円形曲物器		10615D	—	S	横目	ヒノキ			1
686	器具	曲物器	円形曲物器	A類	10615D	—	S	横目	ヒノキ			1
1500	器具	曲物器	円形曲物器	A類	8丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1501	器具	曲物器	円形曲物器	A類	7丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1502	器具	曲物器	円形曲物器	A類	9丁	E	S	横目	アサナ川			1
1503	器具	曲物器	円形曲物器	A類	7丁	E	S	横目	スギ			1
1504	器具	曲物器	円形曲物器	A類	5丁	E	S	横目	アサナ川			1
1505	器具	曲物器	円形曲物器	A類・B類	7丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1506	器具	曲物器	円形曲物器	B類	6丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1507(1組)	器具	曲物器	円形曲物器	B類	11丁	Y	Y	直根目	ヒノキ			1
1508	器具	曲物器	円形曲物器	B類	8丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1509	器具	曲物器	円形曲物器	B類	17丁	K	Y	横目	ヒノキ			1
1510	器具	曲物器	円形曲物器	B類	15丁	Y	Y	横目	ヒノキ			1
1511	器具	曲物器	円形曲物器	B類	6丁	E	S	直根目	ヒノキ			1
1512	器具	曲物器	円形曲物器	B類	11丁	Y	Y	直根目	アサナ川			1
1513	器具	曲物器	円形曲物器	C類	9丁	E	S	横目	アサナ川			1
1514	器具	曲物器	円形曲物器	D類	12年度産品	—	S	横目	ヒノキ			1
1515	器具	曲物器	円形曲物器	E類	5丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1516	器具	曲物器	円形曲物器	E類	6丁	E	S	横目	アサナ川			1
1517	器具	曲物器	円形曲物器	F類	7丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1518	器具	曲物器	円形曲物器	F類	20丁	K	S	直根目	ヒノキ			1
1519	器具	曲物器	円形曲物器	F類	7丁	E	S	横目	アサナ川			1
1520	器具	曲物器	円形曲物器	F類	7丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1521	器具	曲物器	円形曲物器	F類	8丁	E	S	横目	スギ			1
1522	器具	曲物器	円形曲物器	F類	7丁	E	Y	横目	ヒノキ			1
1523	器具	曲物器	円形曲物器	F類	7丁	E	S	直根目	ヒノキ			1
1524	器具	曲物器	円形曲物器	F類	6丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1525	器具	曲物器	円形曲物器	F類	7丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1526	器具	曲物器	円形曲物器	F類	9丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1527	器具	曲物器	円形曲物器	F類	7丁	E	S	横目	ヒノキ			1
1528	器具	曲物器	円形曲物器	F類	16丁	K	Y	直根目	ヒノキ			1
1529	器具	曲物器	円形曲物器	F類	6丁	E	S	横目	ヒノキ			1

第142表 木器類の属性一覧(2)

遺物番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点区分 S:須恵町・ 民間部 集約中区域 Y:弥生土器 土器部 集約中区域	本取り	種類	測定実施年度		
										17年度	18年度	20年度
1530	器具	動物容器	円形動物容器		Rシ	II	S	横目	ヒノキ			1
1531	器具	動物容器	円形動物容器		Rシ	II	S	横目	ヒノキ			1
147 (備前)	器具	動物容器	円形動物容器	A類	1255T	横上	S	横目	ヒノキ			1
183	器具	動物容器	動物燗飯		1252T~1253T	横上(新)	S	横目	ヒノキ			1
206	器具	動物容器	動物燗飯		1250T	—	S	横目	ヒノキ			1
1807 (備前)	器具	動物容器	円形動物容器	自然	芝東部土器出土区	—	S	横目	ヒノキ			1
1532	器具	動物容器	動物燗飯		9シ	II	S	横目	ヒノキ			1
1533	器具	動物容器	動物燗飯		9シ	II	S	横目	ヒノキ			1
1534	器具	動物容器	動物燗飯		9シ	II	S	横目	ヒノキ			1
1535	器具	動物容器	動物燗飯		9シ	II	S	横目	ヒノキ			1
1536	器具	動物容器	動物燗飯		6シ	II	S	横目	ヒノキ			1
1494	器具	動物容器	動物燗飯		6シ	II	S	横目	アスナロ属			1
1495	器具	動物容器	動物燗飯		4コ	II	—	追横目	ヒノキ			1
1496	器具	動物容器	動物燗飯		5コ	II	S	横目	アスナロ属			1
1497	器具	動物容器	動物燗飯		5コ	II	S	横目	アスナロ属			1
1538	器具	動物容器	動物燗飯		4コ	II	S	横目	ヒノキ			1
687	器具	柄杓	柄		10615B	—	S	芝志	ヒノキ			1
1537	器具	柄杓	柄		Rシ	II	S	芝志	ヒノキ			1
274	器具	容器	器		1925B	U	S	横目	ヒノキ			1
145	器具	香炉			1255T	横上	S	横目	ヒノキ			1
1539	器具	釜			16フ	KT	Y	横目	サワウガ			1
71	器具	形代	馬形		1253T	横上	S	横目	アスナロ属			1
882	器具	形代	馬形		10673B	—	Y	横目	ヒノキ			1
423	器具	形代	馬形		3215B	—	S	横目	ヒノキ			1
688	器具	形代	馬形		10615B	—	S	横目	ヒノキ			1
689	器具	形代	馬形		10615B	—	S	横目	ヒノキ			1
690	器具	形代	馬形		10615B	—	S	横目	ヒノキ			1
691	器具	形代	馬形		10615B	—	S	横目	アスナロ属			1
918	器具	形代	馬形		10749C	—	S	横目	ヒノキ			1
1540	器具	形代	馬形		16フ	KT	Y	横目	アスナロ属			1
1541	器具	形代	馬形		16フ	KT	Y	横目	ヒノキ			1
1542	器具	形代	馬形		16フ	KT	Y	横目	ヒノキ			1
1543	器具	形代	馬形		17フ	KDT	Y	横目	ヒノキ			1
1544	器具	形代	馬形		6コ	—	S	横目	ヒノキ			1
1545	器具	形代	馬形		12年度試験品18	—	Y	横目	サワウガ			1
1546	器具	形代	馬形		16フ	KT	Y	横目	ヒノキ			1
1547	器具	形代	馬形		16フ	KDT	Y	横目	アスナロ属			1
1548	器具	形代	馬形		6シ	—	S	横目	ヒノキ			1
1549	器具	形代	馬形		17フ	KDT	Y	横目	ヒノキ			1
1550	器具	形代	馬形		17フ	I	Y	横目	ヒノキ			1
1551	器具	形代	馬形		17フ	KT	Y	横目	ヒノキ			1
1552	器具	形代	馬形		6シ	—	S	横目	アサ			1
74	器具	形代	動物形		1255T	横上	S	芝志	ヒノキ			1
1553	器具	柄杓			7コ	—	S	追横目	ヒノキ			1
25	器具	下駄	渡舟下駄A類		1255T	横上	S	横目	ヒノキ			1
141	器具	下駄	渡舟下駄B類		1255T	横上	S	横目	ヒノキ			1
142	器具	下駄	渡舟下駄A類		1255T	横上	S	横目	ヒノキ			1
144	器具	下駄	渡舟下駄		1255T	横上	S	横目	ヒノキ			1
292	器具	下駄	渡舟下駄		3115B	—	S	横目	アスナロ属			1
1554	器具	下駄	渡舟下駄A類		7コ	—	S	横目	アスナロ属			1
1555	器具	下駄	渡舟下駄A類		4ケ	—	S	横目	ヒノキ			1
1556	器具	下駄	渡舟下駄A類		7シ	—	S	横目	ヒノキ			1
1557	器具	下駄	渡舟下駄A類		芝東部土器出土区	—	S	横目				1
1558	器具	下駄	渡舟下駄A類		芝東部土器出土区	—	S	横目	ヒノキ			1
1559	器具	下駄	渡舟下駄		12年度試験品21	—	—	横目				1
1560	器具	下駄	渡舟下駄		12年度試験品8	—	—	横目				1
1561	器具	下駄	渡舟下駄		12年度試験品3	—	—	横目				1
1562	器具	下駄	渡舟下駄		7コ	—	S	横目	アスナロ属			1
143	器具	下駄	渡舟下駄		1255T	横上	S	芝志	アスナロ属			1
1563	器具	下駄	渡舟下駄		7コ	—	S	芝志	ヒノキ			1
1965 (備前)	器具	紡錘車	紡輪		13フ	Y	Y	横目	アスナロ属			1
1966	器具	紡錘車	紡輪		5ケ	—	S	横目	アスナロ属			1
1965 (備前)	器具	紡錘車	軸		13フ	Y	Y	芝志	野黍類			1
1967	器具	紡錘車	軸		7コ	—	S	芝志	アスナロ属			1
1568	器具	杓子			16フ	KT	Y	芝志	ユウカ類			1
1564	器具	木地			17フ	KT	Y	横目	木皮			1
293	器具	杓子	A類		3115B	—	S	横目	ヒノキ			1
692	器具	杓子	B類		10615B	—	S	横目	ヒノキ			1
1569	器具	杓子	A類		12年度試験品4	—	S	横目				1
1570	器具	杓子	A類		3コ	—	S	横目	アスナロ属			1
1571	器具	杓子	B類		5コ	—	S	横目	ヒノキ			1
1572	器具	杓子	B類		7ケ	—	S	横目	ヒノキ			1
76	器具	箸			1253T	横上	S	芝志	ヒノキ			1
146	器具	箸			1255T	横上	S	芝志	ヒノキ			1
184	器具	箸			3115B~3935T	横(西ノ新)	S	芝志	ヒノキ			1
294	器具	箸			3115B	—	S	芝志	ヒノキ			1
295	器具	箸			3115B	—	S	芝志	サワウガ			1

第143表 木器類の属性一覧(3)

遺物 番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点 区号 S: 瀬田部・ 岡崎部 集中区域 Y: 弥生土 部・埴原部 集中区域	木取り	組種	同定実施年度		
										17 年度	18 年度	21 年度
296	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
297	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
298	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
299	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
300	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
301	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
302	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
303	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
304	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
305	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
306	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
307	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
308	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
309	部具	箸			311SD	—	S	芯材	サワラ			1
310	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
311	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
312	部具	箸			311SD	—	S	芯材	ヒノキ			1
313	部具	箸			311SD	—	S	芯材	サワラ			1
513	部具	箸			324SD	遺印	S	芯材	タケ巻科			1
514	部具	箸			324SD	遺印	S	芯材	サワラ			1
693	部具	箸			1961SD	—	S	芯材	サワラ			1
911	部具	箸			265SK	—	S	芯材	ヒノキ			1
931	部具	箸			339SK	—	S	芯材	スギ			1
1575	部具	箸		6 ス	■	S	芯材	ヒノキ				1
1576	部具	箸		6 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1577	部具	箸		6 ス	■	S	芯材	ヒノキ				1
1578	部具	箸		6 コ	■	S	芯材	アズキノ葉				1
1579	部具	箸		6 コ	■	S	芯材	アズキノ葉				1
1580	部具	箸		6 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1581	部具	箸		7 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1582	部具	箸		6 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1583	部具	箸		7 ス	■	S	芯材	ヒノキ				1
1584	部具	箸		6 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1585	部具	箸		7 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1586	部具	箸		6 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1587	部具	箸		7 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1588	部具	箸		6 ス	■	S	芯材	サヤ				1
1589	部具	箸		7 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1590	部具	箸		6 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1591	部具	箸		5 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1592	部具	箸		6 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1593	部具	箸		6 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1594	部具	箸		5 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1595	部具	箸		6 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1596	部具	箸		8 ス	■	S	芯材	ヒノキ科				1
1597	部具	箸		6 ス	■	S	芯材	ヒノキ				1
1598	部具	箸		5 ケ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1599	部具	箸		8 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1600	部具	箸		7 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1601	部具	箸		6 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1602	部具	箸		6 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1603	部具	箸		6 ス	■	S	芯材	ヒノキ				1
1604	部具	箸		7 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1605	部具	箸		4 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1606	部具	箸		5 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1607	部具	箸		6 ス	■	S	芯材	ヒノキ				1
1608	部具	箸		5 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1609	部具	箸		7 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1610	部具	箸		7 セ	■	S	芯材	サワラ				1
1611	部具	箸		8 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1612	部具	箸		7 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1613	部具	箸		6 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1614	部具	箸		6 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1615	部具	箸		6 ス	■	S	芯材	ヒノキ				1
1616	部具	箸		8 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1617	部具	箸		7 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1618	部具	箸		7 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1619	部具	箸		5 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1620	部具	箸		7 コ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1621	部具	箸		7 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1622	部具	箸		7 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1623	部具	箸		6 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1624	部具	箸		6 シ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1625	部具	箸		6 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1626	部具	箸		6 ス	■	S	芯材	ヒノキ				1
1627	部具	箸		8 サ	■	S	芯材	ヒノキ				1
1628	部具	箸		6 ス	■	S	芯材	ヒノキ				1

第144表 木器類の属性一覧(4)

遺物番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点区分 S:須恵郡・ 岡部郡 豊中区域 Y:弥生土 器・土師器 豊中区域	本取り	材質	測定実施年度		
										17年度	18年度	20年度
1629	器具	箸			6ス	II	S	否	ヒノキ			1
1630	器具	箸			6ス	II	S	否	ヒノキ			1
1631	器具	箸			6ス	II	S	否	ヒノキ			1
1632	器具	箸			5コ	II	S	否				
1633	器具	箸			7コ	II	S	否				
1634	器具	箸			7コ	II	S	否				
1635	器具	箸			4コ	II	S	否				
1636	器具	箸			7シ	II	S	否	ヒノキ			1
1637	器具	箸			4コ	II	S	否				
1638	器具	箸			7コ	II	S	否				
1639	器具	箸			7コ	II	S	否				
1640	器具	箸			7コ	II	S	否				
1641	器具	箸			7コ	II	S	否				
1642	器具	箸			7コ	II	S	否				
1643	器具	箸			7コ	II	S	否	ヒノキ			1
185	器具	次付け木	A類		3115D-303ST	II	S	否				
186	器具	次付け木	C類		3115D-303ST	II	S	否				
221	器具	次付け木	A類		3105M	-	S	否				
222	器具	次付け木	A類		3105M	-	S	否	マツ(横溝管東非属)			1
223	器具	次付け木	A類		3105M	-	S	否				
224	器具	次付け木	A類		3105M	-	S	否	ヒノキ			1
225	器具	次付け木	A類		3105M	U	S	否				
226	器具	次付け木	A類		3105M	-	S	否	ヒノキ			1
227	器具	次付け木	B類		3105M	-	S	否	サウラ			1
228	器具	次付け木	A類		3105M	-	S	否	ヒノキ			1
229	器具	次付け木	B類		3105M	U	S	否				
230	器具	次付け木	A類		3105M	-	S	否	ヒノキ			1
231	器具	次付け木	A類		3105M	-	S	否	ヒノキ			1
232	器具	次付け木	A類		3105M	-	S	否	ヒノキ			1
231	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
232	器具	次付け木	B類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
233	器具	次付け木	B類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
234	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
235	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
236	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
237	器具	次付け木	A類		3115D	U	S	否				
238	器具	次付け木	A類		3115D	U	S	否	ヒノキ			1
239	器具	次付け木	A類		3115D	S	S	否	ヒノキ			1
230	器具	次付け木	A類		3115D	U	S	否	ヒノキ			1
231	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
232	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
233	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
234	器具	次付け木	A類		3115D	U	S	否	ヒノキ			1
235	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
236	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
237	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
238	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
239	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
240	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
241	器具	次付け木	B類		3115D	-	S	否				
242	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
243	器具	次付け木	B類		3115D	-	S	否				
244	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
245	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
246	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
247	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
248	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
249	器具	次付け木	A類		3115D	U	S	否				
250	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
251	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
252	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
253	器具	次付け木	B類		3115D	-	S	否				
254	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
255	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
256	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
257	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
258	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
259	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
260	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
261	器具	次付け木	C類		3115D	-	S	否				
262	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
263	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
264	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
265	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
266	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否				
267	器具	次付け木	A類		3115D	-	S	否	ヒノキ			1
268	器具	次付け木	B類		3115D	-	S	否				

第145表 木器類の属性一覧(5)

遺物 番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点 区号 S: 瀬田郡・ 岡崎郡 集中区域 Y: 伊佐土 郡・桂川郡 集中区域	木取り	組種	同定実施年度		
										17 年度	18 年度	21 年度
369	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
370	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
371	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表	ヒノキ			1
372	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
373	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
374	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表	サワラ			1
375	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
376	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表	ヒノキ			1
377	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表	ヒノキ			1
378	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表	ヒノキ			1
379	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表	ヒノキ			1
380	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
381	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
382	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
383	器具	火付け木	C類		3115D	—	S	芯表				
384	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
385	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
386	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
387	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
388	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表	ヒノキ			1
389	器具	火付け木	C類		3115D	—	S	芯表				
390	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
391	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表	ヒノキ			1
392	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
393	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
394	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
395	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
396	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
397	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
398	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
399	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表				
400	器具	火付け木	A類		3115D	—	S	芯表	ホケレン属			1
401	器具	火付け木	D類		3115D	—	S	芯表	ヒノキ			1
402	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
425	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
426	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
427	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
428	器具	火付け木	C類		3215D	—	S	芯表				
429	器具	火付け木	B類		3215D	—	S	芯表				
430	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
431	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
432	器具	火付け木	A類		3215D	W	S	芯表				
433	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
434	器具	火付け木	C類		3215D	—	S	芯表				
435	器具	火付け木	A類		3215D	W	S	芯表				
436	器具	火付け木	C類		3215D	—	S	芯表				
437	器具	火付け木	C類		3215D	—	S	芯表				
438	器具	火付け木	C類		3215D	W	S	芯表				
439	器具	火付け木	B類		3215D	—	S	芯表				
440	器具	火付け木	C類		3215D	—	S	芯表				
441	器具	火付け木	C類		3215D	—	S	芯表				
442	器具	火付け木	B類		3215D	—	S	芯表				
443	器具	火付け木	B類		3215D	—	S	芯表				
444	器具	火付け木	B類		3215D	—	S	芯表				
445	器具	火付け木	B類		3215D	W	S	芯表				
446	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
447	器具	火付け木	B類		3215D	—	S	芯表				
448	器具	火付け木	A類		3215D	W	S	芯表				
449	器具	火付け木	A類		3215D	W	S	芯表				
450	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
451	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
452	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
453	器具	火付け木	D類		3215D	—	S	芯表				
454	器具	火付け木	B類		3215D	—	S	芯表				
455	器具	火付け木	A類		3215D	W	S	芯表				
456	器具	火付け木	A類		3215D	—	S	芯表				
515	器具	火付け木	C類		3246D	1	S	芯表				
516	器具	火付け木	A類		3246D	1	S	芯表				
517	器具	火付け木	A類		3246D	2	S	芯表				
518	器具	火付け木	C類		3246D	1	S	芯表				
519	器具	火付け木	A類		3246D	護摩	S	芯表				
520	器具	火付け木	B類		3246D	護摩	S	芯表				
521	器具	火付け木	A類		3246D	1	S	芯表				
522	器具	火付け木	C類		3246D	護摩	S	芯表				
523	器具	火付け木	B類		3246D	2	S	芯表				
524	器具	火付け木	C類		3246D	2	S	芯表				
525	器具	火付け木	C類		3246D	護摩	S	芯表				

第146表 木器類の属性一覧(6)

遺物番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点区分 S:須恵郡・ 民部郡 豊中区域 Y:弥生土 器・土師器 豊中区域	本取り	材質	測定実施年度		
										17年度	18年度	20年度
526	器具	次付け木	A類		3245D	遺跡	S	否	否			
527	器具	次付け木	A類		3245D	遺跡	S	否	否			
566	器具	次付け木	A類		2675D	--	S	否	否			
692	器具	次付け木	B類		3085D	--	S	否	否			
699	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
700	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
701	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
702	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
703	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
704	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
705	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
706	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
707	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
708	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
709	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否	マツ属植物管束炭素	1	
710	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
711	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
712	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否			
713	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
714	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否	マツ属植物管束炭素	1	
715	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否	マツ属植物管束炭素	1	
716	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否	マツ属植物管束炭素	1	
717	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
718	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
719	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否			
720	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否	マツ属植物管束炭素	1	
721	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
722	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否			
723	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否	マツ属植物管束炭素	1	
724	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
725	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
726	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
727	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
728	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
729	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否	ネズミ	1	
730	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
731	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
732	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
733	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
734	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否			
735	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
736	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否			
737	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
738	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
739	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
740	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
741	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
742	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
743	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
744	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
745	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
746	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
747	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	マツ属植物管束炭素	1	
748	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
749	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
750	器具	次付け木	B類		10615D	--	S	否	否			
751	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
752	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否	みかん類		
753	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否	みかん類		
754	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否			
755	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
756	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否	みかん類	1	
757	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
758	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
759	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
760	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否			
761	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
762	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否			
763	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
764	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
765	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
766	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否	マツ属植物管束炭素	1	
767	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
768	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			
769	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否	ヒノキ	1	
770	器具	次付け木	C類		10615D	--	S	否	否			
771	器具	次付け木	A類		10615D	--	S	否	否			

第147表 木器類の属性一覧(7)

遺物番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点 区分 S: 須磨郡・ 天橋岡遺 集中心区域 Y: 赤土 土師器 集中区域	本取り	附種	同定実施年度		
										18年度	20年度	21年度
772	器具	火付け木	C類		10615B	—	S	芯表				
883	器具	火付け木	A類		10670M	—	Y	芯表				
884	器具	火付け木	B類		10670M	—	Y	芯表				
914	器具	火付け木	B類		10745E	—	S	芯表	ヒノキ			
915	器具	火付け木	A類		10745E	—	S	芯表				
916	器具	火付け木	B類		10745E	—	S	芯表				
932	器具	火付け木	A類		3395K	—	S	芯表				
933	器具	火付け木	A類		3395K	—	S	芯表				
934	器具	火付け木	B類		3395K	—	S	芯表				
1441	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1443	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1446	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1447	器具	火付け木	A類		7ヶ	■	S	芯表				
1448	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1449	器具	火付け木	A類		9ヶ	■	S	芯表				
1450	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1653	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1652	器具	火付け木	A類		9ヶ	■	S	芯表				
1653	器具	火付け木	A類		8ヶ	■	S	芯表				
1654	器具	火付け木	A類		6ヶ	■	S	芯表				
1655	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1656	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1657	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1658	器具	火付け木	A類		7ヶ	■	S	芯表				
1839	器具	火付け木	A類		8ヶ	■	S	芯表				
1960	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1961	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1962	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1963	器具	火付け木	A類		6ヶ	■	S	芯表				
1964	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1965	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1966	器具	火付け木	A類		6ヶ	■	S	芯表				
1967	器具	火付け木	A類		9ヶ	■	S	芯表				
1968	器具	火付け木	A類		7ヶ	■	S	芯表				
1969	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1970	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1971	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1972	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1973	器具	火付け木	A類		6ヶ	■	S	芯表				
1974	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1975	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1976	器具	火付け木	A類		5ヶ	■	S	芯表				
1977	器具	火付け木	B類		8ヶ	■	S	芯表				
1978	器具	火付け木	B類		5ヶ	■	S	芯表				
1979	器具	火付け木	B類		5ヶ	■	S	芯表				
1980	器具	火付け木	B類		7ヶ	■	S	芯表				
1981	器具	火付け木	B類		16ヶ	KBT	Y	芯表				
1982	器具	火付け木	B類		5ヶ	■	S	芯表				
1983	器具	火付け木	B類		5ヶ	■	S	芯表				
1984	器具	火付け木	B類		6ヶ	■	S	芯表				
1985	器具	火付け木	B類		5ヶ	■	S	芯表				
1886	器具	火付け木	B類		5ヶ	■	S	芯表				
1987	器具	火付け木	B類		5ヶ	■	S	芯表				
1988	器具	火付け木	B類		7ヶ	■	S	芯表				
1989	器具	火付け木	B類		4ヶ	■	S	芯表				
1990	器具	火付け木	C類		7ヶ	■	S	芯表				
1991	器具	火付け木	C類		5ヶ	■	S	芯表				
1992	器具	火付け木	C類		7ヶ	■	S	芯表				
1993	器具	火付け木	C類		7ヶ	■	S	芯表				
1994	器具	火付け木	C類		5ヶ	■	S	芯表				
1995	器具	火付け木	C類		5ヶ	■	S	芯表				
1996	器具	火付け木	C類		5ヶ	■	S	芯表				
28	器具	機道具			1253S	■	S	榎目	ヒノキ			1
1573	器具	機道具			12年産尺取目3	—	S	芯表	キタレンノ葉			1
1574	器具	機道具			12年産尺取目3	—	S	芯表	ヒノキ			1
42	器具	機道具			1253S	■	S	榎目	ヒノキ			1
18	器具	機道具			1253S	■	S	榎目	ヒノキ			1
917	器具	機道具			10745E	—	S	榎目	ヒノキ			1
1697	器具	機道具			9ヶ	■	S	榎目	ヒノキ			1
1698	器具	機道具			5ヶ	■	S	芯表	サワラ			1
1699	器具	機道具			2ヶ	■	S	榎目	ヒノキ			1
1700	器具	機道具			5ヶ	■	S	榎目	ヒノキ			1
1701	器具	機道具			18ヶ	KBT	Y	榎目	ヒノキ			1
1702	器具	機道具			8ヶ	■	S	榎目	サワラ			1
1703	器具	機道具			5ヶ	■	S	榎目	ヒノキ			1
1704	器具	機道具			21ヶ	KBT	Y	榎目	ヒノキ			1
1705	器具	機道具			5ヶ	■	S	芯表	ヒノキ			1

第148表 木器類の属性一覧(8)

遺物 番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点 区分 S:須恵郡・ 岡崎郡 豊中区域 Y:弥生土 器・土師器 豊中区域	本取り	材質	測定実施年度		
										17 年度	18 年度	20 年度
1706	器具	串状木製品			6-3	II	S	芯	サウラ			1
1707	器具	串状木製品			16-7	KT	Y	椀目	ヒノキ			1
1708	器具	串状木製品			17-7	I	Y	芯	ヒノキ			1
1709	器具	串状木製品			8-3	II	S	芯	ヒノキ			1
1710	器具	へら状木製品			20-7	KT	S	椀目	アスナロ属			1
1711	器具	へら状木製品			6-7	II	S	椀目	ヒノキ			1
1712	器具	へら状木製品			8-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1713	器具	へら状木製品			12年度試掘区	—	S	椀目	ヒノキ			1
187	器具	板状木製品			3115B~3025T	III(南ノ原中)	S	椀目	ヒノキ			1
314	器具	板状木製品			3115B	—	S	椀目	ヒノキ			1
315	器具	板状木製品			3115B	—	S	椀目	ヒノキ			1
316	器具	板状木製品			3115B	—	S	椀目	サウラ			1
317	器具	板状木製品			3115B	—	S	椀目	ヒノキ			1
318	器具	板状木製品			3115B	—	S	椀目	ヒノキ			1
319	器具	板状木製品			3115B	—	S	椀目	ヒノキ			1
320	器具	板状木製品			3115B	—	S	椀目	ヒノキ			1
694	器具	板状木製品			1061SD	—	S	椀目	ヒノキ			1
695	器具	板状木製品			1061SD	—	S	遺椀目	ヒノキ			1
696	器具	板状木製品			1061SD	—	S	椀目	ヒノキ			1
876	器具	板状木製品			1067NB	—	Y	椀目	サウラ			1
878	器具	板状木製品			1067NB	—	Y	椀目	サウラ			1
880	器具	板状木製品			1067NB	—	Y	椀目	サウラ			1
921	器具	板状木製品			1074SE	—	S	椀目	ヒノキ			1
1714	器具	板状木製品			9-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1715	器具	板状木製品			8-3	II	S	椀目	アスナロ属			1
1716	器具	板状木製品			16-7	KDT	Y	椀目	ヒノキ			1
1717	器具	板状木製品			5-3	II	S	椀目	アスナロ属			1
1718	器具	板状木製品			5-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1719	器具	板状木製品			6-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1720	器具	板状木製品			6-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1721	器具	板状木製品			6-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1722	器具	板状木製品			6-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1723	器具	板状木製品			6-7	II	S	椀目	ヒノキ			1
1724	器具	板状木製品			8-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1725	器具	板状木製品			5-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1726	器具	板状木製品			8-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1727	器具	板状木製品			8-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1728	器具	板状木製品			5-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1729	器具	板状木製品			5-3	II	S	椀目	スギ			1
1730	器具	板状木製品			8-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1731	器具	板状木製品			16-7	KT	—	椀目	ヒノキ			1
1732	器具	板状木製品			6-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1733	器具	板状木製品			12-7	YII	Y	椀目	サウラ			1
1734	器具	板状木製品			21-7	KT	S	遺椀目	ヒノキ			1
1735	器具	板状木製品			16-7	KDT	Y	椀目	ヒノキ属			1
1736	器具	板状木製品			7-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1737	器具	板状木製品			15-9	YI	Y	椀目	タリ			1
1738	器具	板状木製品			9-3	II	—	遺椀目	—			1
1739	器具	板状木製品			12-7	YII	Y	椀目	ヒノキ			1
1740	器具	板状木製品			5-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1741	器具	板状木製品			5-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1742	器具	板状木製品			16-7	KDT	Y	遺椀目	ヒノキ			1
1743	器具	板状木製品			7-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
1744	器具	板状木製品			8-3	II	S	椀目	ヒノキ			1
149	器具	棒状木製品			1255ST	層土	S	芯	ヒノキ			1
150	器具	棒状木製品			1255ST	層土	S	芯	ヒノキ			1
188	器具	棒状木製品			3115B~3025T	III(南ノ原中)	S	芯	ヒノキ			1
233	器具	棒状木製品			3109M	II	S	芯	ヒノキ			1
457	器具	棒状木製品			3215B	—	S	芯	ヒノキ			1
458	器具	棒状木製品			3215B	—	S	芯	ヒノキ			1
459	器具	棒状木製品			3215B	—	S	芯	ヒノキ			1
875	器具	棒状木製品			1067NB	—	Y	芯	ヒノキ			1
876	器具	棒状木製品			1067NB	—	Y	芯	ヒノキ			1
877	器具	棒状木製品			1067NB	—	Y	芯	ヒノキ			1
919	器具	棒状木製品			1074SE	—	S	芯	ヒノキ			1
920	器具	棒状木製品			1074SE	—	S	芯	ヒノキ			1
1745	器具	棒状木製品			6-3	II	S	芯	ヒノキ			1
1746	器具	棒状木製品			17-7	KT	—	芯	サウラ			1
1747	器具	棒状木製品			6-3	II	S	芯	ヒノキ			1
1748	器具	棒状木製品			6-3	II	S	芯	ヒノキ			1
1749	器具	棒状木製品			14-9	YI	Y	芯	ヒノキ			1
1750	器具	棒状木製品			18-9	KT	Y	芯	サウラ			1
1751	器具	棒状木製品			17-7	KT	—	芯	サウラ			1
1752	器具	棒状木製品			6-3	II	S	芯	ヒノキ			1
1753	器具	棒状木製品			6-3	II	S	芯	ヒノキ			1
1754	器具	棒状木製品			12-7	YII	Y	芯	ヒノキ			1
1755	器具	棒状木製品			不明	—	—	芯	ヒノキ			1

第149表 木器類の属性一覧(9)

遺物 番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点 K号 S:遺跡部・ 民権部 集市区域 Y:弥生土 部・土師器 集市区域	木取り	組構	同定実施年度		
										17 年度	18 年度	21 年度
1756	器具	棒状木製品			8号	Ⅱ	S	芯材	ヒノキ			1
1757	器具	棒状木製品			6号	Ⅱ	S	芯材				
1758	器具	棒状木製品			16号	KT	Y	芯材	ヒノキ			1
1759	器具	棒状木製品			13号	Ⅱ	Y	芯材	サワラ			1
1760	器具	棒状木製品			7号	Ⅱ	S	板目				
1761	器具	棒状木製品			16号	—	—	芯材	サシ			1
1762	器具	棒状木製品			5号	Ⅱ	S	芯材	マツ(葉面線等家重風)			1
1763	器具	棒状木製品			5号	Ⅱ	S	芯材	ヒノキ			1
1764	器具	棒状木製品			16号	KT	Y	芯材	タリ			1
1765	器具	棒状木製品			8号	Ⅱ	S	芯材				
1766	器具	棒状木製品			7号	Ⅱ	S	芯材				
1767	器具	棒状木製品			5号	Ⅱ	S	芯材	アスナロ属			1
1768	器具	棒状木製品			6号	Ⅱ	S	板目				
1769	器具	棒状木製品			7号	Ⅱ	S	芯材	ヒノキ			1
1770	器具	棒状木製品			17号	KT	Y	芯材	ヒノキ			1
13	部材	建築部材	礎板		22(2)(3)	2	S	芯材	アサ		1	
889	部材	建築部材	原板	垂板	1067M	—	Y	板目	ヒノキ			1
890	部材	建築部材	原板		1067M	—	Y	板目	クロハ		1	
891	部材	建築部材	原板		1067M	—	Y	板目	アスナロ属			1
892	部材	建築部材	原板		1067M	—	Y	芯材	アスナロ属			1
893	部材	建築部材	柱材?		1067M	—	Y	芯材	ヒノキ			1
894	部材	建築部材	柱材?		1067M	—	Y	芯材	サワラ			1
895	部材	建築部材	原板		1067M	—	Y	板目	アスナロ属			1
896	部材	建築部材	原板		1067M	—	Y	板目	ヒノキ属			1
897	部材	建築部材	柱		1067M	—	Y	芯材	タリ			1
898	部材	建築部材	原板		1067M	—	Y	板目	アスナロ属			1
899	部材	建築部材	原板		1067M	—	Y	板目	アスナロ属			1
1771	部材	建築部材	柱		4号	Ⅱ	S	芯材	アスナロ属			1
1772	部材	建築部材	柱		14号	Ⅱ	Y	板目	サワラ			1
1773	部材	建築部材	柱		11号	Ⅱ	Y	板目	タリ			1
1774	部材	建築部材	柱		6号	Ⅱ	S	板目	クロハ			1
1775	部材	建築部材	礎		8号	Ⅱ	S	芯材	ヒノキ			1
1776	部材	建築部材	垂木		17号	KT	Y	芯材	シラシラ			1
1777	部材	建築部材	垂木		15号	KT	Y	芯材	ヒノキ属			1
1778	部材	建築部材	梁・桁		17号	KT	Y	板目	サワラ			1
1779	部材	建築部材	梁・桁		15号	KT	Y	板目	サワラ			1
1780	部材	建築部材	原板		16号	KT	Y	板目	ヒノキ			1
1781	部材	建築部材	原板	垂板	20号	KT	S	板目	サワラ			1
1782	部材	建築部材	原板	垂板	20号	KT	S	板目	ヒノキ			1
1783	部材	建築部材	原板	垂板	7号	Ⅱ	S	板目	アスナロ属			1
1784	部材	建築部材	原板		17号	KT	—	板目	アスナロ属			1
1785	部材	建築部材	原板		17号	KT	—	板目	ヒノキ			1
1786	部材	建築部材	原板	垂板	6号	Ⅱ	S	板目	アスナロ属			1
1787	部材	建築部材	原板	垂板	6号	Ⅱ	S	板目	アスナロ属			1
1788	部材	建築部材	原板	床板	不明	—	—	板目	タリ			1
1789	部材	建築部材	原板	床板	21号	KT	S	板目	タリ			1
1790	部材	建築部材	原板		16号	KT	—	板目	サワラ			1
1791	部材	建築部材	原板		17号	KT	—	板目	アスナロ属			1
1792	部材	建築部材	原板		15号	Ⅱ	Y	板目	サワラ			1
1793	部材	建築部材	原板		7号	Ⅱ	S	板目	アスナロ属			1
1794	部材	建築部材	原板		14号	Ⅱ	Y	板目	スギ			1
1795	部材	建築部材	原板		12号	Ⅱ	Y	板目	サワラ			1
1796	部材	建築部材	原板		16号	KT	Y	板目	タリ			1
1797	部材	建築部材	原板		20号	KT	S	板目	アスナロ属			1
1798	部材	建築部材	原板		21号	KT	S	板目	タリ			1
1799	部材	建築部材	原板		不明	—	—	板目	アスナロ属			1
1800	部材	建築部材	原板		8号	Ⅱ	S	板目	ヒノキ			1
1801	部材	建築部材	原板		12号	Ⅱ	S	板目	ヒノキ			1
1802	部材	建築部材	原板		20号	KT	Y	板目	ヒノキ			1
1803	部材	建築部材	原板		17号	KT	—	板目	ヒノキ			1
1804	部材	建築部材	原板		20号	KT	S	板目	スギ			1
1805	部材	建築部材	原板		5号	Ⅱ	S	板目	タリ			1
1806	部材	建築部材	原板		21号	KT	S	板目	アスナロ属			1
1807	部材	建築部材	原板		7号	Ⅱ	S	板目	サワラ			1
1808	部材	建築部材	原板		17号	KT	—	板目	サワラ			1
1809	部材	建築部材	原板		6号	Ⅱ	S	板目	ヒノキ			1
1810	部材	建築部材	原板		7号	Ⅱ	S	板目	ヒノキ			1
1811	部材	建築部材	原板		7号	Ⅱ	S	板目	ヒノキ			1
1812	部材	建築部材	原板		20号	KT	S	板目	サワラ			1
1813	部材	建築部材	原板		7号	Ⅱ	S	板目	ヒノキ			1
1814	部材	建築部材	原板		18号	KT	—	板目	サワラ			1
1815	部材	建築部材	原板		17号	KT	Y	芯材	サワラ			1
1816	部材	建築部材	原板		17号	KT	—	芯材	タリ			1
1817	部材	建築部材	原板		5号	Ⅱ	S	板目	サワラ			1
1818	部材	建築部材	原板		6号	Ⅱ	S	板目	ヒノキ			1
1819	部材	建築部材	柱材?		6号	Ⅱ	S	板目	アスナロ属			1
1820	部材	建築部材			10号	—	Y	芯材	サワラ			1

第150表 木器類の属性一覧(10)

遺物番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点区分 S:須恵郡・ 岡部郡 豊中区域 Y:弥生土器・土師器 豊中区域	本取り	種類	測定実施年度		
										17年度	18年度	20年度
1821	部材	壁塗部材			R中	II	S	板目	タリ			1
1822	部材	壁塗部材			18中	—	—	芝舌	シモノ筋			1
1823	部材	壁塗部材	枠材		5コ	II	S	板目	アスナロ属		1	
14	部材	壁塗部材	柱他		222P(SH)	—	S	芝持ウ	タリ	1		
15	部材	壁塗部材	柱他		222P(SH)	—	S	芝持ウ	タリ	1		
16	部材	壁塗部材	柱他		238P(SH)	—	S	芝持ウ	タリ	1		
17	部材	壁塗部材	柱他		239P(SH)	I	S	芝持	タリ	1		
18	部材	壁塗部材	柱他		241P(SH)	—	S	芝持ウ	タリ	1		
19	部材	壁塗部材	柱他		241P(SH)	—	S	芝持ウ	タリ	1		
20	部材	壁塗部材	柱他		348P(SH)	I	S	芝持	タリ	1		
21	部材	壁塗部材	柱他		353P(SH)	I	S	芝持	タリ	1		
25	部材	壁塗部材	柱他		396P	I	S	芝持	タリ			
26	部材	壁塗部材	柱他		301SP	—	S	芝持	タリ	1		
27	部材	壁塗部材	柱他		494SP	—	S	芝持	タリ	1		
460	部材	土木部材	杭		321SD	—	S	芝持	タリ			
528	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
529	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
530	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
531	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
532	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
533	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
534	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝舌	タリ	1		
535	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝舌	ヒノキ	1		
536	部材	土木部材	杭		324SD	—	S	芝舌	タリ	1		
537	部材	土木部材	杭		324SD	—	S	芝舌	タリ	1		
538	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
539	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
540	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝舌	コナラ属	1		
541	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	マツ属植物等中央属	1		
542	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
543	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
544	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	平削り	タリ	1		
545	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
546	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
547	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	平削り	マツ属植物等中央属	1		
548	部材	土木部材	杭		324SD	連印	S	芝持	タリ	1		
599	部材	土木部材	杭		367SD	—	S	芝持	タリ	1		
619	部材	土木部材	杭		372SD	—	S	芝持	タリ	1		
775	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	ヒノキ	1		
776	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
777	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	タリ	1		
778	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
779	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	ヒノキ	1		
780	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	みかん類	ヒノキ	1		
781	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	平削り	タリ	1		
782	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	みかん類	サワラ	1		
783	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
784	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
785	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
786	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	ヒノキ	1		
787	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	平削り	ヒノキ	1		
788	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	アスナロ属	1		
789	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	ヒノキ	1		
790	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
791	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
792	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	ヒノキ	1		
793	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
794	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
795	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
796	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	みかん類	タリ	1		
797	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	みかん類	タリ	1		
798	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	タリ	1		
799	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
800	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	タリ	1		
801	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	みかん類	タリ	1		
802	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	タリ	1		
803	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
804	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	タリ	1		
805	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	みかん類	タリ	1		
806	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	タリ	1		
807	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	タリ	1		
808	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	タリ	1		
809	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	タリ	1		
810	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	みかん類	タリ	1		
811	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	サワラ	1		
812	部材	土木部材	横木		1071SD	—	Y	芝持	タリ	1		
813	部材	土木部材	杭		1071SD	—	Y	芝舌	タリ	1		

第151表 木器類の属性一覧(11)

遺物 番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点 K号 S：遺跡部・ 同輪郭部 集中区域 Y：弥生土 部・土師器 集中区域	木取り	種類	同定実施年度		
										17 年度	18 年度	21 年度
814	部材	土木部材	杭		107150	—	Y	芯材				
815	部材	土木部材	杭		107150	—	Y	芯材				
816	部材	土木部材	杭		107150	—	Y	芯材				
817	部材	土木部材	杭		107150	—	Y	芯材				
818	部材	土木部材	杭		107150	—	Y	芯材				
900	部材	土木部材	杭		106750	—	Y	芯材				
901	部材	土木部材	杭		106750	—	Y	芯材				
1824	部材	土木部材	杭		5シ	Ⅲ	S	芯材				
1825	部材	土木部材	杭		12シ	Ⅲ	Y	芯材				
1826	部材	土木部材	杭		13シ	Ⅲ	Y	芯材				
1827	部材	土木部材	杭		8シ	Ⅲ	S	芯材				
1828	部材	土木部材	杭		18ツ	KT	—	芯材				
1829	部材	土木部材	杭		20ツ	KY	Y	芯材				
1830	部材	土木部材	杭		6シ	Ⅲ	S	芯材				
1831	部材	土木部材	杭		9シ	Ⅲ	S	芯材				
1832	部材	土木部材	杭		9シ	Ⅲ	S	芯材				
1833	部材	土木部材	杭		16ツ	KY	Y	芯材				
43	部材	器具部材			12525T	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
151	部材	器具部材	有孔薄板		12555T	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
152	部材	器具部材	有孔薄板		12555T	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
153	部材	器具部材	有孔薄板		12555T	Ⅲ	S	板目	アスナロ属			1
154	部材	器具部材			12555T	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
155	部材	器具部材			12555T	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
156	部材	器具部材			12555T	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
189	部材	器具部材	管器具材?		1255T~12555T	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
190	部材	器具部材	有孔薄板		21150~2025T	Ⅲ	(附5-類?)	S	板目	ヒノキ		1
191	部材	器具部材			12535T~12555T	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
607	部材	器具部材			106150	—	S	板目	ヒノキ			1
608	部材	器具部材	紡織具?		106150	—	S	板目	アスナロ属			1
881	部材	器具部材			106750	—	Y	板目	タリ			1
885	部材	器具部材			106750	—	Y	芯材	マツ属植物茎葉部属			1
886	部材	器具部材			106750	—	Y	芯材	ヒノキ			1
1834	部材	器具部材	紡織具	糸巻	7シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1835	部材	器具部材	紡織具?		6シ	Ⅲ	S	芯材	サワラ			1
1836	部材	器具部材	紡織具?		7シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1837	部材	器具部材	紡織具	糸巻	7シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1838	部材	器具部材	紡織具?		6シ	Ⅲ	S	芯材	アスナロ属			1
1839	部材	器具部材	管器具材?		11シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1840	部材	器具部材	有孔薄板		8シ	Ⅲ	S	板目	アスナロ属			1
1841	部材	器具部材	有孔薄板		7シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1842	部材	器具部材	有孔薄板		8シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1843	部材	器具部材			6シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1844	部材	器具部材			9シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1845	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1846	部材	器具部材			6シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1847	部材	器具部材			10シ	Ⅲ	S	板目	スギ			1
1848	部材	器具部材			5シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1849	部材	器具部材			14シ	Ⅲ	Y	板目	ヒノキ			1
1850	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	芯材	アスナロ属			1
1851	部材	器具部材			11シ	Ⅲ	S	板目	サワラ			1
1852	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1853	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1854	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1855	部材	器具部材			5シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1856	部材	器具部材			6シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1857	部材	器具部材			5シ	Ⅲ	S	板目	サワラ			1
1858	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	芯材	アスナロ属			1
1859	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1860	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1861	部材	器具部材			20ツ	KTY	Y	板目	ヒノキ			1
1862	部材	器具部材			6シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1863	部材	器具部材			5シ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1
1864	部材	器具部材			15ツ	KTY	S	板目	ヒノキ			1
1865	部材	器具部材			8シ	Ⅲ	S	板目	アスナロ属			1
1866	部材	器具部材			17ツ	KTY	Y	板目	ヒノキ			1
1867	部材	器具部材			5シ	Ⅲ	S	板目	アスナロ属			1
1868	部材	器具部材			13シ	Ⅲ	Y	芯材	サワラ			1
1869	部材	器具部材			5シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1870	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1871	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1872	部材	器具部材			5シ	Ⅲ	S	板目	アスナロ属			1
1873	部材	器具部材			5シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1874	部材	器具部材			8シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1875	部材	器具部材			17ツ	I	Y	芯材	サワラ			1
1876	部材	器具部材			7シ	Ⅲ	S	芯材	ヒノキ			1
1877	部材	器具部材			6シ	Ⅲ	S	板目	サワラ			1
1878	部材	器具部材			4ツ	Ⅲ	S	板目	ヒノキ			1

第152表 木器類の属性一覧(12)

遺物 番号	種別	種分1	種分2	種分3	出土地点	層位	出土地点 区分 S:須恵器・ 民権器 集約区 Y:弥生土 器・土師器 集約区	木取り	種類	測定実施年度		
										17 年度	18 年度	20 年度
1879	部材	器具部材			6ヶ	II	S	芯材	アスナガ属			1
1880	部材	器具部材			8シ	II	S	板目	ヒノキ			1
1881	部材	器具部材			7シ	II	S	板目	ヒノキ			1
1882	部材	器具部材			8ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1883	部材	器具部材			15ヶ	VI	Y	芯材	サワラ			1
1884	部材	器具部材			5ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1885	部材	器具部材			4ヶ	III	—	板目	サワラ			1
1886	部材	器具部材	器器部材?		8シ	II	S	板目	ヒノキ			1
1887	部材	器具部材			12年度試掘区4	—	S	芯材	サワラ			1
1888	部材	器具部材			5ヶ	—	S	芯材	マツ属種属等東亞属			1
1889	部材	器具部材			8ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1890	部材	器具部材			5ヶ	II	S	板目	キヌ属			1
1891	部材	器具部材			6ヶ	III	S	板目	ヒノキ			1
1892	部材	器具部材			21ヶ	KT	S	板目	—			—
1893	部材	器具部材			6ヶ	II	S	板目	—			—
1894	部材	器具部材			6ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1895	部材	器具部材			5ヶ	II	S	芯材	ヒノキ			1
900	加工材	板板			1067NB	—	Y	みかん類	タヌキ			1
1896	加工材	板板			17シ	KT	Y	板目	タロヘ			1
1897	加工材	板板			17ヶ	KT	—	みかん類	タリ			1
1898	加工材	板板			14ヶ	VI	Y	逆板目	サワラ			1
1899	加工材	板板			15ヶ	VI	Y	板目	サワラ			1
461	加工材	板板			321NB	—	S	板目	ヒノキ			1
902	加工材	板板			1067NB	—	Y	平板	トネリコ属			1
1900	加工材	板板			5ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1901	加工材	板板			16ヶ	ADT	Y	逆板目	ヒノキ			1
77	加工材	板板			1255ST	—	S	板目	ヒノキ			1
117	加工材	板板			1255ST	—	S	芯材	ヒノキ			1
158	加工材	板板			1255ST	—	S	板目	ヒノキ			1
159	加工材	板板			1255ST	—	S	芯材	ヒノキ			1
192	加工材	板板			1254ST~1255ST	—	S	芯材	ミツバツツギ			1
234	加工材	板板			310NB	—	S	芯材	ヒノキ			1
235	加工材	板板			310NB	—	S	芯材	ヒノキ			1
922	加工材	板板			1074SE	—	S	芯材	ヒノキ			1
1902	加工材	板板			6ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1903	加工材	板板			6シ	II	S	板目	ヒノキ			1
1904	加工材	板板			6ヶ	II	S	芯材	ヒノキ			1
1905	加工材	板板			5ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1906	加工材	板板			5ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1907	加工材	板板			7ヶ	II	S	芯材	ヒノキ			1
1908	加工材	板板			6ヶ	II	S	板目	サワラ			1
1909	加工材	板板			4ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1910	加工材	板板			6シ	II	S	板目	ヒノキ			1
1911	加工材	板板			6ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1912	加工材	板板			7ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1913	加工材	板板			5シ	II	S	板目	ヒノキ			1
1914	加工材	板板			6シ	II	S	逆板目	ヒノキ			1
1915	加工材	板板			5ヶ	III	S	板目	タリ			1
1916	加工材	板板			6シ	II	S	芯材	ヒノキ			1
1917	加工材	板板			7ヶ	II	S	逆板目	ヒノキ			1
1918	加工材	板板			5ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1919	加工材	板板			5シ	II	S	板目	ヒノキ			1
1920	加工材	板板			8ヶ	II	S	板目	サワラ			1
1921	加工材	板板			5ヶ	II	S	逆板目	ヒノキ			1
1922	加工材	板板			6ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1923	加工材	板板			15ヶ	ADT	S	板目	ヒノキ			1
1924	加工材	板板			7ヶ	II	S	芯材	ヒノキ			1
1925	加工材	板板			9シ	II	S	芯材	ヒノキ			1
1926	加工材	板板			8ヶ	II	S	芯材	ヒノキ			1
1927	加工材	板板			19ヶ	I	S	芯材	アスナガ属			1
1928	加工材	板板			8ヶ	II	S	板目	ヒノキ			1
1929	加工材	板板			9シ	II	S	板目	ヒノキ			1
1930	加工材	板板			9シ	II	S	板目	ヒノキ			1
1931	加工材	板板			9シ	II	S	板目	ヒノキ			1
1932	加工材	板板			7ヶ	II	S	芯材	タリ			1
1933	空襲不備	不明			30ヶ	KT	S	板目	アサギ			1

## 第2節 野内遺跡C地区検出遺構の消長について

本節では、ここまで個々に見てきた当発掘区の検出遺構について、時間軸に沿った消長をまとめる。当発掘区には、形状や付属施設といった遺構そのものに備わる属性から帰属時期が判明するケースはほとんどない。そこで、主として遺構内から出土した遺物の型式的特徴や組成に手掛かりを求めることとなる。ただし、当発掘区の場合、水田跡や溝状遺構などといった開放的構造の大型遺構が多数を占めることから、遺構内出土遺物の同時代性は必ずしも保証されるわけではないとみなすべきであり、時期幅を最大限に広く考慮しておく必要がある。

### 1 古墳時代前期

この時期に属すると判断されるのは、30区画からなる「古墳時代水田跡」(1075～1086 S T・1091～1100 S T・1280～1282 S T・1287 S T・1296～1298 S T・1316 S T)のほか、堅穴住居跡1220 S B、自然流路跡1067 N Rと付属する溝状遺構1071 S D、それに溝状遺構1057 S D・1315 S Dである。1220 S Bと1315 S Dのみ発掘区のほぼ中央に位置しているが、検出区域が発掘区南半に偏る傾向が認められる。ほとんどの遺構が古墳時代水田跡の周辺に位置している。なお、水田の区画については、その痕跡を検出したのは検出区域の東端部分のみにとどまるものの、その西方でも断続的に畦が見出されたことから、本来は発掘区の西端まで連続と広がっていたと推測される。

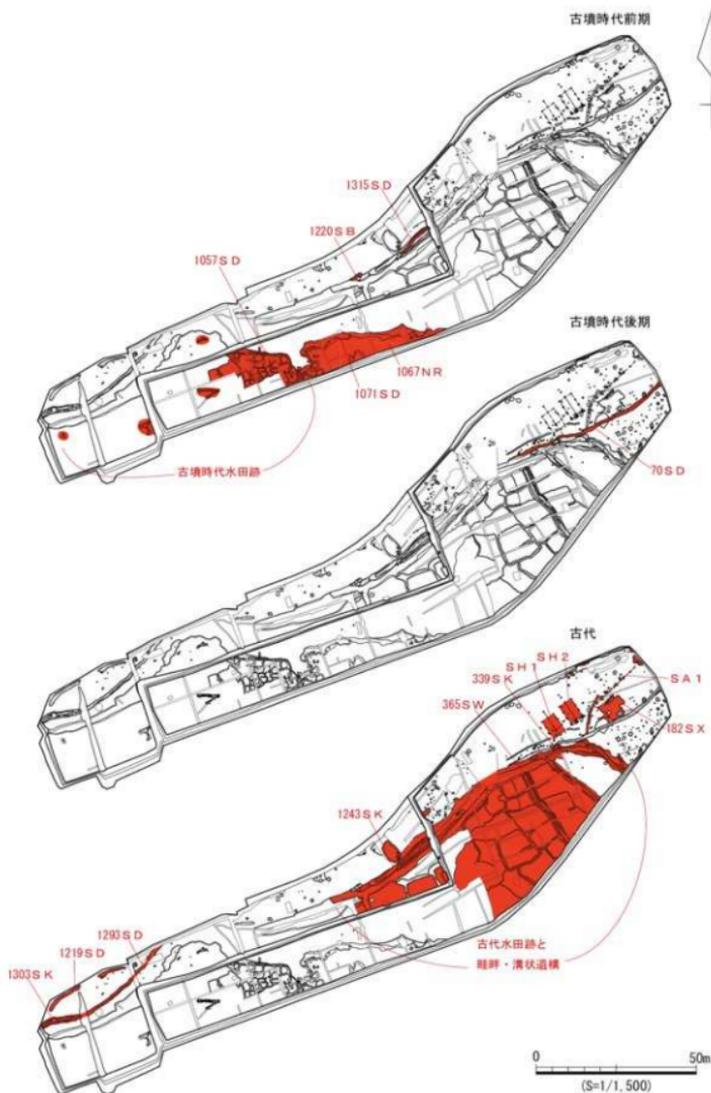
最も残存状態良好な土器群が出土した遺構である1220 S Bについては、明確に古墳時代前期、それも初頭に位置付けることができる。水田跡については、帰属時期を絞り込むのは難しい。出土した木器類には弥生時代に遡る要素はみられない。しかし、包含層や1067 N Rで出土した土器類には、1220 S Bと同時に属すると判断されるものが多いものの、弥生時代後期に遡るとみられるものも少なくないことから<sup>1)</sup>、上限が弥生時代後期にまで遡る可能性は排除できない。また、出土土器類に弥生時代の石包丁(遺物番号2016)がみられることも無視できない。したがって、1220 S Bと同じく古墳時代前期頃に属することは確かとしても、水田耕作の開始が弥生時代後期頃に遡る可能性も皆無ではないことを付言しておく。下限については、第3章第3節にも記したとおり判断材料に乏しく、後述する古代水田にそのまま連続することはないと判断するととどまる<sup>2)</sup>。

なお、1315 S Dは、古代水田に伴う中央大溝の最下層で検出された溝状遺構である。この遺構内には古代の遺物がみられず、古墳時代水田の存続期にすでに存在した可能性が高い。ほかに同様の遺構が確認されないため、これ以上の追究はできないものの、この遺構の存在は、古代水田に伴う水路が古墳時代から存在した水路ないし溝状地形を拡幅・改修して成立した可能性を示唆するものと言えよう。

### 2 古墳時代後期

古墳時代水田の終焉と古代水田の開発開始の間の時期については、人々の活動の徴証がほとんど認められない。ほぼ唯一の事例と言えるのが、発掘区東端付近で検出した溝状遺構70 S Dである。遺構内出土遺物から判断して、古墳時代後期の7世紀代に属すると考えておく。

遺構の性格は明らかとなっていないが、のちに西端部分が古代水田に関わる水路と交わっているこ



第238図 野内遺跡C地区の遺構の消長

とから、古代水田開発の前史に位置付けられる水路跡の可能性が考えられる。

### 3 古代

当発掘区における最盛期である。この時期に属すると判断されるのは、柵跡SA1、掘立柱建物跡SH1・SH2、掘立柱建物跡の周辺に散在する9基のピット(63SP・152SP・193SP・206SP・212SP・242SP・247SP・338SP・379SP)、26区画からなる「古代水田跡」(327ST・384～403ST・1252～1256ST)、古代水田に関わる畦畔310SM・320SM・1250SM、古代水田に関わる溝状遺構のうち17基(311SD・321SD・323SD・324SD・330SD・348SD・361SD・364SD・367SD・368SD・372SD・373SD・1245SD・1305SD・1309SD・1310SD・1311SD)、水制遺構365SW、遺物集積1074SU、性格不明の7基の溝状遺構(192SD・196SD・366SD・1061SD・1219SD・1286SD・1293SD)、墓339SKをはじめとする16基の土坑(29SK・56SK・58SK・60SK・65SK・168SK・172SK・339SK・343SK・1231SK・1243SK・1258SK・1270SK・1283SK・1302SK・1303SK)、不明遺構182SX、以上84基である<sup>3)</sup>。それらの多くは発掘区北半に位置しており、古代の遺構の検出区域は、古墳時代の遺構の検出区域とはほとんど重ならない。

掘立柱建物跡SH1については、柱穴内の土器類の組成と柱穴内に残存した柱根の放射線炭素年代測定結果から、平安時代前半の9世紀頃の建物跡と結論づけることができる。SH1と軸線を揃えて並ぶSH2も同時期の建物跡と捉えてよく、柵跡SA1についても同様とみて大過ないであろう。これらは水田の管理に関わる施設か倉庫のようなものの跡である可能性が高いと考えられる。なお、それらの周辺においては、柱並びこそ確認されなかったもののピットを多数検出していることから、同様の施設がさらに存在した可能性は高いであろう。なお、SH1のすぐ南方で検出した墓339SKについても、さほど隔たりを持たぬ時期の遺構と判断される。

建物跡の南方に広がる水田跡と、水田跡の周辺に広がる畦畔・溝状遺構・水制遺構については、上記の建物跡とも関連を持つ一群の遺構と捉えている。それらの帰属時期は、出土した土器類に手掛かりを求めることにより、灰軸陶器普及前の8世紀後半頃から灰軸陶器普及期の10世紀代までと判断される。これは、隣接する当遺跡B地区の古代集落の最盛期に対応する。集落の営みが軌道に乗った時期に大規模かつ継続的に行われた水田開発の痕跡とみるのが最も無理のない解釈であろう。

#### 第5章 第2節 注

- 1) 古墳時代水田跡とその周辺区域で出土した土器類の多くは、北陸地方の編年における法弘式・月形式、濃尾平野土器編年における山中式・廻間式に相当すると判断される。なお、弥生土器・土器の年代観の拠拠は、第3章第4節の注1)に挙げたとおりである。
- 2) 古墳時代水田の存続下限の手掛かりとなり得る出土遺物として、幅広く鉄刀装着用の加工を持つ新しいタイプのナスピ形鍔(遺物番号1480)と、年輪年代測定により伐採年代576年±αとの結果を得た楕円形曲物容器(遺物番号1499)を挙げることができる。これら2個体から古墳時代水田が後期まで存続した可能性はあると考えるが、出土土器類には当該期はもとより古墳時代中期に属するものさえ僅少であることを重視し、断定を控えることとする。
- 3) 第238図では、古代の遺構については主なもののみ遺構番号を表示した。また、第2遺構面の遺構は掲載を省略した。

### 第3節 野内遺跡とその周辺区域における土地利用の変遷について

ここまで調査成果を報告してきた野内遺跡C地区は、発掘面積9,000㎡を測る広大な発掘区ではあるが、それでも連続と広がる人々の活動域の一部を占めるにすぎない。したがって、前節までにおいて述べた調査成果は、あくまで各時代の人々の活動の一部を切り取って提示したにすぎないと言わざるを得ない。幸いなことに、当センターでは、近年、隣接する区域において、野内遺跡の残る3地区（A・B・D地区）をはじめ、ウバガ平遺跡、三枝城跡、与島B地点遺跡、与島C地点遺跡といった諸遺跡の調査を行っており、それらの大部分について、すでに個別に報告を終えている。それらは互いに立地や性格を異にすることから、それぞれの調査における成果を総合することにより、この区域における人々の活動の全体像を示せるものと考えられる。

本書の締めくくりとして、周辺諸遺跡における成果に目を配りつつ、野内遺跡とその周辺区域の土地利用の変遷を辿り、地域の歴史を描くことをもって、調査成果を総括する<sup>1)</sup>。

#### 1 縄文時代

縄文時代については、野内遺跡C地区では遺物が少量出土したにとどまる。隣接遺跡における調査成果を見渡すと、ウバガ平遺跡の出土遺物中に草創期に遡る有舌尖頭器<sup>2)</sup>がみられるものの、遺構という形で明確に生活痕跡が認められるのは早期以降である。早期に属する可能性の高い遺構としては、ウバガ平遺跡の炉穴（SK8）と焼礫集積遺構（SI1）、三枝城跡の焼礫集積遺構（SF16）を挙げることができる。

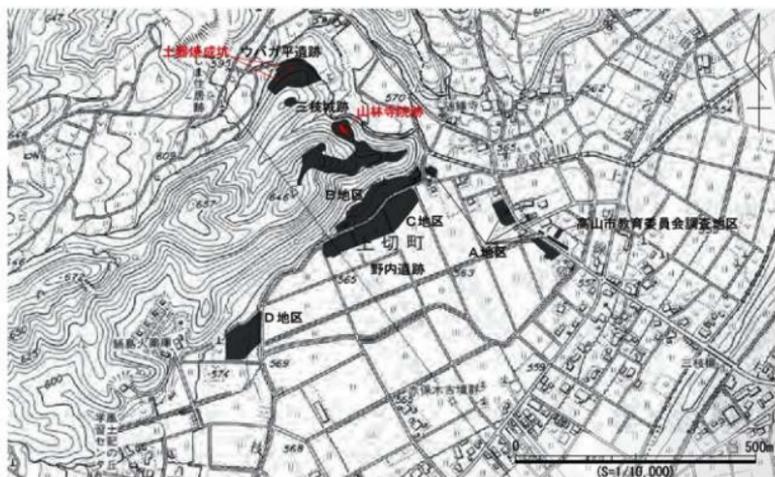
その後、前期末から中期にかけて、ウバガ平遺跡において住居跡が確認されるものの、集落と呼べる規模には至らず、しかも、後期・晩期には住居跡は見出されなくなる。したがって、縄文時代を通じて、集落を営む適地とみなされることはなかったと思われる<sup>3)</sup>。しかし、縄文時代におけるこの区域を鳥瞰した場合、注目すべきは、住居跡よりもむしろ狩猟用の落とし穴とみられる一群の遺構であろう。山への登り際の斜面を中心に、野内遺跡B地区で21基、ウバガ平遺跡で45基を検出したほか、三枝城跡にもその可能性のある土坑がみられる（SK35）。飛驒全域を見渡してみても、これまでに知られている最も大規模な落とし穴である。それらの作られた時期を詳らかにすることはできないとはいえ、縄文時代には、この区域は集住の場というよりは狩り場とみなされていたと判断される。

#### 2 弥生時代

野内遺跡C地区では弥生時代の遺構は検出できなかったものの、出土遺物には注目すべきものが含まれる。石器類では、信州からの搬入品とみられる磨製石鏃（遺物番号907）、飛驒地域で出土したもののなかでは最も残存状態の良い石包丁（遺物番号2016）、土器類では、在地の内垣内式土器の横羽状文甕（遺物番号990～995）、金属器類では銅鏃（遺物番号2034）、主なものを列挙すると以上のようになる。

この区域で確認された弥生時代の遺構としては、まず、前期に属するものに、三枝城跡の土坑SK38がある。この土坑の性格は明らかとなっていないが、前期の柴山出村式土器の壺<sup>4)</sup>の残存状態良好な個体が出土したことが注目される。





第240図 野内遺跡・ウバガ平遺跡・三枝城跡の立地

中期については成果が大きく、ウバガ平遺跡の尾根上の平地地において中期後半の集落跡を確認している。この集落跡では、内垣内式土器の横羽状文甕10個体<sup>5)</sup>、信州系の粟林式土器の壺<sup>6)</sup>、北陸系の小松式土器の無頸壺<sup>7)</sup>、信州からの搬入品である太型蛤刃石斧<sup>8)</sup>、扁平片刃石斧<sup>9)</sup>などが出土し、信州、北陸との交流を保ちつつ独自の土器を持つという飛騨地域の特徴を窺える好例となっている。さほど距離を隔てぬ地点に位置する野内遺跡C地区の出土品に、内垣内式土器をはじめ中期に属するものが少なくないのは不自然なことではない。ただし、今回の調査で出土した中期の土器類には、内垣内式土器の典型例に比べ差異の認められる個体が多く、それらは、今後、内垣内式土器の系譜を追究する上で、検討対象とするに値する。

後期については、ウバガ平遺跡では集落が途絶え、代わって三枝城跡と野内遺跡D地区において人々の活動の徴証が確認される。三枝城跡では、山中で検出した土坑SK1から、後期の甕2個体が出土した<sup>10)</sup>。これは埋葬に伴うものの可能性が考えられる。住居跡は少なく、わずかに当遺跡D地区のSB1のみである。この住居跡は、飛騨地域に多い「コの字状石囲炉」を備える初期の例として注目される。

以上のように、弥生時代には中期後半には尾根上に集落が営まれ、活発な活動が認められるものの、その前後の時期については散発的に活動痕跡が認められるにとどまる。したがって、弥生時代においても、この区域では長期にわたり安定した集落が営まれる状況に至ってはいないと判断される<sup>11)</sup>。

### 3 古墳時代

#### (1) 古墳時代前期

野内遺跡B地区・C地区において弥生時代終末期ないし古墳時代初頃の土器類が多数出土し、この時期に属する住居跡を確認している。また、C地区では水田跡を確認した。この時期に至って、ようやく人々がこの地に本格的に定住したことが窺える。

まず注目されるのは、野内遺跡C地区の竪穴住居跡1220SBにおいて出土した、古墳時代初頃の7個体の土師器である（遺物番号1～7）。それらは残存状態が良好であるだけでなく、系譜を異にする多様な個体が共存する点で特筆される。具体的には、東海系の有段高坏（遺物番号1）、北陸系の盤状有段高坏（遺物番号2）、信州系の櫛描文甕（遺物番号4）、北陸系の有段口縁甕（遺物番号5・6）、縦方向の櫛描文を持つ在地の甕（遺物番号7）、それに系譜不明の台付鉢（遺物番号3）、以上がまとめて出土している。これらが同時に使用されたものなのか、あるいはまとめて廃棄されたものなのかは定かでないものの、出土状況からは同時代性を疑う余地はない。さらに、この遺構で出土した甕には東海系のもはみられないものの、当遺跡B地区とC地区では包含層からS字状口縁台付甕の破片が出土しており、東海系の甕が普及していたことも明らかとなっている。飛騨地域における当該期の土器様相については、飛騨各地で東海系・北陸系・信州系の土器片が出土することから、周辺各方面からの影響の混在が予想されていたが、今回の成果は、それを具体的に実証するものと言える。

縦方向の櫛描文を持つ甕（遺物番号7）については、当発掘区では同様の特徴を備える甕の破片が多数出土しており（遺物番号869・1023～1027）、さらに未報告ではあるものの、高山市国府町域でも類似する土器片が出土することが知られている<sup>12)</sup>。したがって、これが当該期の飛騨地域特有の土器である可能性は高い。この甕の系譜については、美濃山間・内陸地域で出土する「櫛条痕」の条痕文系甕<sup>13)</sup>との類縁関係を指摘できるものの、現時点では直接の影響関係については判断を留保せざるを得ない。とはいえ、飛騨地域から美濃山間・内陸地域にかけて広く普及した土器であった可能性も視野に入れておく必要はあると思う。この問題の解明は、今後の課題としておきたい。

野内遺跡C地区で検出した一群の「古墳時代水田跡」は、それらと同じ頃に端を発する水田耕作の痕跡と考えられる。ところで、飛騨地域における水田耕作の開始時期については、今のところ明らかとなっているとは言いがたい。立石遺跡（高山市国府町）において、溝内から縄文時代晩期の土器とともに稲のプラント・オパールが検出されており、縄文時代晩期に溝を利用した稲作が行われた可能性が指摘されているものの、区画された水田跡が検出されてはいない<sup>14)</sup>。また、弥生時代の農耕具である石包丁が当遺跡をはじめとして飛騨各地で出土していることから、飛騨地域における水田耕作の始まりが弥生時代にまで遡る可能性は高いと考えるが、弥生時代の水田跡そのものの確実な検出例はない。ここで問題となるのが、当センターが平成4年度に調査を実施した深沼遺跡（高山市国府町）の水田跡である。深沼遺跡では畦畔で区切られた約40枚の区画が見出され、実施したプラント・オパール分析からは、それらが稲作痕であることを支持する結果を得ている<sup>15)</sup>。年代については、報告書では出土須臾器を手掛かりに「7世紀末まで遡る可能性がある」としているが、報告書刊行後に明らかとなった出土植物遺体の放射性炭素年代測定結果<sup>16)</sup>を拠る所に弥生時代後期に遡るとの異説が出され、今日に至るも結論は出ていない<sup>17)</sup>。このほか、古墳時代に属すると推定される事例としては半田垣内遺跡（高山市国府町）と杉崎廃寺跡（飛騨市古川町）の水田跡が知られているものの、前者は古

墳時代中期に下る可能性が高く<sup>19)</sup>、後者は寺院創建より前という下限年代が判明することとどまっている<sup>19)</sup>。したがって、現時点では当遺跡の「古墳時代水田跡」が、飛騨地域において最古の水田耕作確認例となる。また、今回の調査により、飛騨地域においても古墳時代前期にすでに木製農具を使用していたことが明らかとなった。

弥生時代終末期ないし古墳時代初頭における遺構・遺物の集中ののち、古墳時代前期における人々の確実な活動痕跡は希薄となり、ウバガ平遺跡において、前期末ないし中期初頭頃の住居跡S B 1と土器埋納坑S K 27を検出したにとどまる。

## (2) 古墳時代中期

古墳時代中期には、集落は山麓を離れ、東方の野内遺跡A地区へ移るとともに、飛騨的な拡大をみせる。野内遺跡A地区で確認された50基を超える住居跡からは、須恵器を伴わない段階から須恵器導入初期にかけての転換期における集落の変遷を窺うことができる。カマドは未だ導入されておらず、「コの字状石囲炉」を使用しており、土師器では有段坏部長脚高坏から碗状坏部低脚高坏へ移ってゆく様子を見ることができるとともに、飛騨地域の古墳時代中期集落を代表する興味深い事例である。さらに、飛騨では最古の部類に属する須恵器が出土したことで注目される<sup>20)</sup>。集落の範囲が、飛騨では最も早く古墳を導入した地域に近接していることを重視するならば<sup>21)</sup>、飛騨地域最古級の古墳の造営主体となった人々の居住地であった可能性を指摘することもできる。

それらと同時期に位置付けられる遺構は、野内遺跡B地区にわずかに認められるにとどまる。今回の野内遺跡C地区の調査においても遺構は確認されず、出土遺物も僅少であった。

## (3) 古墳時代後期

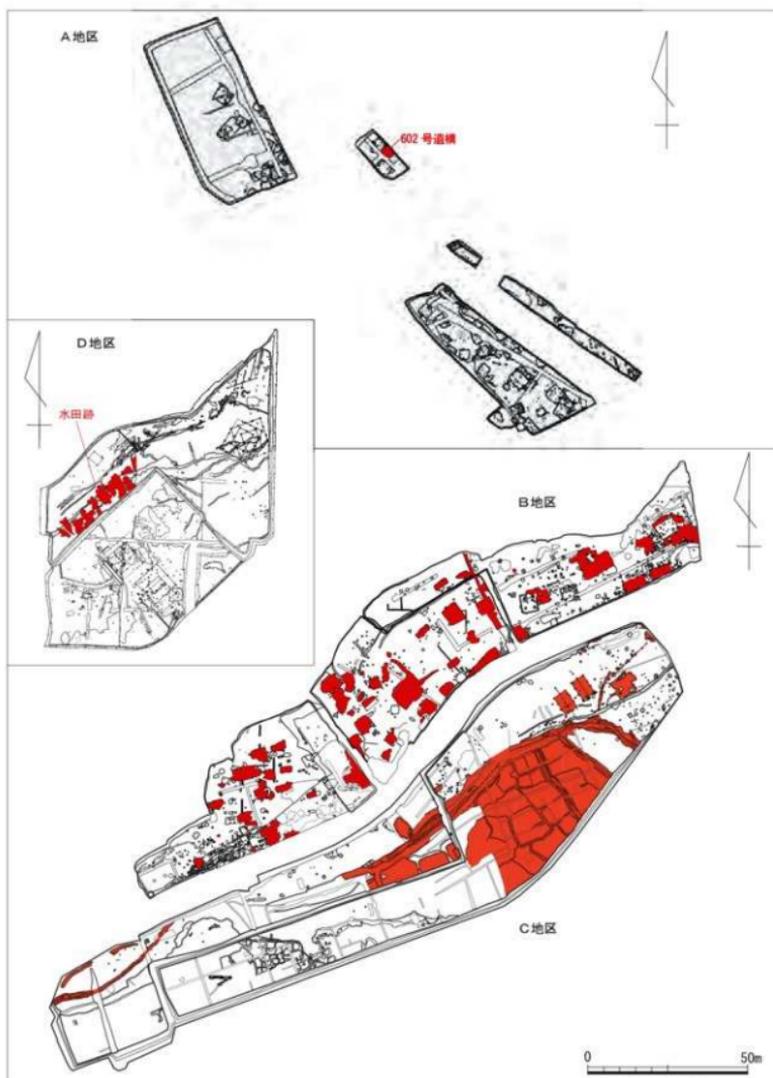
野内遺跡A地区の古墳時代中期集落は須恵器の本格的普及期までは存続せず、集落は再び山麓へ戻ってくるようである。野内遺跡B地区とウバガ平遺跡で、古墳時代後期の住居跡を確認している。ただし、それらは後期でも後半の7世紀代に偏る傾向が認められ、時期的な断絶を持つようである。両遺跡とも、住居にはカマドを備えるようになっており、もはや「コの字状石囲炉」はみられない。

古墳時代終末期に至り、ウバガ平遺跡内に4基からなるウバガ平古墳群が築かれる。川上川左岸一帯は後期古墳の密集する地域として知られ、周辺に目を向ければ、ほかにも与島古墳群<sup>22)</sup>をはじめとする数多くの後期古墳を見出すことができる。野内遺跡B地区とウバガ平遺跡における集落の形成は、そうした古墳群の造営と連動するものであったと判断される。

野内遺跡C地区では、引き続き成果の希薄な時期に当たるが、この時期に属する遺構として溝状遺構70SDを挙げることができる。野内遺跡B地区の集落の再形成に伴い、C地区の範囲にも人々が戻ってきたと捉えられよう。

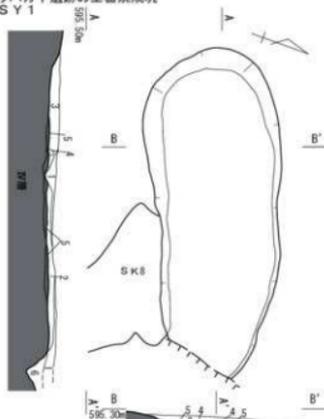
## 4 古代（奈良時代～平安時代前半）

ウバガ平遺跡の古墳時代集落は奈良時代には続かず、以後、途絶える。その一方で、野内遺跡B地区では奈良時代にも集落は存続し、平安時代前半に至り最盛期を迎える。そのころの集落の範囲はB地区内にとどまるものではなく、東方のA地区の範囲にまで拡大をみせている（602号遺構）。そうした集落の発展と連動するように、野内遺跡C地区では大規模な水路の開削が行われ、水田開発が実現した。ここではまず、野内遺跡B地区・C地区の集落及び水田の性格について考えてみたい<sup>23)</sup>。



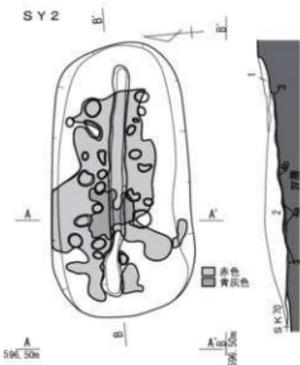
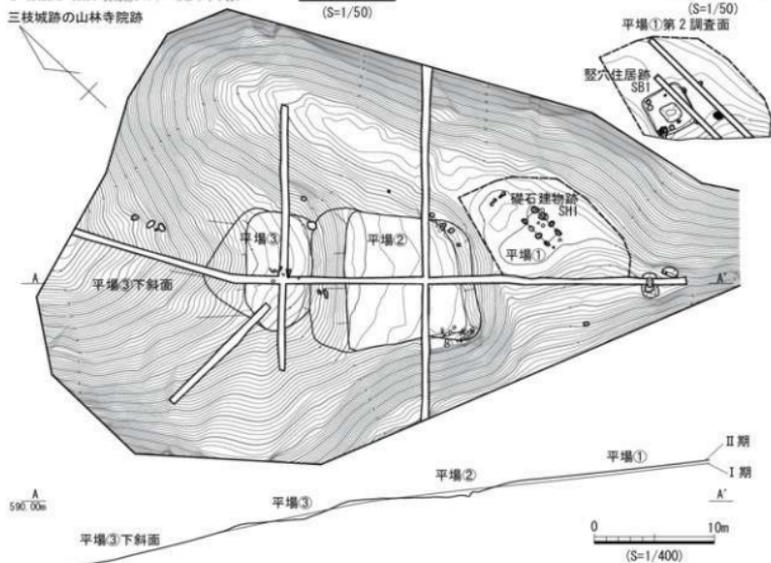
第241図 野内遺跡各地区の古代の遺構

ウバガ平遺跡の土器焼成坑  
SY 1



1 101W/4 灰黄褐色砂質シルト、しまり強い。陶器を含む。  
2 101W/2 黄色土壌、しまり強い。陶器を含む。  
3 101W/1 黄色土壌、しまり強い。陶器を含む。  
4 101W/6 黄褐色粘質シルト、しまりや弱い。IV層土と同質。  
5 SKB/6 粘赤褐色粘質シルト、IV層が焼成した層。  
6 101W/3 上に黄褐色シルト、しまりや弱い。

三枝城跡の山林寺院跡



1 101W/4 褐色シルト、ややしまる。粘性や中あり。  
2 101W/2 褐色シルト、ややしまる。粘性や中あり。  
3 101W/1 黄褐色シルト、ややしまる。粘性や中あり。厚20mmの酸化鉄%相度含有。炭が焼成した範囲。  
4a 101W/1 黄褐色粘質シルト、しまる。粘性や中あり。IV層が焼成した層。  
4b 101W/6 赤褐色粘質シルト、しまる。粘性や中あり。IV層が焼成した層。

第242図 ウバガ平遺跡・三枝城跡の古代の遺構

今回の調査では多種多様な木器類が出土したが、それらの大半は日常用具が占めており、集落及び水田の性格を決定づけるような特殊品はみられない。やや特徴的な点として、箸や火付け木が大量に出土したことが挙げられようが、これは平安時代頃の木器類が出土する遺跡としては一般的な現象と判断する。注目すべきは、墨書土器をはじめとする多数の文字関係資料であろう。それらの多くは当遺跡B地区の集落からの流れ込み品とみられ、内容面でもB地区の出土品を補充するものに位置付けられる。野内遺跡全体で確認された古代の墨書土器は249個体（B地区86個体、C地区161個体、D地区2個体）、へら書き土器は31個体（B地区2個体、C地区29個体）となった。硯は31個体（B地区17個体、C地区14個体）、転用硯は92個体（B地区23個体、C地区69個体）である<sup>210</sup>。いずれも飛騨地域の遺跡としては突出した数であるとともに、最も多様な事例と評価できる。それらとともに、緑軸陶器、須臾器の双耳環・火倉などの特殊品も出土していることにも併せて注目したい。さらに、今回の調査では緑軸陶器の中に京都産であることが確認される個体を確認しており（遺物番号511）、都から奢侈品を導入できるほどの住人がこの地に居住していたとみることができる。

文字関連資料の出土は、そこが識字層に関わりのある土地であったことを示すものである。他の多くの地域の場合と同様、飛騨地域においても、文字関連資料が出土したのは、杉崎廃寺跡（飛騨市古川町）、寿楽寺廃寺跡ならびに太江遺跡<sup>211</sup>（飛騨市古川町）、上町遺跡<sup>212</sup>（飛騨市古川町）など、寺院関連遺跡ないし官衙の要素を備えた遺跡に限られることから、当遺跡もまた一般集落跡とは性格を異にする遺跡と捉えるべきであろう。B地区及びC地区の出土遺物の中に寺院との繋がりを思わせるものはほとんどみられない一方で、B地区では官との関連を証明する物証そのものである腰帯具が出土していることから<sup>213</sup>、やはり官との関連の深い遺跡と考えたい。ところが野内遺跡の検出遺構の実情に目を向けると、B地区では鍛冶工房跡とみなすべき遺構が多い点の特異ではあるものの、平安時代に至るまで一貫して堅穴住居跡が主体を占めている点に疑問を覚える。これはむしろ一般集落跡の様相である。C地区の掘立柱建物跡にも、公的施設を思わせる規格性の強い大型のものがみられるわけではない。したがって、出土遺物の特異な組成が、ここが公的施設であることを強く示唆するのに対し、検出遺構そのものに官衙の要素を窺うことは難しいと言わざるを得ないのである。

このような遺構・遺物にみられる不整合ともいべき様相を、どのように解釈すればよいのであろうか。一案として、官衙そのものではなく、官衙で文書事務等に携わる官人等の居住地とする解釈を挙げておきたい。寺院・官衙という選択肢を排除する場合、識字層の集住を想定できるのはそのような特殊な集落に限られるからである。さらに踏み込むなら、B地区の一群の鍛冶工房跡を公的な様相を帯びた施設の跡と捉え、官人の居住地であるとともに、国府等に製品を供給するための官営工房群を内蔵した集落の跡と言うことも許されるであろう。当遺跡の立地上の特性が、そうした解釈を可能とする。飛騨国府の位置は未だ判明していないものの、当遺跡は飛騨国分寺・国分尼寺からはわずか約3kmの地点に当たり、当時、飛騨国の中心として栄えたであろう地域と直接の繋がりを持つことのできる圏内に位置する。さらに、赤保木1～6号古窯跡、よしま1～3号古窯跡、赤保木8号古窯跡など、高山盆地の重要な古窯跡は、いずれも約1kmの近距離に密集しており、しかも赤保木1～4号古窯跡は飛騨国分寺に瓦を供給した瓦窯跡であることが判明している。以上から、川上川左岸の丘陵のうち、現在の上切町から赤保木町にかけての地域が古代には公的な性格を帯びた生産拠点であり、野内遺跡B地区を中心とする区域にあった集落は、その一角を占める存在であった可能性を指摘しておきたい。

では、野内遺跡C地区の水田については、どう捉えるべきであろうか。検出した水田そのものの年代を明言するのは難しいとはいえ、水路の開削とそれに続く改修の行われた時期がB地区の集落の存続期に当たることは、出土遺物から証明される。また、そのような大事業が施工される必要条件として、付近に大人数の居住する集落の存在を想定するのは当然であろう。やはり、野内遺跡B地区に位置する集落の最盛期、すなわち平安時代前半かそれをやや遡る時期に、集落居住者を直接の担い手として開削されたと捉えておいて大過ないと考える。さらには、B地区の集落の持つ特異な性格からみて、それが公的な性格を帯びた事業であった可能性さえ小さくないであろう<sup>29)</sup>。

なお、野内遺跡では、C地区の南西に位置するD地区でも11区画の水田跡が検出されており、出土遺物から、それらは奈良時代から平安時代にかけての時期に属すると推定されている。したがって、当地における古代水田の範囲は、今回の発掘調査で面として把握し得た部分にとどまるものではなく、より広範囲にわたるものであったとみて間違いない。

さて、ここまでは集落と水田に対象を絞ってみてきたが、当区域における当該期の遺構はそれらにとどまるものではなく、実に多様である。奈良時代には人々の活動痕跡が途切れていたウバガ平遺跡では、平安時代になると土器焼成坑とみられる遺構2基が見出される(SY1・SY2)。さらに、三枝城跡の発掘区内では、広範囲にわたり須恵器・灰釉陶器が出土したのみならず、仏具が出土する3段の平場を検出し、山中に古代の山林寺院跡が存在することを確認した。いずれも飛騨地域では極めて稀な遺構である(第242図)。重要なのは、それらはいずれも野内遺跡の集落・水田の存続期間内に収まるとみて問題のない遺構だということである。

それらウバガ平遺跡・三枝城跡の発掘調査成果を、野内遺跡における上記の調査成果と結びつけることによって、この区域における平安時代前半頃の土地利用の全体像が見えてくる。山麓緩斜面から平地にかけて居住適地では集落を営むとともに鉄製品の生産を行う(野内遺跡B地区、A地区の一部)。その前面の広大な低湿地では水路を開削して水田開発を実施し、耕作を行う(野内遺跡C地区・D地区)。そして、集落背後の山中には信仰ないし修行の場を設け(三枝城跡)、さらに、必要に応じて土器生産を行ったのである(ウバガ平遺跡)。いずれも立地の特性に応じた合理的な土地利用と捉えることができる。発掘調査の成果から、往時における土地利用のあり方について、このように多面的に把握するに至る事例は稀である。今回の調査を含む一連の調査による成果の大きさを、改めて強調しておきたい。

## 5 平安時代後半以降

野内遺跡C地区においては、平安時代後半以降に属する遺構は認められないものの、出土土器類には、輸入磁器・山茶碗・珠洲焼・常滑焼・古瀬戸系施釉陶器など、明らかにそれ以降の時期に属するものが認められる。それらの存在は、この区域における人々の活動が平安時代前半をもって全く途絶えてしまったわけではないことを示唆する。その一方で、それらの数量が平安時代前半までの出土遺物に比べ、問題にならないほど少ないことにも留意する必要がある<sup>30)</sup>。こうした事象をどのように評価すべきであろうか。

野内遺跡C地区の出土遺物の増減は、基本的には野内遺跡B地区における集落の盛衰に連動するものであったと捉えるべきである。野内遺跡B地区では10世紀後半には遺構数が激減することが確かめ

られており、以後、集落は消滅することが指摘されている。それでもなお、平安時代後半以降にも当地における人々の活動が変わらず継続された可能性も皆無とは言えない。なぜなら、そもそも飛騨地域においては、須恵器・灰軸陶器が廃れた平安時代後半以降、それを引き継ぐに足る数量を備えた土器食膳具が現われないうという根本的な事情が存在するからである。山茶碗や古瀬戸系施釉陶器の一大生産地であった尾張・美濃や、土師質土器が広く流通する北陸などは異なり、集落における人々の生活痕跡を出土土器から追うこと自体が困難となるのである。これは野内遺跡の位置する高山市域でも例外ではない。遺物が出土しなくなることが、そのまま人々が居住しなくなったことを意味するとは限らず、例えば木製容器などを使用した人々が居住した可能性について、頭から否定するわけにはいかないのである。

この疑問には、まず、遺物ではなく遺構の様相を検討することをもって答えたい。野内遺跡B地区では、堅穴住居跡が57基検出されている一方で、掘立柱建物跡・橿跡は5基にとどまり、居住施設が基本的に堅穴構造を採っていることが読み取れる。全国的趨勢に照らすならば、いわゆる堅穴住居が住居の主流であったのは平安時代前半頃までと言ってよからうが<sup>30)</sup>、野内遺跡B地区の集落は、まさにその段階にとどまっていると捉えることができる。平安時代後半に下る可能性のある居住の跡、例えば堅穴住居に代わる居住形態とされる小規模な掘立柱建物の跡などといった遺構は、ほとんど確認されていない。したがって、野内遺跡B地区では、平安時代後半の遺物が僅少であるのみならず、遺構構造にも平安時代後半以降に下る要素が見出せず、集落がそのままの規模で平安時代後半にまで継続したことは想定できないのである。ちなみに、野内遺跡C地区の北東区域には掘立柱建物跡がみられるが(SH1・SH2)、出土遺物様相と放射性炭素年代測定結果から平安時代前半に属するとみて問題なく、それより下る可能性はほとんどない。以上のように、遺構そのものの様相からも、平安時代後半には、野内遺跡B地区・C地区は、居住域ではなくなったことが窺えるのである。

また、食膳具の変遷という観点からは、次のようなことも言えるのではないかと思う。一般に、須恵器などの古代土器食膳具の消滅後、それに代わる土器が出土しなくなる地域においては、漆器をはじめとする木製食膳具にその役割が引き継がれたと説かれることが多い。野内遺跡C地区においても漆器は出土しており、それらが中世前期に属する可能性は高い。もし、この点をことさらに強調するならば、土器類が使われなくなったのちに漆器に依存しつつ集落は存続したと主張できるかもしれない。しかし、出土しているとはいえ、その数は破片数でわずかに数十点程度にすぎず、それらが古代土器の果たした役割をそのまま継承したと捉えるわけにはいかないと考える。古墳時代以来の木器類の出土総点数が破片数で28,963点に及ぶという野内遺跡C地区の木器出土状況を念頭に置き、さらに、木質遺物の中では比較的残りやすいという漆器の特性をも考慮するならば、この出土点数は、あまりにも少なすぎるのではないだろうか。平安時代後半以降にも集落が存続したと仮定した場合、漆器の残存率を極めて小さく見積ると、不自然な資料操作を要することになってしまうのである。これは仮定に無理があると考えざるを得ない。やはり、集落の最盛期は須恵器・灰軸陶器の使われた時期までで、その後は存続しなかったか、あるいは大幅に衰退したとみるべきであろう。

ところで、数量として多くはないとはいえ、平安時代後半以降、近世に至る遺物が出土しているのは否定できない事実ではある。それらはどこからもたらされたのであろうか。平安時代後半から中世前期にかけての時期については、すでに記したように、発掘区域からごく近い位置に、ある程度の規

模を持った集落が存続した可能性は小さいとみるべきである。しかし、人々の生活痕跡が見出されないわけではなく、例を挙げれば、野内遺跡D地区で検出された掘立柱建物群がある。遺構内からの出土遺物は僅少であり、建物の性格は不明とされているものの、確認された7棟の建物のうち四面庇構造の6棟については、中世前期の12世紀後半から13世紀前半に属する可能性が高いとされている<sup>31)</sup>。遺構という形で確認されている範囲で検索すると、該当するのはこの事例のみとなるのだが、調査対象外の区域をも視野に入れるなら、野内遺跡C地区の東方、南方、西方に今も広がる周辺水田域に、延々と続けられた水田耕作に伴って同様の施設が広い時代にわたり点在し、それらが流れ込み遺物の供給源となったと考えても不自然ではあるまい<sup>32)</sup>。こう捉えるなら、野内遺跡C地区の当該期の出土土器類に認められる年代幅の大きさやまとまりのなさを無理なく説明できるであろう。

野内遺跡以外に目を向けると、ウバガ平遺跡では中世陶器は全く出土していないものの、三枝城跡の発掘区内においては渡来銭や輸入磁器が出土しており、中世にも人々の活動が山中にまで及んだことを確認している<sup>33)</sup>。さらに、戦国時代には山中に三枝城が築かれる。ただし、野内遺跡発掘調査の成果中に、三枝城に関連を持つような遺構・遺物は認めるのは難しく、わずかに野内遺跡B地区の15世紀後半頃の墓(S K 162)にその可能性をみるにとどまる。山城の造営に伴い、山麓に人々が再び集まってくるようなことはなかったと思われる<sup>34)</sup>。

近世以降については、野内遺跡B地区において、溝状遺構3、土坑15、ピット8を検出しており、それらはすべて近世後期以降に属すると判断される。野内遺跡B地区における近世もしくはそれ以降の出土陶磁器破片数は4,784点にのぼり、それらの大半は18世紀後半以降に属する。野内遺跡C地区でも近世陶磁器の出土数は破片数で322点を数え、これは平安時代後半以降では比較的多まった数量である。おそらく、野内遺跡B地区の区域において、集落の形成とは言えないまでも人々の活動が再開され、それに伴いC地区への遺物の流れ込みも再び始まったのであろう。なお、野内遺跡B地区で近世の遺構密度の高い区域は、明治21年作成の地籍図で「宅地」として表記されている区域と概ね重なることから、近代以降にもさほど変わることなく人々は定住し、現代に至ったものとみられる。

## 第5章 第3節 注

1) 本節において、対象区域における調査成果についての記述は、特に断らない限り以下の文献による。なお、平成19年度に発掘調査を行った与島B地点遺跡と与島C地点遺跡については未報告であるものの、当該地域の歴史像の構築作業に大きく支障を来すことはないと思われる。

①財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡A地区』

②財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』

③財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』

④岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』

⑤岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』

2) 『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』の遺物310番。

3) さらに周辺の遺跡に目を向けると、前期の集落跡は中切上野遺跡で確認されている(高山市教育委員会1999『中切上野遺跡発掘調査報告書』)。また、赤保木遺跡では中期の集落跡を確認している(財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター

- 2007『赤保木遺跡』。
- 4) 『三枝城跡』の遺物132番。
  - 5) 『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』の遺物99・100・102～107・137・138番。
  - 6) 同書の遺物233番。
  - 7) 同書の遺物234番。
  - 8) 同書の遺物101番。
  - 9) 同書の遺物109番。
  - 10) 『三枝城跡』の遺物5・6番。
  - 11) さらに周辺に目を向けても、弥生時代については、赤保木遺跡で中期の住居跡2基を確認したにとどまり、大規模な集落跡はみられない。
  - 12) 押井正行氏（高山市教育委員会）から御教示を賜った。
  - 13) 財団法人岐阜県文化財保護センター2000『砂行遺跡』第2分冊53～62頁。
  - 14) 国府町史刊行委員会2007『国府町史 考古・指定文化財編』92頁。
  - 15) 財団法人岐阜県文化財保護センター1992『深沼遺跡』。
  - 16) 出土したトウの土について放射性炭素年代測定を実施し、 $1,870 \pm 120\text{BP}$ との結果を得ている。
  - 17) 例を挙げれば、近年刊行された国府町史刊行委員会2011『国府町史 通史編1』では、深沼遺跡の水田跡を弥生時代後期に属するものとして紹介している。このほか、飛騨地域で弥生時代に遡る可能性のある水田跡検出例として、昭和62年に国府町教育委員会により発掘調査が行われ、国府町史刊行委員会2007『国府町史 考古・指定文化財編』70頁に記載のある岩田遺跡（高山市国府町）があるが、詳細は明らかとなっていない。
  - 18) 国府町教育委員会1993『半田垣内遺跡 1次・2次発掘調査報告書』。
  - 19) 杉崎庵寺創建に先立つ遺構として、大区画の畦畔と、その中を土盛りで細分する小区画の畦畔が報告されている。古川町教育委員会1998『杉崎庵寺跡発掘調査報告書』155～156頁。なお、寺院の創建年代については7世紀末ないし8世紀初頭と推定されている。
  - 20) 『野内遺跡A地区』所載の遺物31番（甕）、64番（甕）、201番（坏身）が飛騨地域最古級の須恵器とみられる。なお、同書の該当部分の記述には編集ミスによる誤りが含まれるため、以下のように訂正する。  
101頁22～25行目：（誤）「ただし、70号遺構の他の出土遺物に目を向けると、土師器高杯には高杯A（有段杯部長脚高杯）とみられる個体（50）と高杯C（碗状杯部低脚高杯）とみられる個体（56）が混在しており、須恵器坏身（201）の出土遺構である5号遺構が碗状杯部低脚高杯で占められるのに比べ古い様相を示すと捉えられる。」→（正）「ただし、70号遺構の他の出土遺物に目を向けると、土師器高杯には高杯A（有段杯部長脚高杯）の杯部（50）と高杯C（碗状杯部低脚高杯）になるとみられる脚部（56）が混在することが確かめられる。第5章において詳述するが、当遺跡の須恵器出土遺構では土師器高杯が高杯Cで占められる傾向が顕著であるので、70号遺構の土師器高杯組成は他の須恵器出土遺構の場合よりやや古い様相を示すものと捉えることができる。」
  - 21) 第2章第2節にも記したとおり、高山盆地所在の古墳のうち、古墳時代中期に遡るとみられるものは、すべて野内遺跡から1.5km以内に位置する。
  - 22) 財団法人岐阜県文化財保護センター1997『与島古墳群』など。
  - 23) 第241図・第242図は、既刊の報告書から編集の上、転載したものである。出典は以下のとおり。

①第241図上段：『野内遺跡A地区』第7図（32頁）

②第241図中段：『野内遺跡D地区』第66図（110頁）

③第241図下段上半：『野内遺跡B地区』図24（第1分冊43頁）

④第242図上段：『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』第28図（52頁）、第29図（53頁）

⑤第242図下段：『三枝城跡』第95図（163頁）

- 24) ただし、野内遺跡B地区では、擦った痕跡のない個体は、転用礎として扱っていない。
- 25) 財団法人岐阜県文化財保護センター2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』及び財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『太江遺跡Ⅱ』。
- 26) 古川町教育委員会1991『上町遺跡D地点』など。
- 27) 『野内遺跡B地区』所載の遺物134番。
- 28) 野内遺跡の古代水田と条里については、検出した水田小区画の形状と時期判定が検証に耐えるだけの精度を持つか疑問であるため、本書では追究しないこととする。
- 29) 平安時代後半以降に属する出土遺物としては土器類以外に古銭もあるが、出土数は12個体にすぎず、やはり土器類同様、付近に集落の存在を想定するには僅少なすぎる。
- 30) 小野正敏編2001『図説・日本の中世遺跡』東京大学出版会など。ただし、飛騨地域における中世集落の様相については、今のところ明らかになっているとは言えない。
- 31) 野内遺跡D地区の竪立柱物跡については、遺構内からの土器類の出土点数が極めて僅少であること、隣接する水田跡・水路跡などの多くがC地区と同じく古代の遺構とみなされていることから、野内遺跡C地区のSH1・SH2と同じく、古代に遡る可能性も排除できないと思われる。ただし、D地区では、山茶碗をはじめとする中世土器類の占める割合がC地区に比べ高いのも事実である。
- 32) 参考までに、他の発掘区の状況について述べておく。野内遺跡A地区は、検出遺構のほとんどが古墳時代中期に属し、中世以降の遺構は確認されていないにもかかわらず、破片数24,857点を数える出土遺物中には、輸入磁器6点、山茶碗11点、珠洲焼6点、その他の中近世陶器372点がみられる。なお、野内遺跡B地区でも1個体のみであるが第4型式（12世紀代）の南部系山茶碗が確認されており、中世前期における人々の活動痕跡が皆無というわけではない（『野内遺跡B地区』所載の遺物14番）。
- 33) 三枝城跡発掘区では、北宋銭など古銭が9個体、輸入磁器が5個体出土している。
- 34) 野内遺跡B地区では、中世陶磁器124点が出土しているものの、中世の遺構は溝状遺構3、土坑4、ピット2を確認したにすぎない。

## 参考文献

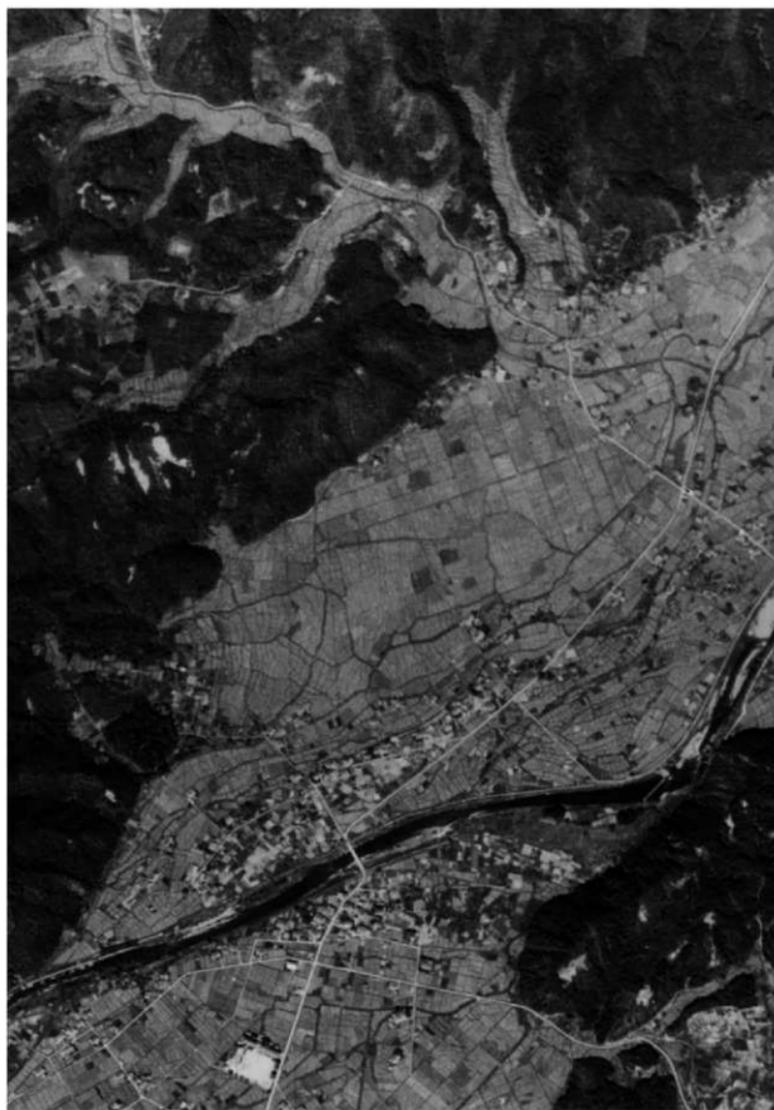
- 愛知県史編さん委員会2010『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』
- 赤塚次郎編2002『考古資料大観 第2巻 弥生・古墳時代 土器II』小学館
- 秋田裕毅2002『ものと人間の文化史104 下駄 神のはきもの』法政大学出版局
- 石川日出志1995「飛騨の弥生中期横羽状文甕」飛騨考古学会編『飛騨と考古学 飛騨考古学会20周年記念誌』
- 岩井宏實1994『ものと人間の文化史75 曲物』法政大学出版局
- 岩田隆1986「中世遺跡出土の下駄」『飾る・遊ぶ・祈るの木製用具』北陸中世土器研究会
- 上原真人1994「入れもの」『季刊 考古学』第47号
- 大垣市教育委員会1997『曽根八千町遺跡』
- 小野正敏編2001『図説・日本の中世遺跡』東京大学出版会
- 加納俊介・石黒立人編2002『弥生土器の様式と編年—東海編—』木耳社
- 川崎編2008『「赤い土器のクニ」の考古学』雄山閣
- 岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県遺跡地図』
- 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』
- 岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』
- 黒崎直1996『日本の美術357 古代の農具』至文堂
- 国府町教育委員会1993『半田垣内遺跡 1次・2次発掘調査報告書』
- 国府町史刊行委員会2007『国府町史 考古・指定文化財編』
- 国府町史刊行委員会2011『国府町史 通史編I』
- 古代の土器研究会1994『古代の土器研究—律令の土器様式の西・東3 施釉陶器—』
- 小淵忠司2011「飛騨の須恵器と灰釉陶器」『研究事業報告（平成22年度版）』岐阜県ミュージアムひだ
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995『柳之御所跡』
- 財団法人大阪府文化財センター2006『古式土師器の年代学』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター1992『深沼遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター1997『与島古墳群』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター2000『砂行遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター2000『冬頭城跡・冬頭山崎1号古墳・冬頭山崎2号古墳・冬頭山崎1号横穴』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター2000『船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター2002『上ヶ平遺跡II』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『太江遺跡II』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『柿田遺跡』

- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡A地区』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』
- 財団法人滋賀県文化財保護協会2011『夏見城遺跡』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1993『研究紀要Ⅳ 水田跡研究の方法と研究』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『古代における農具の変遷—稲作技術史を農具から見る—』
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター1996『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通—』
- 財団法人富山県文化振興財団2004『黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡 発掘調査報告』
- 財団法人富山県文化振興財団2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』
- 齊藤孝正2000『越州窯青磁と緑釉・灰陶陶器』至文堂
- 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1997『石川県出土文字資料集成』
- 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1998『古代北陸と出土文字資料』
- 出土木器研究会2009『木・ひと・文化—出土木器研究会論集—』
- 上嶋善治2004「古代の飛騨における古墳と集落に関する一考察」八賀晋先生古稀記念論文集刊行会編『かにかくに 八賀晋先生古稀記念論文集』三星出版
- 鈴木規夫1985『日本の美術230 漆工』至文堂
- 鈴木道之助1991『図録・石器入門事典（縄文）』柏書房
- 珠洲市立珠洲焼資料館1989『珠洲の名陶』
- 高島英之2000『古代出土文字資料の研究』東京堂出版
- 高山市教育委員会1971『冬頭王塚発掘調査報告』
- 高山市教育委員会1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告』
- 高山市教育委員会1981『栗野遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1993『前平山稜遺跡・赤保木遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1995『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1999『三枝城跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1999『中切上野遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会2001『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会2005『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 巽淳一郎1996『日本の美術361 まじないの世界Ⅱ（歴史時代）』至文堂
- 田中彰2001「飛騨地域の古墳」八賀晋編『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社
- 田中勝弘1989『銅鐵』『季刊 考古学』第27号
- 中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 東海土器研究会2000『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』
- 鳥取県埋蔵文化財センター2008『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 3 建築部材（資料編）』
- 鳥取県埋蔵文化財センター2009『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 4 建築部材（考察編）』
- 長野県埋蔵文化財センター1999『榎田遺跡』

- 中村浩1981『和泉陶器の研究—須恵器生産の基礎的考察—』柏書房
- 奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代篇』
- 奈良文化財研究所2010『出土建築部材における調査方法についての研究報告』
- 成田寿一郎1984『木の匠 木工の技術史』鹿島出版会
- 樋上昇1994「耕作のための道具—ナスビ形農具を中心に—」『季刊 考古学』第47号
- 樋上昇2000「3～5世紀の地域間交流—東海系曲柄鍬の波及と展開—」『日本考古学』第10号
- 樋上昇2005「木製品專業工人の出現と展開—伊勢湾周辺地域における木製品の生産と流通をめぐって—」『古代学研究』第168・169号
- 樋上昇2008「木製農具の研究略史と鍬の伝播経路」『季刊 考古学』第104号
- 樋上昇2010『木製品から考える地域社会—弥生から古墳へ—』雄山閣
- 平川南2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 深堀直1999「北陸の木製農具集成（1）」『富山考古学研究』第2号
- 藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号
- 古川町教育委員会1991『上町遺跡D地点』
- 古川町教育委員会1998『杉崎廃寺跡発掘調査報告書』
- 文化庁文化財部記念物課監修2010『発掘調査のてびき』同成社
- 北陸中世土器研究会1995『中世北陸の木製容器』
- 北陸中世土器研究会1996『飾る・遊ぶ・祈るの木製用具』
- 上枝村史編纂委員会2000『上枝村史』
- 穂積裕昌2000「弥生時代から古墳時代の木器生産体制について—三重県内の木器出土遺跡からの素描—」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号
- 堀真人2011「遺跡出土の化粧道具に関する覚書—夏見城遺跡出土の毛抜きから—」『財団法人滋賀県文化財保護協会紀要』第24号（—設立40周年記念号—）
- 村上隆2007『金・銀・銅の日本史』岩波書店
- 森本幹彦2005「古墳出現期における地域間関係—「白江式」の検討を中心として—」『東京大学考古学研究室研究紀要』第19号
- 四柳嘉章・下村好美1996「能登の木製用具 下駄の研究手法と木製品にみる中世の民間信仰」『飾る・遊ぶ・祈るの木製用具』北陸中世土器研究会
- 四柳嘉章2006『ものと人間の文化史131-I 漆I』法政大学出版局
- 四柳嘉章2009『漆の文化史』岩波書店
- 埋蔵文化財研究会編1996『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器』
- 三重県埋蔵文化財センター2000『六六A遺跡発掘調査報告（木製品編）』
- 向井由紀子・橋本慶子2001『ものと人間の文化史102 箸』法政大学出版局
- 山田昌久編2003『考古資料大観8 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館
- 吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 渡邊晶2004『大工道具の日本史』吉川弘文館

# 写 真 图 版





遺跡遠景（上が北、昭和30年米極東空軍撮影）

図版2 調査前状況



調査前状況（北東から、平成16年12月撮影）



調査前状況（南から、平成16年12月撮影）



発掘区全景（上が北）



発掘区全景（南西から）

図版4 発掘区全景（2）



発掘区全景（西から）



発掘区全景（南西から）



発掘区全景（南から）



発掘区全景（北東から）

図版6 発掘区全景（4）



発掘区全景（上が北）



発掘区全景（西から）



1220S B検出状況(北東から)



1220S B遺物出土状況(北から)

図版8 竪穴住居跡(2)



1220S B遺物出土状況(北東から)



1220S B遺物出土状況(南東から)



1220S B遺物出土状況(北東から)



1220S B遺物出土状況(南西から)



1220S B完掘状況(南西から)



1220SB完掘状況(東から)



1224SB(北西から)



1232SB・1233SB(上が北)

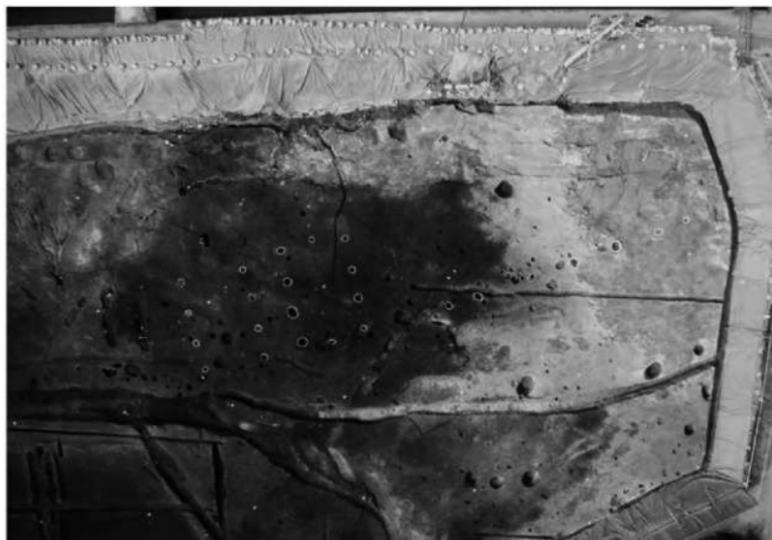


1232SB(北から)

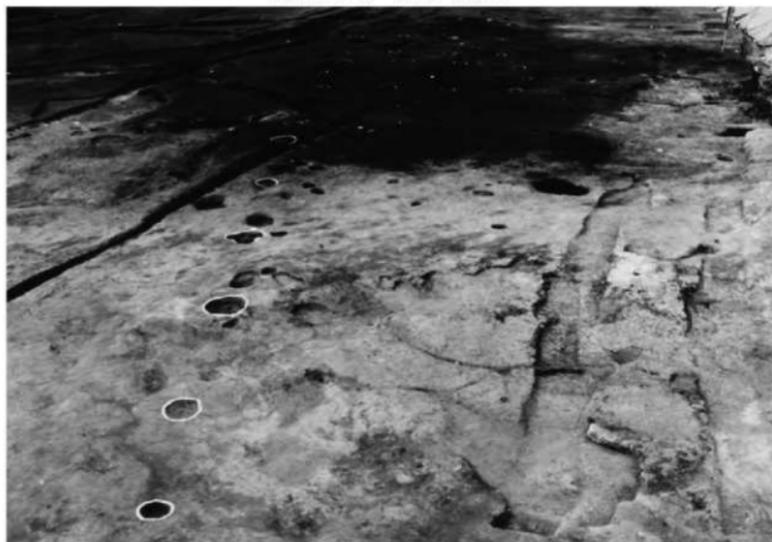


1233SB(北西から)

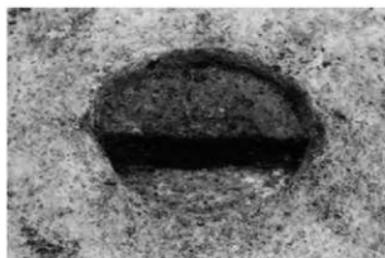
図版10 柵跡 (1)



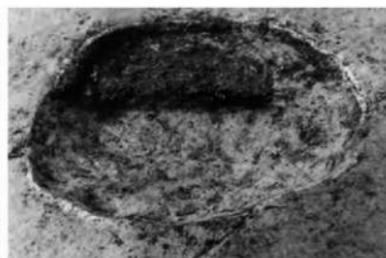
SA1とSH1・SH2 (上が北)



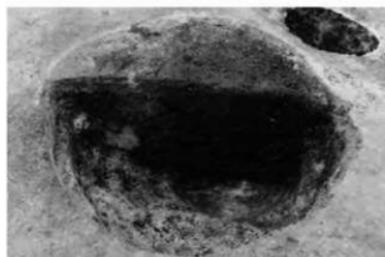
SA1 (東から)



66P断面(西から)



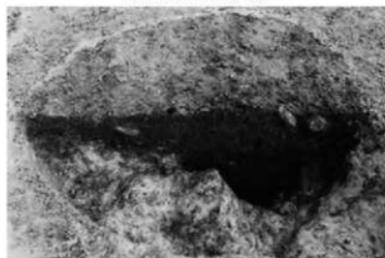
131P断面(南東から)



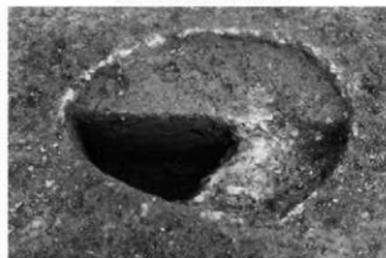
134P断面(南から)



134P完掘状況(南から)



146P断面(南から)



150P断面(西から)

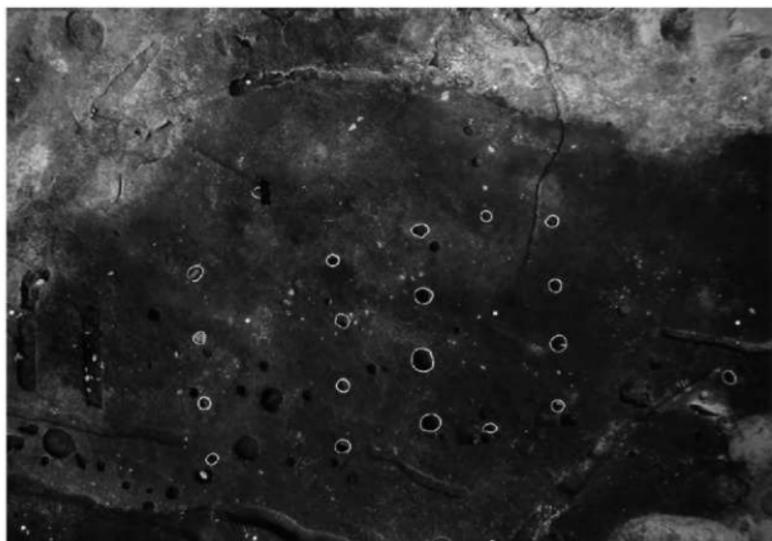


198P断面(南から)

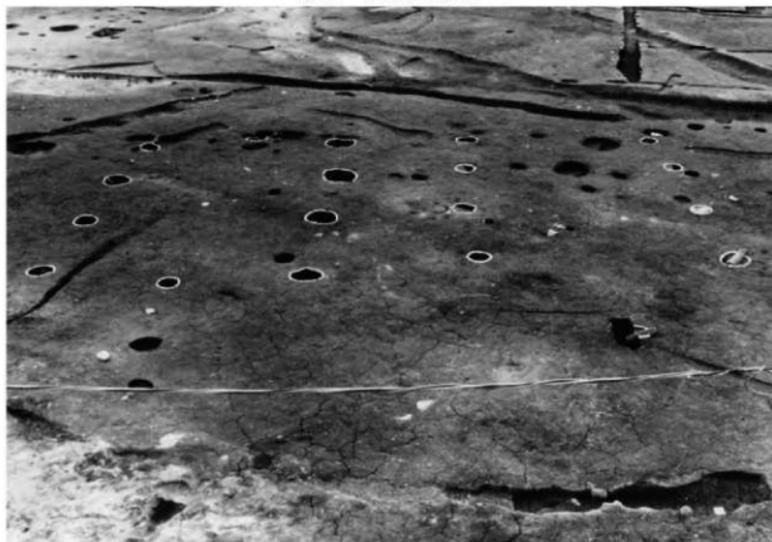


201P断面(南西から)

図版12 掘立柱建物跡 (1)



SH1・SH2 (上が北)



SH1・SH2 (北から)



SH1 (南から)



SH1 (南から)

図版14 掘立柱建物跡 (3)



SH2 (南東から)



掘立柱建物跡と古代水田跡 (東から)



352P 断面 (東から)



352P 完掘状況 (東から)



346P 断面 (東から)



346P 完掘状況 (東から)



349P 断面 (東から)



349P 完掘状況 (東から)



350P 断面 (西から)



350P 完掘状況 (西から)



222P 断面 (北から)



222P 完掘状況 (北から)



241P 断面 (南から)



241P 完掘状況 (南から)



239P 断面 (南から)



239P 断面 (南から)



239P 完掘状況 (南から)



238P 断面 (南西から)



238P断面(南西から)



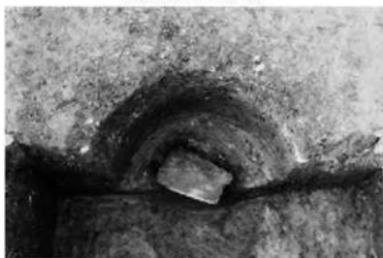
238P完掘状況(南西から)



223P断面(南から)



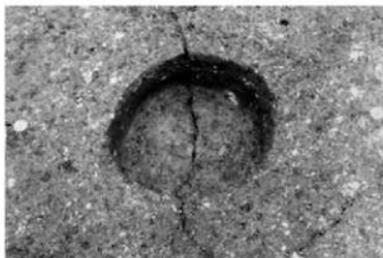
223P断面(南から)



223P完掘状況(南から)



380P断面(西から)



380P完掘状況(西から)



211P断面(南から)



211P完掘状況（南から）



358P断面（北から）



358P完掘状況（北から）



235P断面（西から）



235P完掘状況（西から）



354P断面（西から）



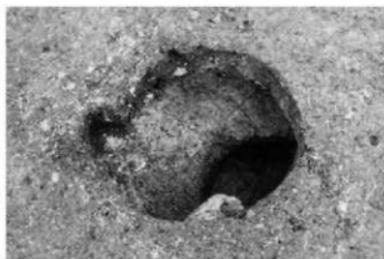
354P完掘状況（西から）



219P断面（西から）



378P 断面 (南から)



378P 完掘状況 (南から)



377P 断面 (南から)



377P 完掘状況 (南から)



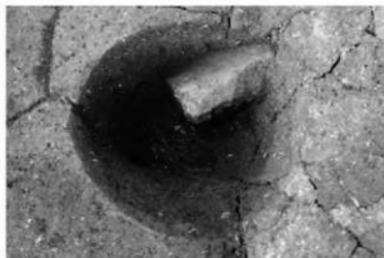
370P 断面 (南から)



370P 完掘状況 (南から)



376P 断面 (南から)



376P 完掘状況 (南から)

図版20 水田跡 (1)



古墳時代水田跡 (西から)



古墳時代水田跡 (南から)



古墳時代水田跡（南西から）



古墳時代水田跡（東から）



古墳時代水田跡 (南から)



古墳時代水田跡 (南西から)



古代水田跡検出作業状況（南西から）



古代水田跡全景（南から）



古代水田跡 (西から)



古代水田跡 (北から)



古代水田跡と中央大溝 (北から)



古代水田跡と中央大溝 (西から)



古代水田跡 (南西から)



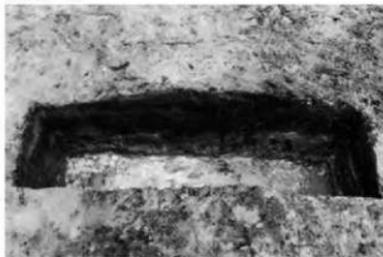
古代水田跡 (東から)



古代水田跡(北東から)



1075S T断面(南から)



1076S T断面(南から)



1077S T断面(南から)



1078S T断面(南から)



1079 S T 断面 (南から)



1080 S T 断面 (南から)



1296 S T ~ 1298 S T (西から)



1287 S T (西から)



310 S M ~ 384 S T 断面 (西から)



385 S T ~ 320 S M 断面 (南東から)



386 S T ~ 327 S T 断面 (西から)



389 S T ~ 385 S T 断面 (南から)



390ST~388ST断面 (東から)



392ST~396ST断面 (南から)



394ST~388ST断面 (東から)



395ST~391ST断面 (南から)



397ST~398ST断面 (西から)



398ST~393ST断面 (南から)



398ST~402ST断面 (南東から)



400ST~396ST断面 (南から)

図版30 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構（1）



古代水田跡及び畦畔・溝状遺構（西から）



311SD・364SD検出状況（南から）



311SD完掘状況、364SD検出状況（南から）



311SD・364SD断面（南から）



311SD・364SD断面（南から）



320SM・321SD (南から)



321SD (北から)



321SD断面 (南から)



330SD (南から)



324SD内杭列 (東から)

図版32 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (3)



323SD完掘状況、324SD・361SD検出状況 (南から)



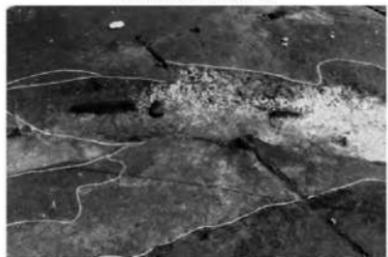
324SD護岸掘削前全景 (西から)



324SD護岸 (南から)



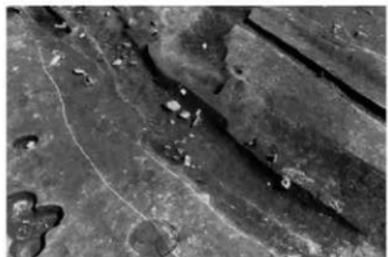
324SD護岸 (南西から)



324SD護岸 (南から)



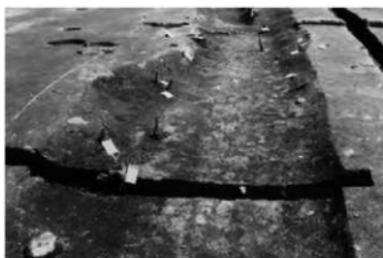
324SD護岸 (西から)



324SD内杭列 (北から)



324SD内杭列 (南西から)



324SD内杭列（西から）



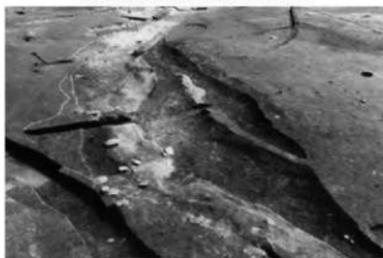
324SD護岸掘削後全景（西から）



324SD護岸掘削後状況（西から）



324SD護岸掘削後状況（東から）



324SD・348SD・361SD完掘状況（西から）



324SD・321SD完掘状況（西から）



324SD・348SD・361SD完掘状況（西から）



323SD（北から）

図版34 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構 (5)



310SM (西から)



310SM (南から)



310SM断面 (西から)



367SD・368SD・372SD・373SD・310SM (西から)



367SD・368SD・372SD・373SD掘削作業状況 (南西から)



367SD・368SD・372SD・373SD（南西から）



367SD・368SD・372SD・373SD（南西から）

図版36 古代水田に関わる畦畔・溝状遺構（7）



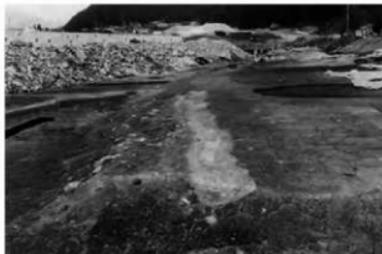
367SD・368SD・372SD・373SD断面（西から）



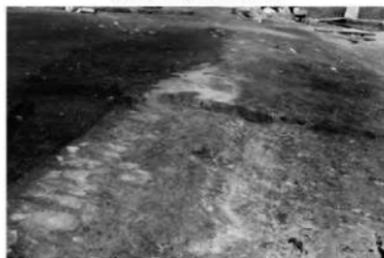
367SD内杭列（南西から）



367SD内杭列（北から）



1245SD・1305SD・1250SM検出状況（東から）



1245SD検出状況（西から）



1245SD完掘状況（東から）



1305SD完掘状況（東から）



1305SD完掘状況（西から）



1306SD完掘状況、1310SD検出状況（東から）



1311SD検出状況（東から）



1311SD検出状況（東から）



1311SD完掘状況、1315SD検出状況（東から）



1315SD完掘状況（東から）



1315SD完掘状況（西から）



70SD全景（西から）



70SD内掘出土状況（西から）

図版38 溝状遺構 (2)



1061SDほか第2遺構面 (南西から)



1061SD全景 (西から)



1293 S D検出状況(東から)



1293 S D埋土最下層検出状況(東から)



1293 S D完掘状況(東から)



1293 S D完掘状況(西から)



1293 S D完掘状況(東から)

図版40 自然流路に付属する溝状遺構（1）



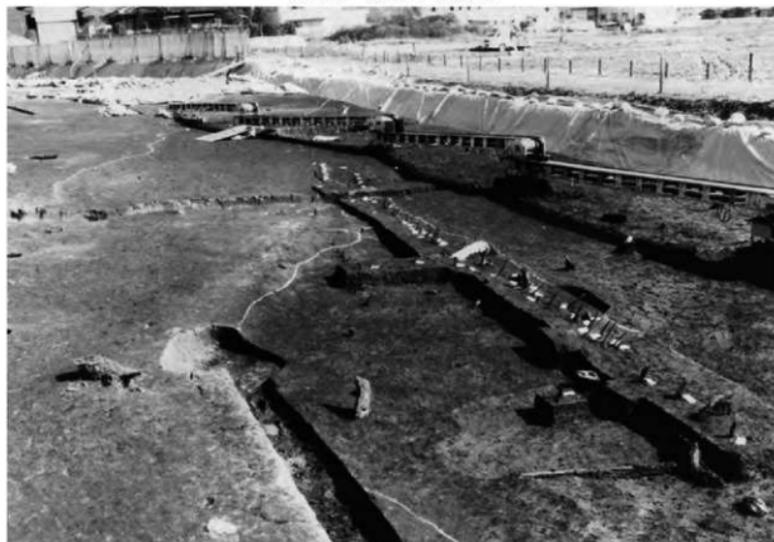
1067NR・1071SD（南西から）



1067NR・1061SD（東から）



1067NR・1071SD（東から）



1067NR・1061SD（西から）

図版42 自然流路に付属する溝状遺構 (3)



1067NR・1071SD全景 (西から)



1071SD内杭列 (北から)



1067NR完掘状況（北西から）



1067NR完掘状況（南西から）

図版44 自然流路に付属する溝状遺構（5）



1071SD内杭列（西から）



1067NR木器類出土状況（南から）



1071SD内杭列（東から）



1071SD内杭列（西から）



1071SD内杭列（西から）



1071SD内杭列（東から）



1071SD内杭列（西から）



1071SD内杭列（南から）



1071SD内杭列（南から）



1071SD内杭列（南から）



1071SD内杭列（南から）



1071SD内杭列（西から）



365SW（西から）



365SW（北から）



365SW（北から）



365SW（西から）



365 SW (北東から)



365 SW (東から)



365 SW (北から)



1074 S U (南から)



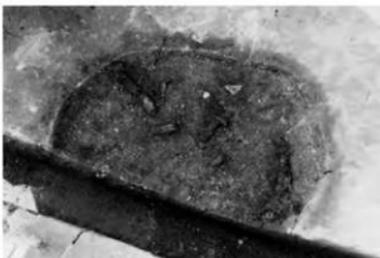
1074 S U (南から)



1074 S U (南から)



1074 S U (南から)



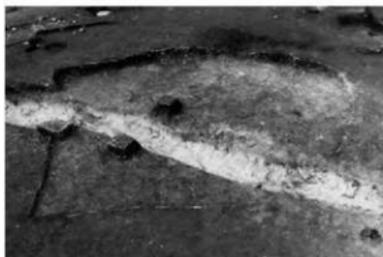
56 S K 炭化物出土状況 (南東から)



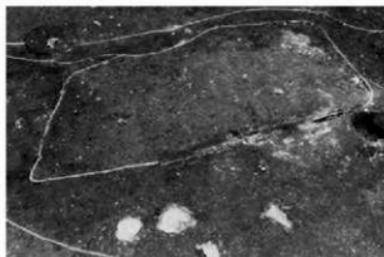
56 S K 完掘状況 (南東から)



315 S K (南西から)



315 S K (南東から)



339 S K 検出状況 (南から)



339 S K 遺物出土状況 (南から)



339 S K 遺物出土状況 (南西から)



339 S K 完掘状況 (南から)



1243 S K (南から)



1258SK (東から)



1303SK炭化物出土状況 (西から)



1303SK完掘状況 (南から)



作業風景



楫 (遺物番号873)



楫 (遺物番号1462)



楫 (遺物番号1463)



楫 (遺物番号1466)



楫（遺物番号1467）



楫（遺物番号1465・1469）



楫（遺物番号1468）



楫（遺物番号1470）



楫（遺物番号1472）



楫（遺物番号1473）



楫（遺物番号1479）



楫（遺物番号1480）



鏃 (遺物番号1483)



鏃 (遺物番号1484)



泥除け (遺物番号1485)



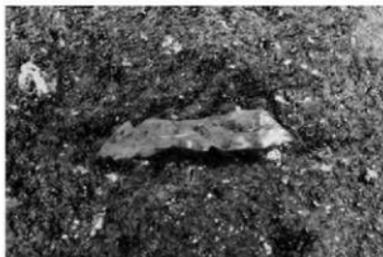
えぶり (遺物番号1486)



楕円形曲物容器 (遺物番号1499)



円形曲物容器 (遺物番号147)



馬形 (遺物番号688)



馬形 (遺物番号1544)



下駄（遺物番号75）



下駄（遺物番号141）



下駄（遺物番号1555）



下駄（遺物番号1556）



紡錘車（遺物番号1565）



杓子（遺物番号293）



311S D内火付け木（遺物番号327ほか）



建築部材（遺物番号895・896）



建築部材 (遺物番号1785)



器具部材 (遺物番号698)



器具部材 (遺物番号881)



器具部材 (遺物番号1847)



割板 (遺物番号903)



石包丁 (遺物番号2016)



銅鈴 (遺物番号774)



銅鏃 (遺物番号2034)

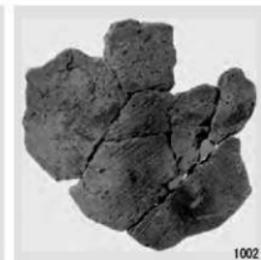
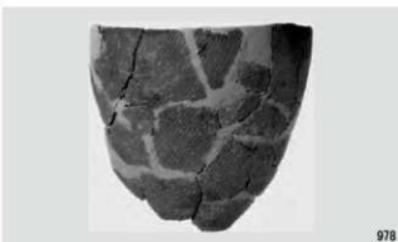
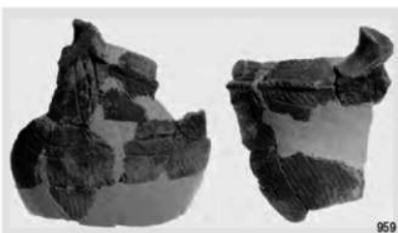


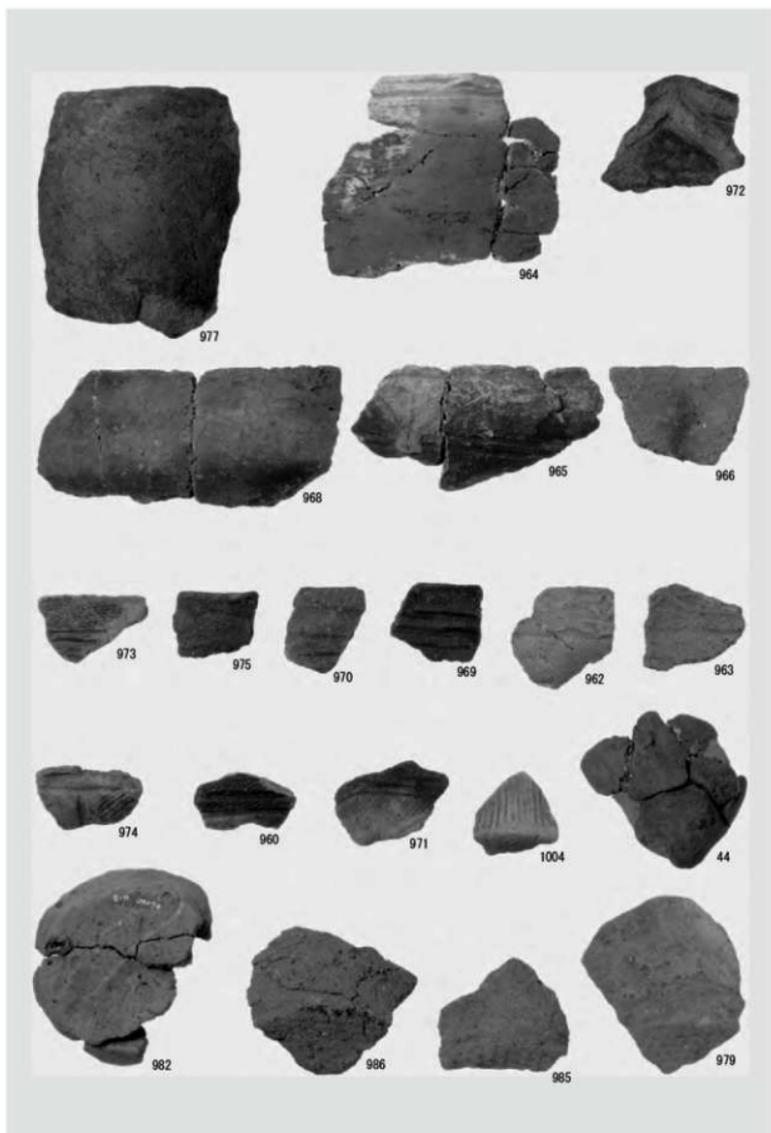
調査後状況（北東から、平成20年6月撮影）



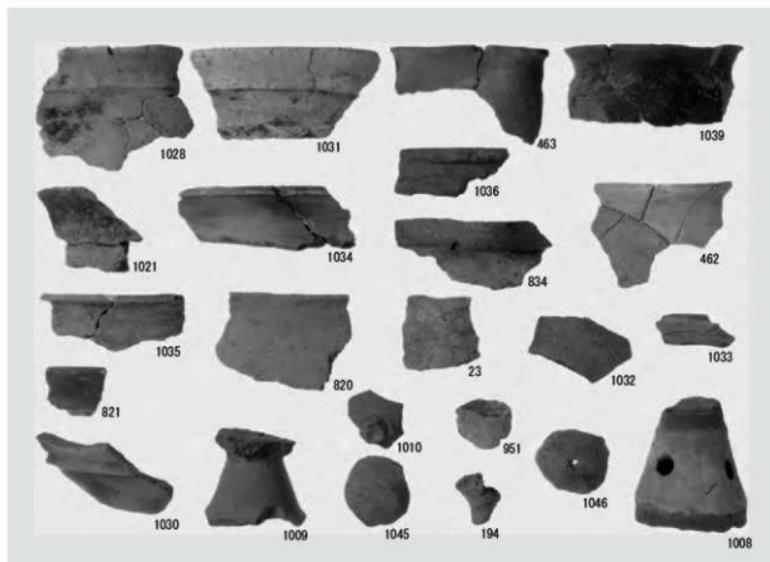
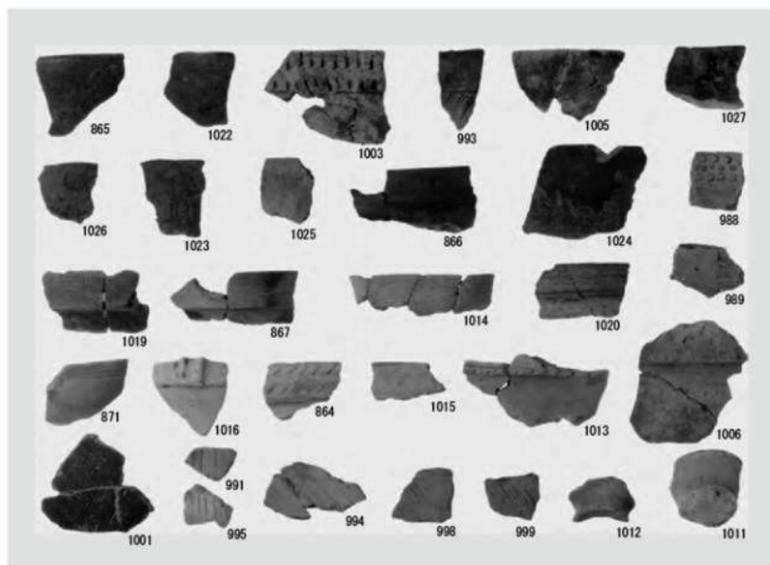
調査後状況（北北東から、平成20年10月撮影）

图版54 绳文土器·弥生土器（1）





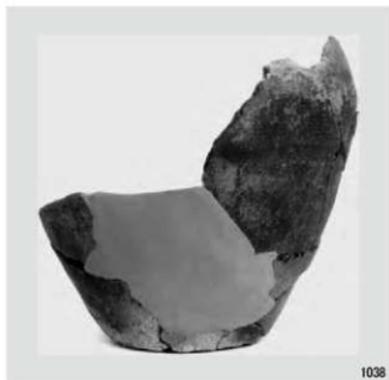
図版56 弥生土器・弥生土器ないし土師器、土師器（1）

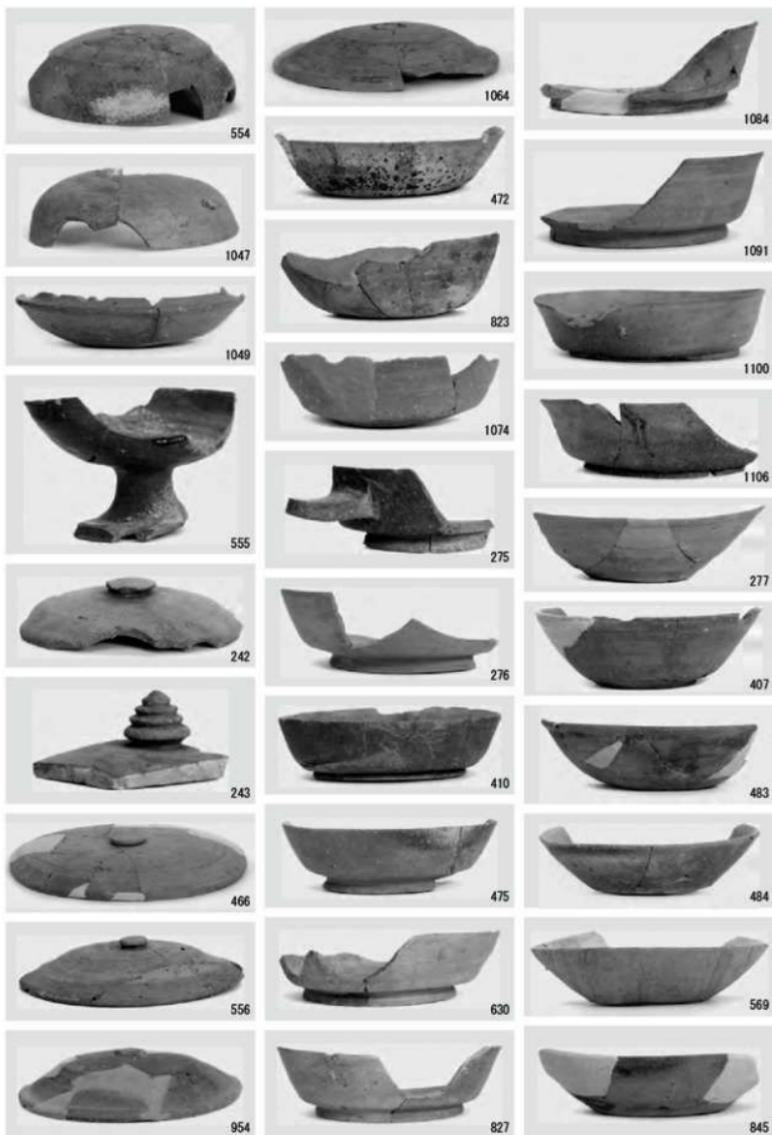


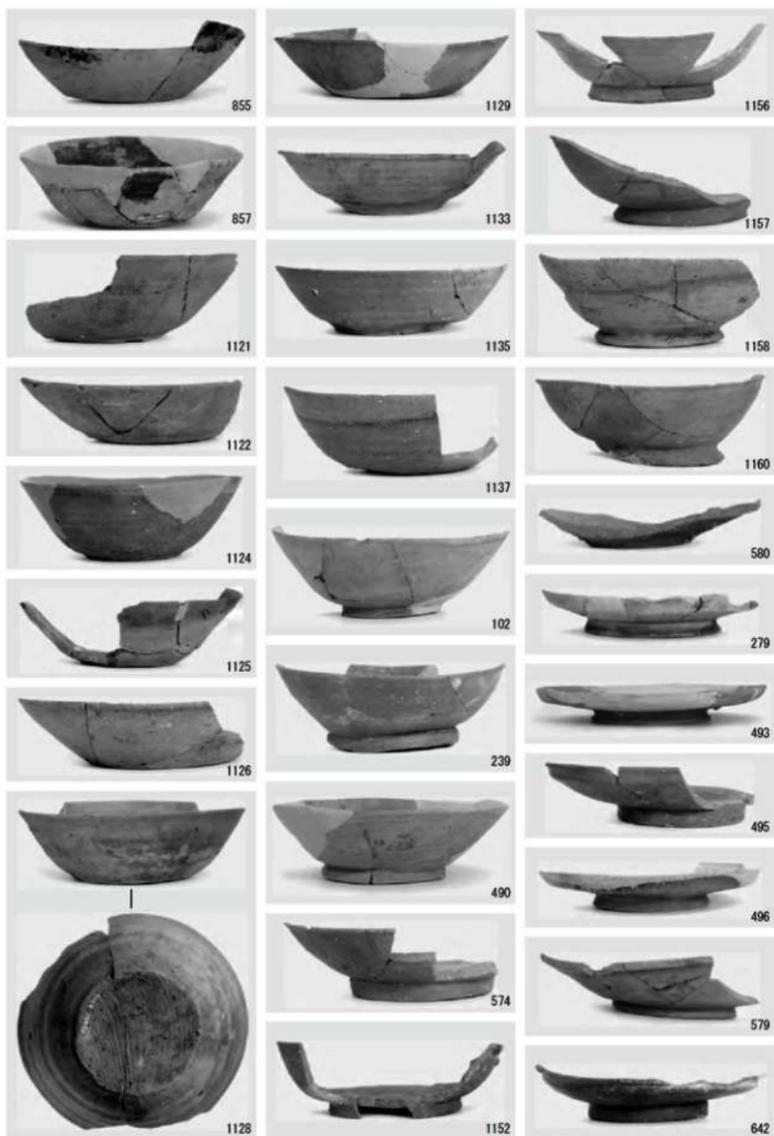


图版58 土師器 (3)











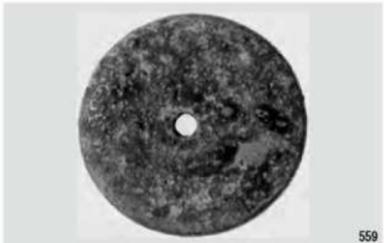
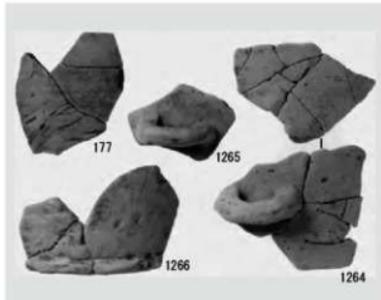
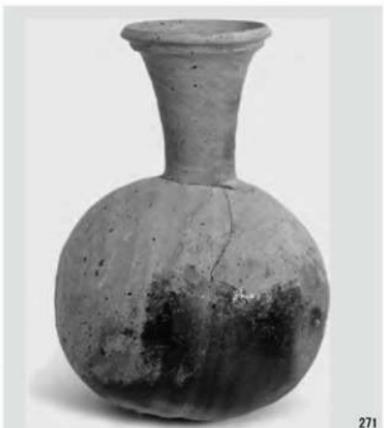
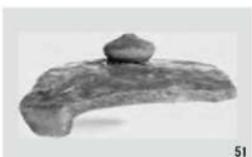


281

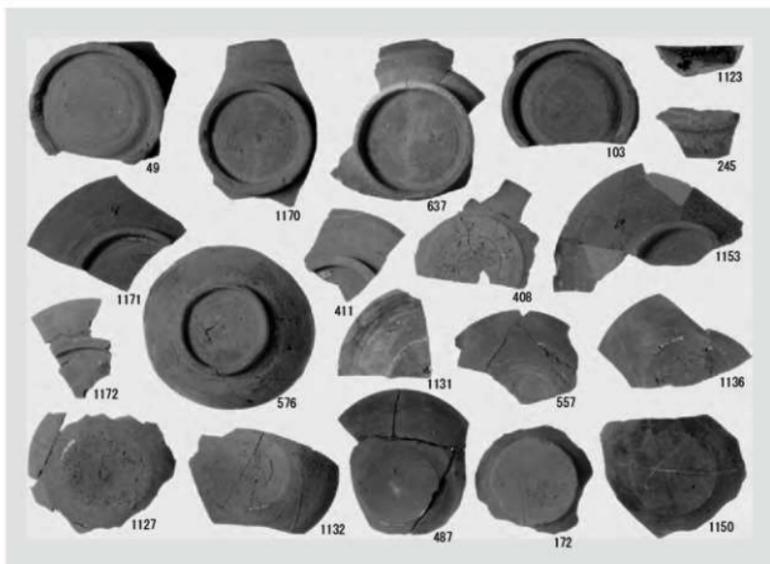
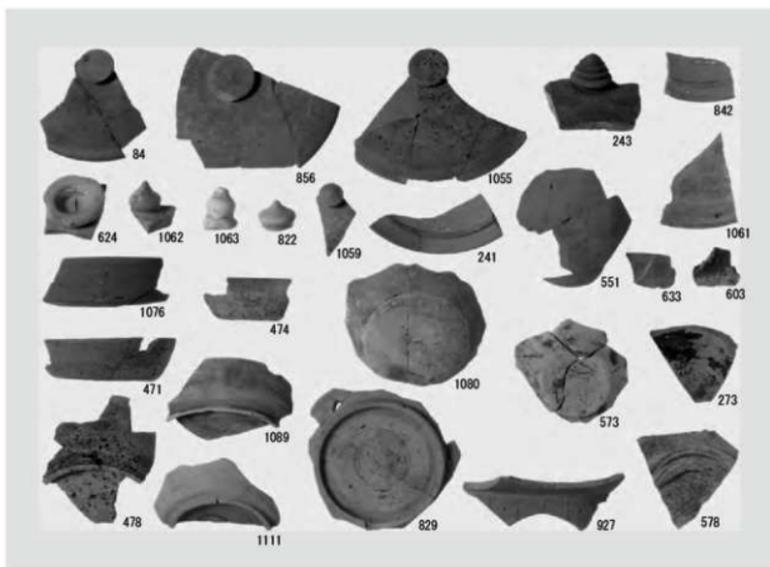


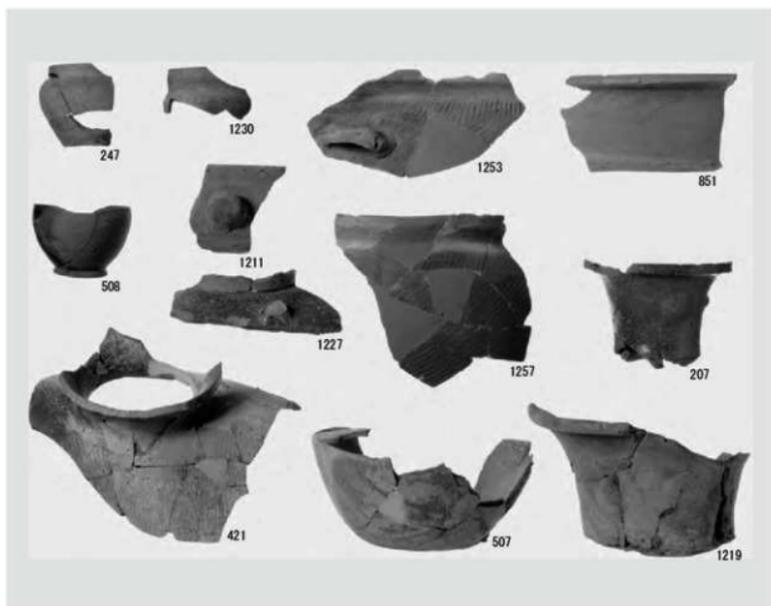
503

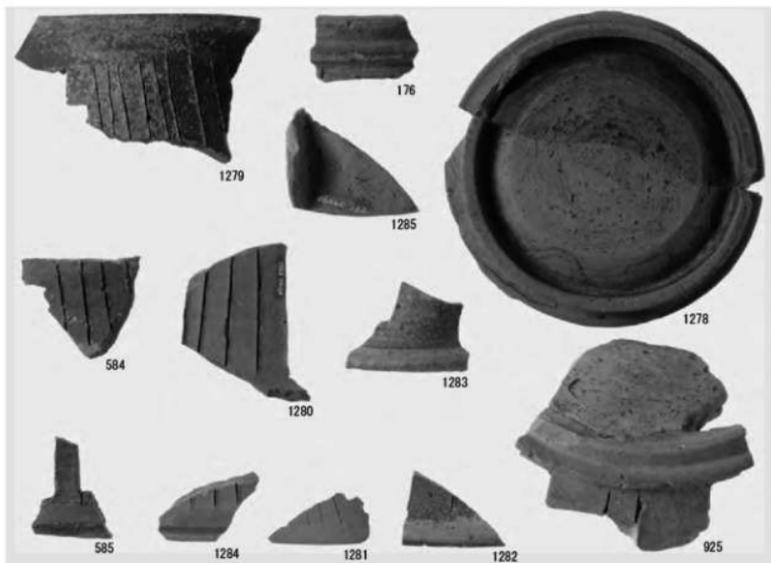
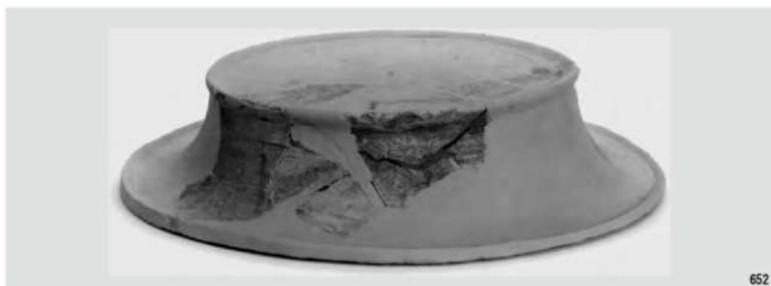


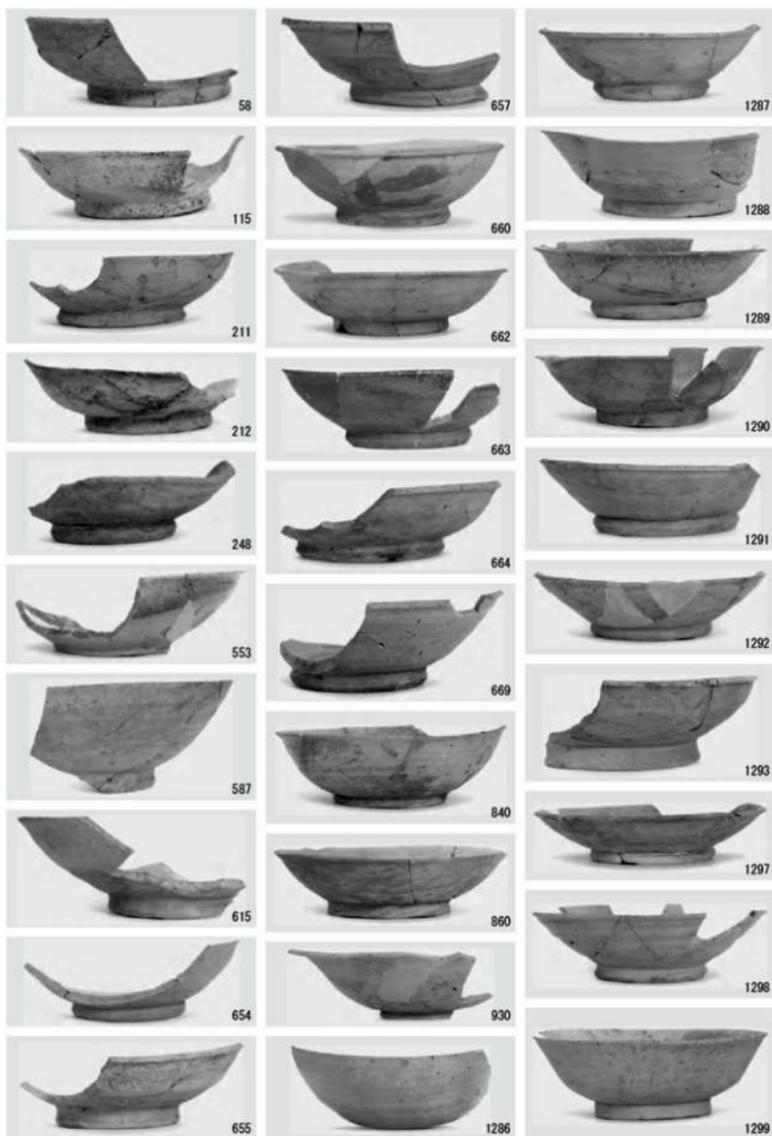


図版66 須恵器(7)

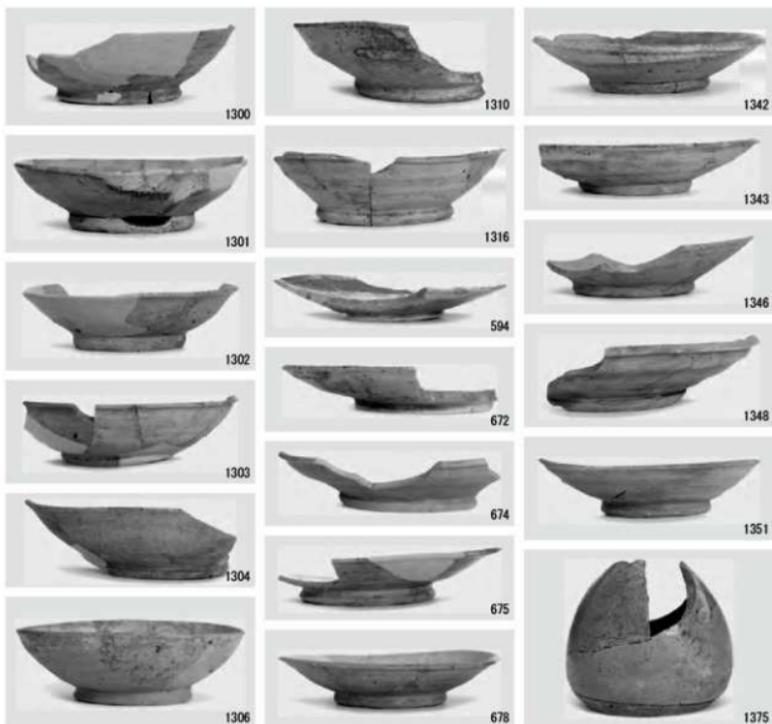








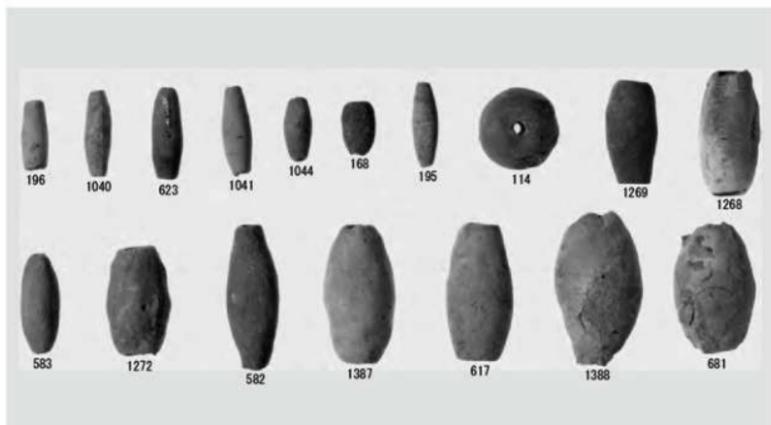
图版70 灰釉陶器 (2)

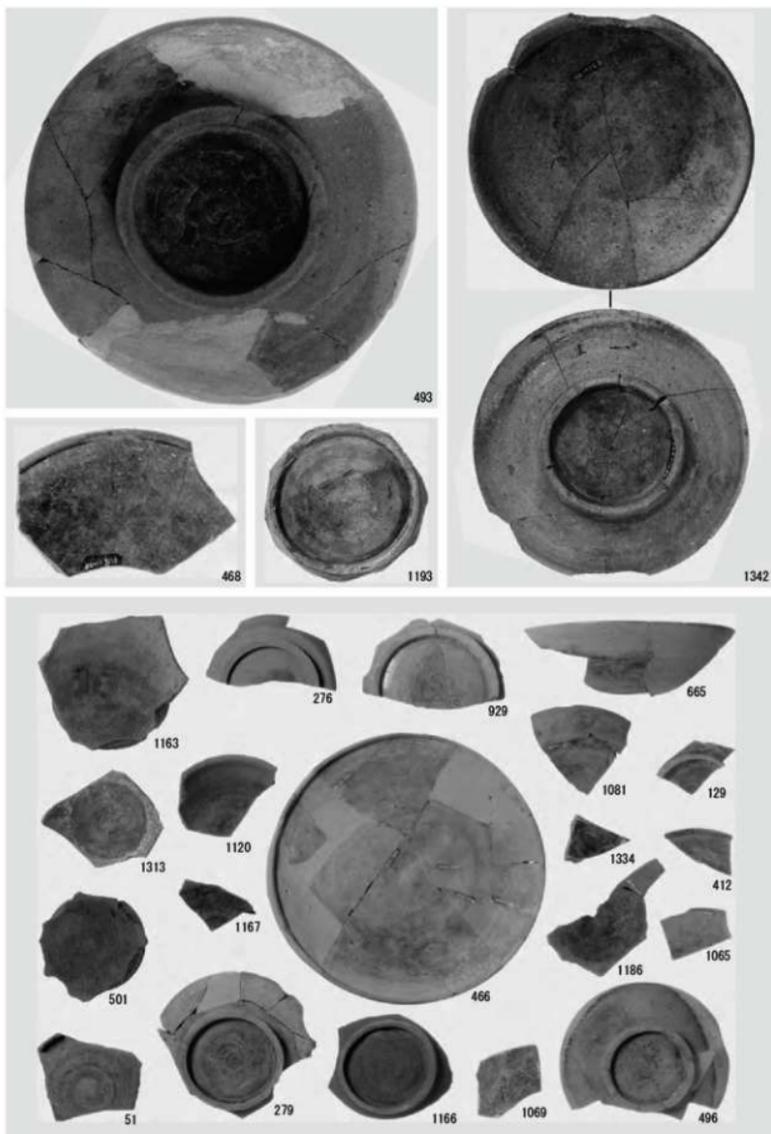


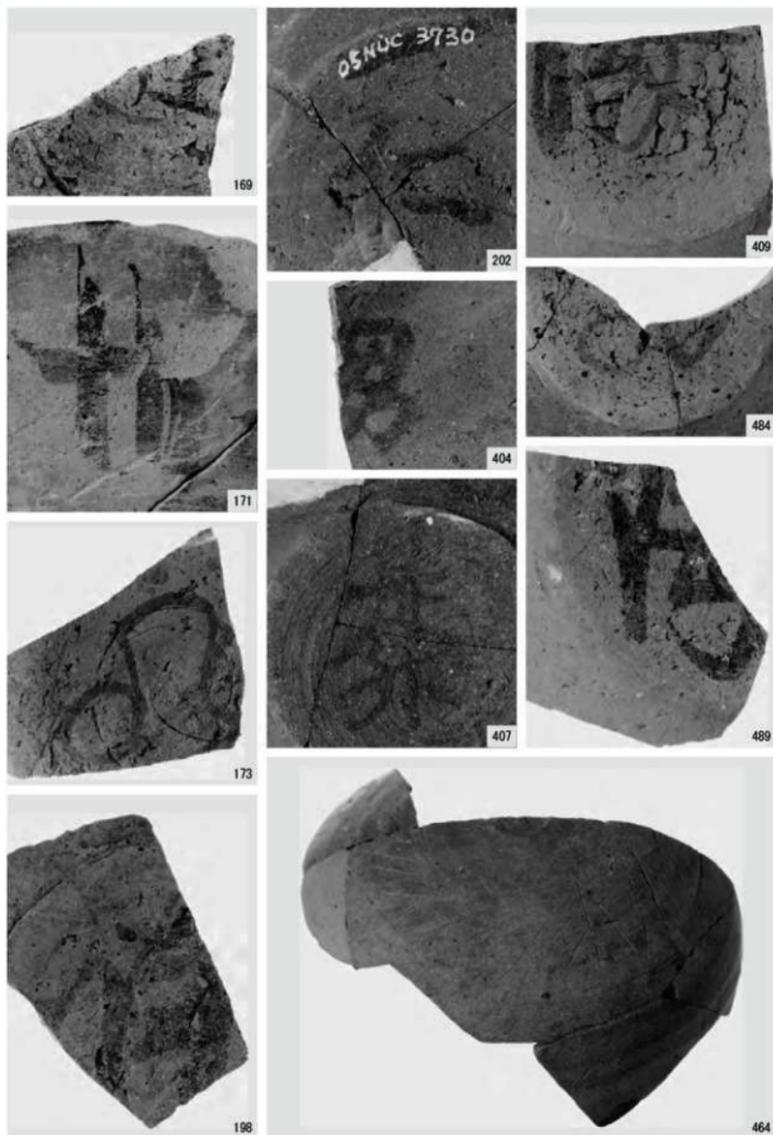
616



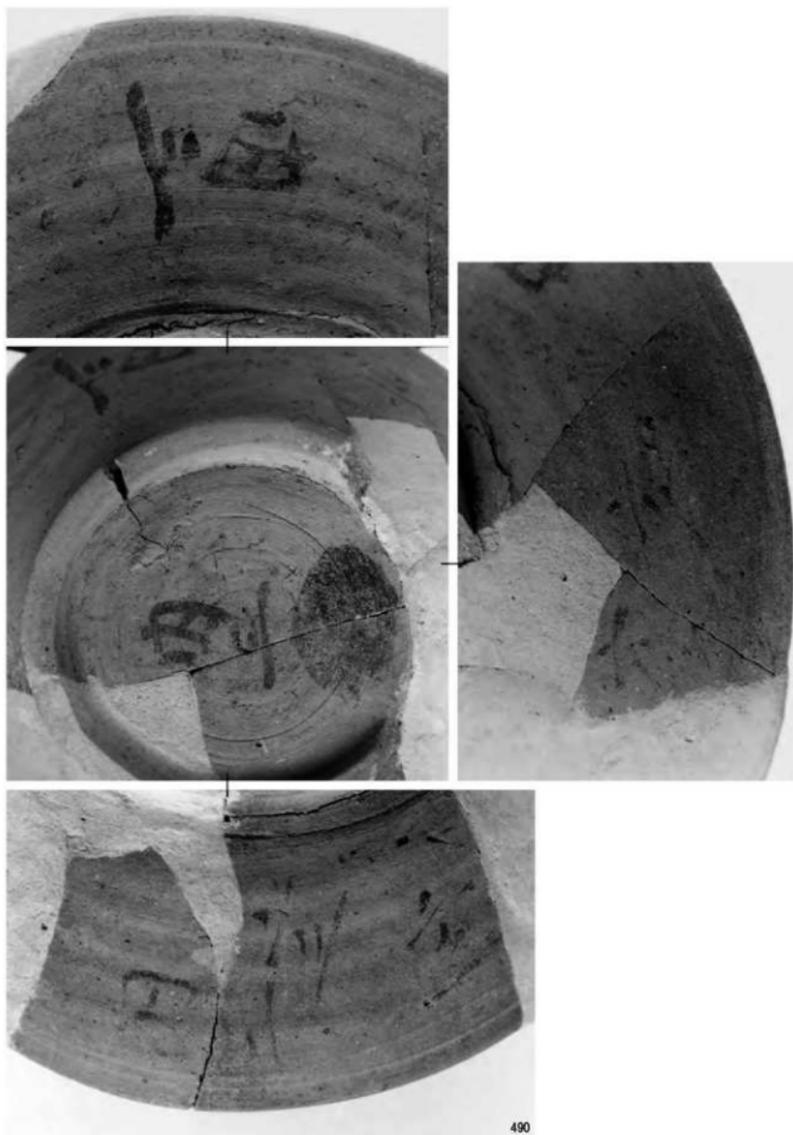
679

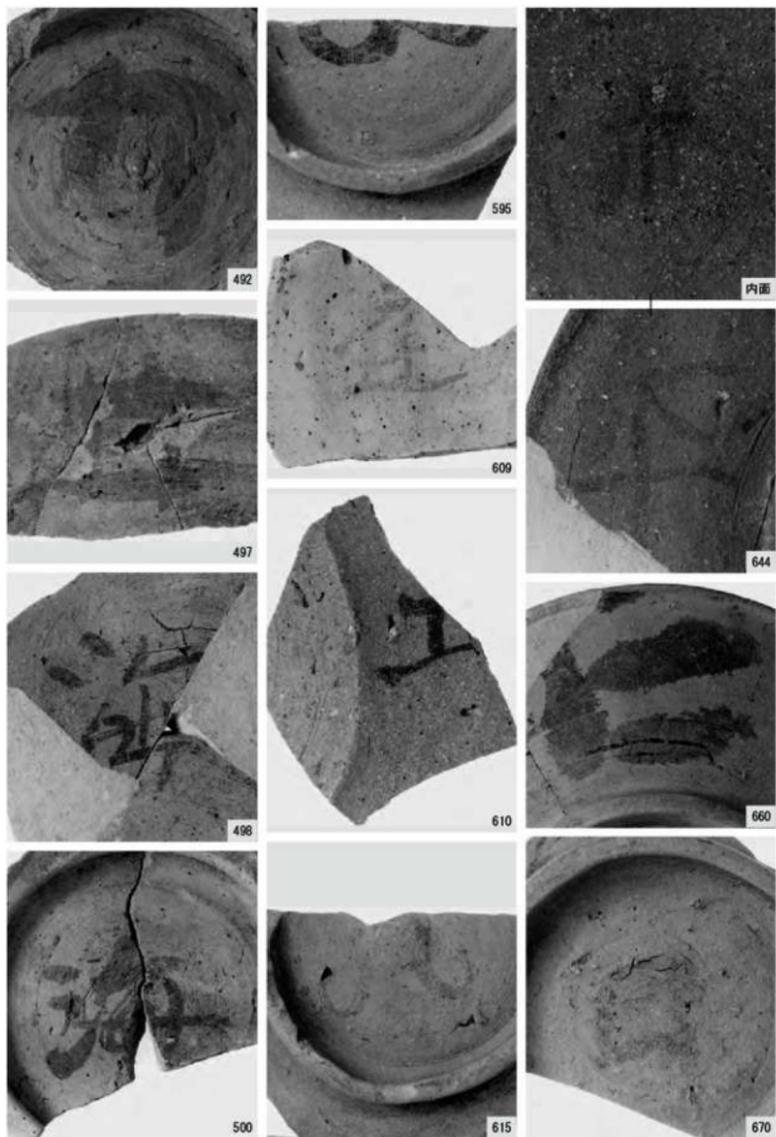




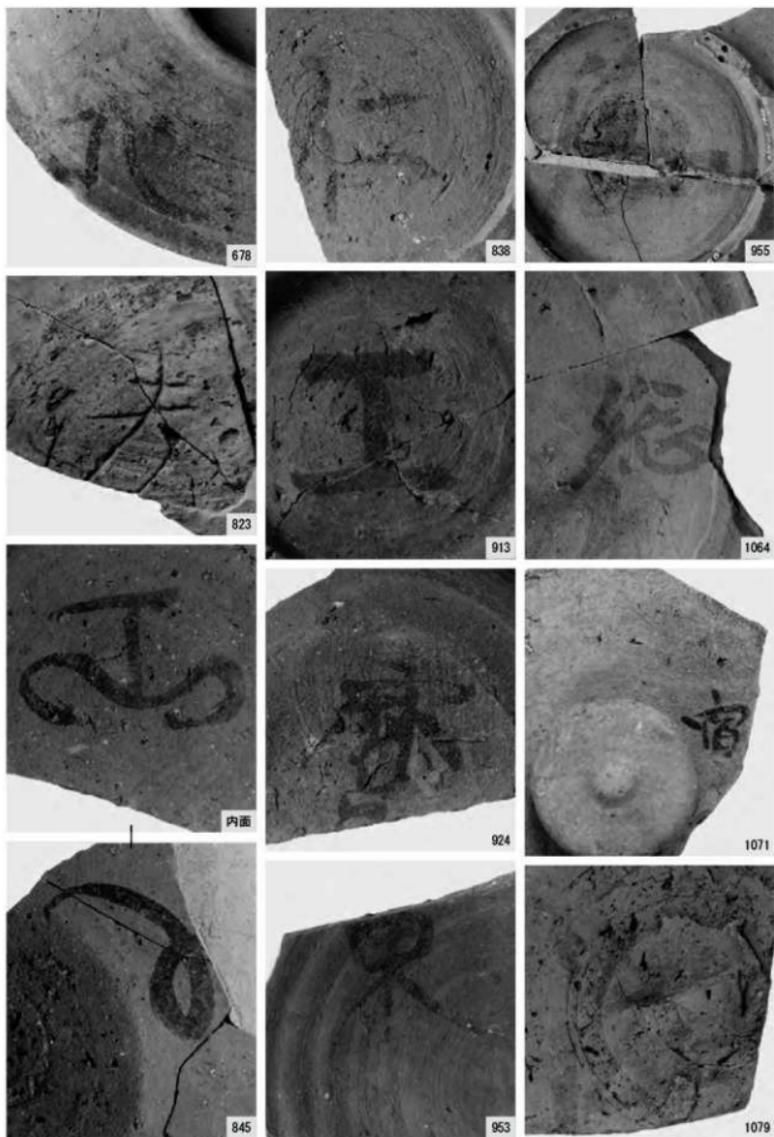


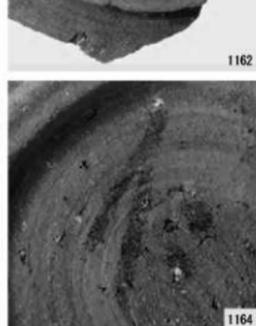
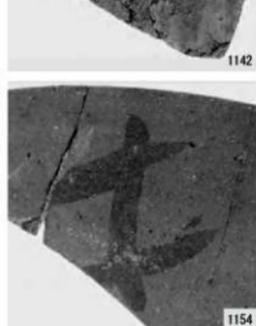
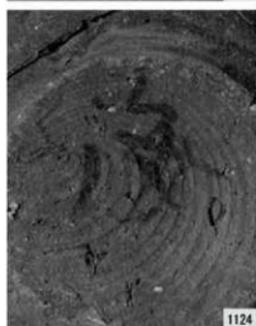
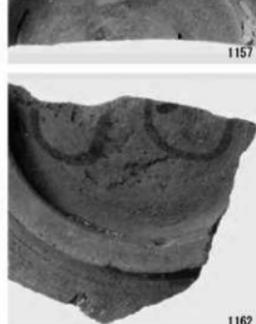
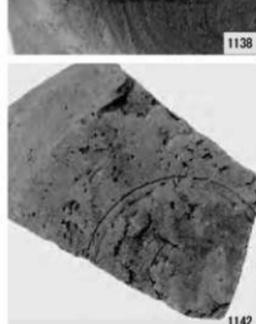
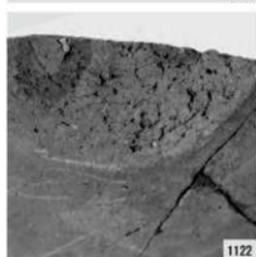
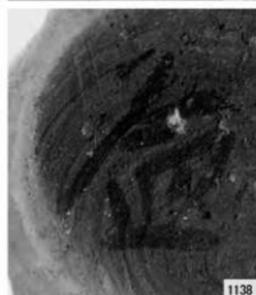
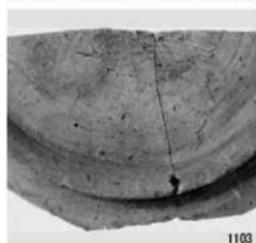
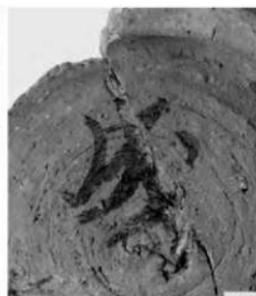
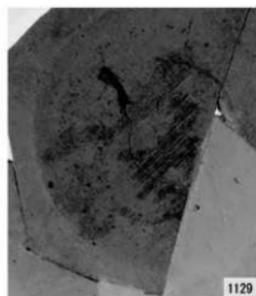
図版74 墨書土器・へら書き土器(2)



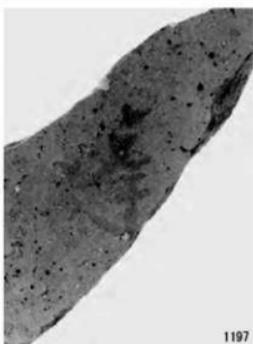
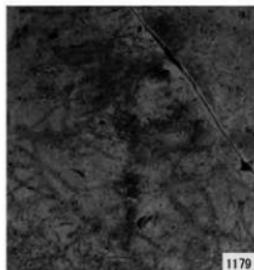
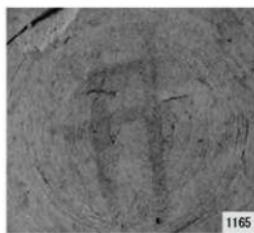


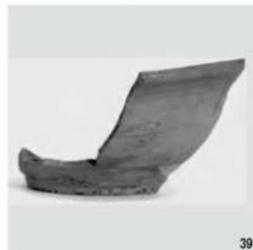
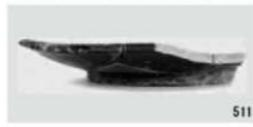
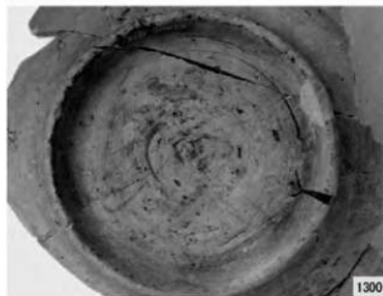
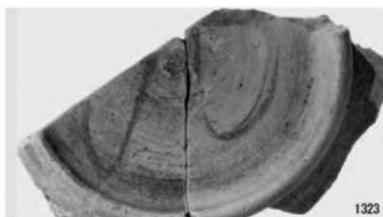
図版76 墨書土器・へら書き土器(4)



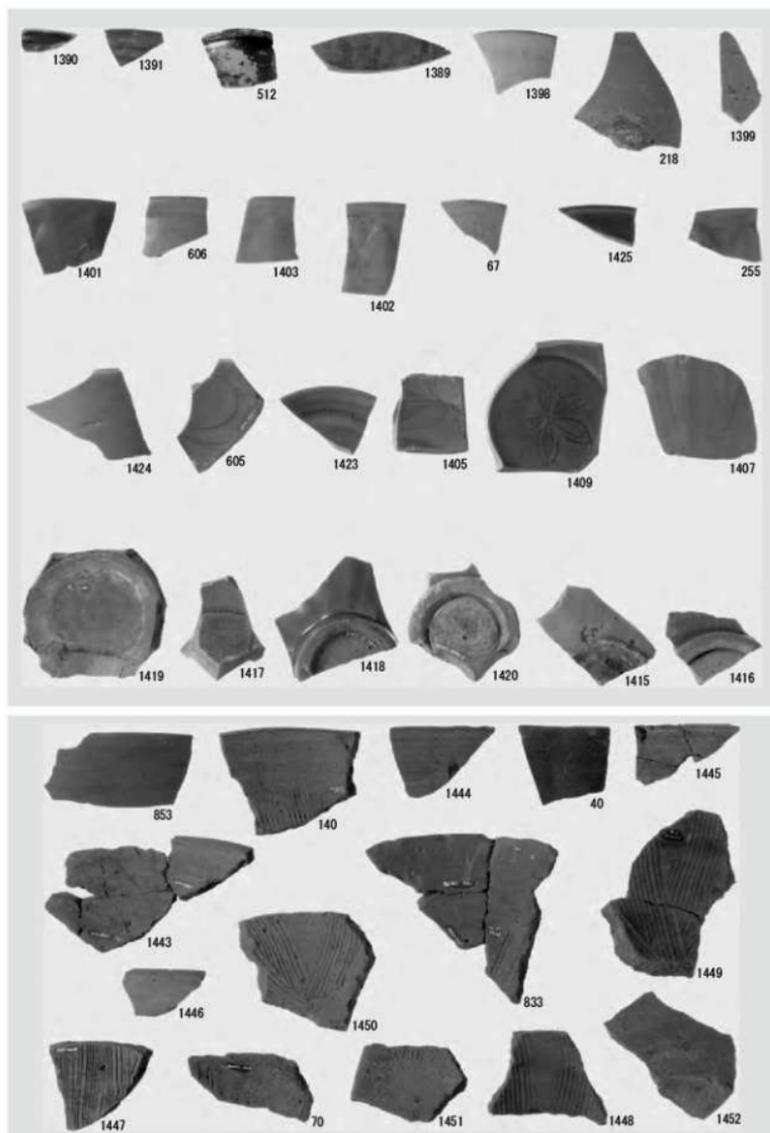


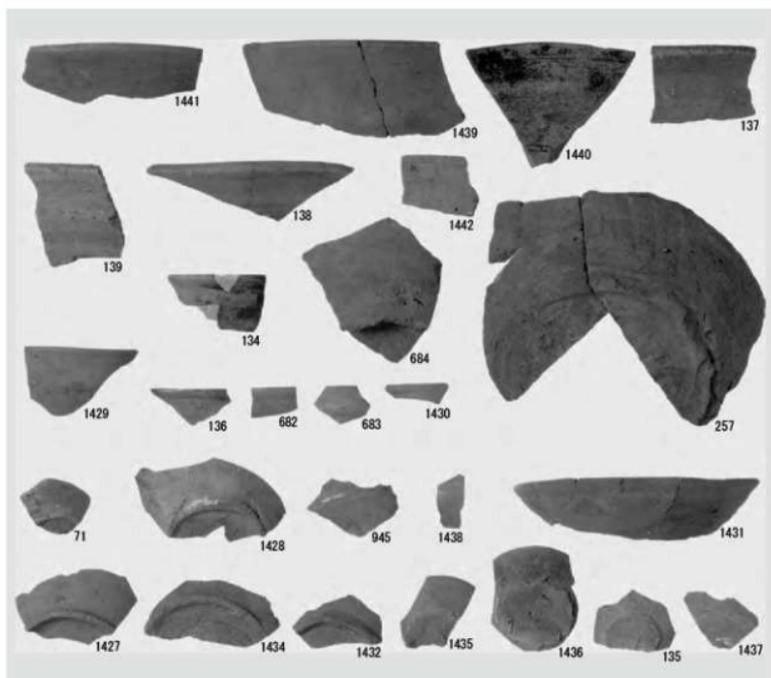
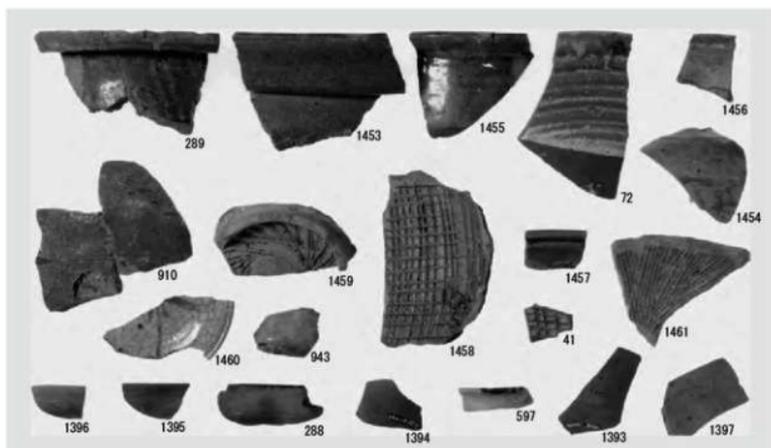
図版78 墨書土器・へら書き土器(6)

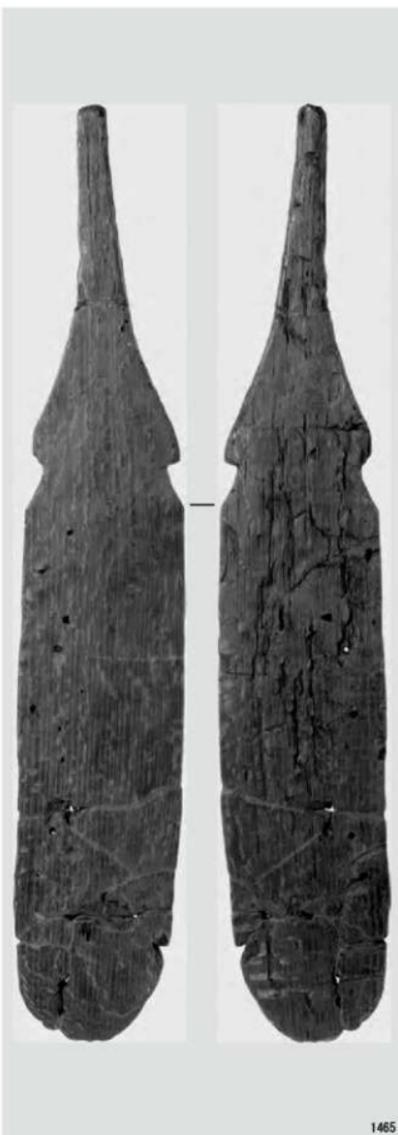
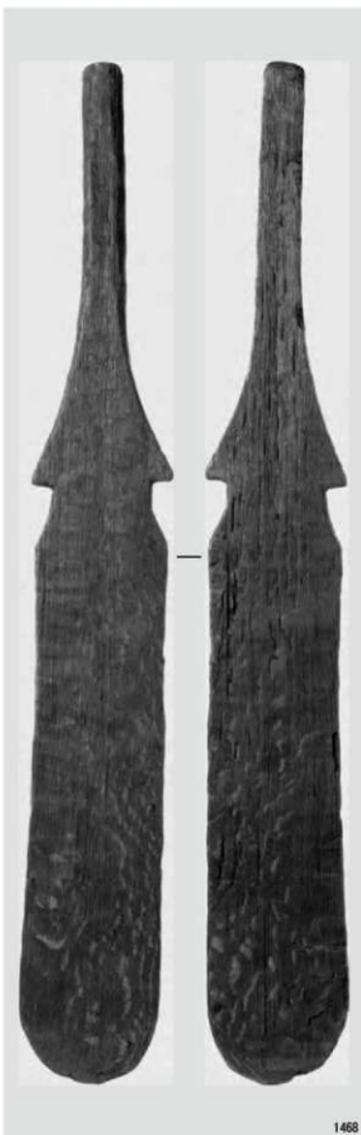


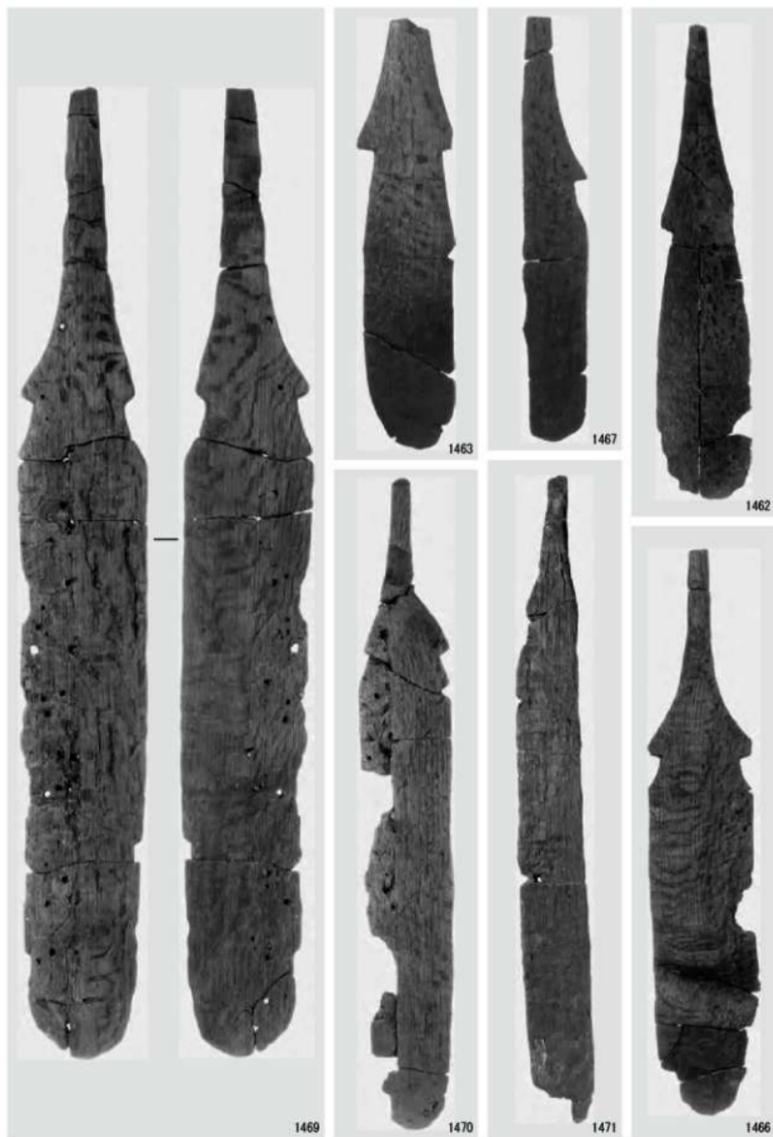


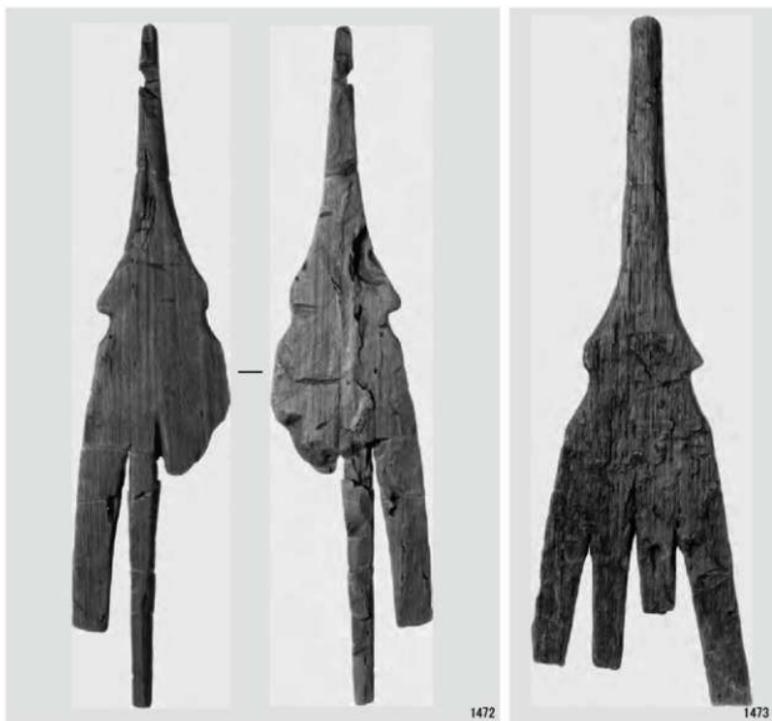
图版80 绿釉陶器·输入磁器·珠洲烧

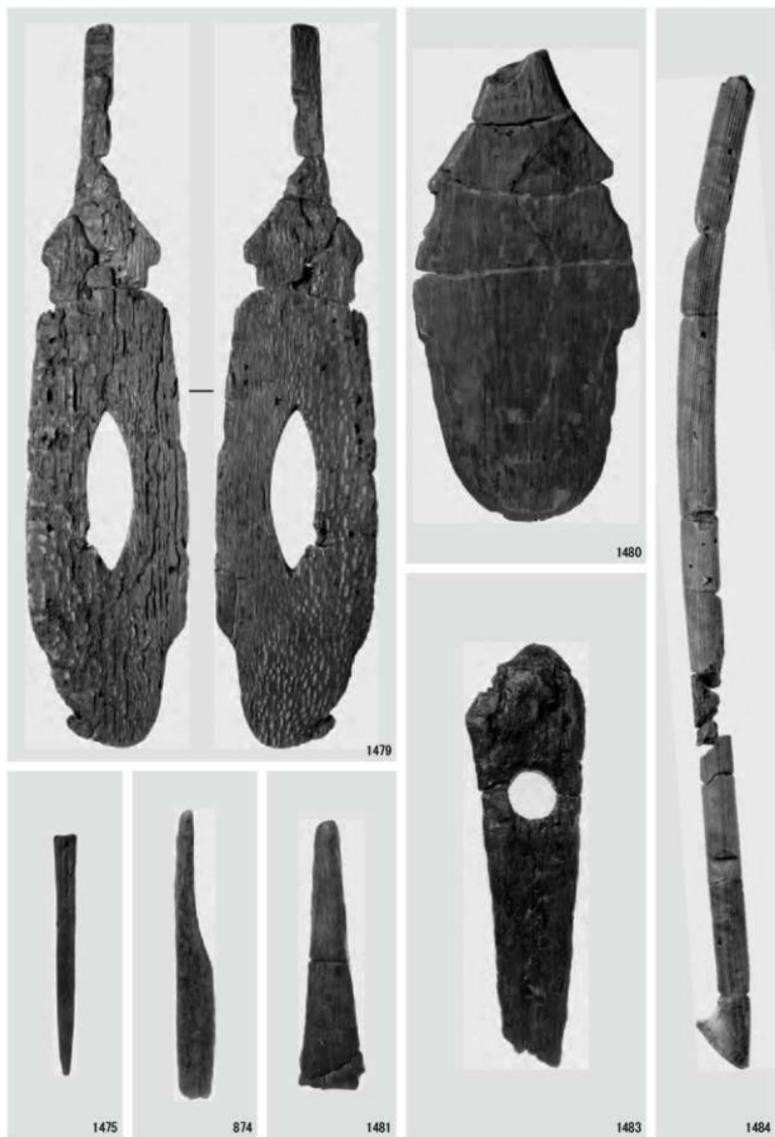


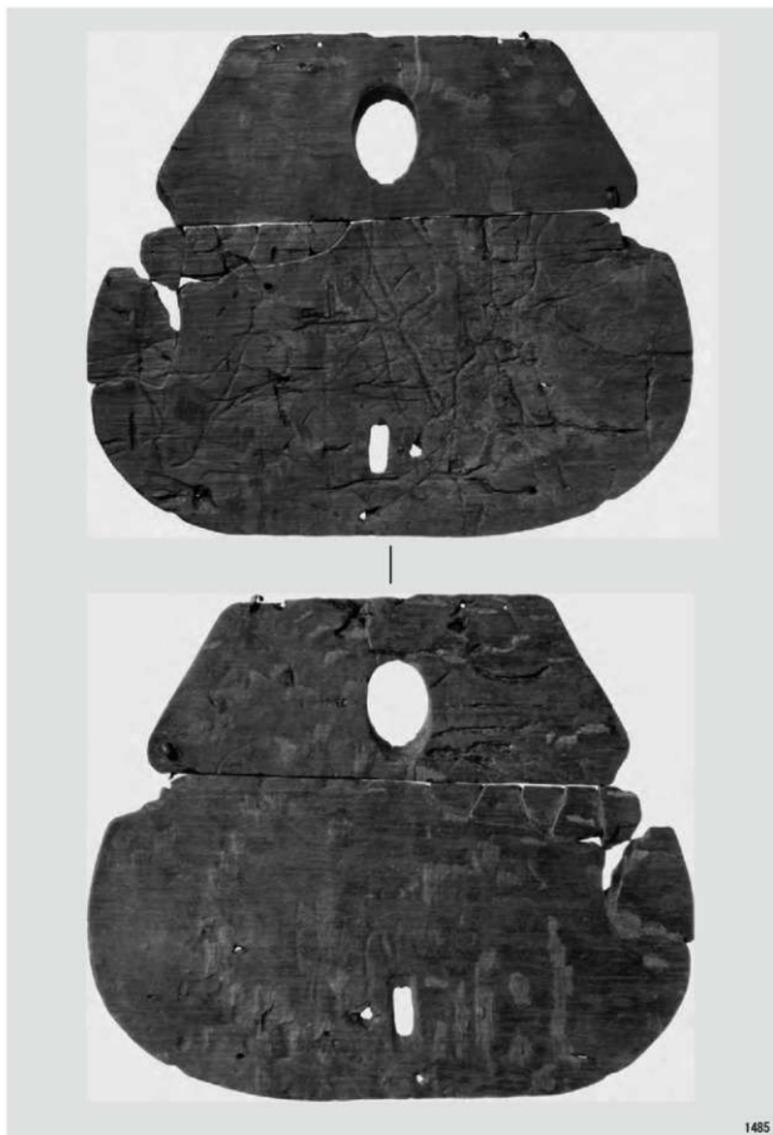








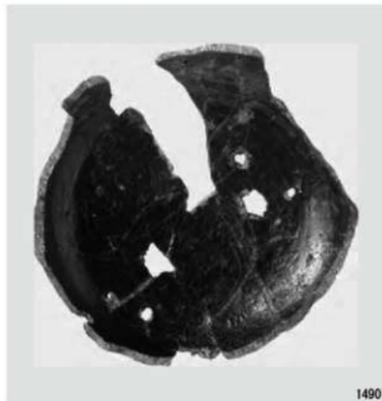








1488



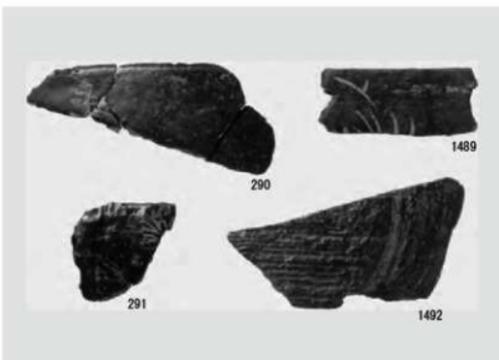
1490



1491



1493



1489

290

291

1492



1498



1499



888

图版90 円形曲物容器（1）



147



1507



182



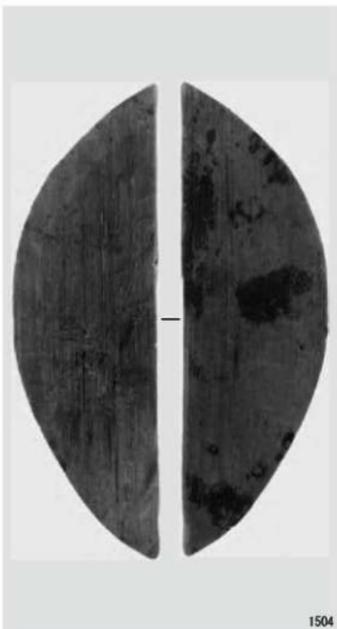
1502



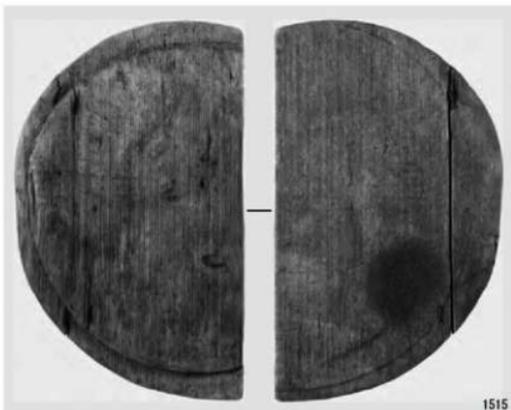
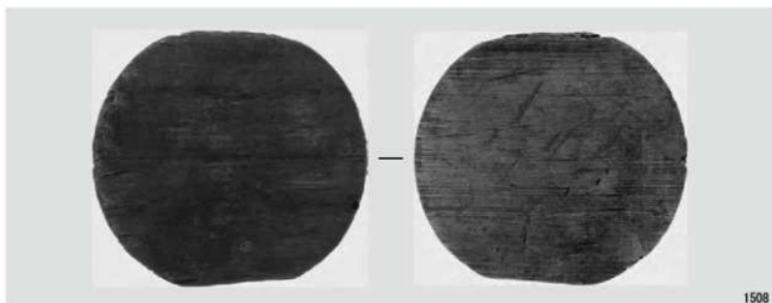
686

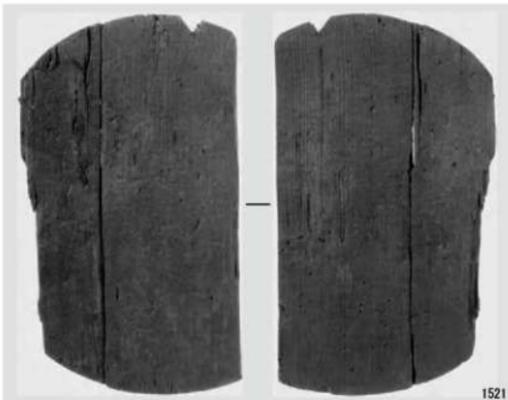
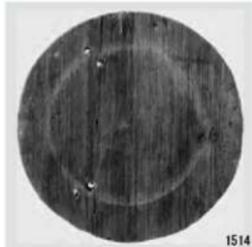
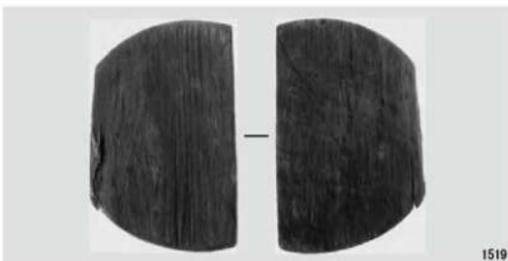


1503

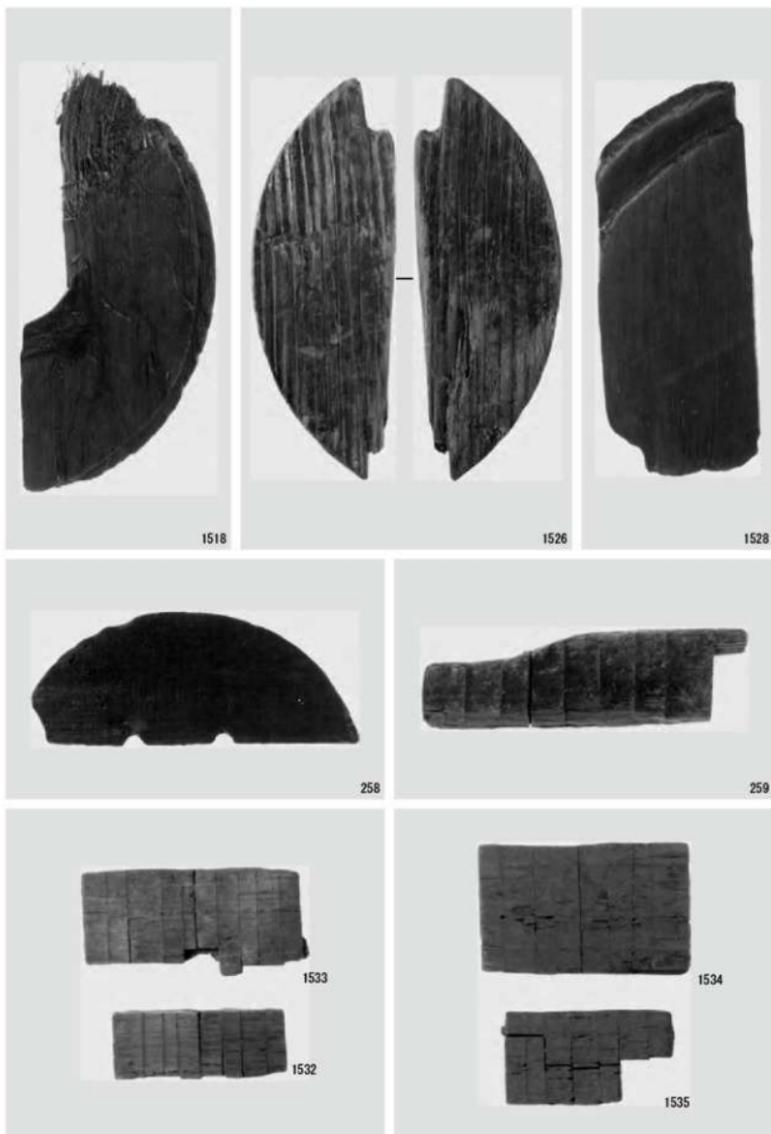


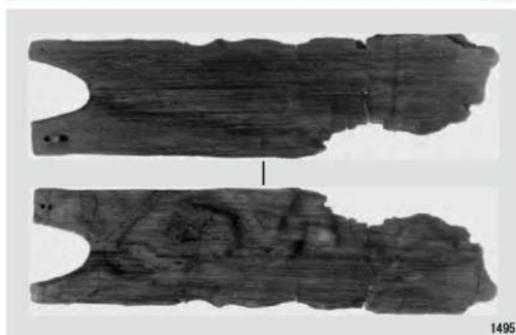
1504

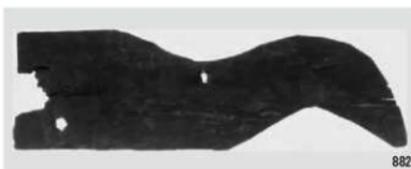


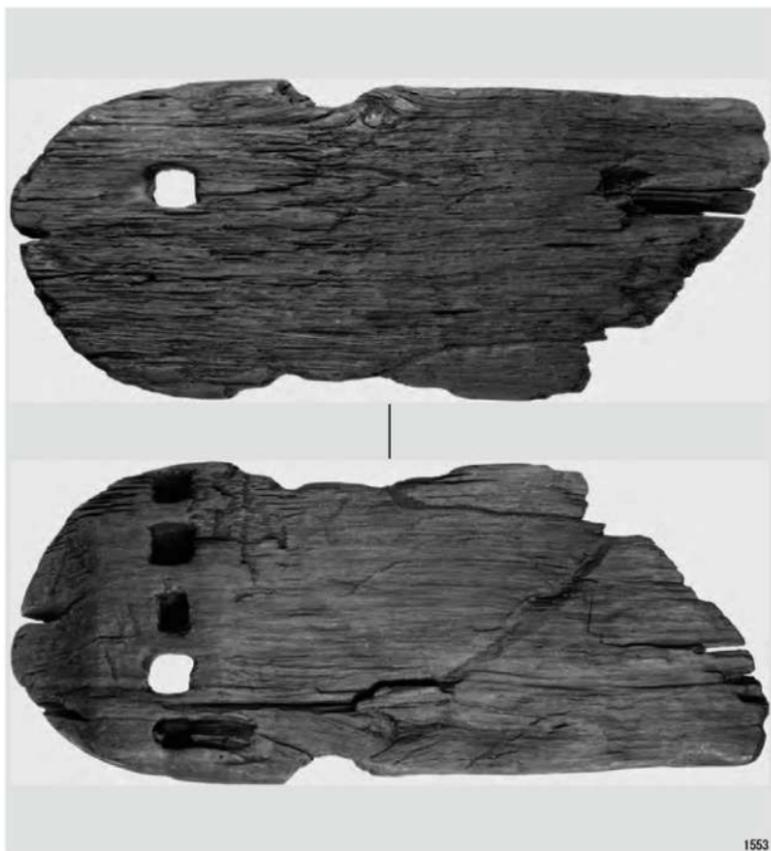


图版94 円形曲物容器（5）、曲物側板









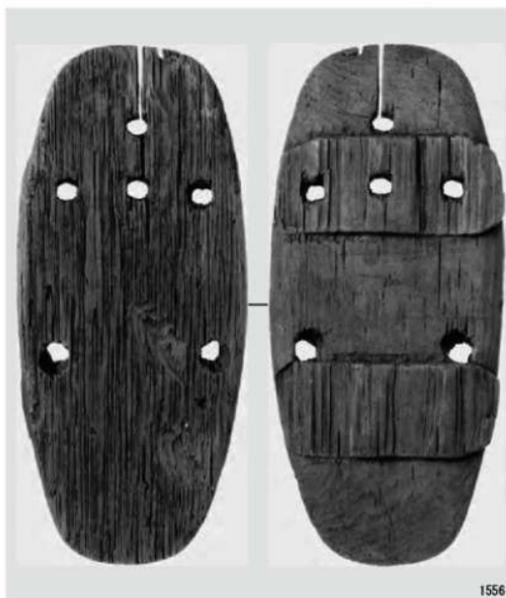
1553

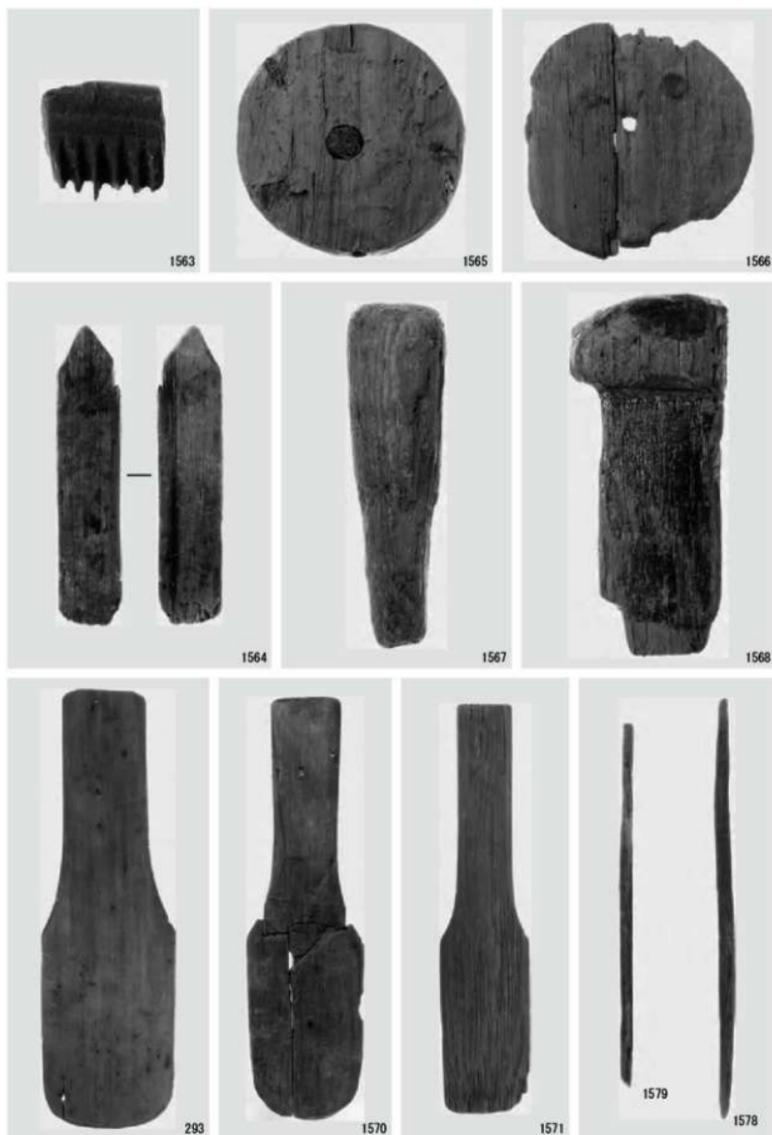


75

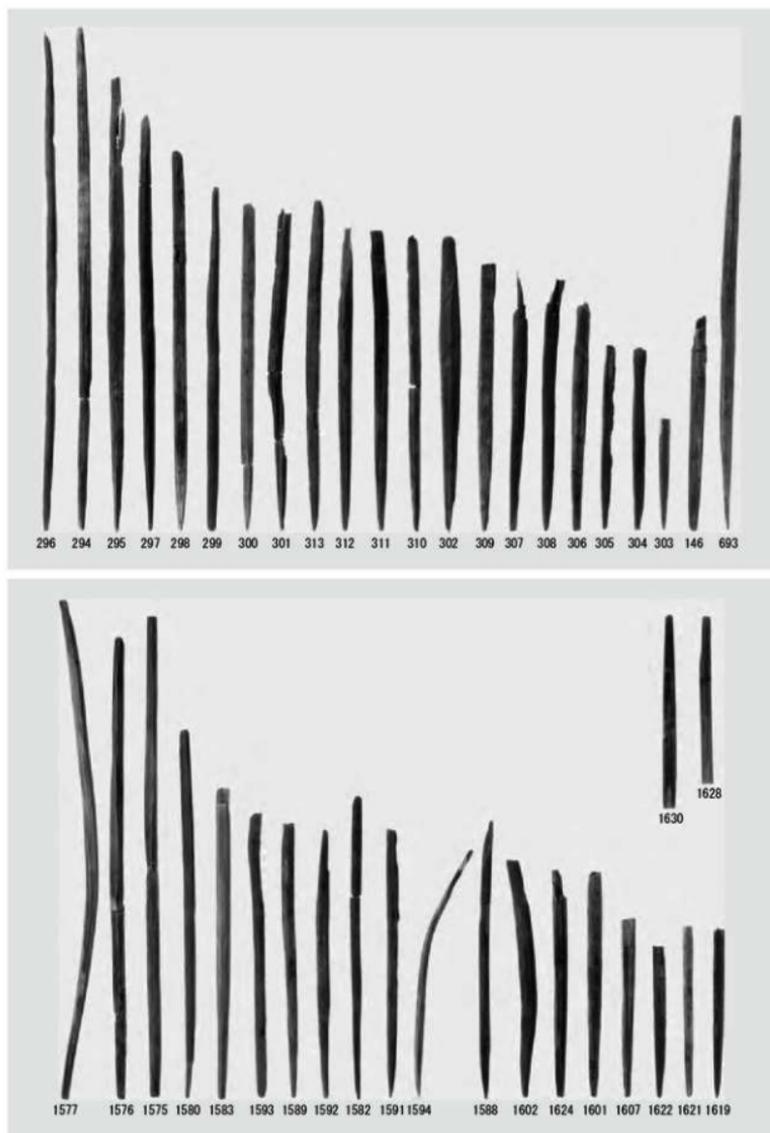


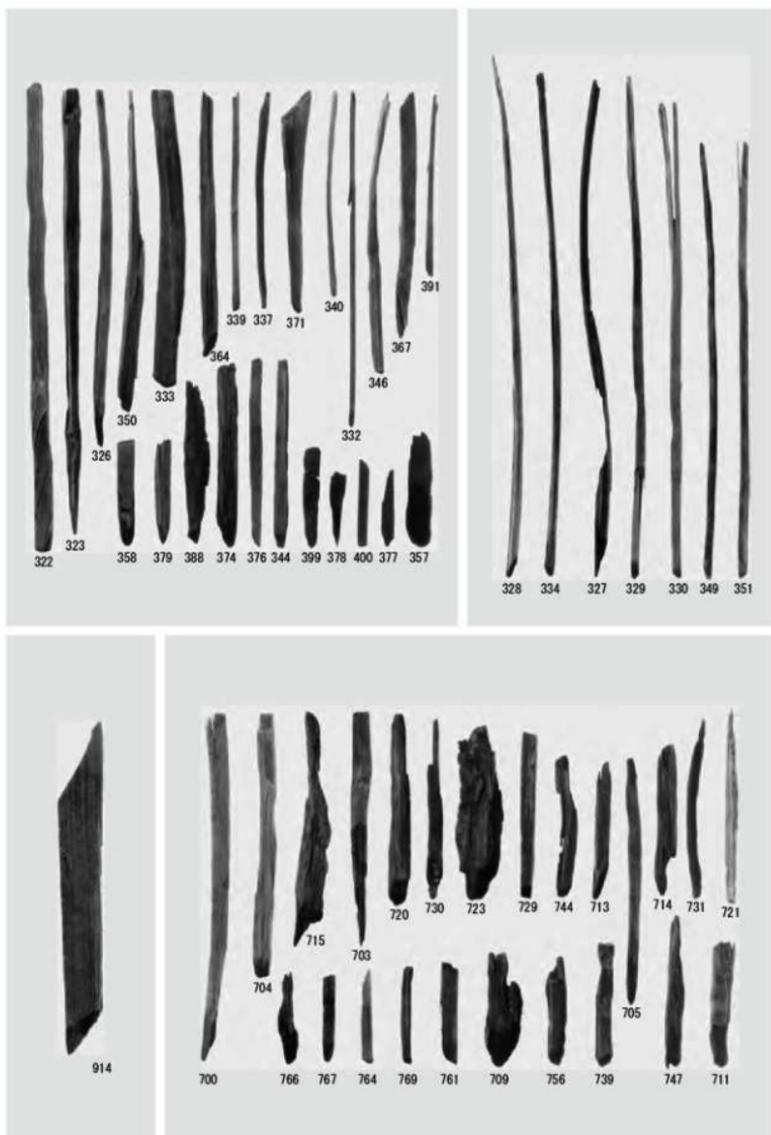
141



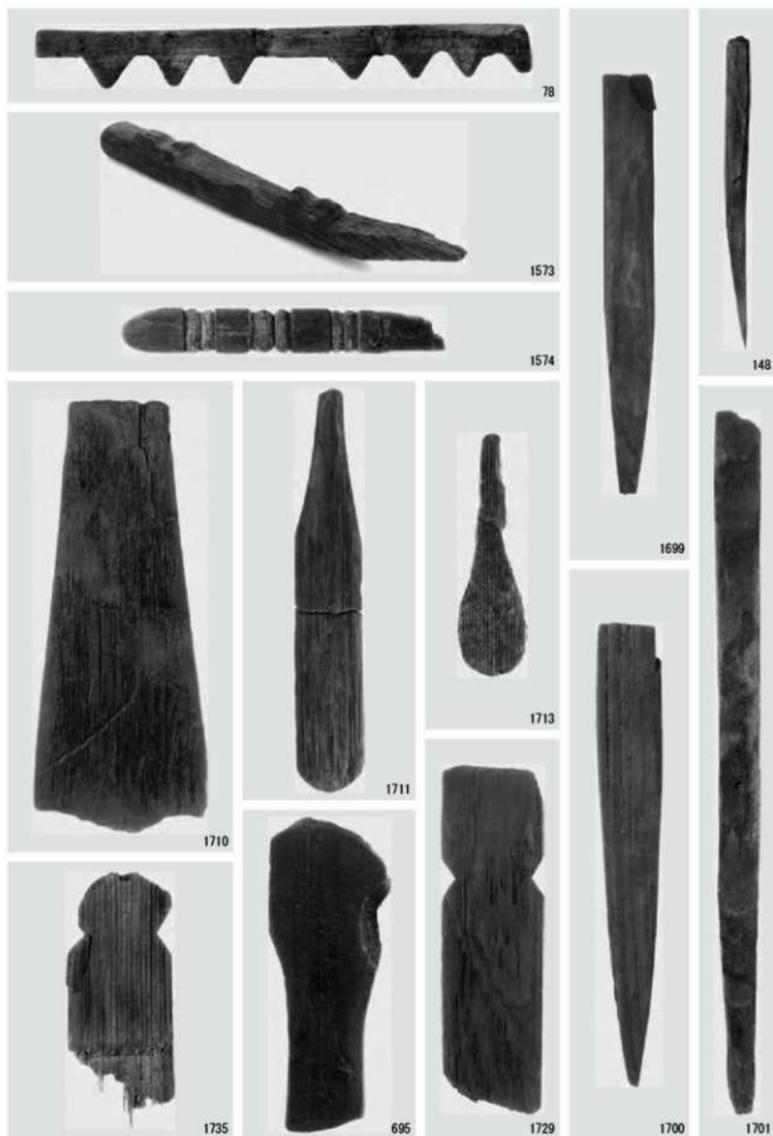


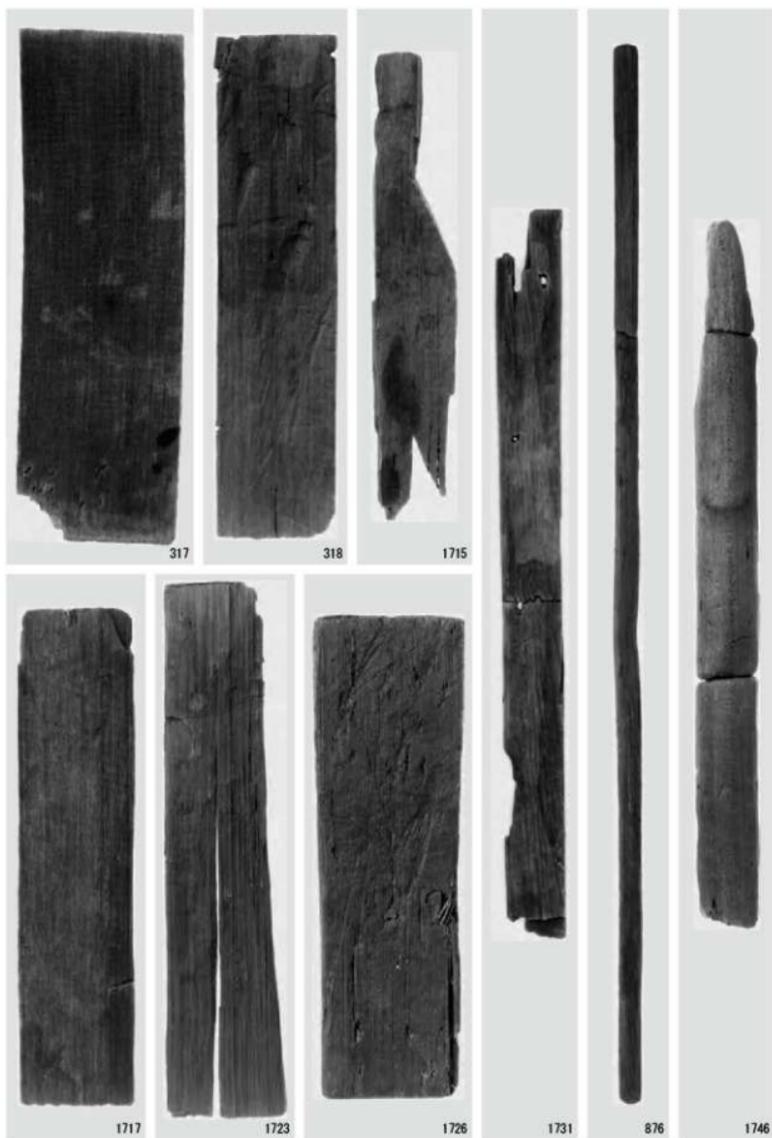
图版100 箸（2）



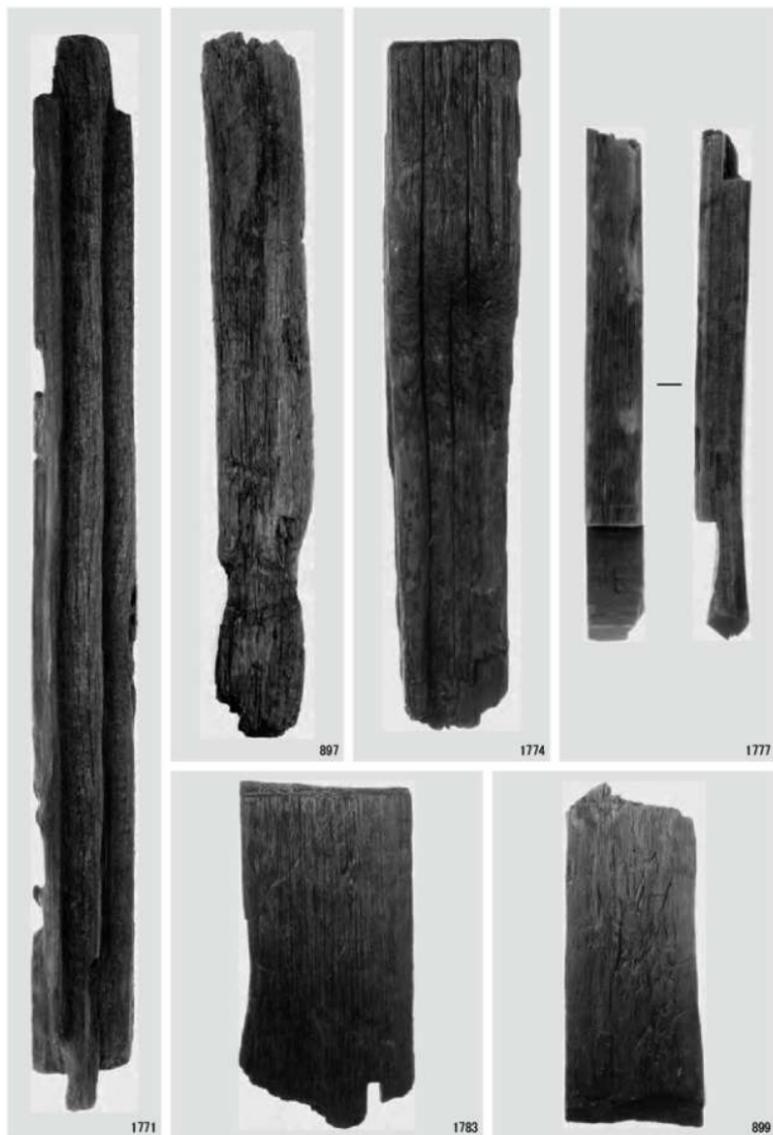


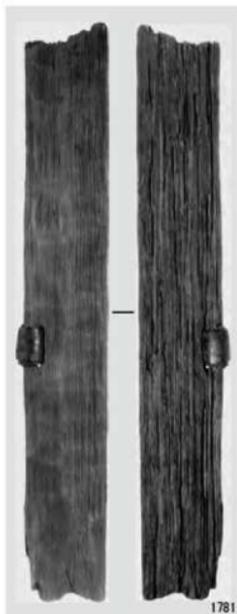
図版102 模造品・串状木製品・へら状木製品、板状木製品（1）

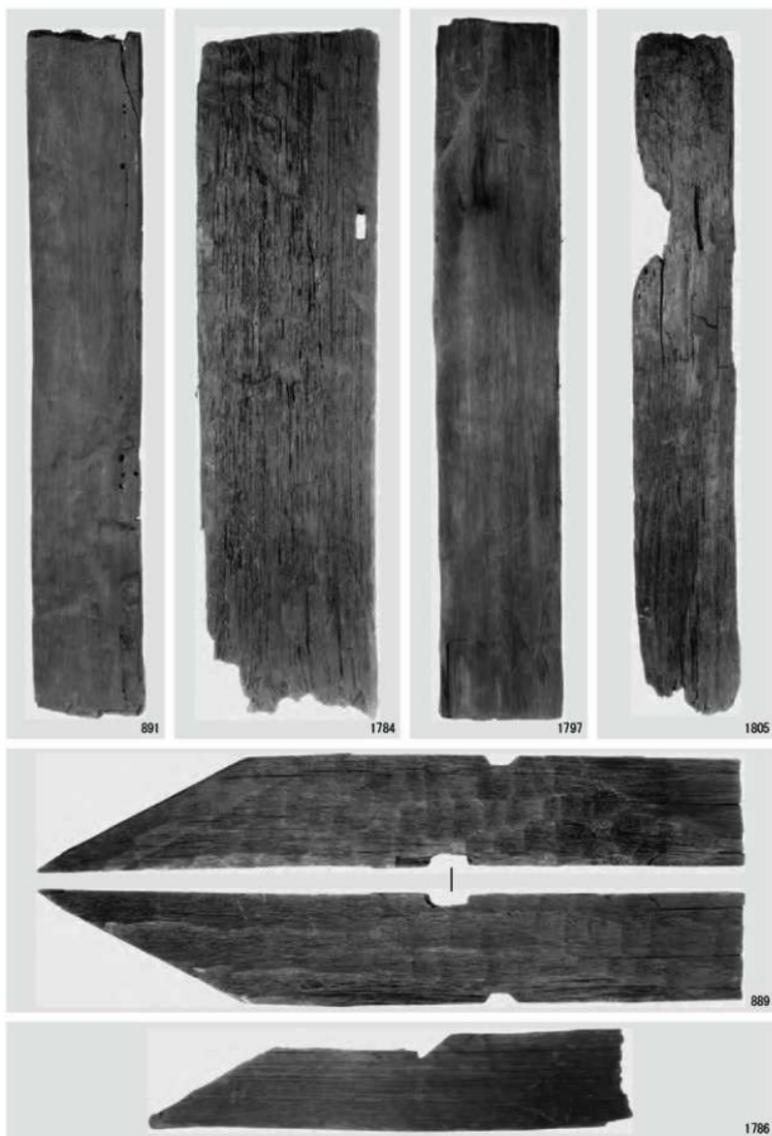




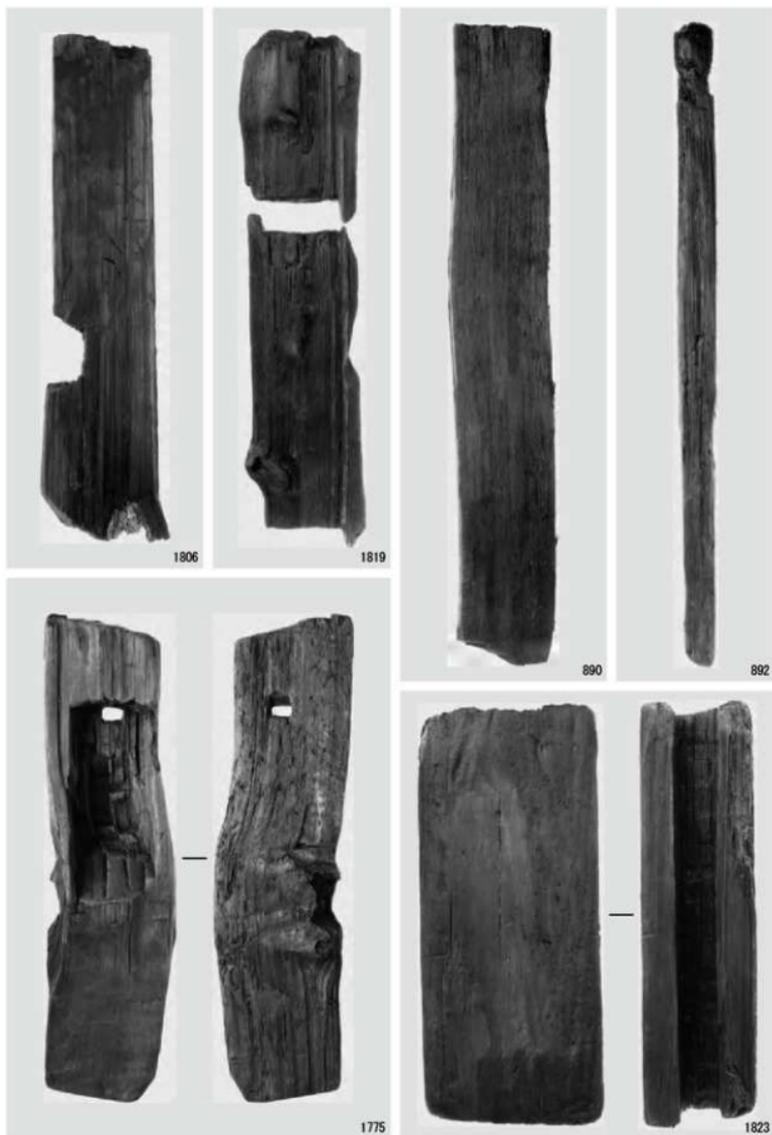




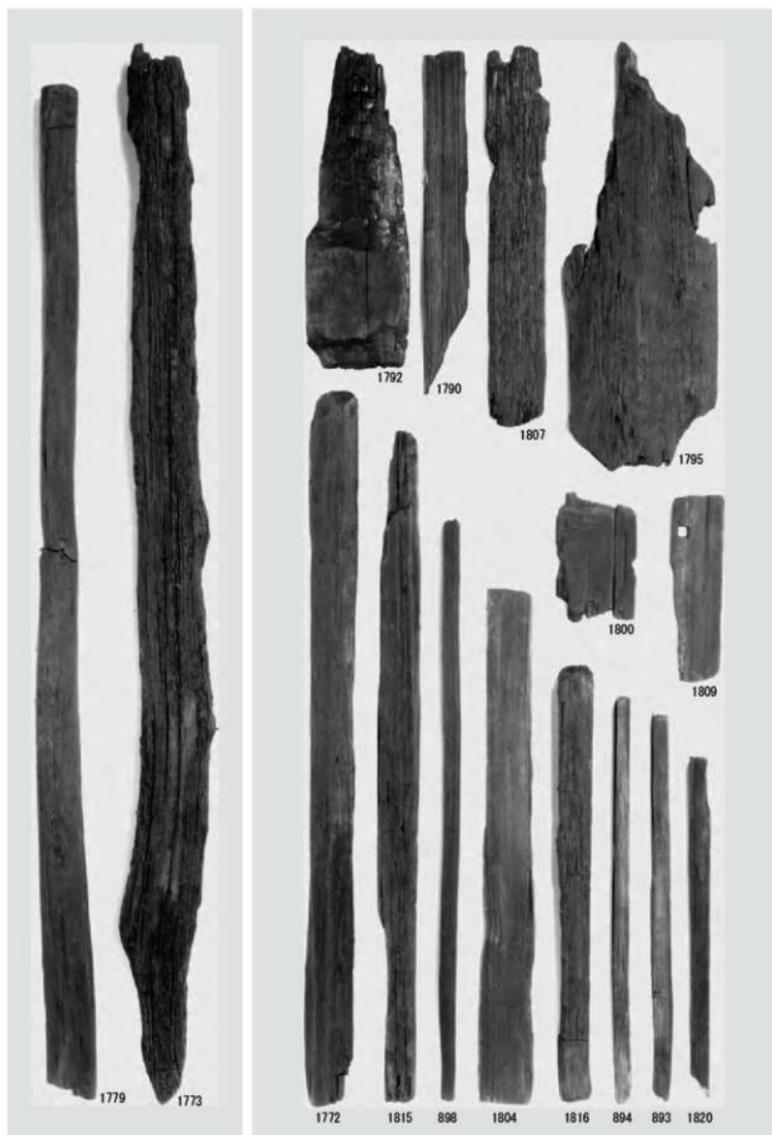


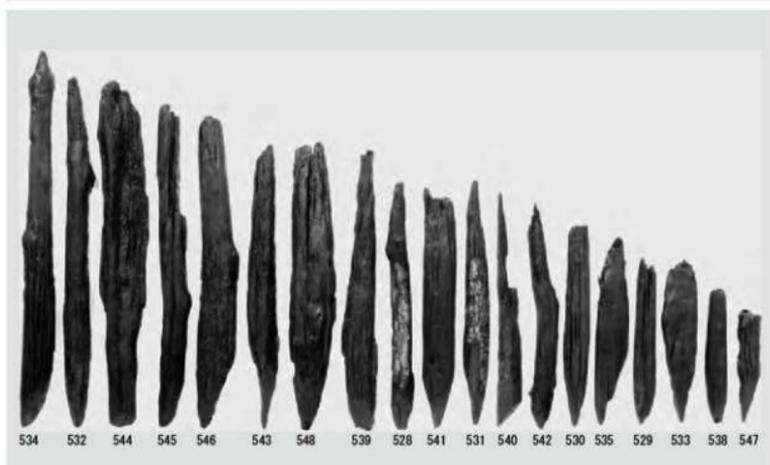
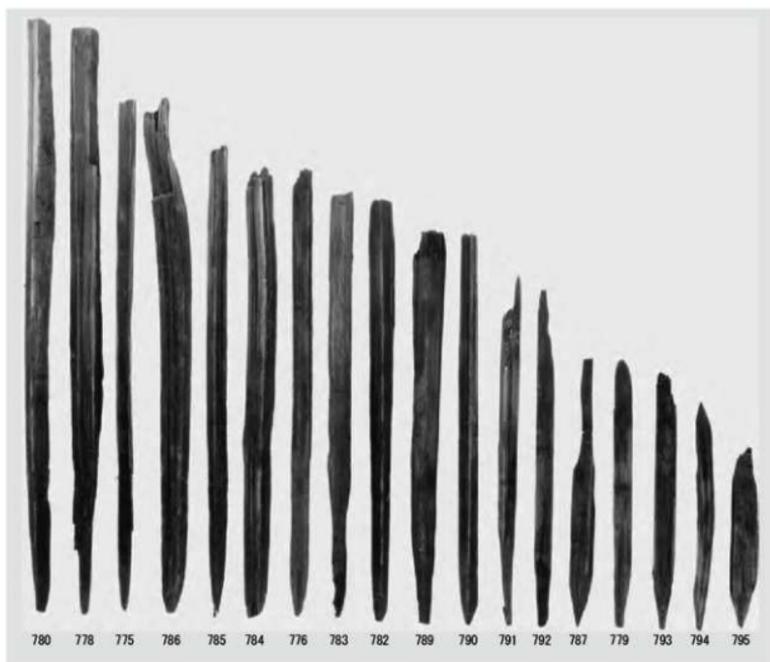






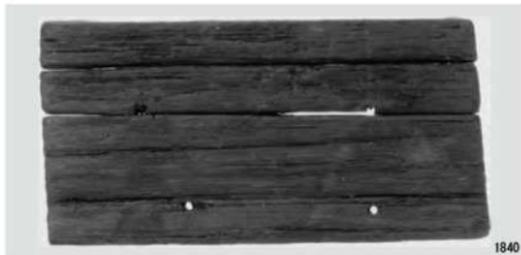
图版110 建築部材 (7)



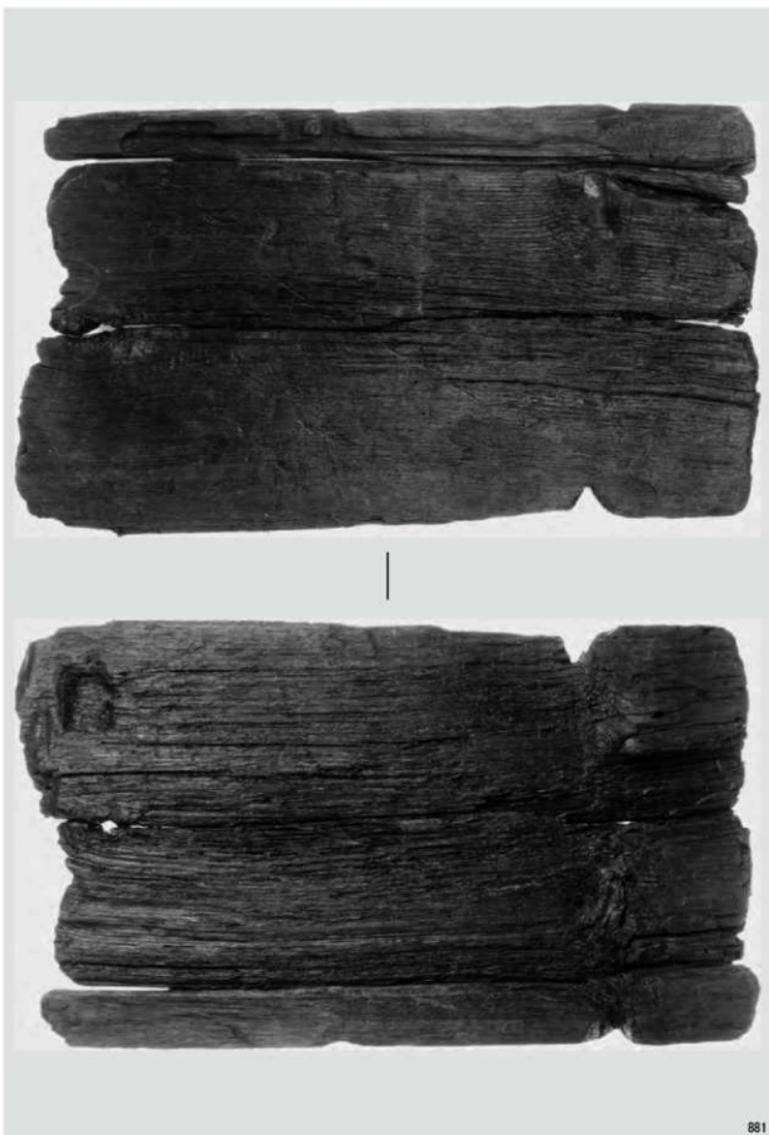


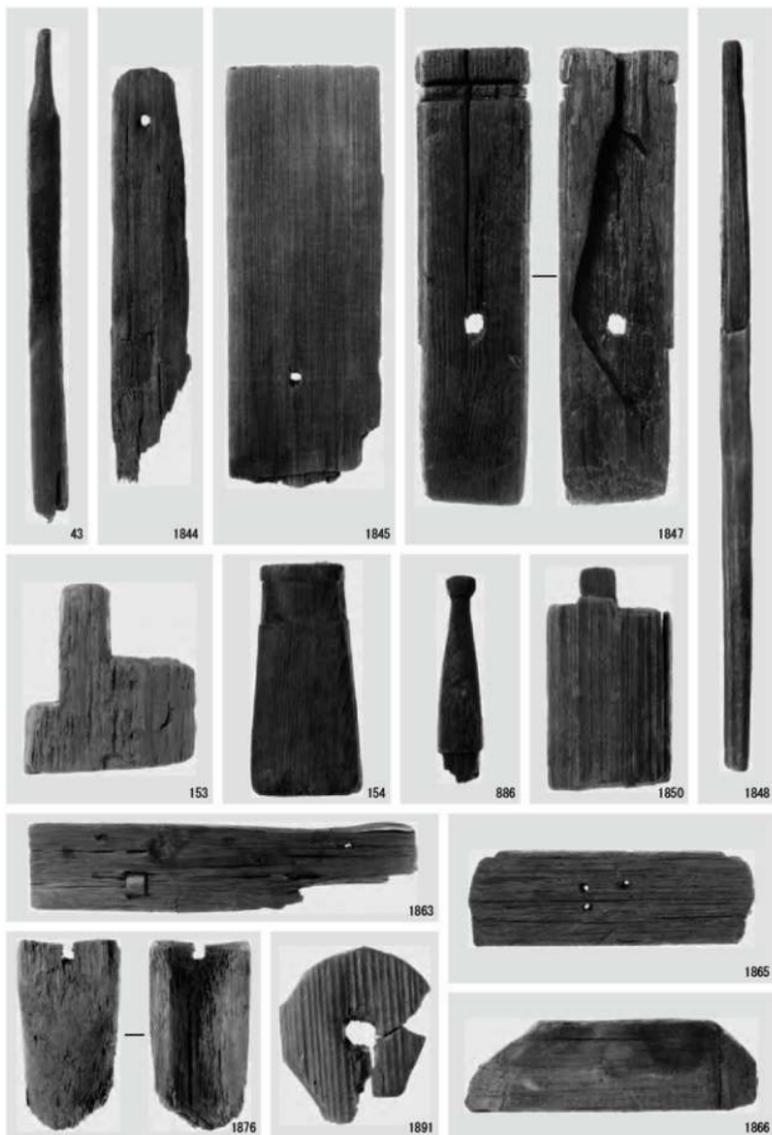
图版112 器具部材 (1)

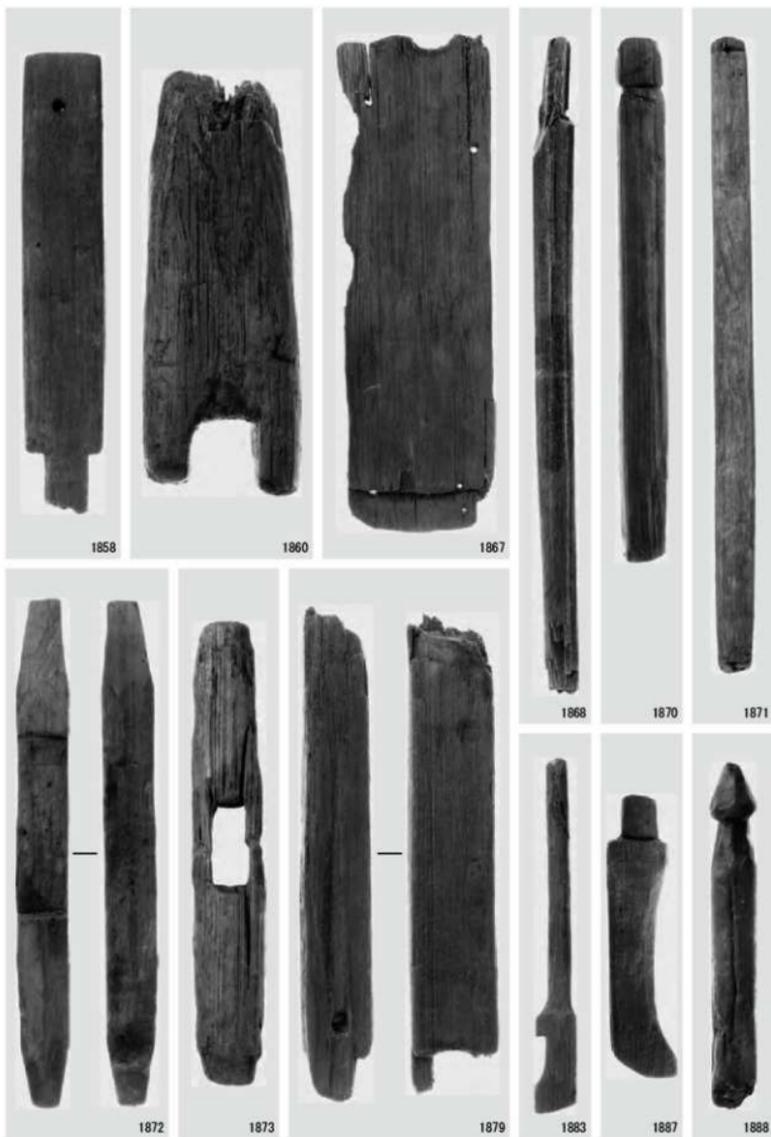


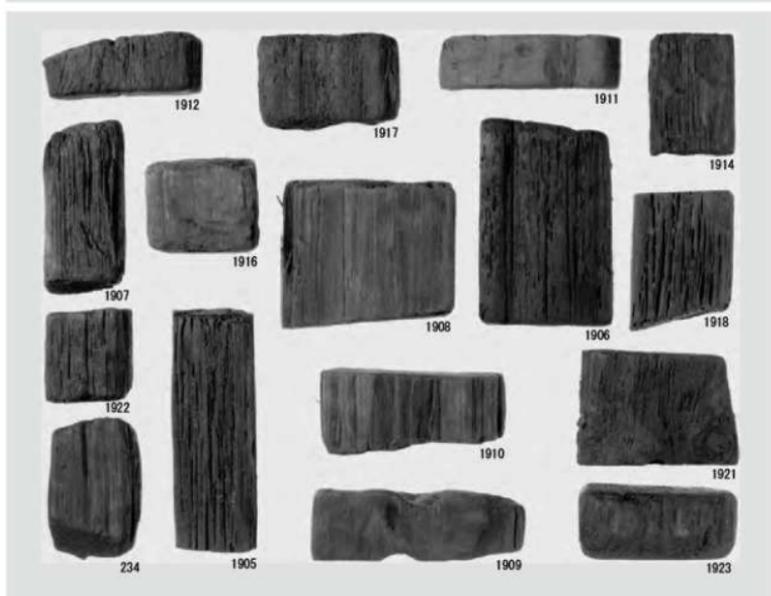
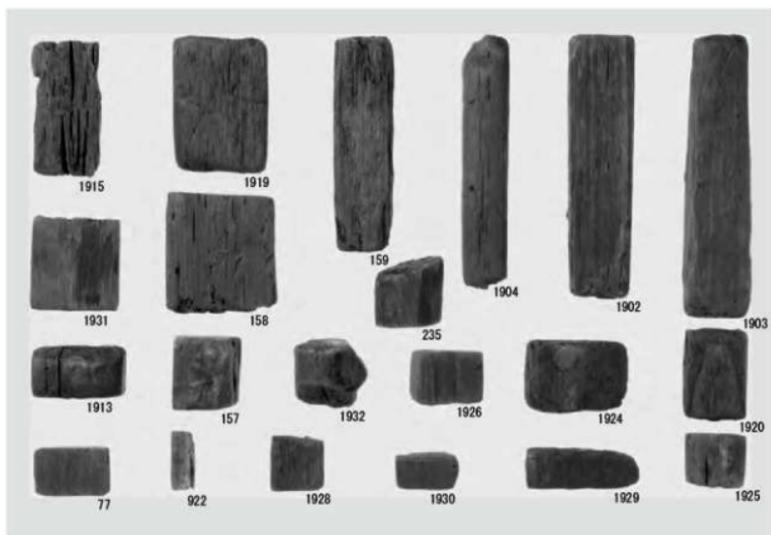


图版114 器具部材 (3)

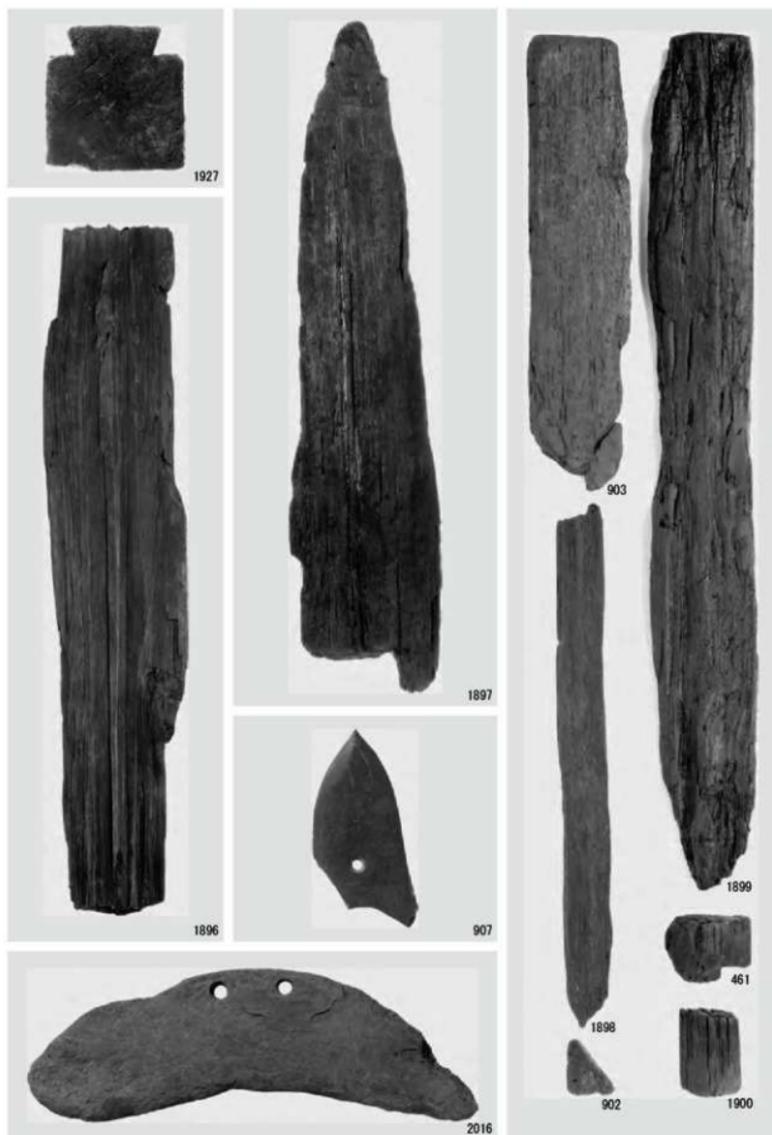


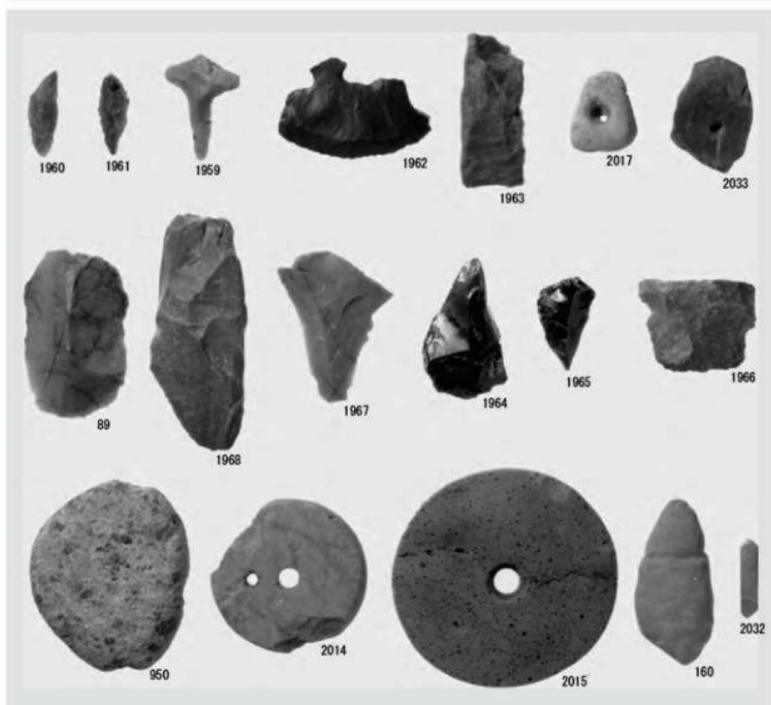
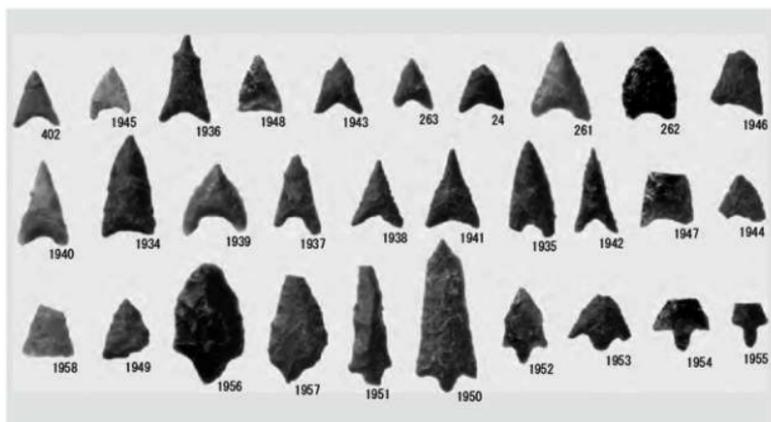


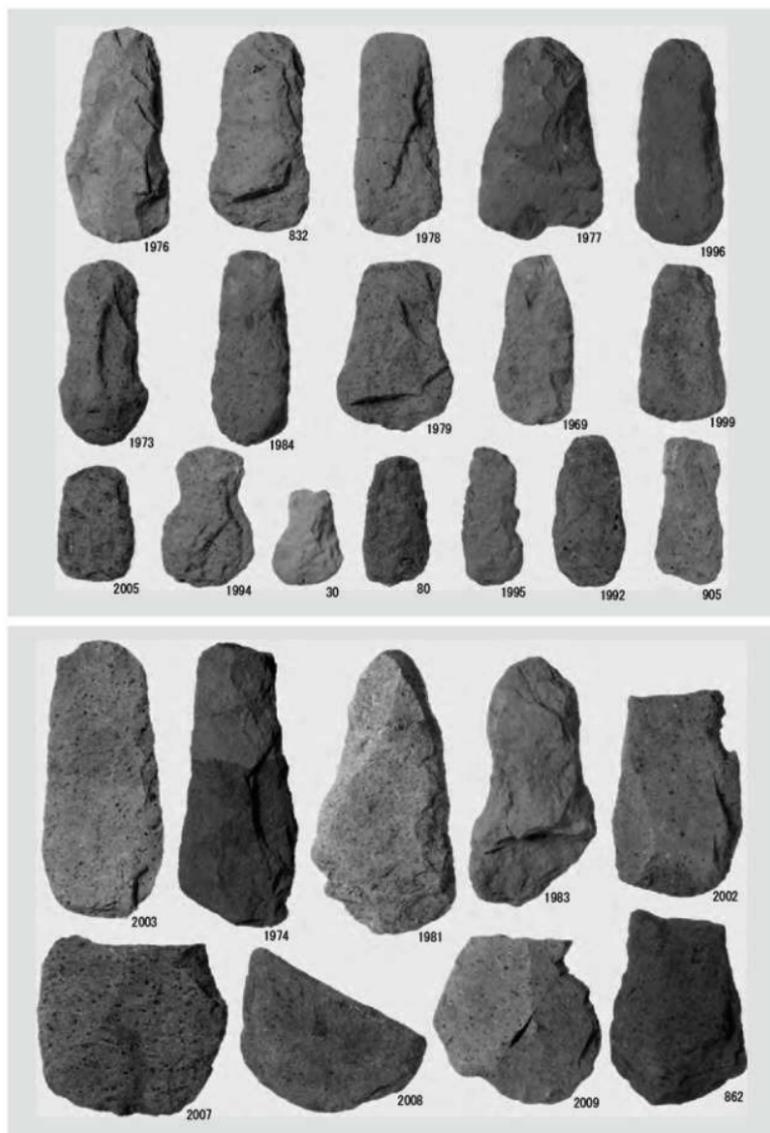


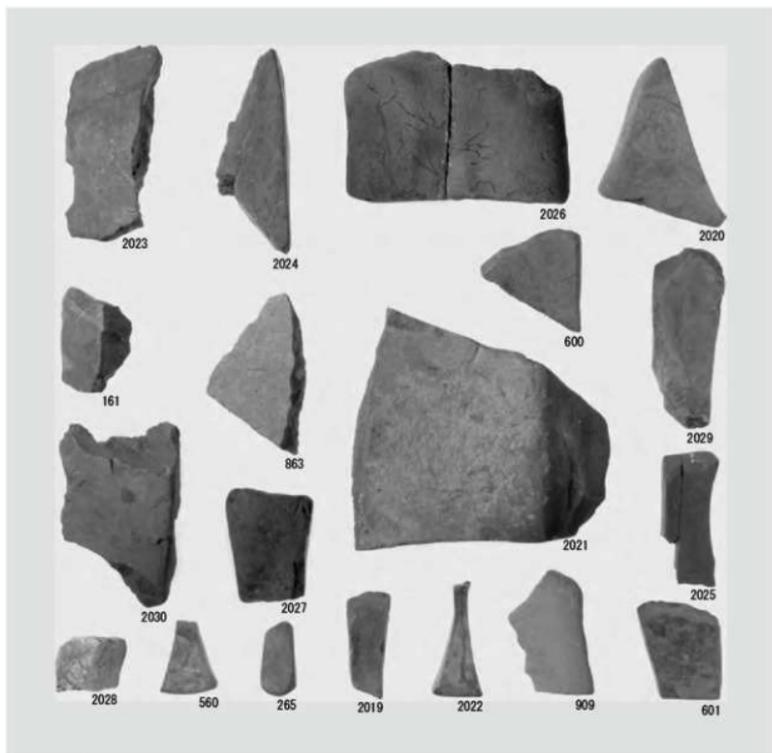


图版118 端材(2)、割板·割板残材、磨製石鏃·石包丁

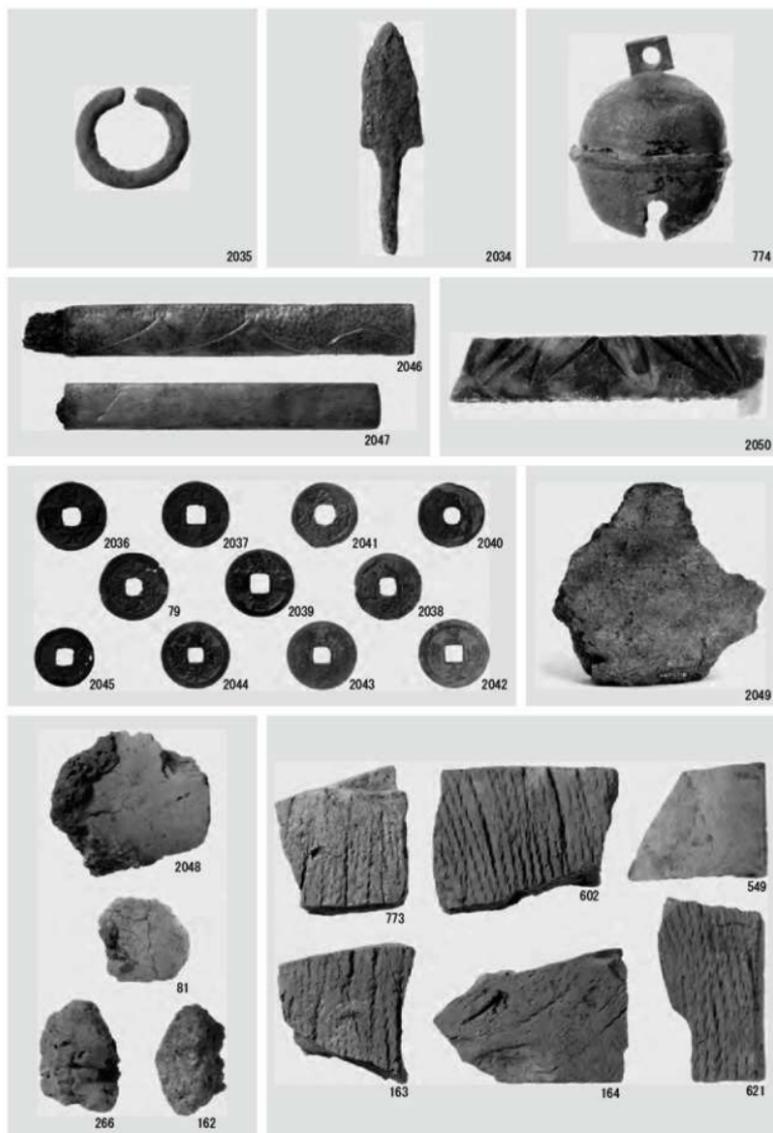


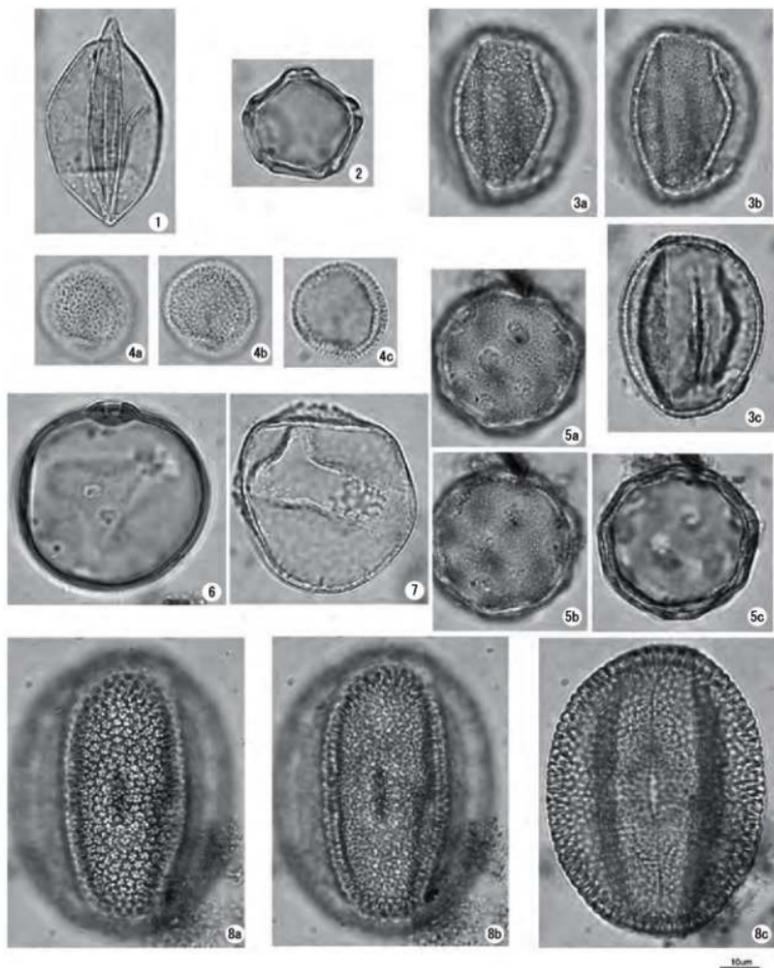




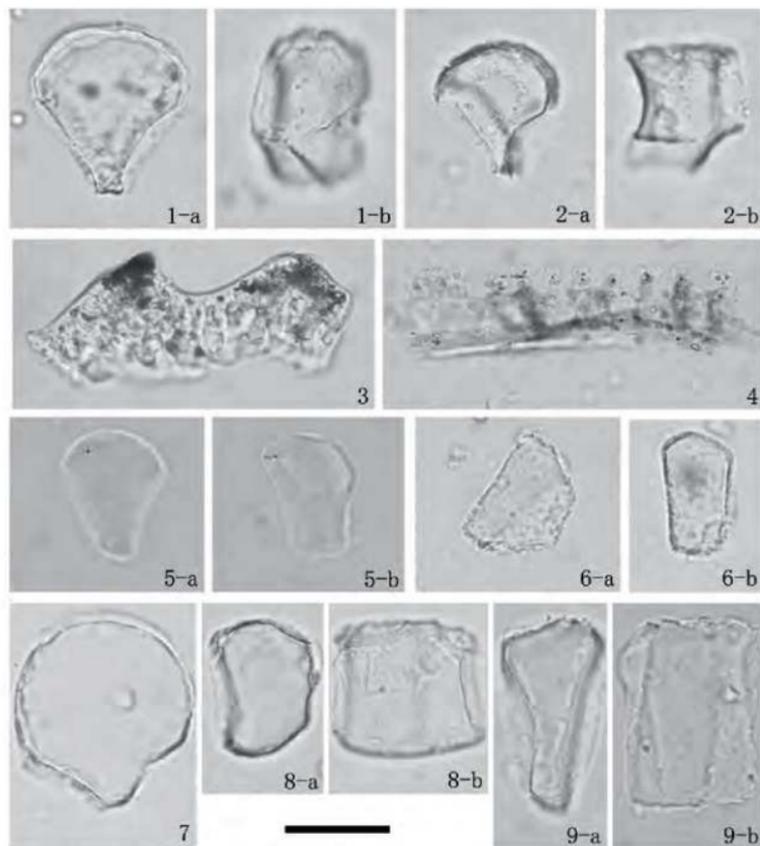


図版122 耳環・銅鍬・銅鈴・小柄・古銭、亀甲製品、匣鉢、羽口・鉄滓、古代瓦





1. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科, 6セII層, PAL. MN 2369
2. ハンノキ属, 6セIIIb層, PAL. MN 2371
3. コナラ属コナラ亜属, 6セIIIb層, PAL. MN 2370
4. ヒルムシロ属, 6セIIIa層, PAL. MN 2364
5. サジオモダカ属, 6セII層, PAL. MN 2368
6. イネ科, 6セII層, PAL. MN 2367
7. カヤツリグサ科, 6セII層, PAL. MN 2366
8. ソバ属, 6セII層, PAL. MN 2365



1-2: イネ (a: 断面、b: 側面) 1:6セ、2:15タ

3: イネ顆部珪酸体破片 6セ

4: イネ型単細胞珪酸体 (列状) 6セ

7: ヨシ属 (断面) 6セ

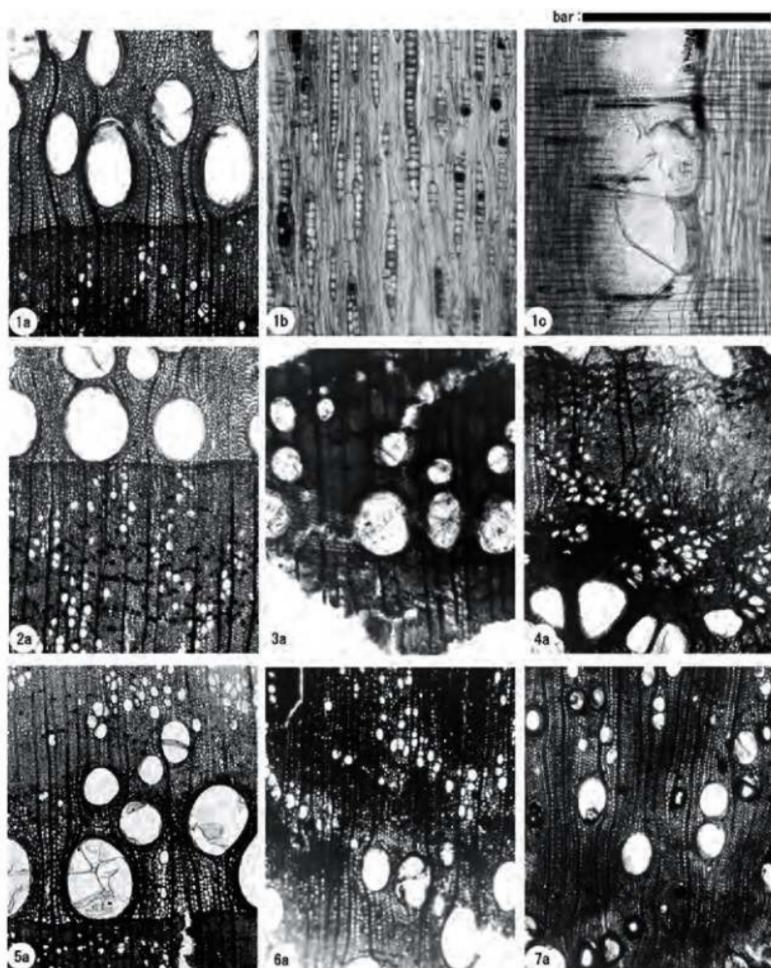
5: ネザサ節型 (a: 断面、b: 側面) 6セ

8: キビ族 (a: 断面、b: 側面) 6セ

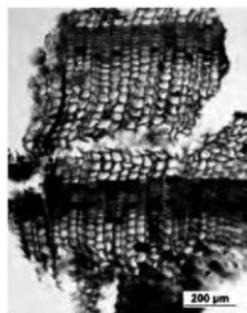
6: クマザサ属型 (a: 断面、b: 側面) 15タ

9: ウシクサ族 (a: 断面、b: 側面) 6セ

(scale bar: 0.03mm)



1a-1c: クリ (239P 柱根、遺物番号 17:PLD-5511) 2a: クリ (222P 柱根、遺物番号 14)  
 3a: クリ (223P 礎板、遺物番号 13) 4a: クリ (238P 柱根、遺物番号 16) 5a: クリ (241P 柱根、遺物番号 18)  
 6a: クリ (346P 柱根、遺物番号 20:PLD-4795) 7a: クリ (352P 棟持柱根、遺物番号 21:PLD-4794)  
 a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 bar:a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.2mm.



木口

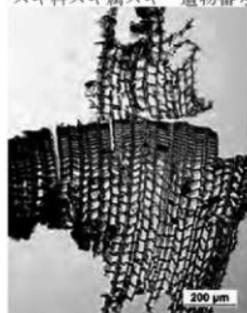
スギ科スギ属スギ 遺物番号1729



柁目

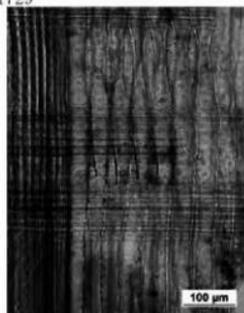


板目



木口

ヒノキ科ヒノキ属 遺物番号896



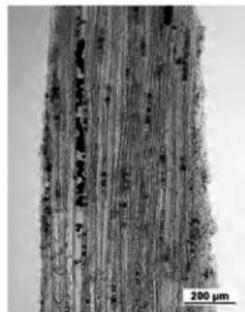
柁目



板目

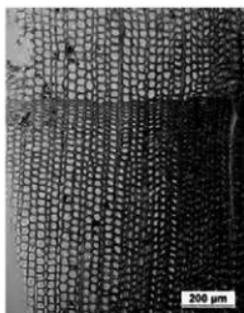


柁目



板目

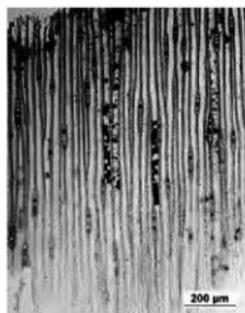
ヒノキ科ヒノキ属 遺物番号1735



木口  
ヒノキ科ヒノキ属 遺物番号1777



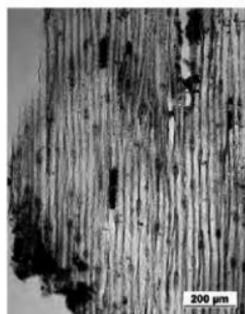
柁目



板目



柁目



板目

木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号73



木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号143



柁目



板目

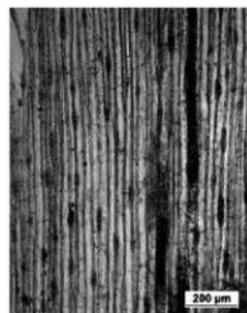


木口

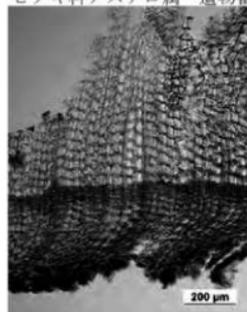
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号153



柁目



板目



木口

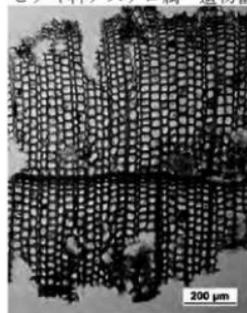
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号182



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号292



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号691



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号698



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号788

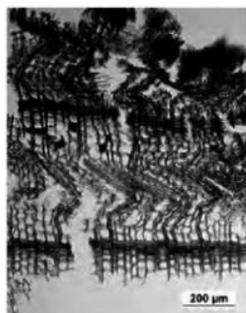


柁目



板目

図版130 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真(5)



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号876



柁目



板目

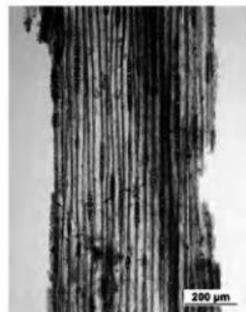


木口

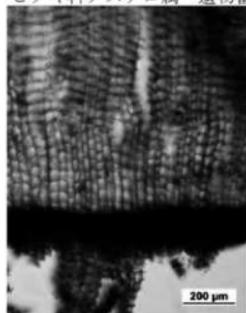
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号891



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号892



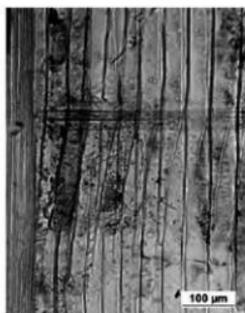
柁目



板目



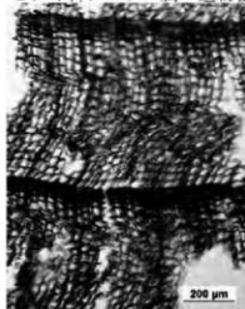
木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号895



柁目



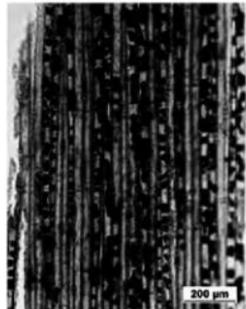
板目



木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号899



柁目



板目



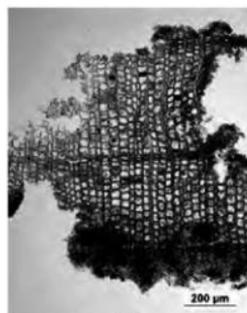
木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1494



柁目

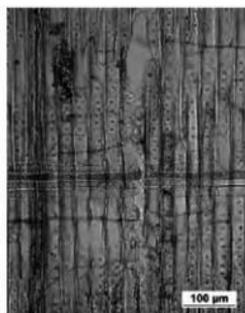


板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1496



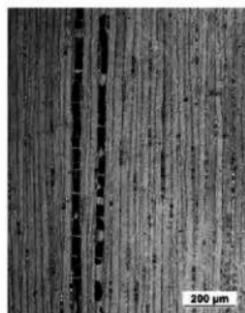
柀目



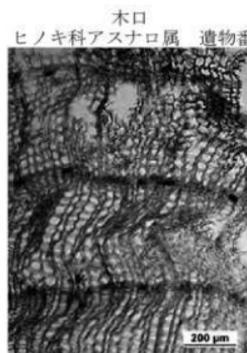
板目



柀目



板目

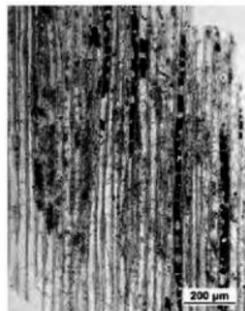


木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1498



柀目



板目



柁目



板目

木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1502

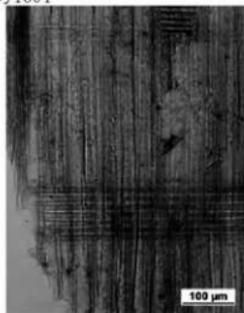


柁目



板目

木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1504



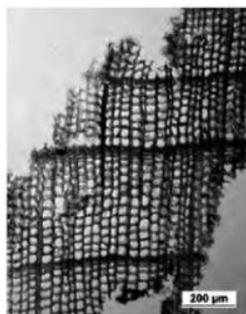
柁目



板目

木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1512

図版134 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真(9)

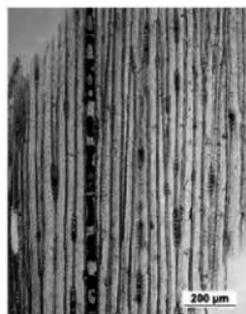


木口

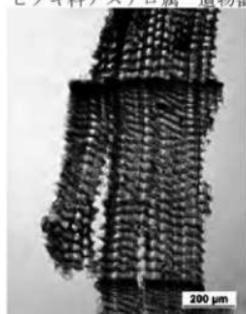
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1513



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1516



柁目

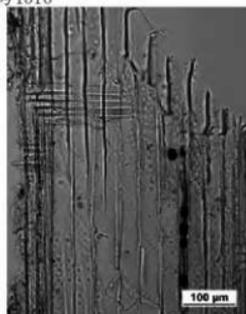


板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1519



柁目



板目

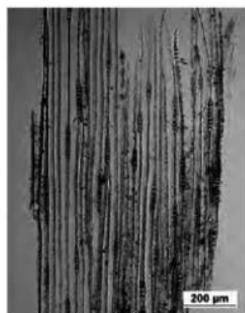


木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1540



柁目



板目



木口

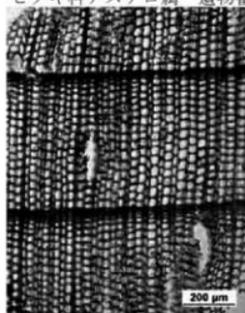
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1547



柁目



板目

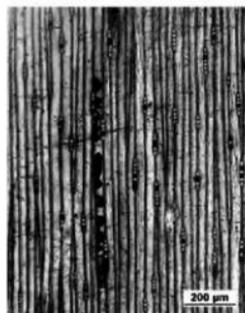


木口

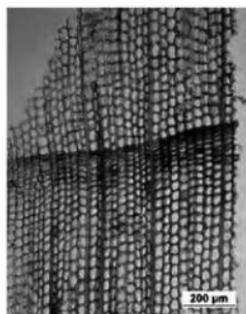
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1554



柁目



板目

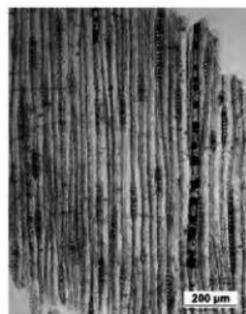


木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1562



柁目

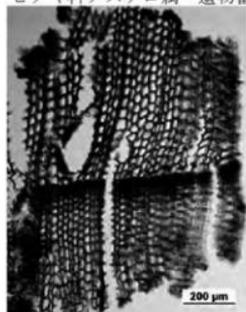


板目



柁目

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1565 (紡錘車の紡輪)



木口

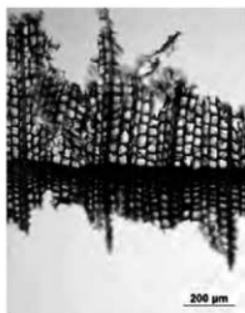
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1566



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1567



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1570



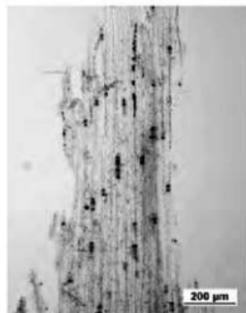
柁目



板目



柁目



板目

木口

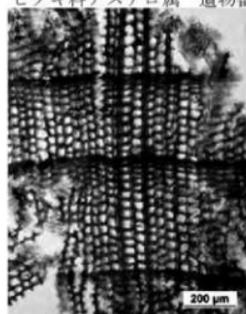
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1578



木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1579

柁目

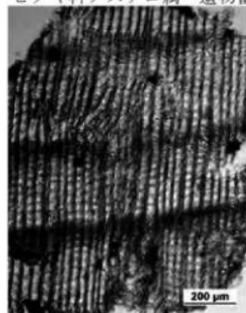
板目



木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1710

柁目

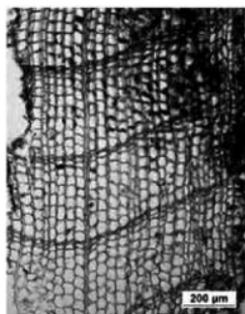
板目



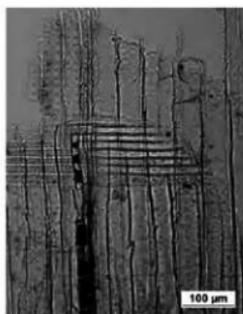
木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1715

柁目

板目



木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1717



柁目



板目



柁目



板目

木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1767



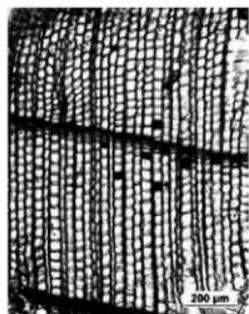
木口  
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1771



柁目



板目



木口

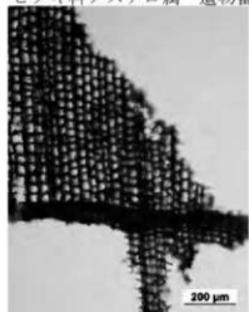


柁目

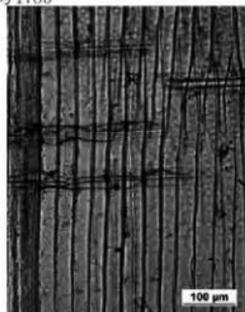


板目

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1783



木口

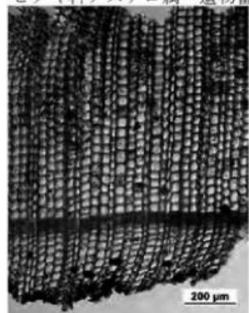


柁目



板目

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1784



木口

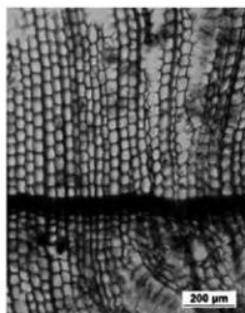


柁目



板目

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1786

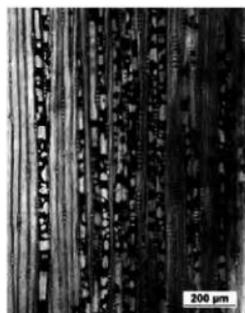


木口

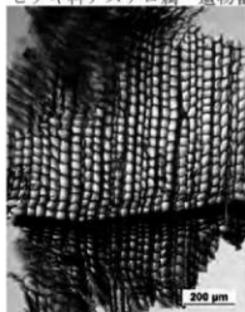
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1787



柁目



板目

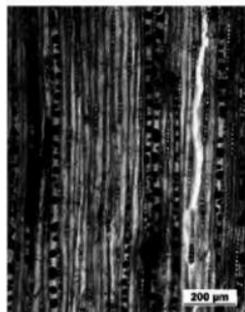


木口

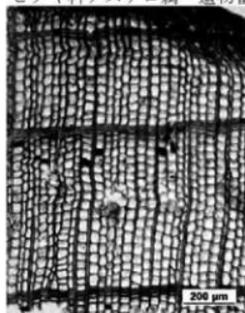
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1791



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1793



柁目

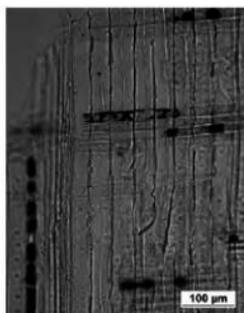


板目

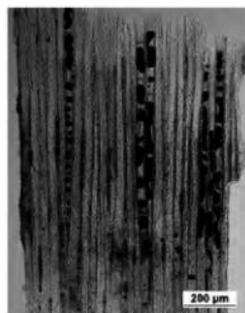


木口

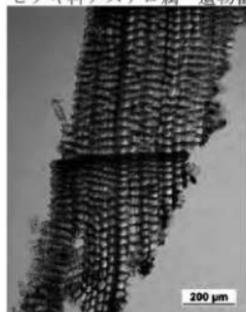
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1797



柁目



板目

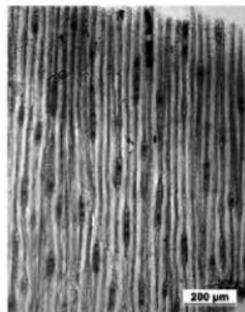


木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1799



柁目

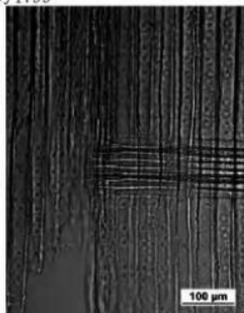


板目

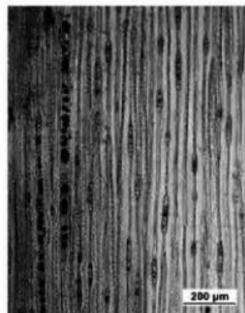


木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1806



柁目

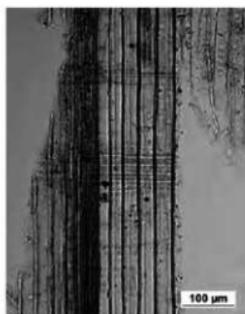


板目



木口

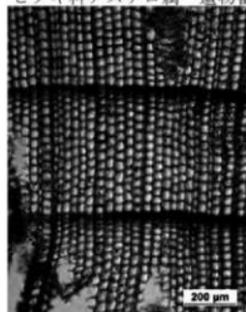
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1819



柁目



板目



木口

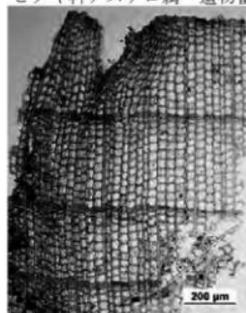
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1823



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1838

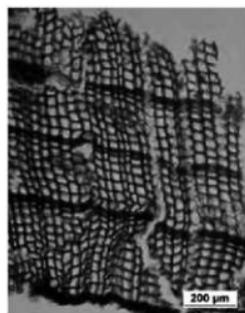


柁目



板目

図版144 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真(19)



木口

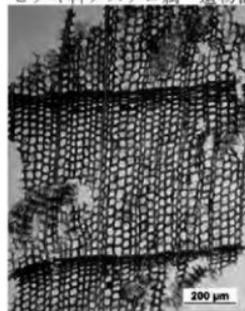
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1840



柁目



板目



木口

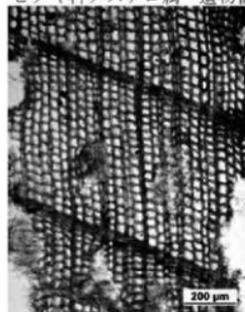
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1850



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1858



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1865



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1867



柁目



板目



木口

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1872



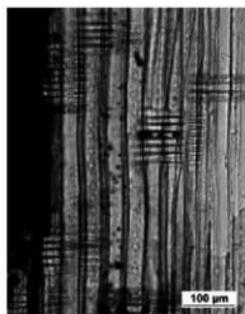
柁目



板目



木口



柁目



板目

ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1879



木口



柁目



板目

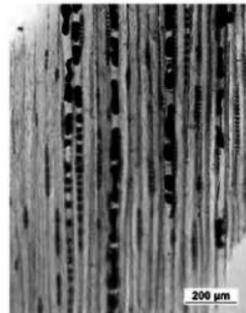
ヒノキ科アスナロ属 遺物番号1927



木口



柁目



板目

ヒノキ科クロベ属クロベ 遺物番号890



木口



柁目

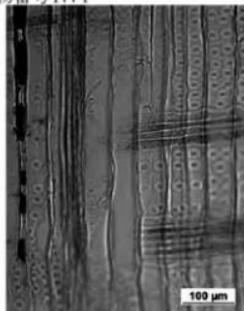


板目

ヒノキ科クロベ属クロベ 遺物番号1774



木口

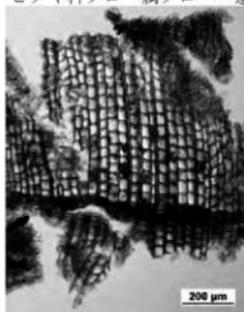


柁目



板目

ヒノキ科クロベ属クロベ 遺物番号1896



木口



柁目

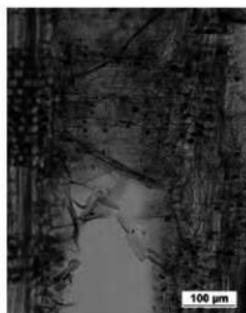


板目

針葉樹 遺物番号1565 (紡錘車の軸)



木口



杵目



板目

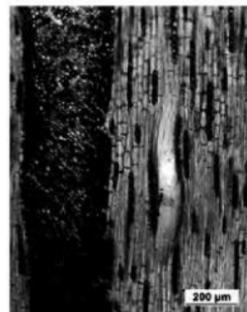
ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節 遺物番号874



木口



杵目



板目

ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節 遺物番号1463



木口



杵目



板目

ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節 遺物番号1464



木口

ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節 遺物番号1467



杣目

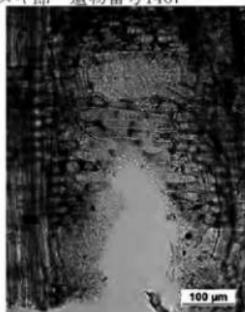


板目



木口

ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節 遺物番号1469



杣目



板目



木口

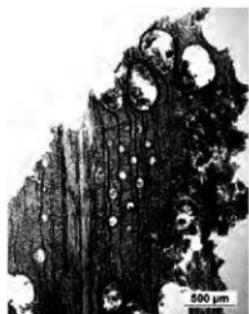
ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節 遺物番号1470



杣目



板目



木口

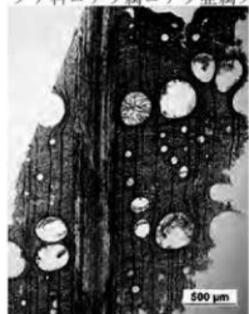


柁目



板目

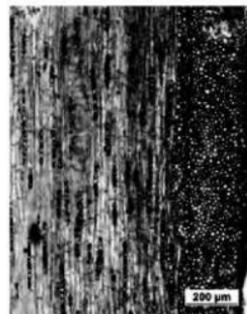
ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節 遺物番号1478



木口

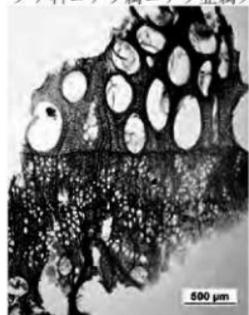


柁目



板目

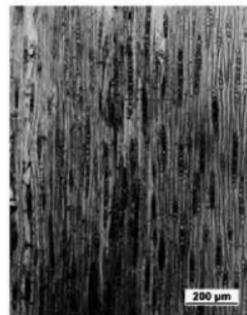
ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節 遺物番号1481



木口



柁目



板目

ブナ科クリ属クリ 遺物番号881



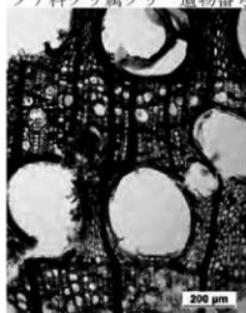
木口  
ブナ科クリ属クリ 遺物番号897



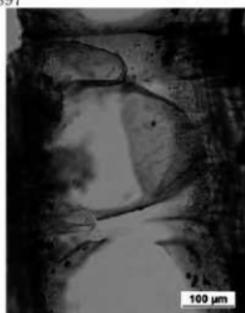
柁目



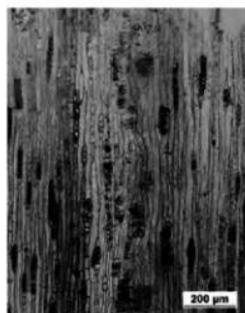
板目



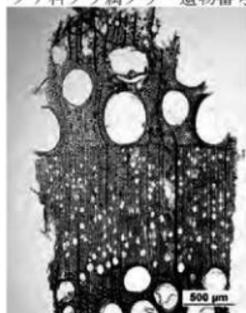
木口  
ブナ科クリ属クリ 遺物番号1788



柁目



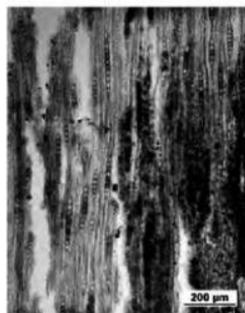
板目



木口  
ブナ科クリ属クリ 遺物番号1796



柁目



板目

図版152 平成20年度樹種同定実施木器類の顕微鏡写真 (27)



木口



柀目



板目

ブナ科クリ属クリ 遺物番号1805



木口



柀目



板目

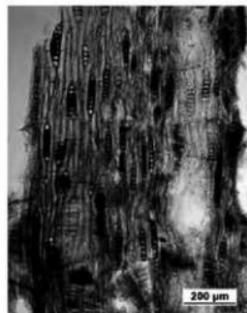
ブナ科クリ属クリ 遺物番号1860



木口

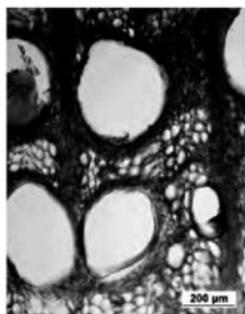


柀目



板目

ブナ科クリ属クリ 遺物番号1897



木口

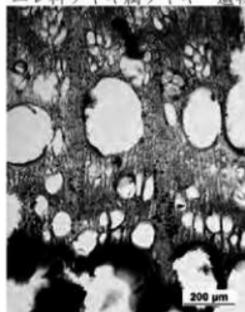


柁目



板目

ニレ科ケヤキ属ケヤキ 遺物番号1488



木口

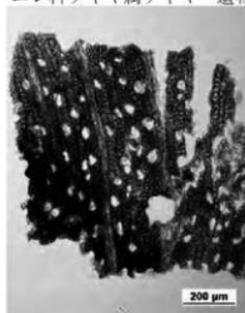


柁目



板目

ニレ科ケヤキ属ケヤキ 遺物番号1493



木口

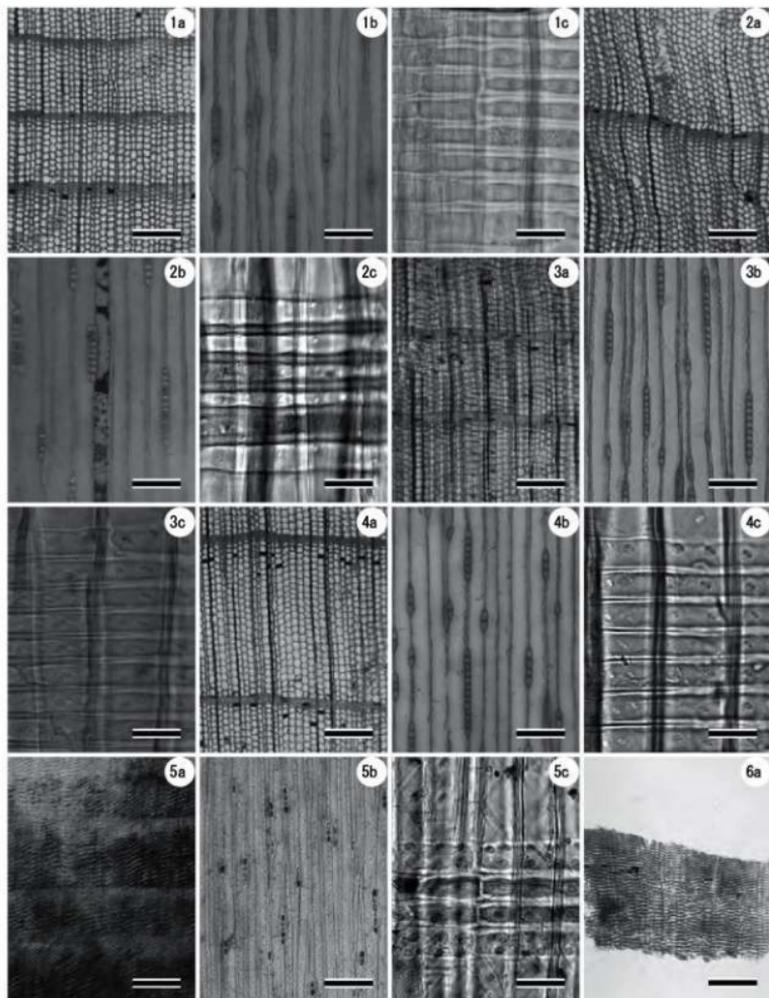


柁目



板目

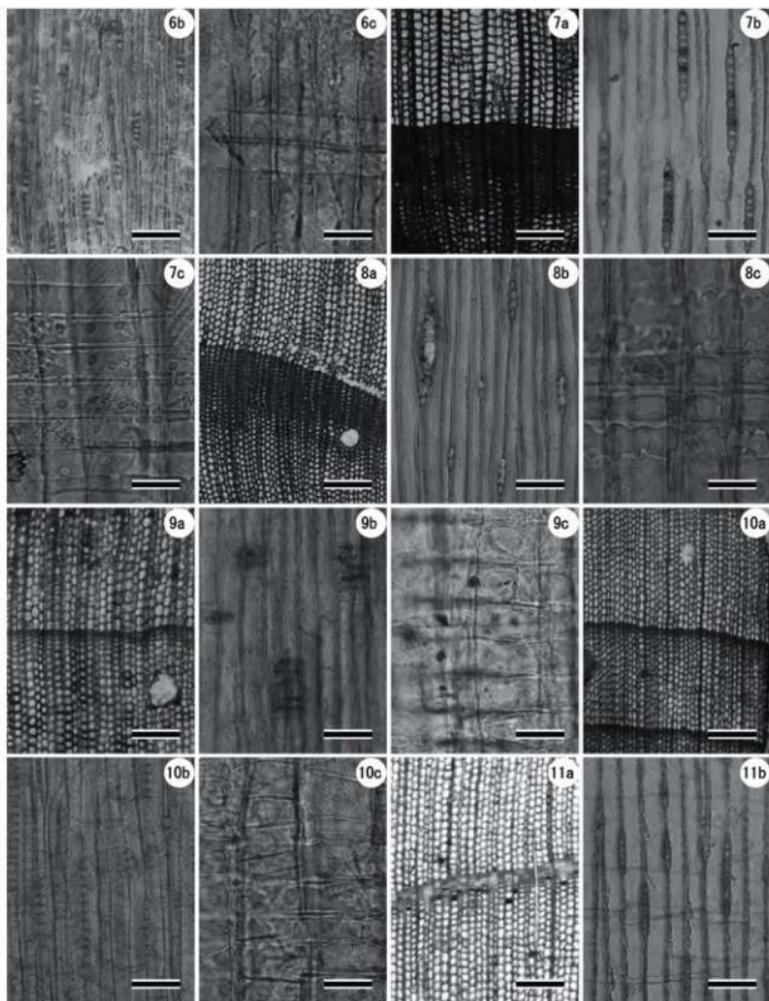
ミツバウツギ科ミツバウツギ属ミツバウツギ 遺物番号192



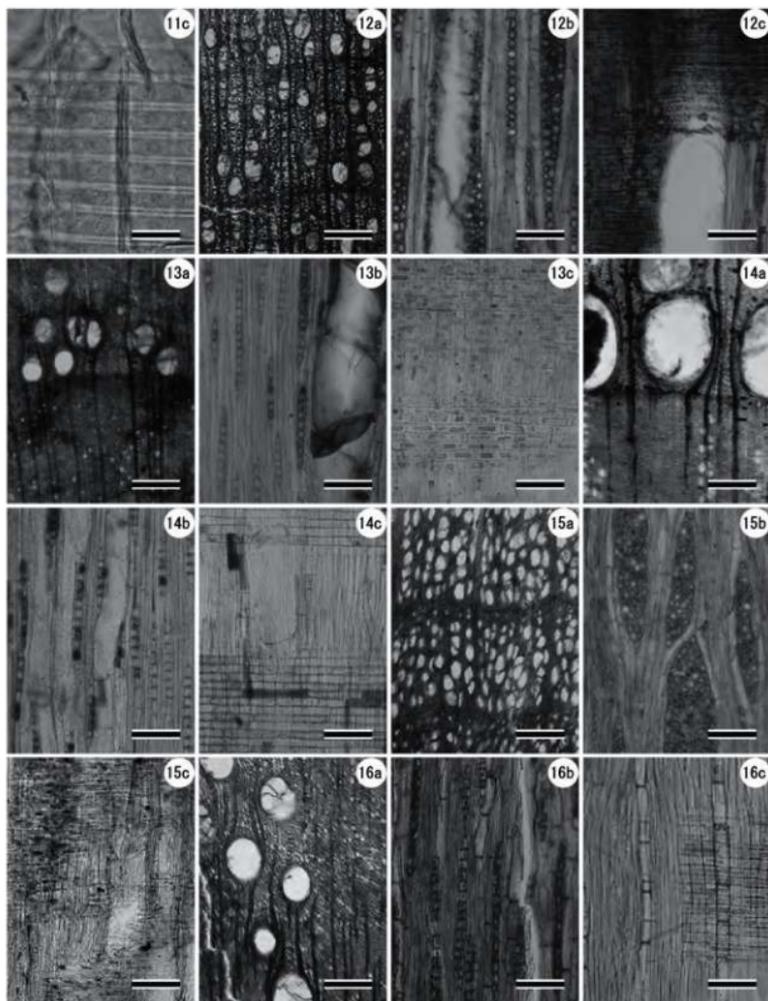
1a-1c. ヒノキ (遺物番号1910) 2a-2c. ヒノキ (遺物番号1811) 3a-3c. サワラ (遺物番号776)

4a-4c. サワラ (遺物番号803) 5a-5c. ネズコ (遺物番号729) 6a. ヒノキ科 (遺物番号731)

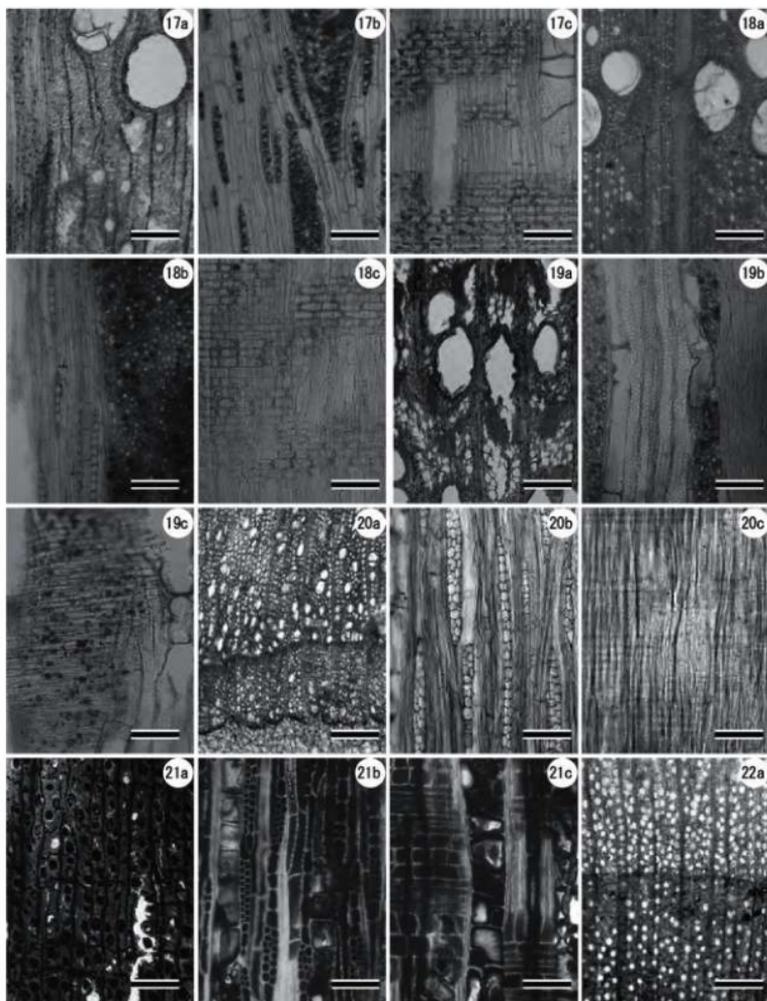
a: 木口面 (スケール=200  $\mu$  m) b: 板目面 (スケール=100  $\mu$  m) c: 柁目面 (スケール=25  $\mu$  m)



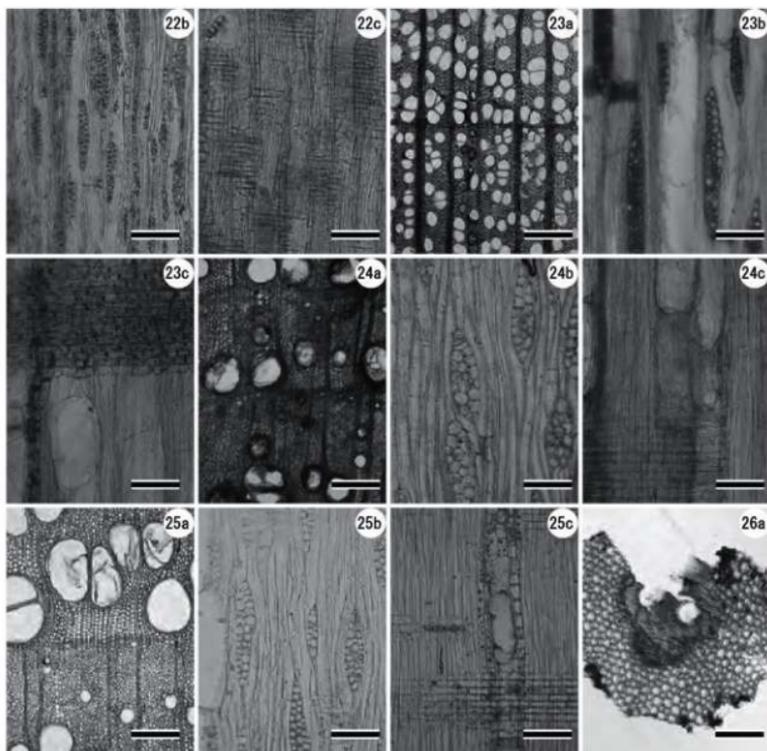
6b-6c. ヒノキ科 (遺物番号731) 7a-7c. モミ属 (遺物番号1890) 8a-8c. マツ属複維管束亜属 (遺物番号541)  
 9a-9c. マツ属単維管束亜属 (遺物番号1762) 10a-10c. カヤ (遺物番号1588) 11a-11b. スギ (遺物番号1804)  
 a: 木口面 (スケール=200  $\mu$  m) b: 板目面 (スケール=100  $\mu$  m) c: 柁目面 (スケール=25  $\mu$  m)



11c. スギ (遺物番号1804) 12a-12c. アサダ (遺物番号1472) 13a-13c. クリ (遺物番号539)  
 14a-14c. クリ (遺物番号1764) 15a-15c. フナ属 (遺物番号1491) 16a-16c. コナラ属アカガシ亜属 (遺物番号1485)  
 a: 木口面 (スケール=200  $\mu$ m) b: 板目面 (スケール=100  $\mu$ m) c: 径目面 (スケール=11:25  $\mu$ m・12-16:100  $\mu$ m)



17a-17c. コナラ属クスギ節 (遺物番号903) 18a-18c. コナラ属コナラ節 (遺物番号540)  
 19a-19c. ケヤキ (遺物番号258) 20a-20c. モクレン属 (遺物番号188) 21a-21c. イスノキ (遺物番号1563)  
 22a. ナシ亜科 (遺物番号1761)  
 a: 木口面 (スケール=200  $\mu$ m) b: 板目面 (スケール=100  $\mu$ m) c: 柱目面 (スケール=100  $\mu$ m)



22b-22c. ナシ亜科(遺物番号1761) 23a-23c. サクラ属(遺物番号1746) 24a-24c. トネリコ属トネリコ節(遺物番号902)  
25a-25c. トネリコ属シオジ節(遺物番号1776) 26a. タケ亜科(遺物番号513)

a: 木口面(スケール=200  $\mu$ m) b: 板目面(スケール=100  $\mu$ m) c: 径目面(スケール=100  $\mu$ m)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	のうちいせきしいちく							
書名	野内遺跡C地区							
副書名								
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第122集							
編著者名	小瀬忠司、野々田光剛							
編集機関	岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tn058-237-8550							
発行年月日	2012年3月9日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
野内遺跡 C地区	岐阜県 高山市 上切町	21203	09624	36° 09' 54"	137° 13' 43"	20050418 ～ 20051122 20060424 ～ 20060926	9,000㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野内遺跡 C地区	集落 田畑	古墳時代  平安時代	古墳時代水田跡 30 堅穴住居跡 1 古代水田跡 26 掘立柱建物跡 2	土師器、須恵器、 灰釉陶器、緑釉陶 器、木器類		古墳時代水田跡区 域から木製農具等 が出土。古代水田跡 区域から土器類・木 器類が多量に出土。		
要 約	<p>野内遺跡は縄文時代から近世までの複合遺跡である。今回、調査を行ったC地区では古墳時代と古代の水田跡・集落跡を検出した。古墳時代では、ナスビ形織をはじめとする木製農具が飛騨地域で初めて出土したことが特筆される。出土した古墳時代初頭の土師器には東海系、北陸系、信州系の個体が混在しており、周辺諸地域との活発な交流を窺うことができる。古代については、平安時代前半かそれにやや先立つ時期に水路の開削が行われ、水田が開かれたことを確認した。水田跡・水路跡からは曲物容器・杓子・箸・火付け木・馬形など多様な木器類が出土し、集落における森林資源活用具体像を示すことができた。土器類には多量の墨書土器・硯・転用硯のほか京都産緑釉陶器がみられ、当遺跡の集落・水田が、公的な性格を帯びた生産拠点区域の一角を占める存在であった可能性を指摘することができる。</p>							

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第122集

# 野内遺跡C地区

(第2分冊)

2012年3月9日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 新日本法規出版株式会社